
魔法少女リリカルなのは 鋼鉄の魔女たち

88式紙製装甲車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 鋼鉄の魔女たち

【Nコード】

N3597S

【作者名】

88式紙製装甲車

【あらすじ】

鋼鉄の咆哮世界の艦艇が一期海鳴市に転移してしまうお話です。一癖も二癖もある艦長たちと魔法少女が出会う時、それは何を生むのでしょうか。そして転移の真相、お互いの世界の関係は…？

鋼鉄世界側はWSG2鋼鉄の咆哮世界を基本としていますが他のシリーズの設定も混在します。鋼鉄原作面子は触れることはありますが登場はしない予定です。知らなくても大丈夫なように補足説明はしていきます。

世界観融合…というよりは没入（？）のフシがありますので合わないと思う方もいると思います。一期序盤から中盤にかけて背景事情描写が多く魔法少女、艦艇双方活躍が乏しく地味ですがご容赦願います。

電子化ストック切れのため週1話ほどのペースで更新中。
序盤部分が一度全面改訂されています（2011・4・9）

第一話 それは世界の始まりで終わり（前書き）

鋼鉄世界側導入編。

第一話 それは世界の始まりで終わり

シエルドハーフェン沖

国連軍第十三任務部隊旗艦 駆逐艦澤風

豊田浩二准将

「司令。依然、超兵器ノイズに酷似した反応、消えません」

「故障であってくれば嬉しいんですけどね」

「最悪の事態というのは常に予想の斜め上に行くものだよ、副長」

あまり座り心地のよくない艦長席に深く身を沈めながら私、豊田浩二は大きく息を吐いた。

私が指揮する国連軍第十三任務部隊は日本海上、シエルドハーフェン沖にて超兵器ノイズに似た反応を捕捉していた。もう世界から超兵器が駆逐されたはずだというのに……。

超兵器。それはこの星にかつて存在した古代文明が残した“超兵器機関”なる原理不明ながら膨大な出力を誇るジェネレーターを核とした常識を覆す性能を持つ兵器群のことである。

そしてその発掘隊にかつて所属していたフリードリヒ・ヴァイゼンベルガー、ウィルキア国防会議議長兼国防軍大將はクーデターによってウィルキア王国の実権を掌握、ウィルキア帝国元首を名乗り秘密裏に研究、保有していた超兵器の武力をもって全世界に恭順を要求した。その野望は各国の協力と超兵器を次々と下したある英雄の

手によって打ち砕かれ、十年ほど前に世界を巻き込んだ戦いは終わった。

かの大戦を引き起こした原因でもある超兵器は戦後、国際条約で建造が禁じられた。第十三任務部隊は表向き対潜任務部隊とされているが超兵器を作り出す疑いのある国家を監視、牽制する国連超兵器開発査察部隊として裏では知られている。

しかしながら究極超兵器フィンブルヴィンデルが撃沈されたのと時期を同じくして、原因は不明ながら全ての超兵器機関が眠りにについている上に超兵器機関及び発掘施設は現在では全て国連管理下であり、従来の超兵器を建造することは事実上不可能である。

では第十三任務部隊の本当の任務とは何か。

戦後各国はかの大戦で多くの将兵、国民を失ったにも関わらず、余力のあるアメリカ合衆国などを中心に国軍を増強する構えを見せ、陸戦の主戦場となり国土復興が優先されるべきドイツ共和国など欧州各国でもそれに対抗するかのように軍備の再編が行われた。超兵器という重石が取り除かれた世界は果てしない軍拡の波に飲まれつつあったのである。

事ここに至り国連はその中立性を保ち、次なる大戦を阻止するために独自の軍事力を持つことを決断した。HLG設計システムに対応した艦を中心とする各国を牽制出来るだけの艦隊戦力を持つべく動き出したのである。

その実験部隊が第十三任務部隊である。設計者の言葉を信じるなら

ば私の指揮下にあるH L G対応駆逐艦4隻だけで小国の海軍ならば圧倒し、米太平洋艦隊の一個機動部隊とも互角以上に渡り合えるという。

普通なら夢物語だと鼻で笑うところだが、かつて超兵器を単艦にて次々と撃沈し、遂には世界を救ったウィルキア近衛海軍シュルツ少将の乗艦がH L G設計システムで建造されていたとなれば信憑性も出てくるというものだ。実際、H L G対応駆逐艦4隻はいずれも常識では考えられない最大速力——通常、快速駆逐艦でも40 K t程度が限界である——50 k t前後を発揮することができる。その装備も各国の主力艦艇と比べると数世代は先のものばかりだ。これはH L G設計システムを国連が独占しているがゆえの恩恵である。

一方で危惧もある。強き力により強き力で押さえつける国連のこの行動はシュルツ少将が戦後に著した回想録の後書きにて危惧していた“次なる超兵器の登場”を誘発しないかという点だ。

事実、最後の超兵器を撃沈し大戦を終結させた有名な名無しの大型航空戦艦——意味不明に聞こえるかもしれないが正式に艦名がつけられなかったのが原因である——は極東地域の軍事バランスを崩しかねないとして戦後間もなく解体されている。同様にウィルキア近衛海軍が保有していたH L G対応艦や、H L G設計システム及び開発者、その研究成果は国連に管理が移された。大戦の引き金を引いた独裁者の統治下にあったウィルキアへの賠償請求が手緩いと評価されることがあるのはこれらの条件を同国が呑み各国の追及をかわしたからである。

話は戻るが、信じ難いことに演習海域に向かう途上で第十三任務部

隊はもういないはずの超兵器の兆候を捉えたのだ。

原理は不明だが――超兵器を語る際にあまりに多く記される言葉である――超兵器の核となる超兵器機関はレーダー、ソナー等に干渉し特徴的なノイズを引き起こす性質がある。幸い機材そのものの探知能力に著しい影響を与えることはない。一般に強大な力を持つ超兵器ほどノイズの影響は大きく、かつその干渉の度合いによって潜水艦型、水上艦型又は陸上型、航空機型などある程度超兵器の特徴も推定できるとされる。

故障であつて欲しいという副長の呟きを信じたいが部隊の全艦が同様の症状を訴えている以上、今日がエイプリルフルでない限りこれは超兵器反応であると判断せざるをえない。そもそも全ての超兵器機関が不活性化した理由は不明なのだから再起動する可能性は誰にも否定できない。また今まで撃沈された超兵器から回収された超兵器機関や既に発見されている超兵器機関発掘施設は国連所管であるが、未発見の物をどこかの国が密かに保有している可能性はゼロではない。かつて超兵器機関の力が広くは知られていなかったとはいえヴァイゼンベルガーはそれをやってのけたのだ。第二のウィルキア帝国が生まれないという保障はどこにもない。

「ウィルキア近衛海軍の演習参加部隊との交信はまだできないか？

日野中尉

「さきほどから呼びかけていますが応答ありません。レーダーにも感なしです」

「司令、既に超兵器と遭遇して全滅している可能性も想定するべきかと」

通信長の日野那岐中尉は有能な通信士官だ。彼女の腕でも通信が維持できず更にはノイズの影響下にあるとはいえ、直前まで水平線上に見えていた近衛艦隊が視界から消え、レーダーで捉えられないとなると副長の鈴木少佐の言葉にも信憑性が出てくる。しかし砲声も爆発音もなく十数隻からなる艦隊が消えるだろうか。いや、常識からくる先入観は捨てるべきだ。超兵器はすべからず非常識なのだから。

「総員戦闘配置。これより第十三任務部隊はノイズの発生源に向かう。ウィルキア近衛海軍の演習艦隊の行方も平行して搜索する」

「了解です司令。那岐君、各艦に伝達してくれ」

「はいはい……すみません、返事は一回ですね。はい」

「……各艦長と通信は繋がるかね日野中尉」

「そちらは問題なく繋がります。実はそうおっしゃると思って手配済みです」

「仕事が早いな。結構なことだ」

日野中尉の有能さには驚かされる。時に今のような越権行為に近い先読みすらあるが私はあまり気にしない。上官に疎まれた結果、左遷された末にこの部隊に流れてきたらしい。日本海軍ももったいないことをしたものだ。たまに間の抜けた発言をすることはあるが……まあ、愛嬌の範囲内だろう。

「あーあー、テストス、おまえら戦闘配置についてください」

「……副長、なんだねそれは」

「緊張感を和らげようかと」

「……………」

一方で副長の鈴木和人少佐は掴みどころのない男だ。普段はやる気のない言動や軍人らしからぬ態度が目立つ。無能ではないようだが士官学校次席卒業という経歴からこの姿を想像できる人間はいないだろう。流石にこの状況下では口調こそ畏まってはいるが、態度やまとう雰囲気はさほど変わっていない。海軍時代を知る日野中尉はスイッチがどうたらと言っていたが要領を得ない。今度詳しく聞い
ておこう。……今度があれば、だが。

「司令、各艦と通信繋がりました」

「フォード中佐、超兵器と交戦となる可能性がある。最悪の場合、貴艦の秘匿装備を使用するかもしれん。発射コードの用意は大丈夫かね」

『問題ありません！なに、最悪撃てなくても乗員を退艦させた後、私一人で体当たりで起爆してやりますよ』

当然のように自己犠牲発言をしたのは駆逐艦エルドリッジ艦長のジョン・G・フォード中佐だ。彼は部下に慕われているので乗員のほとんが彼についていてしまいそうだが。大戦中に母国アメリカ合衆国の超兵器保有を公然と批判したため閑職に回されており、この部隊に相応しいとヘッドハントされた人物である。彼の乗艦エルドリッジは特殊なサーモバリック弾頭ミサイルを装備しており、広範囲をその絶大な攻撃力で制圧する事が可能だ。

『ハハハ、相変わらず暑苦しいね君は。ガチムチで大いにけっこう。だが私は紳士らしくノーマルなので遠慮願いたい』

『お前は何を言っているんだ』

「ベントレー少佐。貴艦の電子戦能力にも期待しているぞ」

『はっ、お任せを准将。気になるアノ娘のように敏感なので担当官には優しく扱うよう、紳士流に指導しております』

「……ほどほどにな」

フォード中佐を呆れさせる変態発言をしたのは駆逐艦アンバスケイド艦長のウィルヘルム・ベントレー少佐。紅茶をこよなく愛するハンサムな英国紳士なのだが変態発言で台無しだ。英海軍から追い出されたのもセクハラ発言が原因と専らの噂である。いつものことなので相手にするだけ無駄だろう。艦長としては有能なのだがな。アンバスケイドは電子戦能力が高い。攪乱や奇襲、隠密行動と、地味ながらこの艦隊の能力を底上げしているのだ。

「ゲルダ代行。そちらも頼りにしている。準備は問題ないかね」

『はっ。いつでも照射可能です。ただ本艦は機関不調のため38k_tが維持できる速力の限界です。申し訳ありません』

『あらあら、あとでウチにいらっしやい。しっかり直してあげるから。ついでにゲルダもワタシの部屋にいらっしやい』

『い、いえ。機関長曰く半日あれば直るそうなので遠慮しておきま

す」

ゲルダことゲルトルト・ベンツ大尉は駆逐艦Z51の艦長代行だ。本来、こちらに出向してくるはずだった艦長が戦後のドイツ共和国海軍の人材不足で遅れに遅れ、現在に至っている。愛称のゲルダが気に入っているらしく部隊内でもゲルダで定着している。呼び名の点を除けば勤務態度は厳格そのもので、生真面目が軍服を着ているとは副長の弁だ。評者自身はそれとは正反対の人物だが。Z51は怪力線装置という光学兵器を搭載している。直射兵器なので運用に注意が必要だが、ミサイルや砲などに比べて目標への到達時間が短く、光学兵器対策が為されていない目標に対しては大口径砲を超える威力を誇る。

『んもう、つれないわねえ』

「アニエツリ大佐、貴艦は護衛駆逐艦とともに後方で待機して下さい」

『はあい。超兵器がどんなコなのかこの目で見れないのは残念だけど仕方がないわね』

『ふふふ、レディのエスコートは我々にお任せあれ』

「……副長、突っ込んだら負けかなコレは」

「別に艦を女性にたとえるのはおかしいことではないですが？」

「いや、そういう意味ではないんだが」

生真面目なゲルダ代行をからかって愉しんでいるのはHLG支援艦

スバルヴィエロ艦長のフェデリカ・アニエッリ大佐だ。子持ちのバツイチとは思えない——はつきり言って日野中尉より若く見える——容姿の持ち主だが気に入った相手を男女問わず誘惑する悪癖がある。

スバルヴィエロは戦闘力こそ低いもののHLG対応艦の戦闘力の源であるHLG設計システムを積んでおり、この艦隊の要でもある。ただしかつてウィルキア近衛海軍が保有していたドック型ではないため外洋作業は厳しい。ちなみに数機の艦載機を持ち、表向きは軽空母扱いになっている。艦長の容姿とは違って少しばかり知識のある人間には通用しない偽装ではあるが。

ちなみに彼女の“現在の”お気に入りアプローチはフォード中佐だが、返事は芳しくないようだ。逆に盛んに接舷を試みている護衛駆逐艦の艦長たちには全く興味がならしい。また護衛駆逐艦はHLG設計システムによってではなく、ごくごく普通に造船所で建造された一般艦艇である。戦闘艦でないために最大速度21kt——空母としては流石に遅すぎるので公称30kt弱。かなりサバをよんでいる——と鈍足なスバルヴィエロの護衛であり、澤風以下のHLG対応駆逐艦に随伴できる能力は無い。

「サプライもスバルヴィエロと共に後退して下さい。万が一があっては困る」

『ん……』

『……艦長、無線越しに頷いても伝わりませんよ』

『あう……うめんなさい』

「ははは。では澤風を先頭に単縦陣で発信源に向かいます」

『『『了解』』』

「後退する各艦はアニエツリ大佐に頼みますよ。最悪の場合はすぐに退避を」

『はい、分かったわよ。フォード中佐、ワタシの胸に還ってらっしゃいよ？』

『下心丸見えな表現でなければ素直に了解というところなんですけどね』

『んもう、いじわるなんだから』

『大佐はそんなに小官をいじるのが好きですかそうですか』

高速総合補給艦サプライ艦長のシルヴィア・シンプソン中佐相当官は民間出身の軍属扱いの艦長で、物静かを通り越して無口であり、ジェスチャーで指示を行うこともあるというほどだ。手信号での操舵などの指示方法は確かに存在するが、それは騒音等で声による意思伝達が難しい時など本来限定的な場面で用いられるものである。

民間時代からの付き合いだというサプライの副長のフォローがなければどうなるのか少々心配ではあるものの、戦時中は民間輸送船の船長として神業とさえ言われる操船で7度も——彼女の意見で航路を変更して敵との接触そのものを防いだことはその倍ほどうしい——攻撃を凌いだ経験のある人物だ。艦そのものを守る手腕については信用していいだろう。

サプライは無限補給装置を備えている最新鋭の補給艦だ。弾薬、燃料、糧食といった物資を無尽蔵に補給できる。……なんというか、H L G 設計システムともども七不思議の一つだ。艦のほとんどの容積を占めている装置の中枢は完全にブラックボックスで、これらの謎としか言いようのない装備はたった一人の博士によって開発されているというのがそれに拍車をかけている。それはそれとして、この艦はこれから整備されていく国連海軍の切り札でもある。

アニエツリ大佐とフォード中佐のやりとりには突っ込まないぞ。関わりあいになつてとばかりを食うのが嫌だからだ。艦隊司令というより引率の先生になつたような気分なのは何故だろう。そつと目頭を押さえて視線を落とした。

「司令、急に霧が」

「超兵器の中には天候に影響を与えるものもあるという。周囲の警戒を厳にせよ！ 日野中尉、僚艦を見失うなよ」

「りよつ、了解です」

副長の声で顔を上げると、艦を濃密な海霧が包み込んでいた。先ほどまで晴天だったのだが……副長が後方を目視で確認しようと双眼鏡を手に艦橋横に出る。ドアからたつた１メートルほど離れただけで丸窓に映る彼の姿がぼやけた。

これはかなりの濃霧だ。と、思うと、一瞬艦がやや大きく傾いた。操舵手がやや慌てた様子で舵を切っている。どうやら彼のミスらしい。ただでさえ超兵器ノイズを捉えた緊張下であつたのに急な天候の変化だ。動揺するのも無理はない。見ると、艦橋要員は一樣に緊張した表情を浮かべていた。

「うひゃー、少し出ただけなのにずぶ濡れだ。水も滴るいい男にな
っちまったい」

「言っておくが突っ込まないからな副長」

「わたしも突っ込みませんよ」

「身を張ったギャグをスルーするとか酷いや。芸人殺し！」

「我々は軍人なんだが」

「副長は全然それっぽくないですよ。日本海軍時代もそうでした
けど」

「那岐君のドジや天然発言も相変わらずだよな」

「いじわるです副長……」

「その辺りにしておけ、二人とも」

「了解」

はからずもコントを演じた結果が、艦橋の悲壮さすら感じさせる重
苦しい雰囲気はやや軽くなった。これが狙った上での言行ならば少
々彼への評価を改めねばならないかもしれない。少々やり方はいた
だけないが。一緒にふざけた日野中尉ともども、勤務評定に一筆入
れねばならんか？

「きゃああー！」

「少尉！ どうした！？」

「きゅ、急にソナーのノイズが増大して……」

ソナー手の少尉が悲鳴を上げてヘッドフォンを外した。副長の問いに少尉は耳を押さえながら答える。一定以上の音量にはリミッターがかけているのだが超兵器ノイズは時にそれすら突破するシロモノらしい。無茶苦茶なのは分かるが、超兵器に関しては常識が全く通用しないのだ。

「ソナーへの干渉が極大ということは潜水艦型か？ 日野中尉、リーダーではどうだ」

「ああ……司令、リーダーが完全にホワイトアウトしています」

「何！？」

「し、司令！ 前を！」

「な……！！？」

副長の声にリーダー画面から目を上げると、目の前は光で包まれ……

誰かに呼ばれたような気がした

懐かしい声のように思えた

第一話 それは世界の始まりで終わり（後書き）

光に包まれて意識を失うのが王道だそうです。鋼鉄他シリーズでも同様の演出があったりします。

次話も状況説明が続いてしまいます。リリカルな雰囲気は第二話終わりから第三話にかけて出てくるかと。

○シエルドハーフェン

我々の世界におけるウラジオストック。ユーラシア大陸東岸部に存在するウィルキア王国の海軍要衝。

○国連軍第十三任務部隊

独自設定。鋼鉄関係は日本ルート二週目クリア後世界なのでこういう捏造設定が多々あります。

○おまえら戦闘配置についてください

ウォーシップコマンダー3のクリア後オマケステージでプレイヤー艦の副長が言い放つ指示。クリア後のキャラ崩壊とトンデモステージの数々はお約束。

○ライナルト・シウルツ少将

WSG2鋼鉄の咆哮の主人公。ゲーム開始時は少佐。単艦で次々と艦隊を撃滅、更には超兵器を撃沈したりと無茶苦茶やった末に世界を救った英雄。彼の祖国ウィルキアが戦争の発端なので戦後の評価は国内外ともに微妙と思われます。

○HLG設計システム

艦の設計、建造、改装などが可能な持ち運び造船所とでもいうべき

鋼鉄お約束のシステム。七不思議扱いされてしまう理由は後々説明。

○第十三任務部隊の面々

オリジナル。乗艦、背景事情や名前に鋼鉄シリーズや車関係、實在艦由来の要素があります。艦隊行動をとることになる一期では澤風クルーと豊田以外は描写が少ないと思います。

○無限補給装置

元ネタは無限装填装置。

無限装填装置

鋼鉄世界における自動装填装置の究極形。自動で無限に弾薬を装填し続けるという壊れ性能。かなり開発を進めないと手に入らないいわゆる“クリア後に使ってね”系の装備。

- 2011.4.9 改稿 全面改訂に伴って誤字等修正。設定集削
- 除に伴い艦やWSG2鋼鉄の咆哮世界について補足説明。
- 4.10 改稿 誤字修正。
- 4.24 改稿 誤字修正。一部表現加筆。後書説明追加。
- 5.1 改稿 いろいろ加筆修正。
- 5.9 改稿 もろもろ誤字修正。
- 6.13 改稿 鋼鉄お約束について追記。
- 6.27 改稿 誤字修正。一部加筆。
- 7.18 改稿 一部表現修正。誤字修正。加筆。
- 7.20 改稿 無限装填装置について後書追記。
- 9.17 改稿 誤字・表現修正。
- 10.19 改稿 ゲルダの本名ミス、誤字・表現修正。
- 11.7 改稿 誤字・誤表現修正。
- 11.25 改稿 改題。

第二話 管理職と睡眠不足（前書き）

船の運行描写は限りなくフィクションです。

第二話 管理職と睡眠不足

位置不明

第十三任務部隊旗艦 駆逐艦澤風

鈴木和人少佐

眩い光は段々と引いていった。そして、光が完全に晴れると海霧も晴れていた。

が、陸地が明らかに近い。霧の中、手探りで進んだとはいえここまです接近するはずがない。司令はいち早く立ち直り、状況を把握するべく指示を飛ばしている。

「被害状況知らせ！日野中尉、現在の艦隊の位置はどうなっている。僚艦は無事か」

「艦内各部、損害は報告されていません。あれ、おかしいですね。地形が変わるわけが無いし」

「日野中尉、はっきりと報告しろ」

「ひゃ、ひゃい。その、理解しかねるのですが海岸線の様子から言つて、日本の太平洋側沿岸ではないかと」

「なに！？」

「またアンバスケイドが艦隊用光学迷彩装置を起動したと報告して

きました。超兵器ノイズも消失しています」

そう言つて那岐君は海図をがさがさと漁っている。彼女が何を言っているのか数秒ほど理解できなかった。

アンバスケイドの判断は妥当だろう。ベントレー少佐は普段の言動はともかく優秀な艦長で、こういう時には頼りになる人だ。ノイズが消えたとはいえ超兵器の追撃はあり得る。希望的観測だがもしかしたら騙されてくれるかもしれない。

「幸いにして僚艦は無事です。が演習艦隊とは依然、連絡がつかません」

「副長、これをどう見る？」

「推測になりますが考えられるのは超兵器による攻撃くらいでしょうか」

「非常識の塊の超兵器なら確かにそのくらいの力があつても不思議は無いな。だとしたらえらく優しい敵だが。陸上にでも放り出せばよかったものを」

「それはともかくこのままだと領海侵犯で日本海軍が出てきますよ」

困つたら超兵器のせいにしてしまう。悪い癖だと思う。理解できないし、納得は出来ないが現に目の前にあるんだから仕方ないが。そして我々の仕事ではそういう訳の分からないモノを相手にすることもある。思考停止してはいられない。

「いや、この艦隊のステルス性を考えると今の日本のレーダーサイ

トでは捉えられんだろう」

「それもそうですね。事実、通信の一つも寄越してきませんし」

「なににせよトラブルを起こさないに越した事はあるまい。状況を把握次第、公海上に出てしまおう」

「始末書は書かないといかんですな」

「揉み消されて表沙汰にはならんだろうがそうなるだろうな」

「おっかしいなあ」

このあたりはH・L・G設計システムの出鱈目ぶりの面目躍如だろう。資料によると今の艦隊の位置では最良の条件でも流木程度のレーダー反射しか得られないはずだ。正直、アレもある意味で超兵器の一種ではないかと思えるほどだ。開発者もなんというか、変わった人間だしな。

司令と山のよオな書類を連想してげんなりしていると数枚の海図とにらめっこをしながら那岐君がなにやら考え込んでいる。

「那岐君どうしたんだい」

「いえ、それがですね。目の前の海岸線に見覚えが無いんですよ」

彼女は航法士官としても有能だ。またこちらは趣味の範疇なのだが海岸線を撮った写真を見ただけでそこがどこであるかを言い当てる特技がある。その彼女が母国日本の海岸線、それも見たところそこそこの規模の都市があるというのに分からないと言う。

「傍受した通信にも知らない地名が頻繁にあらわれています」

「民間船と港湾の通信だな。日本語も混じっているから日本なのは間違いないが……海鳴港？」

「たぶん、あの港の名前です。軍港ではないようですけど」

「記憶に無いな。司令、知っていますか？……司令？」

「……ああ、すまない。いや、私も覚えが無いな」

元々ぼんやりとしていて何を考えているのか分からないところのある豊田司令だが、今は本当に心ここにあらずといった様子だった。ぼうつとしていたという訳ではないだろうが……。

双眼鏡で港の様子を見てみたがそこその規模の港湾施設だ。軍艦は見当たらず、これだけの大きさの港が母国を離れている数年の間に非軍事目的で造成されたとは考えにくい。

「司令、問題が」

「どうした日野中尉」

「全ての衛星及び国連軍司令部と連絡がつきません」

那岐君の蒼白な顔を見ていて、ふと、昔読んだ小説を思い出した。そう、この展開はまるでその話にそっくりじゃないか。

「ははっ、そいつはいい。まるでパラレルワールドに迷い込んだみ

「たいじゃないか」

「副長、ふざけてる場合じゃないですよ」

「あながち冗談とも言い切れんかもしれんな」

「司令？」

「日野中尉、周囲の船舶の挙動から航路になっていない海域を割り出せ。ここがどこであれ、いつまでもぼうつとしているわけにもいかん」

「りよ、了解」

妙に悟ったような雰囲気司令は気になるが指示そのものは冷静で妥当だ。先ほどの呆けたような態度といい、何かあったのだろうか。

海鳴港（？）沖

豊田浩二准将

「ようやく落ち着けるようだな」

「艦隊用光学迷彩も効果を発揮しています。第十三任務部隊の存在に気付いている人間はこの海域には存在しないでしょう」

「消える前の我々の姿を見た者はいたようですが見間違いで処理さ

れているようです」

今日はいろいろな事がありすぎた。何も考えずに艦長室のベッドにダイヴしたいところだが艦長たちと状況整理をして今後の対応を協議する必要があるのでそうもいかないだろう。

そう、いろいろな事が、ありすぎた。

海鳴港沖

日野那岐中尉

「ううん…もう食べられないよう……はうわっ」

あいたたたたた…ベッドから転げ落ちるなんていつ振りかなあ？なんだか夢を見ていたような気がするけど、今ので全部飛んで行っちゃいました。私は痛む腰をさすりながら立ち上がります。急な舵きりか、大きな目の波と寝返りがタイミングよく合わさって落ちたのだと思いたいけれど、どうやらそういうわけではなさそう。時計を見てみると当直時間十五分前。私は手早く着替えながら昨夜のことを思い出していました。

司令は昨夜、艦長たちと話し合いの場をもちました。

私達第十三任務部隊の将兵は出向という名のもとにほとんど厄介払

い同然に国から捨てられたり、逆に自ら国を捨てたり、国そのものを失ったりといった国家に対する帰属意識の薄い人間の集まりです。特に家族に関してはほとんどの将兵が持っています。アニエツリ大佐などは例外ですが息子さんは彼女の艦のヘリパイロットですから事情は他の将兵と大差はないのでしょう。

そんな人たちが集められているのは任務上、この部隊が母国と対立する可能性を見越してのことなんだと思います。私達のような存在を軍人と呼んでよいのかは微妙なところですが平和に対する思いはみんな強くもっているはずです。

だからかもしれません。いろいろ情報を収集した結果、ここが私達の暮らしていた地球ではない、違う歴史を歩んだ地球だということ。司令が艦隊全体に告げた時も混乱こそあれど悲嘆の声はあまり聞こえませんでした。

この世界は私達の世界と比べてとても平和そうだったから。

「日野中尉、どうぞ。……中尉？」

「あ、ごめんね。ぼうつとしていたみたい。ありがとう、少尉」

物思いに沈んでいて咄嗟に返事ができなかった私に聴音長ソナーのオルソン少尉は軽く笑みを浮かべてマグカップを手渡してくれた。彼女が淹れてくれた温かいココアに口をつけながら私は結構前に夕日が沈んでいった水平線を眺める。浮かび上がるように遠くを行き来する船の航海灯がゆっくりと動いていく。夜間配置は体のリズムを維持するのが大変だけど、この幻想的な光景は夜の船でしか見られない

密かな私の楽しみの一つです。

ちなみに私はどうもコーヒーが苦手です。どうしても胃にきてしまうのです。子供っぽいとは思っけれど、ミルクを入れたココアが気に入りなのです。

「夜の海はいいな。見えない闇に想いを馳せる。いいものだ」

「副長、交代には少し早いですよ」

妙に達観した顔で黄昏ている副長さん。何故だろう、凄く決まっているのにそこはかとなく胡散臭さを感じるのは。この手の言行に対しては無言でスルーするのが世間的優しさ、というのは司令のお言葉ですが逆に考えたらそれが世間の冷たさのような気がします。

「この光景を見られるなら少しくらいはな。俺にもコーヒーくれるかい」

「はい、すぐお持ちしますね。砂糖とミルクはどうされます?」

「一個ずつ頼むよ」

「分かりました」

普段からああいう感じならたぶん胡散臭さも消えるだろうし、顔はいい方なのだからモテそうなものなのだけれど。真面目な時とふざけている時の落差が大き過ぎるんだよね、副長は。そんな風に私が思っていると、まるで気の緩みを突くかのようにリーダー画面に僅かな“ゆらぎ”が現れました。

いや、気のせいじゃない。微弱だけど、これは……。

「副長、超兵器ノイズと思われる反応あり！」

「なっ……コーヒー飲み終わってからにして欲しかったな」

「淹れる前でよかったじゃないですか」

「それもそうか。それで、間違いないんだな？ 那岐君」

「はい」

「副長、ソナーには反応ありません」

慌しく少尉が戻ってきて席に着き、副長も表情を引き締めます。本当に小さな反応だけどこれは超兵器ノイズ。いや、少し違うかもしれないけど発生源によって少しずつ異なるのだからこのくらいは許容範囲内のはず。この艦に積まれている新型レーダーは敏感なところがあるので判断が難しいです。腕の見せ所でもあるんですけどね。

「ソナーに反応なしか。今度のは陸上型か航空型か？」

「レーダーそのものには超兵器と思われる陸上軍事施設、機影はありません。距離、方向から考えますと恐らく発生源は陸上と思われますが」

「何かに偽装しているか、あるいは機関の一部だけなのかもしれん。厄介だな。警戒を続けるしかない。司令と、寝ているようなら各艦の艦長を起こせ」

「司令は先ほどお休みになられたばかりだったと思いますが」

「艦隊ごと永眠するわけにもいかんだろう」

気の毒そうに言う少尉に副長は苦笑気味に冗談で返しています。少尉にしたところで気の毒そうな顔をするだけで起こす事自体には何ら言及はしていない。船の乗組員というのはそういうものです。司令の場合、判断を下すべき時はいつでも起きなければならぬのです。

そういえばシュルツ少将の逸話の中に一日徹夜を余儀なくされた後、やっとベッドに入った時に襲撃してきた超兵器を文字通り瞬殺して再び艦長室に消えていったというのがあるのを思い出しました。

冗談のような活躍の多い彼ならという事で作られた与太話らしいのですが、あの温厚そうな司令と二人で縁側でお茶でも飲んでいるのが似合う少将に限ってそれはないだろうと思います。

もつともその後、すぐに超兵器ノイズは消えてしまい、艦橋にやってきた司令がレーダーを覗き込んだ時にそこに敵が居たら目で殺せそんな顔をしていたのを目にして私は案外与太話でもないのかもしれないと思い直しましたけどね。

???

『誰か、僕の声を聞いて……力を貸して……魔法の、力を……』

第二話 管理職と睡眠不足（後書き）

一期、始まりました。

○艦隊用光学迷彩装置

元ネタは敵超兵器が使用する光学迷彩。ただし航跡は丸見え。

WSG2鋼鉄の咆哮でも登場しますがオマケステージでの登場なのでいろいろと酷い。画像も3Dモデルも用意されていないらしい。登場シーンすら別の超兵器のモデルを透明にただけという疑惑がある不憫っぷり。

○困ったら超兵器のせいにしてしまう
フラグ。リリなのではどこかで聞いたことがあるかもしれないフレーズ。

○那岐の部屋

士官な上に部署のトップなので個室です。偉い人は個室、下の人は何人かで一部屋。

○異世界転移しても平常運転

サプライの無限補給装置のお陰で補給の心配がないのもあります。

WSG2鋼鉄の咆哮ではありませんでしたが、鋼鉄シリーズ全体から見ると異世界転移はわりとよくあること。

○超兵器ノイズ

原作中ではあまり説明がありません。さてはてジュエルシードの反応との関連性は？今はまだ、秘密です。

○???

ユーなんとかさん。

2011.4.9 改稿 全面改訂に伴って那岐のエピソードなど
加筆。またジュエルシード暴走の時間考証をミスっていたので該当
箇所を加筆修正。

4.10 改稿 side????の位置がおかしかったので入替。

4.24 改稿 一部表現修正。後書追記。

5.9 改稿 那岐の夢の内容が不自然だったため修正。 以前
の改定の余波被害

6.27 改稿 誤字修正。一部加筆修正。

7.18 改稿 誤字修正。一部表現修正。

9.17 改稿 誤字・一部表現修正。

11.25 改稿 改題。

第三話 それはそれぞれの始まりで（前書き）

ところがどっこい、リリカルマジカル、始まりません。

第三話 それはそれぞれの始まりで

海鳴市街地

通学バス車内

月村すずか

「どうしたの？　なのはちゃん。ぼーっとして」

「なんか変な夢見ちゃって」

「なのはのことだから、寝惚けてベッドから落ちる夢でも見たんじゃないの？」

「にや？　そ、そんな夢見ないよぉ？」

学校へ向かうバスに揺られながら、朝からいつも通りな二人の友達を見て私は自然と自分も笑顔になっていました。

私、月村すずかと二人の友達、アリサちゃんとなのはちゃんは私立聖祥大附属小学校に通う小学三年生。なのはちゃんは駅前の喫茶店、翠屋の娘さん。今もちよつと眠そうにしている朝に弱いけれど、正義感に厚く困っている人を放っておけない芯の強い子。アリサちゃんは大企業の経営者夫妻のお嬢様。ちよつと素直じゃないけれど根はとっても優しく面倒見のいい子。二人とも私の大切なお友達です。

出会ったきっかけは少し気まずいものだったけれど今ではいつも三人一緒に楽しく過ごしています。いつまでもこんな楽しい日々が続

いたらいいな、というのは私のほんの小さな願いです。でも私たちはいつか大人になって——だからこそ今を精一杯楽しまなきゃいけないのだと思います。

海鳴港沖

第十三任務部隊旗艦 駆逐艦澤風

豊田浩二准将

「博士。艦長たちを集めましたがどういうご用件で？」

我々は艦のことを各々の副長に任せ、短艇^{カッター}でHLG支援艦スバルヴィエロに集まっていた。一昨日超兵器追跡の末に転移させられたことに続き、昨夜は超兵器ノイズらしき反応が地上に確認されたがほとんどなくして消失していた。正直、私を含めて艦長たちはピリピリしている。一方で困惑もしているのだ。ノイズが何の前触れもなく唐突に発生したり消えたりといった現象は報告された例がない。ワープする超兵器ではないかという意見もあったが、あながち笑い話では済まないのが超兵器の恐ろしいところだ。

そんな時にこの艦隊の絶大な能力の源とも言えるHLG設計システムの生みの親とも言われ——彼女自身は否定も肯定もしていない——超兵器に対抗するべく数々の超現代兵器を開発し、現在では国連軍先進技術開発チーム主任研究員という地位にあるこの女性が我々に伝えたいことがあると打診してきたのだ。

ジェーン・ドウ、通称博士。本名不詳。年齢不詳ながら30代半ば

と本人は主張。ただし外見は完全に幼女。日本人女性らしい。常によや大きめの白衣姿で今回のように単身自分の開発した兵器のテストに同行する活発な面がある一方で、研究に没頭すると生活無能者になるらしい。事実、アニメッリ大佐曰く母港を出てからほとんど部屋を出なかったという。どうやら何かの研究を続けているらしい。

超兵器研究の第一人者であるブラウン博士とも親交があるらしく、その伝手でかのシュルツ少将とも繋がりと噂されている。一説にはそれはウィルキア解放軍に身を寄せていたからだという。HLG設計システムはウィルキア近衛海軍が運用していたものだから信憑性がないでもない。HLG設計システムの運用を彼女が手がけていることからすると恐らく事実だろう。

とにかく話題に事欠かない女性である。それでいてその経歴に関してはほとんどが分かっていないのだ。私にしても何度か前に会ったという程度。なんともミステリアスな女性である、とはベントレー少佐の評で彼にしては珍しく反論の余地がなく突っ込みどころもない意見だ。

「うむ。実は今回の事象に心当たりが――」

「なんですと!?!」

「フォード中佐、レディの話に割り込むものではなくてよ」

「す、すみません」

「博士、正確に説明を。今回の事象とは、どの事象についてなのだろうか?」

身を乗り出すフォード中佐をアニヱツリ大佐が押しとどめる。大人の女性の余裕といったところか。フォード中佐は熱血青年士官という表現が似合うので彼女にとってはからかいの対象なのだろう。どちらかというとは彼は突っ込み属性なだけで本質は冷静で石橋を叩くタイプと私は見ているが。その様子を博士がおもしろそうな顔で見ているので私は博士に続きを促した。なかなかこの博士も“いい性格”をしているのかもしれない。頭の痛い話だ。

「む、すまんの」

「というより、Dr・ジェーンは分かっているという言い方をしたのでしよう」

「ベントレー少佐は女性の考える事がよく分かるようだのう」

「少佐、あなたもフォード中佐と同じことをしているかと」

「Oh、これは失礼」

ゲルダ大尉の苦言にやけに芝居がかった仕草で一礼するベントレー少佐。あ、シンプソン中佐相当官が無言で頷いている。おじさん、もう泣いていいかな。

「豊田君がかわいそうなので冗談はにおいておいて本題を話すとしようかの」

「冗談なのか」

「タチが悪いですよ」

流石にこれには艦長陣がブーイングだ。慌てた様子で博士は出来心だったんぢゃ！と泣きそうな顔で弁明している。なんなんだろうね、この可愛い自称三十路は。ついほつぺたをふにふにしていまいそうになるこの自称三十路は。言っておくけれど私はロリコンではないよ。本当だよ。ちなみにベントレー少佐は自称三十歳と聞いて合法ロリ！とか叫んでいたけれどアレ逮捕しなくていいのかな。おじさんは心配だよ。

「もうなんでもいいので説明を頼む」

「うむ。今回、わしは艦隊用光学迷彩の他に持ち込んだ装置があるんぢゃよ」

現実逃避するのをやめて話を進めようと博士を促した途端にきりつとした真面目な表情になって何事もなかったかのように説明に戻る博士。……何か騙されたような気がしてならない。

「Oh、アレですか？」

「知っているのかベントレー少佐」

「なんでもスパルヴィエロに物々しい警備の中運び込まれたモノがあると聞きました。さては国連の陰謀ですね？」

ベントレー少佐がウィンクしてきた。無視するでしょう。捨てられた子犬のような顔をしているが目を合わせてはいけない。一方得体の知れないモノが自分の艦に運び込まれていると知ったアニエツリ大佐は軽く肩を竦めただけでさほど気にしていない様子だ。もちろん運び込まれた事実は知っていただろうが、HLG設計システムという特大のブラックボックスを元々抱えているのだから今更という

ことなのだろう。

ちなみに艦隊用光学迷彩装置はスパルヴィエ口にも装備されている。武装こそしているが基本的には非戦闘艦である同艦は戦闘部隊である我々4隻とは戦闘中、別行動をとることになるので効果圏外に出してしまう可能性を考えてのことだ。しかし自分の艦隊の実力も正確に把握できないこの秘密だらけの状況はなんとかならないものか。これで部下を死なせるようなことがあれば彼らに顔向けが出来んぞ。思っていることが顔に出ないように苦労しつつ、私は博士に続きを促した。

「演習用に役に立ちそうな装置だったのな」

「しかしこの状況で役に立つものなのですか？」

「フォード中佐、失礼ですよ」

「よいよいゲルダ代行。彼も聞けば態度も変わるじゃろ」

フォード中佐の言葉にも嫌な顔一つせず博士はホワイトボードに装置の名前を書いた。

『謎の訓練用装置』

「そのまんまじゃねーか！ー！！」

「はうっ」

誇らしげな顔でとうだ！とこちらに向き直った博士にフォード中佐が思わずノリ突っ込みしているが、今度は誰も咎めなかった。とい

うより、幼い子をしかる為にデコピンしたようにしか見えない。凄くいい音がしたので、我々はなんとなく無言になった。

「ひどいのう」

「いや、今のは俺は悪くないよなあ？」

「レディ、男性というのは待たせるのは慣れているが待たされるのは慣れていないのですよ」

「私も今回は擁護できません」

「ふふ、あんまり出し惜しみすぎるのもよくないっていう教訓になったわね」

「ん……（コクコクと頷いている）」

完全に我らが艦長ズを敵に回したようだ。ちなみに護衛駆逐艦の艦長たちはアニエツリ大佐が、後で貴方達には伝えるわ。それまで本艦を守ってくださいるかしら？と流し目で言ったので来なかったらしい。

なんか、司令官ってお飾りのような気がしてきたな。あ、天国の天城大佐が手を振ってるよ。え？カラオケ？いいですねえ、私もストレス発散したいですよ……。

「また豊田君が遠い目をしておる」

「あんたのせいだあんたの」

「仕方ないのう。この装置は訓練用に作ったものでな。なんと、聞いて驚け！ この艦隊からの攻撃で人が死なくなるのじゃ！」

ババアーン（ドヤ顔）ノ（司令）（熱血）（変態）（堅物）（年増）（無口）

みな、無言になった。表情が消えているね。はは。私は苦笑いだろ
うか？

「あ、あれ？ ここはおおー！ とかそれはすごい！ と言う所ではないのかの！？」

「それで訓練用か。最悪こっちの世界の軍と戦闘になってもいろいろ言い訳がききやすいということを博士は言いたいんだな」

「原理は聞かないでおきますよ、レディには秘密がつき物と言いますからな」

「心置きなく実弾訓練が行えるわけですか。それは心強い」

「すごいじゃないのーパチパチパチー（棒読み。手拍子も口で言っている）」

「……わたしには、あんまりかんけいなさそう……かえっても、いいかな……」

「おお、天城大佐、結構歌えるんですね。よし、では私も一曲」

「おおー！？ 豊田君！？ 還ってくるんぢや豊田くん！？」

気付いたら私は澤風の艦長室のベッドに居た。机を見ると、手書きのメモで謎の訓練用装置というものの説明がされていた。

『謎の訓練用装置』

スパルヴィエロ搭載。効果範囲は半径数キロ以上なので多少離れても問題なし。使用する兵装によって生物が死亡しなくなる。最悪の場合でも命はとりとめる。ただし、艦艇、建造物等は破壊されてしまったため、改良の余地あり。これらの破壊によって巻き込まれた際も、基本的に死なない。謎の装置だから作り方は分かるが原理は謎ぢゃ。

ほ、ほめてくれても、いいんじゃないぞ？ はかせ

「最後の一行はなんなんだろうな」

何か思い出してはいけないことがあるような気がして、私は考えるのをやめた。何故か今日も凄く疲れているような気がする。今日くらいはしっかり眠りたいものだ。

海鳴市街地

アリサ・バニングス

帰り道、なのはとすずかとの塾への近道。なんだかなのはがぼーっ

としている。私とすずかとの話にも入ってこない。たしかになのは朝に弱いけれど今はもう夕方よね。どうしたんだろう？ もう、すずかにも心配されてるじゃないの。しっかりしなさいよ。

「え？」

「なのは？」

「なのはちゃん？」

急になのはが立ち止まって、きよろきよろと辺りを見回す。声が聞こえたとか。やだなあ、この近道、暗くなると結構……って何考えてるの私。まだ明るいのに幽霊とか出るわけが無いじゃない！

なのはが急に駆け出した。ちょっとちょっと、何なの？ 慌ててすずかと一緒に後を追いかけると、なのはが小さな動物を抱いていて……これ、フェレットだよな。やだ、怪我してる！

「とりあえず、病院？」

「獣医さんだよ」

「ええっと、この近くに獣医さんってあったっけ？」

「待って、家に電話してみる」

そのフェレットは怪我也大したことなかったみたいで、大丈夫だったみたい。起きた後はなんだかなのはをじっと見ていたから、助け

たなのはに懷いたのかも。あーもう可愛いなあ。すずかも動物好きだからもう目をキラキラさせていたわ。でもあの子は衰弱していたから、しばらく院長先生が預かってくれることに。早く元気になりなさいよ？

……って、塾が始まつちゃう！ 急がないと！

塾の間もあの子のことが気になって、誰が引き取るか筆談していたらなのはが当てられたけれど問題を教えてあげるとその場ですらすらと解いてなのはは答えてみせた。やっぱりなのはは理数系得意よねえ。わ、私だってあのくらいはできるわよ？ って私は誰に言い訳しているんだろう…。

結局、犬猫屋敷の私やすずかの家では難しいのでどうなることかと思っただけれど、夜になのはからメールが来て、預かってもいいと言ってもらえたと聞いて安心したわ。とはいえ、いつまでもそのままというわけにはいかないわよね。なのはの家は喫茶店だから、一応住んでいる家とお店が離れているとはいえ動物を飼うのは衛生上よくないだろうし……。いい引き取り手、探さないとね。

第三話 それはそれぞれの始まりで（後書き）

なのは視点でユーノ回収を書こうとしたけれど、タイトル通りあまりにもアニメそのままになりそうだったのですずか及びアリサで代打しました。

。すずか&アリサ
やや落ち着きすぎたかもしれませんが。リリカルの子供はこんなものかもしれないが。

。エルネスティーネ・ブラウン博士
兵器・戦術研究の博士号保有者。片眼鏡がチャームポイントの女性技術士官。超兵器機関を探りにウィルキアを訪れ、クーデターに巻き込まれた際にシュルツに救助された。その後はシュルツたちのよきアドバイザーとしてその戦いを補佐した。戦後は超兵器の無力化研究に尽力している。

。天城仁志大佐
故人。クーデター後、同盟国である日本に落ち延びたウィルキア近衛海軍を帝国に売り渡そうとした上官に反発してシュルツたちを救うも、帝国に日本が併合された後は艦隊指揮官として立ちはだかり、シュルツらに後事を託して戦死する。カラオケが趣味というのはオマケステージでのイベントから。

。謎の訓練用装置
ロリババア自重。鋼鉄流“なるものはなる”。フラグでもある。

。アリサの心の中での幽霊発言
分かる人だけが分かればいいネタ。お前が言うかお前が！ って。

苗字違うし別人だし原作違いだけど。

そしてツンデレは難しい。（重要）

2011・4・9 改稿 全面改訂に伴い、大幅に変更。なのはたちの側の描写を加筆。一部を次話以降に。

4・10 改稿 付属↓附属など誤字修正。

5・9 改稿 誤字修正。

6・27 改稿 一部加筆修正。

6・30 改稿 誤字修正。後書加筆。

7・18 改稿 誤字修正。謎の訓練用装置の搭載艦など一部設定齟齬を修正。

9・18 改稿 前回までの改定によって発生していたいくつかの致命的な齟齬を修正。

11・25 改稿 改題。

第四話 都合の悪いことは都合の悪い時に起こる法則（前書き）

緊急時とはいえ、とりあえずコレで！ と言って変身して「ふえ、ふえー！？ 嘘お！」は一種のギャグですよ。その時のなのは顔といい。

だがそれがいい。

第四話 都合の悪いことは都合の悪い時に起こる法則

海鳴市

自宅

高町なのは

さてと、アリサちゃんとすずかちゃんにあのフェレット君についてのメールは送ったし、もう遅いから明日に備えて寝ようっと。またアリサちゃんにからかわれたくないもの。あれ……？ この感覚、もしかして……？

『聞こえますか？ 僕の声が……聞こえますか……』

「夕べの夢と、昼間の声と同じ声……」

『聞いて下さい。僕の声が聞こえるあなた』

な、なんだろう……急に力が抜けてわたしはベッドに倒れ込んだ。でもそれどころじゃない。急いで着替えて家を飛び出す。行き先は何でか分からないけど、あの動物病院！ 後先も考えずに頭に聞こえてくる声に従って出てきてしまっなんて自分でも良く分からない。でもあの声の子は困っていたの。聞かなかったフリなんて、できないよ！

病院前まで来て……なに……？この頭に響く音……すると大きな音がして、飛んできたフェレット君をとっさに受け止めて……な、何が起こってるの！？なんか黒いよく分からないのが大きな木を吹き飛ばしたよ、

今！？

「来て、くれたの？」

「しゃべったあ！？」

何がなんだかよくわからないけど、と、とにかく逃げなきゃ。しゃべるフェレット君を抱えて走る。彼は資質がなんとかとか探し物がどうか、ここではない世界とか……ううゝ聞き捨てなら無い言葉もあったような気がするけど、協力してほしいって言ってもわたしたちの小学三年生だよ？

「僕の持っている力を、貴女に使って欲しいんです。僕の力を、魔法の力を」

「まほう？」

えっと、アニメとか漫画の世界のお話だね、それ——ってなんか黒いのが降ってきた！？危ないところだった。運動音痴のわたしにしてはよくやったと思うけれど。え、なに？ 協力してくれたらお礼をするって……それどころじゃないよね？

——後から思えばわけも分からないことに巻き込まれて頭が混乱して、体も命の危機を感じて一步も動けないのが普通なはずなのに、こうして逃げる事ができていたのは目の前の“彼”が言うことがことごとく現状からズレていたからなのかもしれません。“彼”にしても狙ってやったわけではなく彼自身動転していたせいらしいのですが。

「どうすればいいの？」

そしてこの夜、彼と彼が渡してくれた赤い宝石——レイジングハー
トとの出会いが後のわたしの未来を一変させたのでした。でも、そ
の時のわたしはただただ必死で、そして混乱していたんです。

日野中尉の日記の一部抜粋

那岐ですが、艦橋の空気が最悪でした。

今夜も司令はベッドに入ったところで起こされました。そして例の
ごとくノイズはほどなくして消えてしまいました。

指差して笑っていた副長に司令がアームロックをかけました。少尉
がそれ以上いけない、と言わなかったら危なかったと思います。

明日は超兵器ノイズが出てもごまかしちゃおうかなーなんて一瞬思
ってしまいました。

海鳴市

私立聖祥大附属小学校

高町なのは

昨日は誰かの声に呼ばれていった先で出遭ってしまったジュエルシードの思念体というのを封印しました。その後、夜の公園でその声の主に事情を教えてもらいました。名前も交換して……彼はユーノ君というんだそうです。可愛い名前だよね？ あ、でも男の子に可愛いというのは褒め言葉じゃないと思うので口にはしませんけれど。

ジュエルシードというのはユーノ君が発掘した、昔の人が残した発明品で願いをかなえる石なんだそうです。けれどもその効果が安定せず——思念体というのも人の残留思念や大気中の魔法の素を寄り代にしてくる願いを求めて暴走する姿なのだそうです——とても危ないから事故で海鳴市にばらまかれてしまったジュエルシードをユーノ君は回収しに来て、でも一人ではうまくいかなくて怪我をして……後はわたしの知っている通り。

その後帰宅したのですがこっそり出かけたのがお兄ちゃんにばれてしまっ、お姉ちゃんのフォローで許してもらえたけれど心配させてしまいました。ユーノ君を家に置くことについてはお父さんとお母さんにも受け入れてもらえて……あれだけ可愛いんだから無理も無いよね？ しばらくおもちやにされてしまっていたユーノ君がぐったりしていました。ご、ごめんね？

で、どうなったのかと言うと。うん、いつも通り、寝起きはあんまりよくなかったのです。寝るのが少し遅くなってしまったのもあるのですが。これからのことを話すために朝出かける前に離れていてもお話できる方法——念話を教えてもらったので学校の空き時間にいろいろ教えてもらおうと思います。

でもほんとにわたし、アニメの世界のような魔法少女になっちゃったんだ。実感、湧かないなあ。

「なのは聞いてる？」

「ふえ？」

「昨日行った病院で車の事故か何で壁が壊れちゃったんだって。あの子大丈夫かな？」

「あ……」

今はもう学校です。ぼうつとしている間にアリサちゃんとすずかちゃんの話が進んでいたみたい。やっぱり、パトカーのサイレンとか聞こえていたから昨日のことは大事になっているよね。あわわ。フレット——もといユーノ君を二人とも心配しているし、ど、どうやって誤魔化そう！？ええと、ええと。た、助けてユーノくん！

『それなら僕が逃げ出して君の家に来たということにすればいいと思うよ』

『気になって外に出た時にユーノくんを見つけたって言えば、嘘にはならないよね。ちよつと、ちよこつと真実をばかしただけ』

アリサ・バニングス

動物って凄いわよね。きつと危ないっていう勘が働いて逃げ出したんだわ。あれ、でもどうしてなのは家が分かったのかな？それも勘だとすれば本当になのはに懷いているのね。なのはのうちに飼

える事になったみたいだし、慌てて貰い手を探す必要はないみたい。ふふ、あの可愛さになのはの両親も撃沈されたのかも。

「あは、あははははは……」

ただ一つ妙なのは乾いた愛想笑いを漏らし続けるなのは。私とすずかは顔を見合わせて首を傾げるしかない。うーん、何か隠しているのかしら？ まあいいわ。名前はユーノくん？ ふうん、いい名前じゃないの。

海鳴市

高町家

ユーノ・スクライア

ジュエルシードは僕らの世界の古代遺産。ロストロギア手にした者の願いを叶える——という触れ込みの石だけれど実際にはうまく願いをかなえる保証はなく、単体で暴走したり生物を取り込んで災厄を撒き散らすこともある危険な品物。僕が発掘の責任者だった。嚴重に封印されて管理局で保管するために輸送されていくのを僕は見送った。

でも輸送船の事故でこの世界に21個のジュエルシードがばらまかれてしまった。なのはは僕のせいじゃないって言ってくれたけれど、これは僕の問題だから彼女は巻き込めない。僕一人で探すんだ。危ないこともあるんだから。

『それはだーめ』

『で、でも』

『お話、聞いちゃったから。それにお父さんが言ってたの。』

困っている人がいて、助けてあげられる力が自分にあるのなら、その時は迷っちゃいけない。

ユーノくんは困ってる。わたしが力になれるならお手伝いしたいの』

そう言っただのは僕を手伝うことを半ば強引に認めさせられてしまった。君は優しい子だね。神様がいるとしたら感謝します。スクライアの一族の皆にも何も告げず、飛び出してきてしまった僕にこんなにも頼もしい味方を引き合わせてくれて。

『それに昨日みたいな騒ぎが何度も起こったらご近所さんに迷惑になっちゃうよ?』

『……ありがとう、なのは』

冗談交じりに言っただけの僕を軽くしてくれようとするなのは。その気遣いに礼を言った直後、招かれざる客はやってきた。新しいジューエルシードが発動したのだろう、かなり大きな魔力が放出されている。なのはも感じたみたいだ。方向もなんとなく分かれると言っている。聞いてみると僕の感覚とほとんど方角は一緒だった。魔法に触れたのは昨日だというのに凄いい子だな。

『どうしたら?』

『すぐ近く。一緒に向かおう!』

で、急いでなのは家を出ようとしたのだけれど、僕は困ってしまった。この姿では玄関のドアが開けられない。都合よくなのは家族が出入りしたりはしないし、そもそもペット扱いの僕が彼らについて外に行くわけにはいかない。元の姿に戻るわけにもいかないし。まさか窓を開け閉めする為に魔法を使うことになるなんて思ってもみなかったよ。

海鳴市

高町なのは

途中でユーノちゃんと合流して、長い長い神社の階段を駆け上がった……つ、疲れたよ。何段あるんだろうこれ。えつとアレはもしかして、犬？ 原型はかろうじて留めているけどなんだか怖いよ。それに女の人が倒れている。あの人どこで見たような。……うん、昨日塾に行く途中ですれ違った人だ。アリサちゃんがあの子の人が連れていた犬がほえたから叱っていたつけ——ってそれどころじゃないよね。

「暴走体だ！ 実体がある分手強くなってる。レイジングハートの起動を！」

「大丈夫、たぶん。えつと、起動って……なんだつけ？」

「え」

あわわ、こつちに向かってくる！ 起動パスワード？ あんな長い
の覚えて無いよあ！ ってレイジングハートが光りだした？

「レイジングハート？」

> Standby ready・Setup・Barrier jacket・<

うわあ、なんだか魔法って便利なの？ レイジングハートが何もし
ていないのに起動して、気付いたらわたしも防護服姿に！ そして
そこに暴走体が。あ、危なかった……。

「なのは！」

ってぼうつとしてる場合じゃなかった！ 鳥居の上からまた襲って
くる！？

> Protective condition , all green・<

ええと、これ、私必要なのかなあ？全部レイジングハートがやって
くれているような気が。でもユーノくんが言うにはこれはわたしの
力なんだよね。うん、手伝うって決めたんだから、迷ってる場合じ
やないの。やるべきことをやらなきゃ。

「大丈夫だよ、ユーノくん。レイジングハート、お願いね」

> All right・<

そうして、ジュエルシードの封印も無事に終わり、取り付かれていた犬さんも、シヨックで気絶してただけの飼い主さんも怪我もなく、めでたし、めでたしなの。

「ってもうこんな時間」

「ごめん。結構時間がかかったね」

「ううん。じゃあ早く帰ろう？」

「あ、僕はこっそり抜け出したから鞆に入っているよ」

「にははは、ごめんねユーノくん」

この日は、こうして終わりました。不安な事もあるけれど新しい友達、ユーノくんと一緒に頑張っただけのことだと思います。

そのときのわたしはまだ自分がどんな世界に足を踏み込んだのか気付いていませんでした。いえ、気付きたくなくて目を逸らしていたのかもしれませんが。9歳のわたしに現実を見つけることはまだ難しかったのだと思います。

日野中尉の日記の一部抜粋

那岐ですが、艦橋の空気が最悪でした。

今日も、司令はベッドに入ったところで起こされました。そして、例のごとくノイズはほどなくして消えてしまいました。

指差して笑っていた副長に司令がアームロックをかけました。少尉がそれ以上いけない、と言わなかったら危なかったと思います。

明日は超兵器ノイズが出てもごまかしちゃおうかなーなんて一瞬思っていました。

…副長曰く、こういうのは天井っていうらしいです。二日連続でみんな疲れているんですね…私です。

第四話 都合の悪いことは都合の悪い時に起こる法則（後書き）

司令の悪夢はこれからだ！（副長談）日野中尉の日記にはネタが詰まっています。

○なのはの就寝時間

なのははユーノの声を聞いた時にはパジャマなのでもう寝るつもりでいるのでそれから出かけたら遅くもなるよねというお話。

はやてさんは絶賛お休み中。艦隊は航路圏外にまで離れているので流石に範囲外だと思います。

○思念体、暴走体、異相体

88式もメディアの違いと用語の曖昧さで混乱していました。この話の中では以下で統一します。

思念体——人の残留思念が核となったもの。何もなくてもジュエルシードが暴走する原因。

暴走体——生物などの確固とした寄り代があるもの。願いが本能に立脚しやすい知能の低い個体を取り込んだ際に多い。

異相体は映画のみだったので没りました。

○ちよこつと真実をばかしただけ

若干修正の上でユーノ発案に。あの説明の上に乾いた笑いは胡散臭すぎです。小さくても女の子は鋭いから怖いです。

○ユーノとの念話

この話では帰り道でアリサと別れた後に話しています。マルチタス

クにまだ習熟していないので転んだりとか電信柱に頭打ったりとかしてたんじゃないかと。

○異世界の魔導師、家から出る為に魔法を使うの巻
神社でのなのはは鞆を背負ったままなので家に戻っておらず、こんなことに。4月だから窓も開いて無いでしょう。

そしてオチが二重に酷い。

2011・4・9 全面改訂に伴い大幅に変更。ほぼ全編新規。

4・15 改稿 一部表現修正。誤字修正。

5・9 改稿 誤字修正。

6・29 改稿 誤字修正。アニメを覚えていないとわかりにくかった部分加筆。

7・18 改稿 誤字修正。一部表現修正。

9・18 改稿 加筆修正。大筋変わらず。

11・25 改稿 改題。

第五話 母と息子 書類とオレたち（前書き）

ようやく管理局サイドのお話ですよ。

第五話 母と息子 書類とオレたち

三日前 時空管理局次元間航行部隊 第5次元巡察隊旗艦 L級次元航行艦アースラ リンディ・ハラウン少将

「…ちょっと待ってちょうだい。もう一度繰り返してくれる？レテイ」

「第296管理外世界が消滅したわ。同世界に多数存在したロストロギアの暴走によるものと推定されている。不幸中の幸いだけど今のところ付近の次元世界への影響は確認されていないわ」

「そんな…あの世界のロストロギアは休眠状態に入っただけではなかったの？」

「今のところ情報が錯綜していてほとんど状況が分からないのよ。付近を航行中だった第8次元巡察隊が向かったから追々分かると思うけど」

「…ようやく緊急通信が回って来たわ」

「こっちも混乱しているのよ。兆候も掴めず突然次元世界が消滅したんだから。それじゃ何か分かったらまた連絡するわ。」「ロウラン中将！」「…あー、連絡する暇ないかも」

「無理はしないで」

私は暗転したモニターを前にしばし呆然としていた。第296管理外世界の一件は先遣隊によってロストロギアを管理している組織の責任者に連絡がつきこれからというところだったというのに。かの世界は多数のロストロギアが存在が確認されながらつい数年前までそれらを用いた戦争が続き、その危険性から不干渉の原則を破つても時空管理局が介入するべきか協議されていた。

ロストロギアを危険視し、あくまで管理局で回収すべきとする強硬派からは魔法技術こそないものの多数使用されている兵器群を理由に魔導師の投入は危険であるとしてアルカンシエルの使用も辞さない論調すら存在した。もっともそれに対しては強硬派内部でもやりすぎとの声が強く、多数意見とはならなかった。一方たださえ人材不足の管理局に次元世界そのものを巻き込んだ戦争に介入する体力はないと反論していた穏健派にしても交戦状態にある各国にロストロギアを放棄させる策があるとは言い難く、議論は大いに紛糾していた。

が、幸いにして戦争は終結、ロストロギアが休眠状態に入ったことが確認された。この際、多少の規則の問題を横に置いてでもこの機会を使って封印あるいは回収を行うべきという結論が出され、近々正式に次元間航行部隊を派遣して現地組織と対応を協議する方向で調整が進められていた。

私はこの問題に関しては穏健派に属しており使節団を乗せて派遣される艦隊は指揮下の第5次元巡察隊になる予定だった。リンディ提督のおっとり具合では独断専行の危険がない、と判断されたんだろうというのはいくぶん次元航行部隊とは犬猿の仲で有名な地上本部のゲイズ少将の評と聞く。なるほど確かにそれを聞いてもあまり怒る気にならないあたり、その評価は正しいのかもしれない。

「提督。これは…」

「…どうやら次に入る予定だった航行任務がなくなったようね」

息せき切って艦橋に駆け込んできた息子のクロノの顔には信じられない、と書いてある。私も気持ちは同じ。

忌まわしい、未だに私たち家族の心に傷を残したままあの事件にしろ次元世界の消滅とまではいかないまでも次元災害は度々起きているのが現実だ。非情なようだけどそれをいつまでも気に病んでいる訳にはいかない。それが私たち次元航行部隊の仕事なのだろう…。

「…どうして、そんな事に…」

でもいつも真面目でしっかりしたこの子でもやはり14歳。世間では社会に出る事はあるとしても私にとってはまだまだ子供。けれどもこの子はすぐに自分の殻にこもってしまう。悲しみの表情を見せたのもほんの一瞬だった。上司としては感情のコントロールができている部下に感心するところだろう。

だけどそれは子供の行動ではない。母親としては見過ごせない。そしてきつとそれは一番側にいてあげるべき時に私がこの子の隣にいなかったから。だから上司としてではなく母親として今できるのはこんな事くらい。

「か、母さ…提督？」

「ふふ、上官命令よ。しばらくじっとしていなさい」

こう言えば頑固なこの子でも黙って抱きしめられたままでいてくれ

る。…他に言い方を思いつけないあたり、やはり私は母親失格なのかもしれないわね…。

あら、エイミイがこっそり目配せしてきたわ。てっきり仕事にかかりつきりだと思っていたのだけど目ざといこと。底なしに明るいなあいう子たちが一緒にいてくれればこの子の心の闇も、いつかは…。

第5次元巡察隊 D級次元巡察艦 ディフェンダー 艦長

「艦長、救難信号です」

「何？」

やれやれ、第296管理外世界が消滅したというニュースの次は遭難船と来たか。俺は肩をぐるりと回して、海軍帽を被り直した。制式帽にはなっていないがこいつは俺を含め、次元艦の艦長の間では結構愛用者が多く、半ば準制式扱いになっているので公の場で被っているのも文句は言われない。元は海上部隊から次元航行部隊に引き抜かれた艦長が広めたものらしい。どちらもフネには変わらないとはいえ無茶な引き抜きだよな。それだけ人材不足が酷いということなのだが。

「どこの船だ」

「た、大変です」

「どうした落ち着け」

「スクライアー族が発掘したロストロギアを積んでいた輸送船だそうですね！」

「な、なにい！？」

落ち着けと言っておきながら俺は艦長席から立ち上がって叫んでいた。だが誰も非難はしてこない。そりゃ俺じゃなくたって驚くさ。こつも立て続けに次元災害を引き起こすような知らせが耳に入ればな……。ロストロギアの詳細を問い合わせるように指示を出しつつ俺は厄介事が舞い込んだものと心の中でため息をついた。一口にロストロギアと言ってもピンキリだ。次元世界丸ごと吹き飛ばすようなものからジョークグズ紛いのものまである。物騒なものじゃなければいいが、救難信号を出すような状態だから、な。

「アースラに緊急連絡！本艦は直ちに現場に急行する！総員配置につけ、不測の事態に備えろよ！」

第5次元巡察隊が輸送船救援に向かってしばらく後 時空管理局
ある出入世界管理官

「ふう、今日も仕事が多い事多い事。観光気分であちこち動かれたらたまんねえな」

いつも通り山のよオな書類を整理していく中、オレはふとある書類

で手を止めた。こういう勘は俺たち出入世界管理官の間ではよく“第六感覚醒！犯罪者リーダーに反応あり！”なんて言われている。ああ、表現は気にするな。オレ流の言い方ってただけだ。

「ん？ユーノ・スクライア？スクライアといやあ…あの一族か。何で第97管理外世界に…ふーん、休暇ねえ。ま、連中でも命の洗濯は必要って事か。羨ましい！妬ましい！オレにも休みをくれ！」

「うちも休暇欲しいなあ…」

「おいばかやめろ。士気が落ちるだろ！」

「そうは言いますけどしつちょー、もううちら三日も家に帰ってませんよお」

「わ、私だって妻に次はいつ帰るのかって責められてるんだ！去年は娘の運動会にも出られなかったし…ちくしょー！」

「すみません室長…こちらはまだマシでした…」

あ、やべ室長泣いてる。ちくしょう、くやしくなんかないやい。半ば意地になって上から下まで舐めるように確認したが非の打ち所のない正式な申請だ。ちよつと手元の端末でも調べてみたが、過去に何度か管理外世界へも渡航しているし、その際にも特に問題を起こしたとかいう記録はない。

どうやら今回のオレの犯罪者リーダーは空振りだったらしい。ま、こんな事もあるさ。というより、何もない方がいいに決まってる。それにこしたこたあない。休暇なんてクソ食らえだ！オレたちや昨日も今日もそして明日も書類とダンスだぜ！それでも仕事はおわら

ねえ！

バカな事考えて現実逃避している場合じゃないな。今日のノルマは終わらせないと…ため息一つついて認印を押印してその書類を処理済の箱に放り込むとオレは再び山のよオな仕事に取り掛かった。ふ、今日も帰れそうにないぜママン。

…後でこのユーノとかいうスクライアー族の子供がある事件の解決に関わっていたなんて言われたがその頃にはオレはこの書類のことで、自体、ほとんど覚えていなかった。書類は友達、なんて自虐ジョークが囁かれるんだからな、この職場は。ハハッ

第五話 母と息子 書類とオレたち（後書き）

MOVIE 1stのコミックスでユーノ渡航やアースラが地球近くにした理由は描かれていますがこの辺りは当方の独自設定で突っ走ります。ユーノは自分とスクライアー族の信用を利用する形で独断で現地に向かい、アースラ組は元々付近をパトロールする部隊だったという事になります。

○提督

階級表示の方がやはり偉さなどが一見して分かり易いので別途、彼女らには将官クラスの階級をあてておきます。かつ、提督と呼ばれるのは数隻を預かる前線指揮官（将官クラス）のみとします。

○リンディ

艦隊指揮官兼アースラ艦長となっているのでアースラクルーを中心に見られた艦長との呼称は作中ではあまり用いないと思われます。

○ミッドの就労可能年齢事情

よくあるこの形に。所変われば常識も変わるという事で。誰でもその年齢からという意味ではなく能力があればの話です。それゆえ十分に周りから認められるまでは周囲からの偏見の目も少なからずあるでしょう。

○出入世界管理官

その気になれば個人で転移できる人間もいるリリカル世界では一見無意味な存在ですが、逆に言えばそうでない相手になら十分有効なはずです。そしてこれはひどいブラック企業。

7	5	4
・ 1 8	・ 9	・ 1 5
改稿	改稿	改稿
誤字修正。	誤字修正。	誤字修正。
一部表現修正。		

第六話 紳士には潜入任務が似合う（前書き）

めくるめく紳士ワールドによっこそ。

88式はグリーン・ワイ。ットとか大好きですよ。

第六話 紳士には潜入任務が似合う

日野中尉の日記の一部抜粋

二日ほど何事もなかったのですが、また司令が艦長室に消えた直後に超兵器ノイズを捉えてしまいました。：なんかもう、運命か何かだと思うんです。すぐ反応が消えるのも。副長もからかつのをやめて哀れみの目で見ていました。でも司令は

何も言われて無いがお前の態度が気に入らない

と言ってチェストーとか言いながら副長と戦っていました。お気持ちには分かります。確かにあの目はイラッと思うんです。

海鳴港沖 第十三任務部隊 旗艦 駆逐艦澤風 鈴木和人少佐

「天気晴朗なれども波高し、と」

「司令、なんですそれ？」

「ん、日本海軍の有名な参謀が日露戦争の時に打った電文の一部だぞ」

「まさか知らないのか那岐君」

「……うー、戦史は落第寸前だったんですよ……」

少し遠い目になってしまふ。ああ、偉大なる先輩、明治は遠くになりけり……いや、俺のような海軍を追い出された出来損ないの後輩に先輩などとは呼ぶ資格はないのかもしれないけどさ。

「しかし、やはり賛成しかねますよ。司令自ら上陸するなどと」

「すまんが決めた事だ。陸戦隊隊長も一緒に、そもそも平和そうな土地だ」

「一見平和そうでも超兵器ノイズが頻繁に観測されてるんですがね」

こういう時の司令は頑固だ。自分で決めた事は頑として曲げない。指揮官の意思があつちにふらふらこつちにふらふらしてもらっては困るが時としてそれは美德にもなり弱点にもなる。少し俺は心配だ。特に今のようにここではないどこかに心があるような顔をしている時は。

「夜を待つてアンバスケイドで接近し、ある程度まで近づいたら内火艇にて上陸する」

「所属は上から布で覆い同様に船名もそれらしいものに偽装します」

「澤風のものが使えばよかったんだがな……」

司令が残念そうに言うがこればかりは仕方ない。艦隊用光学迷彩装置を積んでいるのはスパルヴィエロとアンバスケイドだけ。従つて

澤風の内火艇を使用するためにはどちらかが随伴しなければならなくなるが、夜間で人や船が少ないとはいえそろそろと行動するのは危険だ。こちらに來た時は幸い何事もなく沖合いまで行くことが出来たがなるべく危ない橋は渡りたくない。そうなると光学迷彩装置を搭載した艦が単独であたるのが一番安全というわけだ。

スパルヴィエロは軽空母のふりをしてはいるものの機動力は低い。船足が遅く図体大きい上に小回りもきかないとあってこつそり陸に接近して人を上陸させるなんていう作戦には全く向いていない。ヘリで上陸？うるさいし目立つ事この上ないだろう。却下だ却下。消去法でこの任務を行えるのはアンバスケイドだけとなる。あの艦は電子戦能力が高く機動力もあるしな。

H L G 対応駆逐艦は従来艦に比べて機動性も高い。トップスピードから数秒で静止する、と言えばその異常性は分かるだろうか？防御重力場発生装置の余技で重力制御があるので艦内の俺たちが将棋倒しになるというオチもない。なんというか…軍艦乗りとしての常識がごとごとく海の藻屑になるという点では超兵器といい勝負だ。この状況下ではその非常識なほどに頼りになる点が救いではあるんだけどさ。

『ははは、紳士は慎ましさを忘れない。私にお任せを…おっと君、艦は恋人、もっとエレガントに舵を切りなさい』

『サーイエツサー！』

通信越しに漏れた操舵手とのやり取りに俺たちは一様に苦笑の色を貼り付けて顔を見合わせた。艦長が変態紳士でなければもうちょっと安心できるんだがなあ…。腕は確かなのはこれまでの訓練で知ってはいるんだがどうにも不安が拭えない。なるほど有能であっても

軍にとってはあまり好ましくない人物だ。せつかく大事なことを任せられる実力があるのにいざ任せるとなると不安になる奴なんて非常時かつ人材不足でもなければ誰も使いたがらないだろう。

セクハラ発言が理由でロイヤルネイビーを追い出されたというのは案外事実ではないのかもしれない。いや発言そのものは事実でそれを口実にされてしまったのかもしれないな。そういう疑念がつきまわってしまうあたりやはり困った男だ。

「副長、艦隊全体はアニエツリ大佐に任せる。非常時にはフォード中佐が第一戦隊―H L G 駆逐艦4隻―の指揮官だ。澤風を頼むぞ」

わざわざ言うまでもない本来の艦隊の指揮権序列ではある。司令代理が階級上、次席のアニエツリ大佐になり、圧倒的な戦闘力を持つ第一戦隊と、非戦闘艦を抱える第二戦隊―こちらはスパルヴィエロ以下、非H L G 対応艦。サプライも含まれている―が同じ戦闘機動ができるはずはないので豊田司令がない場合、4艦の中で最高位になるフォード中佐が第一戦隊の戦闘指揮官になるのも当然だ。司令が艦長を兼ねるとするのがそもそも非常識であつて、澤風には大佐クラスの艦長が別に置かれるべきではあるんだが。

「ちなみに、当初赴任してきた准将を見て俺は4隻を束ねる戦隊指揮官だと思っていた。大佐クラスが駆逐戦隊の指揮官として准将の階級を与えられることはそう珍しいことではないからだ。人材不足ここに極まれり、というこの艦隊の事情の発露であつたと今にしている。

「了解。普段も艦長職は任せて下さつても構わんですよ？」

「お前のような青二才にはまだ早い。威厳のイの字が分かってから

言うんだな」

「はは、違いありません。その意気なら撃たれても平然と戻ってきそうです」

神妙な顔で言うので一言言ってみたが、あっさり反撃されてしまった。憎まれ口を叩いておくくらいしかできない。まだまだこの人には敵わないな。俺などひよっこか。海は広いということだろうな。

海鳴市沿岸 第十三任務部隊 駆逐艦アンバスケイド ウィリアム・ベントレー少佐

「静かな夜ですな。紳士は静寂を好みます。思索にはもってこいの環境ですよ」

「紳士は関係ないとは思うがその考えには同意するよ」

私はダージリンを楽しみながら司令に目配せをしました。司令も私の言葉に快く同意してくれます。紳士は理解のある上司に恵まれるのです。理由が知りたいですって？簡単な事です。紳士たる振る舞いを心がけていれば自然と相応しい環境は整うものなのです。

「ふう、やはりダージリンはよいですな」

「艦長、無灯火の貨物船、艦尾側を通過しました」

「ふむ、非常識な事をする船もあるものですな。紳士として本来なら説教の一つでもするところなのですが致し方ありません」

「……そうだよな…クルーはもう慣れてるんだな。むしろ私が異物なのか…」

ふむ、我らが上司はどうやら思索にふけっている様子。邪魔しては無粋でしょう。紳士は空気を読んで行動するものです。相手の感情を乱すような行いは慎まなければなりません。そういう意味では…

「……何か？ベントレー少佐」

「いえ、何も」

そつと司令のお側に控え、身じろぎ一つせずただ静かに佇んでいる中肉中背の男。ぱつと見ではさほど強そうにも見えず、かといって軟弱なようにも見えず。彼は補給艦サプライに乗船している陸戦隊の隊長です。陸戦隊はウィルキア陸軍との技術交流のためにきたのですからとばつちりもいいところでしょうが彼らは実におとなしくしているとか。

司令が彼さえいれば大丈夫とおっしゃられるのだからかなりの実力者なのでしょう。もしかするとお知り合いだったのかもしれないね。でも詮索はするものではありません。紳士は自分の分をわきまえているのです。

「司令、そろそろ内火艇へ」

「分かった」

ちなみに上陸する二人は作業着姿。私なら紳士らしくスーツで…と言いたところですがかくいう私も戦闘艦に私服を持ち込んではいません。こればかりは仕方がないというものでしょう。せいぜい自分で選んだ茶葉を持ち込む程度が関の山、紳士は妥協点を探る事にも長けているのです。

海鳴市 豊田浩二准将

「意外とあっけなく上陸できたな」

「…予想より装置の効果が高かったのでしょうか。沿岸ぎりぎりまで姿が消えていたようですから」

「そうか」

離れていく内火艇の様子を見守っていると、陸戦隊長の言葉通り艇のすぐにその姿は闇に溶け込むように消えていった。博士は装置の理論値は説明してくれたが試作品ゆえ効果が一定ではないそうだ。範囲内の対象を装置で指定して見えなくするのだが見えなくなつた対象同士の間では見えているので消えているはずの当事者たちからすれば本当に“消えている”のか確かめる方法がない。

出航以来自室にこもっていたのは出力を安定させる調整をずっとしていたからとのことだ。効果の不確かなものなど兵器としては下の下であるから博士の努力に期待したいところである。

「さて、我々の仕事は超兵器ノイズの近距離観測だ」

「無線機と観測用の小型レーダーのチェックをします」

「うむ」

『鋼鉄の魔女、こちら、鷹の目。感度いかが。送れ』

『鷹の目、こちら、く、鋼鉄の魔女。感度良好。くれぐれもご注意を。送信終わり』

「それにしてもここまでレーダーの小型化が進むとはね」

「トランクサイズになるとは私も驚いていますよ」

鋼鉄の魔女は今回の通信で使う澤風の呼出符号だ。副長の趣味らしい。ベントレー少佐あたりの入れ知恵があったのではないかと日野中尉は睨んでいたが…一応、文句は言いつつも取り決め通りに応答してくれているようだ。どうにも中尉はたまに子供っぽい態度が出るのだが…他の個性的な面々に比べればどうということはないような気もする。

戦争は技術を飛躍させる。確かにそういう一面もあるのだろう。陸戦隊長はレーダーのチェックも手早く終えて機材の入ったトランクを持ち上げた。もしかすると一見軽そうに見えるが結構重いのかもしれない。何しろ実際に持ち運びをするのは鍛えている軍人なのだから頑丈さとの両立も問題となる軽量化は案外後回しという事も考えられる。

「しかし君は何も言わないんだな」

「…准将がお決めたことですから何か意味があるのでしょうか？自分のような腕っ節ばかり強い兵隊があれこれ言う事は無いですよ」

「過ぎた謙遜は時に嫌味にもとられるぞ、大尉」

彼はパナマ運河攻略作戦の際にシウルツ少将の艦と連動して動いたアメリカ陸軍の士官の一人で戦後に少将の勧めで国連軍入りした人物だ。彼もフォード中佐同様、母国の超兵器計画に反対したが、彼とは逆に最前線に送られ続け、それでも尚生き残った歴戦の猛者である。彼の武勇伝は彼の部下を通じてシウルツ少将へ、そして私に伝わっている。

上官が日系アメリカ人である彼を嫌っていたのだろうとシウルツ少将は私にこぼしていた。実にくだらない事だがそれが我々の世界の現実でもあった。そしてそれは戦後もそう変わってはいない。

「…私にもこの土地の雰囲気というものは分かりますよ。うまくは言えませんが…ここでは銃が必要とは思えませんね」

「そうか…」

大尉は「恐らく拳銃を携帯しているのだろう」胸をぽんぽんと軽く叩きつつ言った。私は苦笑して生活物資を入れたトランクを手に歩き出す。が、そのとき大尉の手にしたトランクからピピピ、という音が聞こえてた。

「超兵器ノイズです」

「おいおい冗談だろ。もうお出ましか」

「私が偵察します。ここでお待ち下さい」

「…そうする。くれぐれも無理はしないでくれ」

陸戦に関しては私は門外漢だ。彼は敬礼すると風のように走り出した。…艦内生活で鈍った私の脚力だと荷物を持ったまま追うのはそもそも無理そうだ。

私は星空が広がる夜空を見上げて…小さく、小さくある言葉を呟いた。こうして夜空を見上げたのはいつ振りだろうか。

「…お前もこの空の下にいるのか…？」

空は応えない。独白は夜空へと吸い込まれていった。

第六話 紳士には潜入任務が似合う（後書き）

全編鋼鉄視点の巻。豊田が寝ようとする時に起こされるのは4回目。司令官自ら上陸とか何考えてんでしょねホント。

○ 一期SS01

那岐の日記の裏で終了です。ペット同伴可のプールはあまり聞きませんし…。大きい友達向けサービスは断念しました（SLB直撃

○ 日本海海戦

実はウィルキアの立地の関係上、発生したかどうか怪しいのですがここはあったという事でお願ひします。

○ めくるめく紳士ワールド

紅茶の香り漂う艦橋をお楽しみください。今日もアンバスイイトは平常運行です。

○ 無灯火の貨物船

安全な航行のために夜間には法で定められている灯火を点す事になっています。逆にそれ以外の光を漏らすのは駄目です。

○ 独白

無理を言ってまで上陸した豊田。フラグそのさん。

そして上陸早々に超兵器ノイズ…ええ、学校です。

2011.4.10

全編改稿に伴い、一部表現修正の上で旧第四話をそのままスライド。

7	6	5	4
・18	・30	・9	・15
改稿	改稿	改稿	改稿
誤字修正。	誤字修正。	誤字修正。	誤字、一部表現修正。
一部加筆修正。	一部加筆修正。		

第七話 偶然はいつも悪い意味で起こるモノ（前書き）

ここでCM…ではなく管理局視点に戻ります。

第七話 偶然はいつも悪い意味で起こるモノ

第5次元巡察隊旗艦 L級次元航行艦アースラ リンディ・ハラオ
ウン少将

救助作業は無事終わりディフェンダー艦長から報告を聞く事になった。

ディフェンダーはD級次元巡察艦の5番艦にあたる。同クラスは50年以上前の設計の旧式艦ながら長大な航続距離を持ち、余裕がある設計だったため改修を重ねて一線で使われ続けている。管理局黎明期を支えた武勲艦という評価もある。

高性能ゆえに将官クラスが艦長にあてられる事もあるL級に比べれば武装も防御も貧弱なのだが、堅実な設計で故障も少なくメンテナンスも容易とあって長距離パトロール任務の多い次元巡察隊では評価が高い。私も乗っていたことがあるけれど癖のないいい船だと思う。

一般の次元巡察隊はこのD級やそれに準ずるクラス3隻で構成されることが多いが、第5次元巡察隊はD級4隻とアースラで構成されている。…実のところ、レティあたりの手が入っているのだけど、その分任務もそれ相応のものが回ってくるのでトントンと言ったところだろう。そのせいか第5次元巡察隊は海の前線部隊と言われることもある。出勤回数は次元巡察隊では一番多いという事実もある。

『輸送船は格納庫を失い中破していますが乗組員は怪我も無く無事です』

「それは良かったわ。船長に事情は聞けましたか」

『彼らもよく分からなかったそうです』

私は僅かに顔をしかめた。それはディフェンダーの艦長も同じ。この輸送船はそれほど古いわけではなくロストログアを含めて危険物の輸送の経験も豊富な大手の特殊輸送会社が運航している。資料を見るに船長もこの道20年以上のベテランだったはずだ。その彼らが状況も分からないまま事故に遭う。一体何があったというのだろうか。

『突然格納庫で膨大な魔力の放出、次いで爆発が発生したものの船長が格納区画を切り離したので沈没をまぬがれたようです』

「いい判断ね。その区画がどこへ向かったかのは分かっていますか」

『輸送船側が記録をとっていました。そちらに回します。あと、輸送船はあんななりですが航行は可能なようです』

「分かりました。エイミィ」

「はいっ、すぐ分析に取り掛かります」

「艦長。」苦労様。ディフェンダーはそのまま輸送船に随伴して下さい」

『了解しました』

ディフェンダー艦長が敬礼してメインモニターが暗転した。エイミイは既に転送されたデータを元に作業を始めているようだ。彼女は魔導師としての素質はなかったものの、こういった情報処理の腕は一級品である。管理局は近年魔導師による凶悪犯罪の増加によって魔導師を優遇されており、広告塔として高位魔導師を全面に押し出すなどしているけれど、彼らの活動を支えているのは彼女のような数多くの名もなき後方要員であるということを忘れてはならない。

「どのくらいかかるかしら」

「あの輸送船の乗組員は優秀みたいですね」

「どういう意味？」

「これならもう分析はほとんど要りません。第97管理外世界に一直線です」

エイミイが軽くエンターキーを叩くとモニターに切り離された区画がバラバラになりながら緩やかな軌道を描き、第97管理外世界へと向かっていく様子が表示された。その破片は魔力の放出の影響を受けるなどして、ほとんどが途中で消え失せている。ジュエルシードそのものが健在なあたり、やはりロストロギアというだけあって規格外ね。

「恐らく地球の極東地区周辺にまとまって落着いているかと」

「困ったわね。管理外世界ではそうおいそれと手は出せないわ」

私は少し頭痛を感じてこめかみを軽く揉んだ。接近すればアースラの観測機材なら絞込みは可能でしょうと言ってエイミイがいたずらっぽく笑って軽く肩を竦める。…なかなかどうしてこの子も食えないところがある。

これが管理世界であつたならこのまま現地に急行するなり地上部隊に任せるなりして回収する事も可能なのだが、管理外世界に対しては管理局は基本的に不干渉の立場であるし、魔法の行使も一般に認められない。事が事だから一応抜け道はあるのだけどすぐに部隊ごと向かつてはい回収というわけにはいかない。

私は残ったD級3隻を現場の調査のために残し、アースラは落着軌道をトレースしつつ第97管理外世界にぎりぎりまで接近するように命じた。そしてエイミイの肩にぽんと手を乗せ、顔を寄せる。

「あんまり感心しないわよ。そういう絡め手は」

「いえいえ採用なさった提督ほどでは」

「うふふふふ」

「くつくつくつくつ」

「…提督にエイミイ…何しているんですか…」

丁度、状況を確認しにやってきたクロノにやや引き攣った顔で突っ込みを入れられてしまった。ちよつとした悪巧みよと告げるとますます顔が引き攣るクロノ。巷では堅物と評されているらしいけれど顔に出易いよね、クロノは。執務官にはこういう時のポーカーフエイスも必要なのだから学習してもらわないと困るのだけど。

時空管理局本局運用部 レティ・ロウラン中将

「わざわざこっちに通信って事は人手不足かしら」

『うちは隻数こそ5隻ですけどD級含めて旧式艦だらけの寄せ集めですよ。足りてるわけないでしょう…』と言いたいところですが正直足りていますね』

「なら用件は何？」

『ちょっと興味深いデータが出ていましてね』

モニターの向こうで憂鬱そうに頭を掻いているのは第296管理外世界付近を哨戒している第8次元巡察隊の司令だ。彼の言葉とともにモニターに資料が映し出される。かつて第296管理外世界があった空間は今ではただただ広大な虚数空間が残されているだけである。たしかにこれだけでも異様だが読み進めるうちに目に付いた部分があった。

「…消滅寸前に次元転送の痕跡？膨大な質量ね」

『うちの機材が僅かに捉えていましてね。解析班の努力の結晶ですよ。馬鹿馬鹿しいでしょうがいくらうちの部隊がオンボロ所帯でもこんなに桁を間違えたりはしません』

「…行き先は…これはまた問題、か」

『そ、第97管理外世界。近くにハラOWN提督がいたんじゃありませんでしたっけ？』

彼はリンディとも顔見知りだからいずれは回ってくる情報を一足先にというちよつとしたお節介のつもりで私に連絡を入れてきたのだろう。私は礼を言つて通信を切つた。

資料を読みながら、管理外世界から管理外世界への転移とはいえこれが人為的なものである可能性がある以上、調査しなければならぬいなと思つていると今度は噂をすれば何とやらなのかリンディからの状況報告書が上がってきた。…ロストロギア輸送船の事故。対象ロストロギア、ジュエルシードは第97管理外世界に落着…。ははあ、これはアースラの動きからすると搜索を早めるために私に何とかしろと言つていようだ。

「あー…うまい事情報が揃つてゐるわねえ。気味が悪いくらい…」

これなら彼らの転移した事情の把握と救助活動を口実に第97管理外世界へ行けるはず。捜査権や魔法使用許可関連もやりようによつてはもぎとれなくはないわね。少々渡りに船に過ぎるところはあるものの、私は根回しの為に連絡を入れるべき相手の顔を取捨選択し始めていた。

この時、もう少し二つの資料とここ最近の第296管理外世界に関する動きに気を配っていればなんとなく感じていた気味の悪さの正体に気がついていたかもしれない。立て続けの悪いニュースで感覚が麻痺していたのだらう。都合の良い偶然なんてものは世界には存在しないが悪いことというのは重なるもので、あちこちに兆候があ

つても見逃されるからこそ悲劇は生み出される。世界はそういう悪い偶然で溢れているということを忘れていたのだと思う。

ミッドチルダ某所　ギル・グレアム中将

「…ロウラン中将が第97管理外世界での捜査に関して動いている？…現地の指揮官はハラオウン少将か」

「はい、間違いないかと。あの件には関わりはないようです」

「リンディに気付かれると厄介だが…とはいえ捨て置くわけにはいかんな」

万が一にも私の計画を悟られるわけにはいかない。私はリーゼたちに事件に下手に手を出して藪蛇にならぬよう、だが早急に事態を解決する為にロウラン中将の思惑を後押しするように指示してロッキングチェアに身を預けた。

あのロウラン中将ならばまったくもって油断は出来ない。お互い知らぬ仲ではないが不審に思うような点があれば彼女は突いてくるだろう。たとえ身内であろうともそういう甘さはない人物だ。だが、“アレ”の近くで下手に魔法沙汰を起こしてもらっては困る。万が一にもイレギュラーがあつてはならない。

机の上には先ほどまで読んでいた一通の手紙が置かれたままだ。自分を遠い親戚、グレアムおじさんと“信じている”一人の少女から

のものである。

「ふ、ロウラン中将くらいに人を駒と見れるのならばこうはならなかったのかもしれない」

11年前、忌まわしきロストログア―闇の書に乗っ取られたし級次元航行艦エスティアを最期まで艦の制御のために残った部下もろとも吹き飛ばしたあの日から私の時計は止まっている。だがどこかで非情になりきれていないのだ。だから少女からの手紙を読まずに捨てることもできず、たまに返事までしてしまうのだろう。

クライド。私は間違っているのかもしれない。だがもう止まる事もできない。既にサイは投げられているのだ。

第七話 偶然はいつも悪い意味で起こるモノ（後書き）

漫画版ではレティの所属がA、sとStSで変わっているのですがこれって単純に部署が変わっただけなのかなあ……？詳しく知っている人がいましたら教えて頂けると幸いです。

○D級次元巡察艦

艦名及びクラス名の元ネタは英海軍D級駆逐艦。

○ジュエルシード輸送中の事故経緯

格納区画とか共通規格にしてパージできたら積み降ろしが早くなつて輸送効率が上がらないかなとか思った結果がこれ。プレシアによる攻撃説は話の関係上没りました。

○グレアム一家

一期には直接は不介入という方針を決めました。理由は文中の通り。

4・10 全面改訂に伴い旧第五話を一部修正し、sideグレアム中將を新たに追加。

4・15 改稿 誤字修正。説明不足の部分を一部加筆。

5・9 改稿 誤字修正。

5・21 改稿 一部表現修正。

7・1 改稿 誤字修正。一部加筆修正。

7・19 改稿 誤字修正。一部加筆修正。

第八話 困ったときのユーノくん頼みなの？（前書き）

今度こそ一期っぽくするの！ と全力全開の笑顔で言われたので、
と容疑者の88式は供述しており……

第八話 困ったときのユーノくん頼みなの？

私立聖祥大附属小学校

大尉

「反応は近い。建物内だと厄介だな」

茂みの陰に身を隠して辺りを窺いつつ毒づく。ここは私立聖祥大学附属小学校——の校庭だ。良家の子女が通うであろう私立校という割には意外とセキュリティが甘かったのどここまではすんなり入ることができた。しかし建物内はどうだろう。しかし学校とはな。超兵器のある場所としてはイメージには合わないが逆に考えればこんなところにあるとは誰も思わないだろう。地下施設か何かでもあるのかもしれない。

そんな事を考えていると足音が近づいてくるのに気付いた。どうやら考えにふけり過ぎていたようだ。平和な風景に毒されたかもしれない。そつと盗み見ると10歳かそこの少女が小さな動物とともに何かを探すようにキョロキョロと周囲を見回している。落とした物を探しにやってきたこの学校の生徒だろうか。しかしあのような小さな子が夜に一人で出歩くとは。本当にここは平和なのかそれともあの子の両親の危機管理意識が薄いのか。

下を向いて小さくため息をつく。視界の端を何かが駆け抜けた。……ねずみか。何か小さな結晶のようなものを抱えている。何か嫌な予感がしてそつとアラームを消していたレーダーを確認すると超兵器ノイズの発生予想位置はほぼ私と重なっていた。思わず二度見し

てしまったが間違いない。あの博士が作った対超兵器レーダーなのだから故障ではないだろう。

「まさかとは思うが、これか？」

そう呟いた私の顔は引き攣っていたに違いない。それと同時にねずみが抱えていた青い結晶が眩い光を放ち始め――

高町なのは

「見つからないね。この辺りなんだよねユーノくん」

『発動していない状態だと反応が僅かだからはっきりとは言えないけどこの辺りにあるはずだよ。……それとなのは、声に出てるよ』

『にゃ！？　うう、誰かに聞かれたら変な人だね。独りでぶつぶつと』

『とつさに声に出してしまうかもしれないし練習のためにもなるべく念話で話そう』

『うん、そうする』

わたしが昼間の間に僅かに感じた違和感を伝えたと魔力が少しは回復したというユーノくんが調べてくれてわたしたちの学校の中に発動前のジュエルシードがあるのが分かった。それで二人でこっそり

家を抜け出して——これもユーノくんがいろいろ助けてくれたの——
—守衛さんや、ユーノくんが気付いてくれた警備システムを避けながらこれ30分は探しているのだけどジュエルシードがなかなか見つからない。あと探していないのは警備が厳重で入れない校舎の中と……もしかしてあの草むらに落っこちているかも？

そう思った時、草むらから急に光が溢れて——

「こ、これはもしかして！」

『間違いない、ジュエルシード！』

光がおさまって……えっと、これって？

「ね、ねずみ……？」

『一応、威嚇はしているみたいだけどそこまで危険は感じないような——ってその人を助けないと！』

草むらからは男の人が転がり出していて、50cmくらいの大きなねずみがそれを一生懸命威嚇しているんだけど、なんだかそのどこか微笑ましい様子に和んでしまってたしはちよつとぼうつとしてしまった。その間に作業服姿の男の人——帽子から出ているアリサちゃんみたいな金髪からすると外国の人かな——がこつちを見てわたしたちを庇うようにして前に立つ。

「君たち、ここからすぐに離れるんだ」

「にやっ！？」

突然外国の人だと思っていた男の人に日本語で話しかけられてしま
ってわたしは混乱してしまう。えっと、アリサちゃんが流暢な日本
語で話すのには慣れているからいいんだけど、やっぱり外国の人が
綺麗な発音の日本語で話しているとびっくりしちゃうよね？

あれ、でもこれが危ないものだって知っているということはこの人
はもしかしてジュエルシードを知っているのかな？

『ユーノくん、この人ジュエルシードを知っているのかな？ もし
かしてユーノくんみたいにこの世界に来た魔法使いなのかも』

『もしそうならバリアジャケットを構成してデバイスを構えている
ところだと思う。単に危ないと思ってなのはを庇おうとしているん
じゃないかな』

あ、なるほど。だとするとどうしてこの人がこんな時間にこんなと
ころにいるのかが分からないんだけど、もしかしてこの人は守衛さ
んなのかな？ なんにしる魔導師じゃないのならこの人の前で魔法
を使うわけにはいかないんだよね。

『ええ、じゃあどうしたら』

『このままじゃあの人が危ない。僕が結界を張るから——』

『うん、分かった。やってみる』

『え、ちょ、なのは。まだ準備が——』

大尉

超兵器機関が生物に影響を与えるという話は聞かないが、そもそも常識の通用しない相手なのはよく知っている。天候にまで影響を与えることがあるのだ。今更驚かん。……単にねずみが大きくなっただけというのは腑に落ちないが。

もしかしてあんななりで光学兵器でも撃つのか？ 風の噂では大戦中にあの博士が開発したものの中には“にゃんこビーム”だの“かにビーム”だのというふざけた名前の光学兵器があったという。ならばこのねずみがビームを撃つてもおかしくは……ないのかもしれない。生身で対峙している今は考えたくも無いな。

そんなふざけた兵器で殺されるのは御免だがこの場に現地の少女が居合わせてしまったのは問題だ。足が竦んでしまったのか困惑顔で立ち尽くしている。彼女は我々の世界の人間ではない。我々の世界の産物である超兵器によって命を落としていいはずがない。

こんな事なら重火器でも持ち込んでおくべきだったかと後悔しつつ懷から拳銃を抜こうとすると背後から声が聞こえてきた。

「レイジングハート、お願い！」

> Stand by ready・Setup・<

「な、なのは！ まずいよまだ結界が！」

「ふえ！？ だ、だめだった？」

……これは何かの冗談か。背の丈ほどもある女の子らしいファンシーなカラーリングの杖らしきものを手に白を基調としたやや派手な服を着た少女がそこに立っていた。どう見てもさっきの少女である。はて着替える時間はあっただろうか。更に言えば一緒にいた小動物がしゃべっているように聞こえる上に抑揚の無い別の声も混じっている。さてこれは一体どういうことだろう。

「危ないっ」

「っ、しまった！」

立て続けの予想外の出来事で一瞬思考停止に陥っていた私には巨大なはずみの跳躍を避けることができなかった。警告を発したのは小動物が発していたと思われる少年のような声だったように感じたが、それを確かめることもできずに私は気を失った。

高町なのは

目の前で男の人が倒れる。間に合わなかった！唇を噛み締める。こんな事にならないためにユーノくんのお手伝いをしようって決めたはずなのに……わたしには止める力があつたはずなのに……。

『なのは、しっかりして！あの人を助けないと！』

「……そうだねっ」

ユーノくんの声で我に返ると大きなねずみさんは助走をつけてもう一度、倒れた男の人に飛び掛ろうとしているところだった。今度はなんとか前に出る事が出来て跳躍を受け止める。あの犬さんに比べたらこのくらい…！

『大丈夫なのは！？』

「大丈夫、このくらいなんともないよ。これってこのまま封印できるの？」

『このくらいなら問題ないよ。このねずみも多分驚いてしまっただけなんだと思う』

「わかった。それじゃレイジングハート、お願いね」

> All right . Sealing mode , set
up . Stand by ready . <

「リリカルマジカル、ジュエルシード、封印！」

> Sealing . <

なんとかジュエルシードを封印してレイジングハートにも元に戻ってもらったけれど…。

「だ、大丈夫ですか？」

『なのは、心配ないよ。気を失っているだけみたいだ』

「でもこのままこんなところで寝ていたら風邪をひいちゃうよ」

ユーノくんが心配ないと言うんだから大丈夫なんだろうけどこのまま放っておく訳には行かないし…それにわたしのバリアジャケット姿も見られちゃったし…あわわ、どうしよう？

ユーノ・スクライア

あ、危なかった。結界が間に合わなくて焦っていたからって声をあげてしまうなんて。自分で念話で話そうとなのはに言っておいてこれはどうなんだ僕。それにいくらなのはが優秀でもまだ魔法を使いながら僕と念話するのは難しいみたいだ。もう少し魔法についてしっかり話をして練習をしないとイケないかもしれない。幸い襲われた人も無事なようだから結果オーライかな。でも今回のことで重い事実を突きつけられた。なのはを巻き込んでしまっただけでやっぱこれは僕の手には余る事態だったんだ…。

『ええと、大丈夫だよなのは。彼が目覚めるまで僕がここで見ているから』

『で、でも』

『なのはがいたら余計にややこしいことになってしまうよ。きっとこの人もこの前の女の人みたいに頭でも打ったんだろって思っ

くれるよ』

人間、自分の認識を超える事態には気のせいだと思ったり、あるいは常識的な出来事を頭の中で捏造してしまうことが多いんだ。それが一種の防衛反応。だから管理外世界に次元犯罪者が逃げ込んで魔法関係の問題を起こしても現地ではそこまで大きな事件にならないことが多い。

せいぜい好奇心旺盛な人の一部が超常現象とかで騒ぐくらいだと思う。…まあ僕ら管理世界でもそういうのが好きで追いかけている人たちはいるからどこの世界でもどの時代でも人間はさほど変わらないという証明なんだろうね。スクライアー族でも遺跡の中で幽霊に出会ったとかいう話をする人もいるし…ぼ、僕は信じてない。きつとホログラムか何かに決まってるよそんなの！

なんとか納得してくれたなのは小さく手を振って離れようとした時、足音が近づいてくるのに僕は気付いた。まさかさっきの光や暴走体の発した音で誰かが様子を見に来たんじゃ…。

第八話 困ったときのユーノくん頼みなの？（後書き）

これからといういいところで引く。CMとか次号に続くとか。あまりやりすぎると外道と言われる手法らしいです。

○深夜に小学校の敷地内に踏み込む作業着のおっさん
どう見ても不審者です。警察を呼べ！警備はいたのですがトラップに慣れている遺跡発掘者と軍関係者（大尉）には通用しなかった模様。

○ユーノの結界間に合わず
なのはが即断即決したので自分で促したにも関わらず……。どうもこの二人は結構賢いはずなのに抜けたところがあると88式は思います。

○強いぞフラグ建てておいてあっさり無力化された大尉
どっちにしろなのはに守られていたので実は意識が無い分まだ幸せかもしれません。

○にゃんこビーム、かにビーム
鋼鉄シリーズにて登場するそのままずばりの外見の光学兵器。ねこビームというのもある。猫シリーズの方はにゃーという可愛い発射音付き。

これでネタ武装ではなくてそこそこ使えるというのが恐ろしい。

○デバイス会話
ミッド語もとい英語にしましたがレイハさんに関しては日本語化の案があったりします。

○常識外のことに対する反応
まあ多くの人はそうなるものなのですが…鋼鉄世界人はいろいろと斜め上なのです。

○幽霊

ユーノくんが9さいだということをおもいだしてください。にぱー。

- | | | | | | |
|---|---|---|---|----|--------------------|
| 4 | ・ | 1 | 0 | 改稿 | 全面改訂に伴い、旧第六話を加筆修正。 |
| 5 | ・ | 9 | | 改稿 | 誤字修正。 |
| 7 | ・ | 2 | | 改稿 | 誤字修正。一部加筆修正。 |
| 7 | ・ | 1 | 9 | 改稿 | 誤字修正。一部加筆修正。 |
| 1 | 1 | ・ | 6 | 改稿 | 誤字・誤表現修正。 |

第九話 ゼア・イズ・ミステリアス・ガールズ（前書き）

シリアス
真面目になって何が悪い。

第九話　ゼア・イズ・ミステリアス・ガールズ

私立聖祥大附属小学校　ユーノ・スクライア

「おや、君は…？」

「はう」

眼鏡をかけた中年男性だ。着ている作業着が倒れた男の人と同じものだからもしかしたら仕事帰りの同僚？でもよく考えると小学校の敷地内にいるのはおかしいんじゃない…。僕がそう考えているうちに眼鏡の男性は倒れた人に歩み寄った。

「気絶しているだけか。もみ合った様子もない…。お嬢さん、私は彼の同僚なのだがここで何があったのか分かるかい？」

「え、えっと、倒れているのが見えて、それで…」

「ふむ」

眼鏡の男の人は思案顔で自分が来た方を見ている。まずい…。とつさの返答にはなのはの答えは悪くは無いけれど、街路からは目隠しの垣根のせいでこの辺りはよく見えないかもしれない。小さな子が夜中に出歩いているから尚更不審に思っているだろう。

「こんな時間に君みたいな女の子が出歩くのは感心しないな」

「そ、それは、その…」

「いや、いいんだ。何か理由があるんだろう？」

「ふえ？」

「真っ直ぐな良い目をしている。その気持ちを大事にするといい。でもご両親や周りの人に心配をかけちゃいけないよ？」

「は、はい…」

そう言うとおじさんはなのはに早く家に帰るように言った。大した追求もなく僕があっけにとられている間に、なのはは勢いよくお辞儀をして、気をつけるんだよと手を振る彼を残して足早にこの場を去って行く。僕も慌ててなのはを追いかけた。

「ねえユーノくん」

「…？」

「…不思議な人だったね。優しそうな人だったけど」

「…そうだね」

去り際に見たあの人の顔は何もかも見通しているようなそんな達観した笑みに見えたのだけど。でもどこか何かを懐かしむような悲しむような、そんな笑みにも見えた。念のため念話で魔導師かと問いかけたけれど返答が無かったから少なくとも――魔法的な素質があっても聞こえない人が稀にいる――あの人は魔導師ではないみたいだ。意図的に無視したのでなければ、だけど。そして根拠はないけれど、

僕は何故かまたあの人たちと会う事になるような気がしていた。

豊田

「…大尉、起きていいぞ」

「おや、いつからお気付きで」

「私が彼女に声をかけたあたりから起きていただろう」

「お見通しでしたか」

私は苦笑しつつ肩を竦めて大尉に手を貸す。敵いませんねと呟いて彼は私の手を取り、立ち上がった。

「しかし一体何があったんだ？短時間とはいえ君が気絶するとは。この辺りから強烈な光が発せられていたぞ」

「…准将は私をサイボーグか何かと勘違いしていませんか？」

後者の質問をスルーしつつ大尉は表情を微妙に変化させつつ小さくため息をついた。…サイボーグだよなあ。恐らく本人は惘然とした顔のつもりなのだろう。彼は話してみれば意外と洒落の分かる人物なのだがこの無表情ゆえにお堅い人間と勘違いされるフシがある。

とにかく長居は無用だ。私たちはそれぞれのトランクを手に学校を

後にした。

彼曰く、超兵器機関と思われる青い結晶を抱えたねずみが突然眩い光とおもに巨大化したので近くにいたあの少女を守ろうとした。その彼女が背後でいきなり…変身？でもしたのかともかく服装が変わっていて拳句ペットがしゃべったという。それに驚いている間に不覚をとったという訳らしい。かくいう私は青い光が立ち上ったのに気付いて心配になり彼の後を追いつ、近くまで来たところで桃色がかつた光が見えてそれなりに大きな音がしたためここまで来たのである。

「なあ大尉」

「…なんでしょう」

「普通ならここは、ははは」冗談をと言ったところなんだろう」

「でしょうね」

「…超兵器に慣れてしまつとある程度の非常識なら許容範囲と思えてしまふな」

「否定できません」

真顔で大尉は首を縦に振って同意を示す。彼はイタリアやドイツなど欧州戦線を転戦する中、実際に超兵器を目撃した経験があるという。私は実物を見たことこそ無いがシュルツ少将などから生の声を聞く機会があり、また超兵器の映像資料などに触れる機会も多かつ

た。だから超兵器の非常識さ、そしてそれを前に思考停止することによる危険を知っている。

あれだけの光量だったというのにこの辺りにはそれを説明できそうな照明器具の類は一切なかった。ここにいたのは大尉と少女、それに彼女が飼っているであろうペットだけ。ねずみはどうなったのかは分からないが…。

「あの少女が襲われた様子がない以上、彼女がなんとかしたと考えるのが妥当だろう。そのしゃべるペットも何かしたかもしれないが」

「最悪の場合、超兵器機関が彼女たちにも何らかの影響を与えている可能性もあります」

「それは分かんが少なくともそのねずみからは知性は感じなかったのだろう？」

「それはそうですが…。まあ我々の立場では拘束して話を聞きだすわけにはいきませんでしたからね」

「誘拐犯は勘弁だな。後をつけて変態になるのも嫌だぞ？」

「…ここの治安を守っている優秀な警察を敵にはしたくないですな」

「そういうことだ」

こんな騒ぎがあったのに飛んでこないというのもどうかとは思うが…と思った矢先にサイレンだ。付近の住民が通報したのかもしれない。こちらの姿を見られていなければいいが。あの状況では私たちは小学校に忍び込む作業服姿の怪しい男二人でしかない。

「長居しなくて正解でしたな。しかしまた彼女たちに接触するのは難しいですよ」

「分かんぞ。意外とすぐに再会するかもしれない。それに彼女たちは恩人かもしれないからできれば礼を言いたいものだ」

超兵器ノイズはかなり頻繁に発生しているが必ずすぐに消えてしまう。つまり誰かがノイズの元を絶っているとも考えられる。今回の状況から考えるとそれにあの少女たちが何らかの形で関わっている可能性は高い。だとすれば現場に駆けつければまた会うことになるかもしれない。

しかし生物に影響を与える超兵器となるとこれは厄介だ。ねずみ一匹が50cmになるくらいなら大した問題にはならないかもしれないが、これが10mだったり、あるいは100匹が50cmになれば大変なことになる。もっと獰猛な動物にでも作用したら非常に危険だ。これは至急艦隊に連絡を入れて博士に相談をしなければなるまい。

厄介なことになったなと思いつつ、頭の隅で大尉の言う彼女が着替えたという服装を想像してみる。うーむ…アニメか何かの登場人物か？ベントレー少佐あたりなら喜びそうだが。

「なんてものを託してくれたんじゃ…バカ者め…」

わたしはここにはいないあの男のことを思い毒づいた。託されたモノと想いはあまりにも大きく、わたしにとつては重荷だった。二つある写真立ての一方にはアイツとわたし、そしてブラウン博士。もう一方には…わたしと若かりし時の“新しい”義父。

「…わたしにはもう生きる理由などなかったというのに…そんな女に、世界を、希望を託す阿呆がどこにおる…！？何故じゃ…何故、わたしを選んだ…」

…しばし机に伏し、慟哭…。顔を上げると規則的な電子音を奏で続ける機器が視界に入る。ふらふらと立ち上がり、その棺桶のような――実際のところ、棺桶と変わらないかもしれない――ケースに手をついた。いくつものコードがそれには繋がっていて壁一面の計器へと伸びていた。

「…世界の希望…いや、希望だったモノじゃな。そしてあの時と結果も同じじゃった。シュルツよ。所詮、わしらだけの想いで守れるほどではなかったのじゃ…それも、たった一人にそれを強いるなど、到底無理な話じゃ…」

どこで間違ったのだろう。何が間違いだったのだろう。それは誰にも分からない。そういうものなのだ。こんなはずじゃなかった。そう言うのは誰にでもできる。

「シュルツよ。今回ばかりはお前の見込み違いじゃ…。世界に絶望し、世界を倒そうとした女に世界を救わせるなど所詮、茶番でしかなかったのじゃ…」

ケースの上では球状の分厚い強化ガラスで覆われた中に嚴重に固定された紺碧色の大きな結晶体が鈍く、光っていた。それを睨みつけ……目を逸らす。

「わしらの世界はわしらの手で守る。シュルツ、お主はそう言ったな……」

振り返り、写真の中でシニカルな笑みを浮かべているあの男をじっと見つめた。

「ならばその手段として君らの手に余るものを使ったのは……やはり間違いだったのじゃ……これは報いじゃよ……手に余るものを身の丈に合わない手段で御しようとしたわしらに対する、な」

ケースには覗き窓がある。そこには病的なまでに白い少女が眠っていた。その脇に短い文章と署名が添えられている。

このピースメイカー計画が世界の希望とならん事を願う

ライナルト・シュルツ

西園寺 五十鈴

エルネスティーネ・ブラウン

「人は人に裁かれる……ふ、道理じゃな。ある意味わしがこうして今もここで生き恥をさらしているのは罰なのかも知れぬな……」

その自嘲に答える者は、
ここにはいない。

第九話 ゼア・イズ・ミステリアス・ガールズ（後書き）

豊田たちとなのはたちのファーストコンタクトです。表面だけみると豊田がただのロリコン…（艦砲射撃直撃）

○魔法的な素質があっても念話が聞こえない人
独自設定にしてフラグそのよん。

○超兵器機関と生物

一応正史の上では関わりがないのでさすがの豊田たちも及び腰。
特殊任務？はははシリラス中に冗談を。
ウラノタイウイカ

○日本の警察機構

物語では大抵の場合、この手の組織は役立たずの象徴にされてしま
います。ですが逆に言えば彼らは優秀な組織が立ち向かえないよう
な出来事を解決してしまう主人公かつこいい！という表現手法の犠
牲者なのです。

○舞台裏はシリラスモード

博士は秘密を一人で抱え込んでいますが果たしてそれがどういう結
果を生むのか…おいしいとこで引きましょ。

4・10 全面改訂に伴い、旧第七話を元に再編集。

4・15 改稿 誤字修正。一部表現を修正。

5・9 改稿 誤字修正。

7・2 改稿 誤字修正。加筆修正。

7・19 改稿 誤字修正。

第十話 聞かぬ疑念 聞かぬ信頼（前書き）

舞台裏がゴロゴロと。お陰でなかなか話が進みません。

第十話 聞かぬ疑念 聞かぬ信頼

海鳴市郊外 大尉

「大尉」

「どうしました、准将」

「これは不法侵入になるのかな。やっぱり」

「もし戻れるとしたら始末書が必要でしょうね」

私たちは郊外の半ば廃墟となっているビルで夜を明かした。ここが異世界である以上、最も問題となったのが情報が無いという点だ。異世界であること自体は各国や司令部との通信途絶、衛星とのリンクの消失、そして電波傍受による情報収集によりそう判断せざるを得ず即日艦隊全体に通達された。それによる混乱が少なかったのと対潜戦闘や航法に関わってくる海水成分や海流、主な地形などにさほど変わりが無いのは救いだった。だがやはりあまりにもこの世界に対する知識が足りない。

この世界の日本やアメリカ、他の国々がどういう国なのか。ウィルキアのようにこちらでは存在しないと思われる国すらある。そして世界がどうなっているのか。これは考えにくいことではあるが…うまく具合にどこからも目を向けられていない空白地でもあれば入植することもできるかもしれない。そうすればあの大戦の引き金となったクーデターにより母国を追われたウィルキア近衛海軍のように

漂流することも無い。それが難しいにしても艦隊を休ませられる安全な海域や乗員をリフレッシュさせられる安全な上陸地があればそれに越したことはない。

この上陸には超兵器の調査という意味もあつたが本題はむしろ情報収集だつた。我々には落ち着ける場所が必要だつたのだ。いくら物資があつたとしても霞のようにいつまでも海の上を漂流し続けることはできない。人の精神力には限界があるのだから。

「さしあたっては図書館を探すのが安全かつ確実だと思う」

「誰でも自由に入れるのならよいのですが」

「図書館というのは誰に対しても門戸を開くべきだと思うがね。その本質を考えれば」

准将はそう言うてからからと笑う。たしかにそうなのだが…。

昨夜、拠点となる場所を探すにあたって私は一つの疑念を覚えたのだ。私が選定した建物を准将が却下したのだ。曰く“軍の警備システムに似た高度なセキュリティがありそうだ”と。

まさかと思つたが調べてみれば確かにその通りだつた。監視カメラに振動センサー。よく見れば街のあちこちにダミーも含めて監視カメラは多数配置されていた。平和に見えるのには理由がある。優秀な警察組織に防犯設備。異世界ということで私も冷静さを失つていたのだらう。

だがおかしいのだ。平静でなかった私が見つけれなかったが、こんな状況下でも落ち着いていた准将には見つけられた。それならば

いい。だが彼はそれらのシステムが見えない位置からこの建物は駄目だと言ったのだ。判断材料はなかったはず……。何故だ？

彼は笑ってこう言った。塀に警備会社のシールが貼られているからだ。……たしかにシールはあった。だがそこには会社名こそあれど警備というものを連想させるような文字はどこにも無かった。これだけで警備会社と言い切れるものだろうか？私が疑問に思ったことに全く気付いていない様子の彼にその次を聞くことは出来なかった。　「貴方はこの会社を元々知っていたのではないですか」と。

「どうした大尉。ぼうつとして」

「……いえ、何でもありません」

准将が強行に自分が上陸することを主張した意味。そして司令と離れた際の通信で澤風の副長、鈴木少佐が私に“司令は何かを隠している”と告げた意味。彼も何かひっかかりを感じていたのだろう。そして今回我々の身に起きた出来事――異世界への移動は私の脳裏に浮かんでしまった荒唐無稽な考えに信憑性を与えている。

……だが私はあえて問わないことを選んだ。

今、あの艦隊が大きな混乱も無く未だに部隊行動をとれているのは准将がいるからだ。今のところは大きな混乱はないが将兵それぞれに想うところはあるはずである。国に帰属意識が薄いのと故郷に愛着がないのとは別だろうし、家族がないのと人間関係が存在しない

のも別だろう。

だが部隊をとりまとめる指揮官が方針を示して彼らを率いている。そのことが我々を安心させている。こなすべき仕事がある。我々のリーダーは彼だ。指揮官が責任を持って部下を率い、部下がそれに応える限りは部隊は無様に瓦解したりはしない。であれば私は部下として彼の“出身”ではなく、彼の“指示”を信じる。

私の推測が正しいのならば彼は逃げることも出来たはずだ。我々を放り出して“あるべき場所”へ帰ることも出来たはず。だが彼はそれをしなかった。責任を果たし続けている。それを知って彼を裏切ることなど私にはできない。

部屋を出て廊下の先に行く司令の背中から視線を外してガラスの無い窓から空を見上げる。どこの戦地でも落ち着いた時の空は青かった。だがこの空は我々の世界のあの空には繋がっていないのだろう。

この空は准将にとってどういう意味を持つのだろう。空はいつも人の問いに答えようとはしない。

第296管理外世界付近 第8次元巡察隊旗艦 D級次元巡察艦
ダッチェス ダリアス・カムリー等海佐

「…チツ、次元世界丸ごと消失とはね」

俺は元第296管理外世界、現無限に広がる虚数空間の海を眺めつつ煙草をくわえた。先遣隊が持ち帰った情報ではここで確認されていたロストログアは同時暴走でもせいぜい星一つを滅ぼす程度という話だったはずだ。次元震すら観測されていないにもかかわらずどうしてこんな事態になったのか。もっともこんな状態では俺たちが出来ることは対してない。ここはもう次元世界ごと文字通り消失しているからだ。

虚数空間。それは一度落ちれば内部からはどうあがいても脱出できず、ただどこまでも沈んでいく事になる空間。魔法も発動せず、他の科学的手段もこの中では無力だ。外部からならば引っぱり上げる事は不可能ではないが膨大なエネルギーが必要な上に、急激に引き戻されたり、空間内で長い時間が経ち過ぎた対象は物理的、あるいはそれが人間などであれば精神的に著しい影響を受けるケースが多い。無事に戻すことは難しいができるだけ早く、かつ焦らない救出が望まれる。だがこの世界に“あつたもの”は到着時には観測不可能な状態にあつた。既に助け出せる段階ではなかったのだ。

これが管理世界であり、かつ何らかの兆候があつたのならば溢れかえる脱出者の避難船や緊急避難用のポッドなどの回収に忙しく、場合によっては次元艦隊の出動すらあり得ただろうが。ロウラン中將に伝えた次元転送された質量の中に人間が含まれていれば恐らく彼らが唯一の生存者だろう。もっとも大した数では無いだろうが。

痕跡も残さず自分の世界とそれを構成するほとんどの人間が消えたと知れば平静ではいられまい。遺体も残されぬ死。それは。クるものがある。事情は違うがアイツもそれに押し潰されそうになったクチだ。第4次元艦隊に尻尾を振っているこの方面の統括官である上司に睨まれるのを覚悟で真っ先にロウラン中將に伝えたのはそのた

めだ。

リンディ…もといハラウン少将とその周りの連中―俺も含まれてるんだろ？―は管理局ではそこそこの影響力がある勢力だ。管理世界の無闇な拡大や武力偏重を嫌う穏健派の一角を為している。だが逆に言えば勢力があるのは敵がいるという意味でもある。今回の件は何か効果のある話じゃないがハラウン少将にとっては心穏やかでは無い事態でもあるだろう。どっかの阿呆が汚い口で何かを言うのは俺には我慢がなかったってだけの話だ。

「リンディのやつ…変に気張らなきゃいいが」

「カムリー佐、何度も言いますがここは」

「禁煙だろ？くわえてるだけだ、固い事言つなよ」

この艦橋では俺以外で唯一の男性クルーである主任通信士のいつもの苦言だ。このやり取りも随分前からだよな。だいたい他のオペレーターがどいつもこいつもガキばかりだというのに吸うわけにはいかんだろ。それでも俺は常識人を通っているんだからな。

「一佐、虚数空間の端に漂流物があります」

「なに？生命反応はどうだ」

「…微弱ながら、一人分確認」

地道なローラー作戦がうまくいったみたいだな。…やれやれ、どんよりしていた連中の雰囲気が一気に明るくなりやがった。まったく子供は元気が一番だよな。

「ようやく明るい話だな。回収するぞ、救護班準備しろ！」

「え…だ、第4次元艦隊第2分艦隊より通信です」

「救助が先だ。待たせろ」

「その漂流者に関して、だそうです」

「…分かった」

ようやくお出ましか。演習で付近にいたくせに今まで支援一つよこさなかったお偉い第4次元艦隊サマが今更何の用だ？

同じ次元航行部隊^{うみ}といっても次元艦隊と次元巡察隊の対立は根強いもんだ。次元世界を常時パトロールする次元巡察隊と大規模事故や次元世界を跨ぐような重要案件に限って投入される次元艦隊の間には装備、人員の差がある。花形と言われる次元航行部隊だが実際に配属を望む者が多いのは次元艦隊の方だ。拳句、次元巡察隊は次元艦隊の露払いから事件の後始末、更には管理世界を守護する地上部隊からの依頼や苦情もと…まあ、これで仲が悪くなかったら嘘つてものだろう。

もちろん次元艦隊の末端の隊員のほとんどは人のいい連中だ。何せ世界の危機にすら逃げることなく立ち向かう勇者たちだからな。だが軍閥化しているとさえ言われる第4次元艦隊上層部は多くの局員から忌み嫌われている。もちろん俺も連中が嫌いだ。で、その嫌いな奴の中でも筆頭の顔がモニターに現れた。髭面でモクモクと葉巻をふかしている。相変わらずいいご身分な事で。そこだけは羨ましいよ、まったく。

『第4次元艦隊第2分艦隊司令、スターレット准将だ』

「次元艦隊のお偉いさんが何の用でしょう」

『相変わらずだな“はねつかえり”カムリ一佐』

「で、用事が無いなら切らせてもらうぞ。本艦は救助作業中だ」

『では手短に言おう。現時点をもって第296管理外世界救援任務は本分艦隊の任務となった。第8次元巡察隊は直ちに本局に帰還せよとのことだ』

「なに!？」

「一佐、本局から帰還命令が…」

「……………」

『お分かりになったかな』

「…おい、漂流者の位置座標を送って差し上げる」

俺はぞんさいに返して通信を切った。やれやれ、明るくなったばかりのガキどもの表情の沈みようといったら…。しかしどこからの横槍だ？第4次元艦隊そのものが動いたのかもしれないがどう見てもここには大した仕事は無いぞ…。まさかあの漂流者一人を横からかつさらうためじゃあるまいし…。考えても仕方ねえか。たかだか次元巡察隊司令が頭を捻ったところで奴らの真意なんて早々分かるもんじゃないからな。それに…世の中には知らない方がいいこともある

る。

「本局帰還となりやうちのポンコツ部隊にや艦の補修も要るだろ。しばらく休暇でも楽しめ」

「そ、そうですねっ！」

おやおや…こりやまあ現金なことだ。あっというまに浮ついた空気に早変わりだ。切り替えが早いのは悪くないが…ちったあ悩めと言いたくもなるぞ。釘をさしておくとするかね。

「そうとなりや、さっさと報告書上げておけよ」

「げっ」

「帰って報告書出すまでが任務だ。甘ったれるんじゃねえ」

第十話 聞かぬ疑念 聞かぬ信頼（後書き）

こついう事故転移型の時ってやっぱり情報収集がネックですよねという話。

ちなみに鋼鉄世界の技術力に関しては民生では現代並みとしておきます。終盤になると超兵器でもないのに光学兵器を撃ってくる敵艦がゴロゴロ出てきますし。超兵器機関の膨大な出力で実用化という設定はどこにいったのやら。

○不法侵入

大尉がイロイロしたので入れたとも言っ。

○司令の正体

複雑になりますがそういうこと。情報収集前にもそれを臭わせるような発言や独白をしていたりはします。

○次元航行部隊とか虚数空間とか

ここらへんの設定はもろもろ捏造。まあ、元の設定の陸と海の関係と大して変わりません。質は次元艦隊＞次元巡察隊＞陸となっています。

○リンディ

裏事情をあまり知らない人々からの認識はそこそ人望のある有力将官という程度。いくつもある次元巡察隊の司令官に過ぎませんから。

○艦橋クルーが子供ばかり

ダリアス基準の“ガキ”なのでなのはたちのような幼い子という意味ではないにしろ、管理局の人手不足の描写。

4・10 全面改訂に伴い、旧第八話を再編集。

4・15 改稿 誤字、一部表現修正。

5・10 改稿 誤字修正

7・7 改稿 誤字修正。加筆修正。

7・20 改稿 誤字修正。一部加筆修正。

第十一話 砲撃魔導師が砲撃と出会う時（前書き）

守るも攻めるもくろがねの浮かべる城ぞ頼みなる――

ようこそ魔女たちの砲煙の祭典へ

第十一話 砲撃魔導師が砲撃と出会う時

海鳴港沖 第十三任務部隊 駆逐艦澤風 日野那岐中尉

「司令たちの情報収集も順調なようだなあ」

「情報を元に今までの超兵器ノイズ発生地点もほぼ絞り込みました。何らかの破壊があったケースもありますが、怪我人は出ていないようです」

「しかしなあ」

副長「今は艦長代行」はノイズが発生した地点が記されたマップを見ながらため息をついている。それもそうですよ。発生地点を示す赤丸が表示されているのは公園、動物病院、神社、プール、そして小学校。

「軍事施設のぐの字も出ないぞ」

「神社ですかあ」

「そういえば那岐君は代々巫女さんの家系だったか？まあここ二代は途切れているようだが」

「はい。母が寝る前に話してくれたお話では怪我を一瞬で治したとか、重病人を抱えて空を飛んだとか…」

母も父も、私が小学校を卒業する直前に他界していて親族とも疎遠だった私は施設で育ちました。寂しくないと言え、嘘になりますけど…。

「空を飛ぶ？司令たちが出会った不思議な少女としゃべるペットじやあるまいし。あれだって胡散臭いが…あの太尉が冗談言うようには思えんぞ」

「なんでも山を越えた村に急いで行く為に飛んだとか。あの太尉さん意外とユーモアのある人でしたよ？」

「比喩か何かじゃないのか。…って那岐君、妙に詳しいな。彼に惚れたか？」

「さあ、なにぶん子供向けのお話ですから。そんなんじゃないですって」

私もよく知らないお話に突っ込みを入れられても困ります。もつとも同じような質問を無邪気にぶつけた幼い私に対して母さんは黙って苦笑するだけだったので母も知らなかったのではないのでしょうか？母は巫女にならず、普通の主婦でしたしね。

海鳴市 太尉

昼下がりの公園。母国の糧食^{レーション}はまずかったが、国連軍に来てからは随分食の環境は良くなったように思える。残念ながら火気厳禁らし

いので携帯コンロは使えず、暖める事はできないがアレと比べるのは失礼なほどうまい。

ただ公園のベンチに中年男性が二人並んで座って缶詰の飯を頼張るという画は…。

「大尉…その、なんか侘しいと思わんか？」

「この世の無情を感じますね。うまいのです…確かにうまいのですが…」

私たちの背中にはきつと哀愁が漂っていたと思う。

情報収集の結果、この世界が上辺通りの平和なものではないというのは分かった。だが我々の世界に比べれば遥かにマシであるように思える。武器を突きつけあう平和でも実際に殴りあうよりはずっといい。

突きつけあう武器がエスカレートした結果、それをコントロールしてお互い話し合う段階にまで進んだこの世界は素晴らしいと私は思う。必ずしも有効にその仕組みが機能しているわけではないが、武器を突きつけあい、歩み寄る事もできずに対立がエスカレートし続けていた我々の世界とは比べようもない。

「私は慣れていますかね。食事などカロリーが摂取できればよいと思っていましたし」

「それは人生を損していたな。食は人間の最も基本的な欲求の一つだぞ」

「日本人は貪欲すぎるくらいがあると私は思いますがね。それはこちらの世界でも同じようですよ？」

「それは否定できんが、だから日本の飯はうまいとも…大尉」

「超兵器ノイズですね」

私と准将は顔を見合わせた。いくら侘しいとはいえ飯は飯。食事のときくらいは邪魔しないでほしいものだ。…なるほど私も少しは食に対して執着を覚えつつあるようだ。昔なら後で食べれば良いと思っていただろうから。うまい飯は正義と鈴木少佐が言っていたが至言かもしれない。

海鳴港沖 第十三任務部隊 H L G 支援艦スバルヴィエロ フェデリカ・アニエッリ大佐

「司令たち、情報を送り終えてこれからご飯だったんじゃないかしら」

「恐らくそうでしょう。どうも豊田司令は間が悪いというかトラブルに好かれているように思えます」

「ワタシだったらランチの邪魔をするような無粋な輩には一発決めてやってるところだわ。…それにしても何アレ？悪趣味ね」

双眼鏡で見る限り、どうやらうねうねとした巨大な木らしきモノが

街を蹂躪しているようだ。ここまでデタラメだなんて。超兵器ってほんとなんなのかしら。しかし…ここがワタシたちの世界ではないとはいえ…。

「気に入らないわね」

「大佐？」

「…気に入らないわ。転移だかパラレルワールドだか知らないけどね。ワタシたちと一緒に引きずり込んだのは百歩譲って許してあげてもいいわ。けどね」

ワタシは超兵器を睨みつけながら拳を椅子に叩きつけた。…頭に血がのぼっているわね、ワタシ。悪い癖。家庭を考えて結婚して子供ができたのを機にワタシは退役して予備役になった。けれど夫は家から逃げた。小動物を連想させるような臆病なヒトだったから。で、夫が逃げた先は兵隊。…ハア、そんなに怖かったかしら。

「目の前でこんなことをしてくれるのは我慢がならないのよ。ワタシたちから守るべき人々を奪っておいてワタシたちには手の届かない人々を襲うなんてね」

「大佐…」

「…ごめんなさいね」

「いえ、お気持ちは我々として同じです」

祖国イタリアは旗色不鮮明であつたにも関わらず開戦後間もなく帝国に蹂躪された。理由は簡単だった。領内に超兵器機関が埋まって

いたのだ。たったそれだけのことだった。そして夫は戦場に消えた。開戦によってワタシは現役復帰していたけれども彼も祖国も救えなかった。まともに戦うこともできずに部下たちのために降伏するしかなかった。

「やるわ、幸い今の司令官はワタシよ。責任は全てワタシが被る。目の前の人々を救える力を持ちながら傍観しているなんてワタシにはできない」

「大佐、ですが！」

「し、司令より入電……」

「……司令はなんと？」

「は……我々が為すべき事を為せ、以上です」

……味なことをするわね。豊田司令、アナタいい男だわ。夫には悪いけど本気で惚れちやいそうよ。

アニメッリ大佐の演説

司令代行のアニメッリ大佐だ。

今、眼前の都市は超兵器に襲われ、為す術もなく蹂躪されている。ここに我々が守るべき民は居ない。我々が守るべき世界もない。

我々が守るべきは我々自身のみであり

我々は、我々の世界に戻るその日まで倒れることは許されない。

…だが、諸君！目の前で助けを求める人々に見捨てることができるか？

超兵器とともにやってきてしまった我々は、これを見捨ててよいのか！？

超兵器は、我々の世界の敵だ。我々は、我々の敵を討つ。

我々の世界のことは、我々が負うべき問題である。

そのツケを、彼らに払わせてはならない！

これより第十三任務部隊は超兵器を殲滅する！目標、超兵器。攻撃を開始せよ！

H L G 支援艦スバルヴィエロ 博士

「…ふ、超兵器か。アレは厳密には超兵器ではない。いや、わしらが超兵器と呼んでいたものの方が、出来損ない、あるいは残りカスと言っのが正しいか」

難しいものじゃな。造られた経緯を考えればやはり逆か？わたしは研究室でアニエツリ大佐の演説を聞きながら“棺桶”にすがりつくようにして呟く。

「しかし、澤風のレーダーの挙動。興味深いのう。陸からあれほど離れておるのに正確に超兵器の位置を掴んでおる。日野中尉の腕か？それだけでは説明できんな」

どこかで計算を間違えたのか。そう思いいろいろと試すがどうにも分からない。あるいは技術的な問題ではないとすれば…時空管理局の言う魔法か。だが我々の世界に魔法の素養のある者は少ないはず…。

「はあ、面倒じゃ。さつさと管理局の犬っころもこちらを見つけんか。これだけの質量の次元転移じゃぞ。少しは痕跡が残っておるじやろつに」

ぶつぶつと文句を言っていると目の前の紺碧の石が光を放ち始める。慌てて計器に目をやる。意味の無い数字の羅列。

「いかなな、暴走か。さては今の演説の影響かのう」

海鳴市街地 高町なのは

これはわたしのせいだ。わたしはこのジュエルシードに気付いてい
たんだ。だからお父さんが教えているサッカーチームの応援の帰りに
キーパーの子とマネージャーの子が気になったんだ…。彼が何か
をポケットに入れるのを私は見ていたの。

でもどこかで気のせいだと思い込んだんだ。疲れていて今日はジュ

エルシードの探索はお休みってユーノくんに言われていたから？うん、違う。そうじゃない。わたしのせいだ。見えていたのにそうであるはずがないって思い込んだんだ。だから“見えなかった”んだ。

街を巨大な木が襲っている。広すぎてユーノくんでも結界でカバーしきれない。このままじゃ街の人たちがたくさん怪我をしてしまう。こうなる前にわたしは何とかできたはずなのに…！

「な、なのはっ」

「え？」

「これは…結界だ！ちょっと感じが違うけど…」

ユーノくんの言う通り少し雰囲気が違うけれどたしかに逃げ惑っていたはずの街の人たちがいなくなっていて怒号や悲鳴も聞こえなくなっていた。ユーノくんも凄く驚いている。一体、どういうこと？

「だ、誰が？ここには魔導師はいないはずじゃ…」

「僕みたいに結界を得意にしている魔導師は少ないよ。それに…この範囲は広すぎる。こんなのSランクの魔導師だって…個人で出来る範囲じゃないよ。もしかして…」

ユーノくんが何かを言いかけた時、背中の方で大きな音がして頭の上を何かが飛び越えていつて…。

> Protection . <

目の前のビルにまわりついてた木が爆発したように吹き飛ばされて、降り注ぐ木の破片がレイジングハートが張ってくれた魔法で弾かれて…私は空に飛び上がって最初に音がした、海の方を見たの。

「なのは、あれを…海を！」

「お船がいつぱい…？」

「あれは軍艦だと思う。彼らが攻撃しているんだ。結界を張ったのは彼らなのかも…でも、攻撃手段は魔法じゃないみたいだし…どういう事なんだ…」

海にはまるで映画みたいにくつもの船が浮かんでいて、大きな音とともに船から薄い煙が上がって…またお化けの木が爆発した。…わたしはそれを、呆然として見ている事しかできなかった…。

第十一話 砲撃魔導師が砲撃と出会う時（後書き）

砲撃魔導師、リアル砲撃と遭遇するの巻。…すいません。いや、折角軍艦なんだからこれはやらないでどうするって思ったんでつい…。

127mmじゃ興奮しないという筋金入りの砲撃マニアの方はごめんなさい。でも46cmとかぶっぱなしたら下手したら結界貫通すると思うんだ…。

○空を駆ける巫女さん

二人の会話の仕方含めてフラグ。

○侘しいおっさん×2

通報はしなくていいのでこっそり哀れみの目で見てあげませう。そして司令の間の悪さ世界一！

○イタリア

原作ではヴェスヴィオ周辺に超兵器機関が埋まっていたため侵攻されて帝国制圧下となっている。シュルツたちの活躍と現地抵抗勢力によって後に解放された。

○演説

彼女らは軍人に似て非なるもの也。ただ世界に仇為すモノを被う者達也。

○博士

魔法も管理局も知っている。黒幕臭増強中。

○サッカー応援前後を独白で消化

アニメを知らない人には分かりにくいかもしれませんが長くなりすぎるので…。

○第十三任務部隊

謎の訓練用装置といい結界といい“ろくでもないナニか”があるのは確実です。

4・11 全面改訂に伴い、第九話を再編集。

4・15 改稿 誤字、一部表現修正。後書にて謎の結界に関して加筆。

4・16 改稿 謎の結界に関しての後書部分追記。

5・11 改稿 “木のお化け”だと別の暴走体と被るので表現差替。誤字修正。

7・7 改稿 誤字修正。一部表現差替。

7・20 改稿 誤字修正。

第十二話 現実には立ち向かわなくちゃなの？（前書き）

一期らしくする時に限って題が残念なのは仕様です。

いつも残念なような気がします。がたぶん気のせいでしょう。

第十二話 現実に向かわなくなっちゃうの？

side 豊田

突然、街から逃げ惑っていた人々が消え失せる。ただ艦砲射撃の音と超兵器の蠢動する音だけが聞こえる。

「こ、これは一体…何が起こったというんだ？」

「司令、まずは退避しましょう。訓練用装置の効果のあいまいな巻き込まれてはたまりません」

「そうだな」

こいつは危険だ。昨夜大尉が遭遇したねずみのお化けとは違う…心配していた事が現実になったようだ。この場から離れるべく、駆け出そうとしたその時…。

白い、どこかの学校の制服のようにも見える。そして手にするは杖。

「司令、あれは…」

「やはり、だな。あの少女だ」

side ユーノ・スクライア

「ユーノくん、わたし、どうしたらいいの？」

「なのは…」

僕にも、どうしたらいいか分からなかった。あまりにも判断材料が少ない。でも、僕がなのはを巻き込んだのだから、しっかりしなくちゃいけない。状況を整理しよう。

確かにこの状況を利用すれば、封印はできるはずだ。攻撃で弱っているタイミングを狙えば可能だろう。けれども、それはこの激しい攻撃の中、ジエルシードの位置を探し出し、更にはそこに近づかなきゃならないという事になる。

どのような意図で撃ち出されているかも分からない質量兵器の飛び交う中になのはを突っ込ませる…そんな事は、できない。だとすれば、どうすればいい？考えろ、考えるんだ…

「おーい、そこの君！」

「ふえっ！？」

「！」

後ろからの声…昨夜の作業着の二人組だ！結界の中にいるという事はもしかして本当は魔力を隠していた魔導師だった…？いや、でもこの結界は何か違う…一瞬、僕らまで弾き出すような力を感じたんだ。もしかして基準は魔力ではないのかもしれない。そう考えれば

魔導師でないはずのあの二人がここにいるのも分かる。でも、ただの一般人にしてはこの状況で落ち着き払っているのはおかしい。

「き、昨日の人たち…」

「無理にとは言わないんだが、お互い何が起こっているのか、何をしようとしているのか情報交換が必要だと思わないかね？」

『ゆ、ユーノくん。この人たち、やっぱり…？』

『僕にも分からない。けれど、このままじゃどうにもならない。ちよっと待っていて』

僕はひよいとなのはの肩から飛び降りて… あ、なのは飛んでいたんだ… まあ、少し高いけれど、このくらいなら着地に問題はないね。

「あわわ、ゆ、ユーノくん!？」

「おっと」

「あ、す、すみません」

なのはが慌てた声を出して追いかけてきて、それを見てあの時倒れた金髪の男性が僕をキャッチした。僕も慌てていて迷惑かけちゃったな。思わず頭を下げてしまう。

「なに、気にする事はない…やはり、君はしゃべれるんだな？」

「あ」

「ゆ、ユーノくん…」

…条件反射って怖いよね…ほら、人混みでぶつかったらもう反射的にごめんなさいって言うじゃないか…。

side 高町なのは

ユーノくんがうつかりあの人たちの前でしゃべってしまっただけな
るかと思っただけ、おじさんたちはそういう事もあるか、と納得
してしまいました。それでいいのかなと思っただけ、よく考
えればわたしが飛んでいる時点で常識外れなのは今更だね…。

それから、もう隠し事をして仕方がないとおじさんたちもユーノく
んも思っただけ、そのままお話を始めてしまいました。…でもユー
ノくんとおじさん二人が腕組みして真面目な顔をして話し合ってい
るのって、よく考えると凄くシニールな光景なような…。

「状況が状況だ。手短に話そう。私は豊田浩二、あの艦隊の責任者
だ。我々はその暴れている奴を追っていて、アレを倒すために攻撃
をしている。少々派手だが…直撃しても人死にが出ない仕掛けにな
っている」

「し、質量兵器で非殺傷…！？いえ、すみません。僕、ユーノ・ス
クライアと彼女はあれを封印するために戦っています」

「あ、わ、わたしはなのはっています。高町なのは」

ユーノくんがちょっと驚いていた。そういえば、魔法は相手を傷つけないように無力化する事が比較的簡単にできるから、ユーノくんたちはわたしたちの世界のような武器は使わないって言ってたような。逆に考えれば、わたしたちの世界の武器ではそういう事は難しいから魔法を使っているんだよね。だからユーノくんはおじさ…豊田さんの言葉に驚いたんだ。

でも、そんな事ができる豊田さんは何者なんだろう？もしかしたら自衛隊とかでわたしたちが知らないような研究の成果で、できるようになったのかな。あるいは…ユーノくんみたいに他の世界から来た人たちなのかも。

「封印…？あれを休眠状態にできるという事なのか？」

「はい。どう説明したらいいか、少し困るのですが…」

「いや、信じよう。説明は後でいい。我々のやり方では街を焦土にしかねん。君らに任せよう。先ほど浮いていたが、空は自由に飛べるのね？」

「え、はい。ある程度は。…不思議に思われないのですか？」

ユーノくんの疑問はわたしも気になっていたこと。だって、魔法だよ？使っているわたし自身でも、本当のところ、現実感が薄いのが、これが夢なんじゃないかって思うこともあるくらい。

いつでも一緒にいてくれて、お話してくれるユーノくんがいるのも、こうして、ジュエルシードを何とかしてくれそうな豊田さんたちが

来たのも。

これが全部わたしの都合のいい夢だから。いい子にして、いい事をしていれば、いつか…って思ってしまったから。そう思ってしまったくらいなの。

そう、だからだね。わたしはあの時、見えていたはずのジュエルシードに、気付けなかったんだ。心のどこかでこれは夢なんだって、思ってしまったんだ…。

「疑問があると言えば、あるさ。だがね、現にこうして街は襲われている。我々がしなくてはならない事は、一つ。そうじゃないか？」

「…そう、ですね」

「詮索は後さ。まずは目の前の現実と戦うべきだ。…そうだろう、高町なのは君」

だから、豊田さんがそう言って、わたしを正面から見た時、わたしは目を逸らしてしまった。ユーノくんも、俯いていた。ユーノくんはわたしを巻き込んでしまったと、自分にジュエルシードをこの世界にばら撒いてしまった責任があると思ってる。真面目なんだよね、ユーノくんは。

でも、わたしに、この街を、目の前の現実を救う覚悟はあるのかな…？

私は、これから大人としてではなく、軍人として言葉を紡がなければならぬ。この子は少し前までの私と同じだ。私も、目の前からずっと逃げてきた。そして恩人を、一人失った。そして、今も私は彷徨っている。だが、私を頼る者を裏切る事などできない。

あの時逃げなければ、失わなかったかといえば、答えは恐らく否だろう。彼は、天城大佐はどこまでも職業軍人だった。国の意思に反する事無く、それが間違いだと知っていて尚、海軍軍人として海にその身を沈めた。

そして今、逃げれるかと聞かれれば、それは無理だと言える。あの部隊は、既に私の居場所だ。そしてここには、私の居場所はもうないだろう。

だが、救えたかもしれない。戻れたかもしれない。僅かな可能性であつても、絶対にできなかったとは言えない。その思いは一生、背負い続けなければならぬだろう。

こんな幼い子にこの先その思いを背負わせてもいいのか？ いいはずがない。だが、そんな決断を、戦いの場に身を置かせてよいのか？ 私のような軍人は、彼女たちを戦場に立たせないために存在が許されているのではないのか？

…だが、この子はもう、決断している。その夜見た、彼女の目には迷いはなかった。心の表面で今、迷っているだけの事。芯ではとっくにどうするか決めていたのだ。そして今、泣き叫ぶでもなく、逃げ出すでもなくここにいる。

「高町なのは君。私たちにはできない事が、君にはできる。この街を守るのは君たちだけだ」

こんな小さな子に、大人が言っているいい台詞ではない。だが、これは事実だ。これが現実なのだ。

このしゃべる動物、ユーノの言う事を鵜呑みにするわけではない。

こちらとて奥の手はある。艦砲射撃は相手の反応を見るための小手調べだ。本命はエルドリッジに搭載されている特殊弾頭ミサイル―着弾地点を中心に破壊的なダメージを与える広域破壊兵器。私の部隊で陸上型超兵器を撃破できる望みのある武器はあれしかない。だが、それでは仮に超兵器を止める事ができても街を焼き払う事になる。それでは意味が無いのだ。

この街を救い、かつ超兵器を止めるには超兵器機関を休眠状態にできるといふ彼女たちの力を借りる他無い。

将来、彼女がこの時の決断を悔やむなら私を恨めばよい。やはり、こんな年齢で自分から向き合うべきではないのだ。私のような大人に強要されればよい。逃げが、そこにあった方がいい。

side ユーノ・スクライア

豊田さんが苦渋に満ちた表情で言ったのは、僕が初めてなのはに会

った時に言ったのと変わらない事じゃないだろうか。僕はただ必死で、深く考えてはいなかったけれど、あの時あそこにはなのはしかなかった。だからあの時も止められるのは「なのはだけ」だった。

あの時、なのはが守るべきだったのは自分と僕だけだった。でも、その後は違う。

彼の表情を見ていて気付いた。巻き込んだなんて言い方は保身なんだ。僕は、結局僕自身のためになのはの思いを利用してこの世界を守れと強要していたんだ。俯いている僕を、豊田さんはちらりとした。そうか、彼は僕らが向き合えていなかった事に気付いているんだ。

なのはが、目の前の現実に向き合えていない事。

僕が、自分のした事に向き合えていない事。

そつだよね。お互い向き合えていて、納得していたのなら。なのはの性格なら危険を顧みず、封印をしようとしたはず。僕もなのはを守る事を誓って、送り出したはず。

そつ、僕らはまだ、お互いが向き合うべきものに向き合えていなかったんだ。だから、豊田さんは、それを自分で引き受けようとしている。僕らは彼の提案に手を貸しただけ。そういう形を作ろうとしている。僕となのはの関係と違うのは、彼はそれが意味する事を分かった上でやっているという点。僕らが向き合えないのなら彼は全てを引き受けるつもりなんだ。僕らに任せた結果、起こること。将来僕らが、このことを振り返ったときに思うこと。

僕は…僕はどついたらいいんだろっ？なのはどつするんだろっ？

第十二話 現実に立ち向かわなくちゃなの？（後書き）

なのはだけでなく、ユーノにも覚悟してもらうために豊田は鬼になりました。9歳に言う台詞じゃないですね。そしてその意図を理解してしまうユーノ。…ほんとこの話の子供たちは可愛くなくないませn（チェーンバインド↓SLB直撃

・空飛ぶ魔法少女をすんなり受け入れる鋼鉄世界人
戦場でアドレナリンが飽和状態になっている時の反応なので離れた視点や平時に遭遇していたなら流石に驚くとは思いますが。

・しゃべったうっかりユーノ君
てんぱった結果、思考がフェレット化。説明のために物影で変身を解除するつもりだったのですが、結局なのはが驚くのでうっかりになるというダブル落ちだったりします。

・特殊弾頭ミサイル
鋼鉄名物の一つ。着弾地点を中心に爆発が広がって範囲内の目標に「無差別に」壊滅的なダメージを与える素敵武装。サーモバリック弾頭として扱います。

4・11 全面改訂に伴い、旧第十話を再編集。

5・11 改稿 誤字修正。

第十三話 覚悟を決めなきゃなの！（前書き）

「なの？」ではなく「なの！」なのは決意の証なの！

第十三話 覚悟を決めなきゃなの！

海鳴市街地 高町なのは

そうだよね、ユーノくん。

そうだよね、レイジングハート。

そうだよね、わたし。

あの時、ユーノくんに言われた時。わたしにしかできない事がある
と思ったあの時。

心の底では凄く嬉しかった。

だって、私は必要とされている。私がやらなきゃいけない事が見つ
かった。そう思ったから。

いい子でいれば、そんな受け身から。

あの時わたしは自分から何かをしようとする力をもらったから。

だから、ここにわたしは来たんだよね。ここにいるんだよね。

だから、本当は戦うのなんて怖いけれど。

だから、本当は誰も傷つけたくなんか無いけれど。

でも、これは私にしかできなくて、私がしなくちゃならないって心から思っている事だから。

夢だなんて思ってしまったのは私の心が弱いから。

誰かに言われたから手伝うというのは言い訳。

その場の勢いに流されたなんて言葉で目を逸らすのは現実からの逃げ。

自分の心で、自分の意思で。

私が、自分からやらなくちゃと思ったんだから。だから、もう逃げない。

だからわたしが口にすべき言葉は単なる肯定じゃなくて、自分の意思を表す言葉なの。

「わたしに、封印をさせて下さい。そのために豊田さんたちの力を貸して下さい。お願いします」

豊田浩二准将

力を貸して下さい。彼女はそう言って腰を折った。はは、大した子だよ。私は笑うしかなかった。

「にゃ？…ゆ、ユーノくん、わたし何か変なこと言っただけかな」

「…いや、そんなことは無いよ。豊田さん、僕からもお願いします」

「あ、いや、すまんね。こちらこそ、よろしく頼む。皆でアレを止めよう」

汚い大人の言い訳を彼女は踏み越えてきた。子供らしい、素直な心で。

もう私も後戻りは出来ない。

あの子は強要させるという逃げを私に許さなかった。私の言葉は高町なのはという一人の少女に命をかける決断をさせるきっかけとなった。だが私が狙っていた強要にはならなかった。彼女はあくまで自分の責任において決断したのだ。彼女のこの先に私は責任を持つ事はできない。何故ならこれは彼女自身の意思だからだ。

人がそうと決めた意志にはその人自身しか責任を持つことはできない。
誰かに強要された意思は強要した人物が責任を放り投げれば容易く投げ捨てられる。

いつか彼女がこれによって何か不利益を被った時、私は悩むだろう。責任が無いゆえに苦悩するのだ。もっともらしい理由に逃げられないから。何らかの罰を受けて清算する事もできないから。

ユーノ・スクライア

「さて、作戦会議といこう。アレを倒す為の方法を考えねばな」

「封印はアレの核を見つけ、弱らせてから接近して行います。流石にそのままでは厳しいので」

「だいたいの位置なら核の位置も分かるが…正確には難しいな」

金髪の方の人―そういえば、彼は結局名乗っていなかった―が何かの機械を見ながら頭をかく。擬似的に探索魔法を行使できるような装置を持っている以上、この世界の人間ではないだろうね…いや、詮索は後にしよう。

「そういうことなら僕に―」

「えっと、元を見つければいいんだよね」

「え」

「リリカルマジカル、探して災厄の根源を！」

> A r e a s e a r c h . <

ほんと、なのはの才能には驚かされっぱなしだよ…。こんなに簡単に使いこなされたら…僕の立場が無いじゃないか。

「これは…驚いたな。今のが魔法かね？」

「にやつ！？魔法を知っているんですか？」

「…本当に魔法なのか。ベントレー少佐が喜びそうだな」

でも、やっぱりなのはなのはだった。これはまだまだ僕がついてあげなくちゃいけないみたいだ。魔法の世界に引き込んだ責任、果たさないとけないものな…。

高町なのは

「弱らせて、封印する。はは、実にシンプルでいいじゃないか。こちらはなのは君の誘導で攻撃を続行する。砲撃に巻き込まれないようにね」

「は、はいっ」

豊田さんは当たったらどうなるかについては笑うだけで何も言ってくれなかったの…。対人実験はしていないから分からない？…あは、は…なんだか物騒な響きの言葉が聞こえたような…ふ、深く考える
と怖いからやめておくの。

あの木のようなのが弱ったら豊田さんに攻撃を中止してもらうのと、私に念話でタイミングを知らせてもらうために今回はユーノくんは豊田さんの肩の上だから、わたしは一人で行かなきゃいけない。

「覚悟を決めなきゃなの…」

> What is the matter with you?

< (どうかされましたか?)

「ううん、大丈夫。レイジングハートも準備はいい?」

> I stand by whenever you need me.
< (貴女が必要となさる時ならいつでもどうぞ)

レイジングハートに心配されちゃった。そんなに不安そうな顔をしていたのかな。でも、そうだよね。レイジングハートが一緒だもの、大丈夫。

「行くよ、レイジングハート!」

> Yes, my master... Uh, don't worry, you can do it.
< (了解、マスター! ええと、心配なさらずに、貴女ならできますよ)

「う、うん」

ちよつと勢いよく飛び上がりすぎてバランスを崩しちゃった。あはは…ちよつと、力が入りすぎていたみたい。うう、ユーノくんも豊田さんも笑いすぎだよ…。

海鳴港沖 第十三任務部隊 駆逐艦澤風 鈴木和人少佐

「おいおい本当に空飛んでるよ」

「私にも見せてくださいよ」

「ほいよ、好きにしていーいぞ。相手が動く気配も攻撃してくる気配もないんじゃないだろう？」

「あはは、ばれちゃいました？」

俺是那岐君に双眼鏡を渡しつつ、なんとなく脱力を感じていた。司令一流のジョークかと思ったが…まさか本当に空を飛ぶ子がいるとはね。それもあんな小さな子が…これはこれで超兵器とは違ったトンドモだな。向こうにとっては世界の垣根を飛び越えてやってきたこちらもトンドモかもしれないが。

「わあ、可愛い格好ですね。あはは…私も小さい頃だったら着てみたかったかな」

「箒ならぬ魔法の杖で空を飛ぶ魔法使いの少女…といったところか？… 案外、那岐君のお母さんの話も本当だったのかもしれないぞ？」

「あはは、そうかもしれませんね」

今頃、アンバスイトでは興奮したどこかの少佐の演説でも始まっているんじゃないだろうか。…しかし、どうにも腑に落ちないことがある。

「ところで謎の訓練用装置は確かに凄いが…建物とかは壊れるんじゃないのか？」

「うーん、確かにところどころ壊れていますけど妙に被害が少ないですね」

「その上、これだけ派手に撃ち込んでいるのにこの国は何をしているんだ？」

『それにはわしが答えよう』

「ぶつ、は、博士え！？」

いきなり博士が無線で割り込んできた。盗聴器があるんじゃない？って犯人はそこでニヤニヤ笑っている那岐君か。OK、後で覚えてろよ？作戦行動中に非戦闘員の勝手を許すなよ…まあ、雑談していた俺が言えたことではないけどな。

『謎の訓練用装置を調整してな。なんとか間に合わせたんじゃない。いくつか論文が書けるくらいの技術を注ぎ込んだんじゃないよ。これがま

た凄くて――』

「自慢はいいので手短に願います」

『…つれないのう。要は建物は壊れず、一定範囲内から任意に人を排除して尚且つ彼らには気付かれないという素敵機能じゃ！』

「相変わらず無茶苦茶ですね謎の装置」

『まだ試験段階なんだがの』

「危ないことせんでください。妙な副次的効果でもあつたらどうするんですか」

『そうは言っても、この世界からわしらの存在を隠すにはこうするしかなかったんじゃない』

…博士も考えているということか。ただの研究馬鹿ではなく、そういう頭も回せる人物らしい。見た目こそ幼いが本当に底の見えない人だな。

『流石に特殊弾頭ミサイルや怪力線装置とかの大威力の兵器だと機能がつまく働かないから使用は控えて欲しい』

「元々そのために司令は彼女と協力体制を敷く事を決めたのだから問題ないかと。それに我々の手でアレを止めても保管のしようがないですからね」

『封印か…研究課題としてはいいかもしれぬのう』

∴訂正、やっぱり研究馬鹿かもしれん。

第十三話 覚悟を決めなきゃなの！（後書き）

鬼になってど真ん中に投げ込んだ速球をジャストミートされた豊田司令。なのは、恐ろしい子！ 悟ってしまっていたユーノとは違ってた。ただ素直で礼儀正しいだけなんですけどね。でもそれが無自覚に豊田を追い込んでいたり。

○エリアサーチ

原作で作者が思った事をユーノの独白で消化。なのはの凄さの描写箇所でもあるので展開は原作に近い形に。

○バランスを崩すなのは

この頃のなのはの飛行制御はまだレイジングハートに頼っている部分が大きいはずなので緊張感を紛らわすためにわざとやった疑惑。

○副長たちの反応

驚きを通り越して呆れモード。

○謎の訓練用装置改良

こんなこともあるのかと。HLGは真田さんシステムと言っても過言ではないと思います。

4・11

全面改訂に伴い、旧第十一話を再編集。

5・11 改稿

誤字修正。

7・20 改稿

誤字修正。

第十四話 持てる者の責任（前書き）

ユーノの決意。

かっこ悪くたっていい。ただ思いを貫けば、輝く時があるはずですよ。

第十四話 持てる者の責任

海鳴市街地 豊田

『というわけで司令、砲撃ならいくらでも撃ち込めます』

「分かった。こちらもおかしいとは思っていたがそういうことが……トンデモだろう……」

しかし完全に実用化できればとんでもないものだな、謎の訓練用装置。立てこもり事件とかで使えば犯人だけ残して人質を救出したりできるかもしれん。だが使い方次第では恐ろしい兵器にもなる。……たとえば戦闘艦から乗員だけを弾き出したりできる可能性がある。……今にして思えばブラウン女史が戦後に無人戦闘艦計画を提唱していたのはこの装置が念頭にあったのかもしれないな。彼女は博士とも親交があつたわけだから……。

「ユーノ君、作戦変更だ。周囲の危険そうな部分もなのは君に探させてくれ。対地ミサイルも使って同時に一斉攻撃を仕掛ける。それで弱ったところで一気に行く」

「でも、それじゃあ街への被害が」

「あ、いや、建物も壊さずに攻撃できるようになってね……もつとも、アレを倒せるような高威力の武器は流石に無理だから使用はしないのだが」

「え」

目をまん丸にするユーノ君。…いやはや、感情豊かな生き物のようだ。後で詳しく話を聞きたいものだね。…他人が驚いているのを見ると冷静になるといふのは本当だな。

「そ、そんなことができるんですか？」

「…正直、私も呆れているがなのは君が怪我をする危険を減らせるのだから悪い話ではないだろう？」

「そ、そうですね。それじゃなのはに伝えます」

本当に非常識だ。慣れたと思っていたが…。シュルツやブラウン女史とはそれなりに私は親しいが、あの博士はそれほどでもない。この一人と一匹も、出会ったばかりで謎だらけだ。

実を言えば初めて彼らに出会った夜に懸念していた通り、レーダーに極めて微弱ながら彼らが反応していた。この反応はいわゆる超兵器に対するものではない。

戦後、国連に管理が移された後に博士の報告により判明して各国に震撼をもたらし、トップシークレットとなった事がある。

至近距離において、H・L・G設計システムや一部の謎の装置は通常レーダーやソナーに対して僅かながら超兵器のそれに似たごくごく小さな干渉を起こす事があるという報告だ。基本的には単なるノイズとして処理されてしまう程度で通常運用時には何の問題もないため、無用の混乱を起こすとして秘匿された。これに関して博士は当時世界中で運用されていたレーダーの基幹設計部分に自身が関与してお

り、その部分が影響していると述べている。原因については超兵器機関に及ばないまでも膨大な出力を持つから、という説が有力だ。

あの博士の非常識な逸話の一つだ。この艦隊では謎の装置を含め、博士の発明品を運用する事が多いため佐官クラスや、各艦のリーダー、ソナー運用担当者などはこの秘匿情報を知っている。

謎の装置やHLG設計システムの根幹部分がブラックボックスであることを知る者は更に少ない。

私はその事実を知った時、薄ら寒い何かを感じたものだ。そして、それらの設計者と言われる博士自身、謎だらけ……。私は頭を振って疑念を追い出した。

「准将、我々もビルに上りましょう。こちらの判断でも砲撃管制ができるでしょうから」

「そうだな。そうしよう」

なのは君に誘導を頼んだものの、子供の指示に頼った攻撃ではそれこそどこに飛んでいくものか分かったものではない。“あっち”や“そのへん”では困る。だいたい位置を指差してもらって、そこから大尉によって指示を出してもらえばより効率的になる。ここからは時間との勝負だ。こちらの攻撃で建物は壊れないが、アレが暴れて壊れることは防げないのだろうか。

…ちなみに、今、ユーノ君は大尉の肩の上にいる。

「なかなかシニールな画だな」

「准将、何か？」

「どうしたんですか豊田さん？」

「いや、なんでもない」

ユーノ・スクライア

軽やかに螺旋階段を駆け上がっていく大尉さんの肩にしがみつながら僕は上空にいるなのはに念話を送った。ちなみに、なのはへの連絡方法、念話についてはテレパシーみたいなものか、と思いのほか簡単に納得されてしまった。もう少し驚くものと思っていたのだけど…。うーん…なのはの大袈裟なリアクションに慣れていたからか、凄く違和感が…。

『なのは、聞こえるかい？』

『うん、聞こえるよユーノくん』

『作戦変更だ。周りの危ないところも一緒に叩いて弱ったところを封印するよ』

『でもそれじゃあ街が』

結構離れているのに驚いているのが分かるリアクションだなあ。うん、やっぱりこうじゃないとね。…って何を僕はしみじみと頷いて

いるんだろう…。

『彼らは建物を壊さずにダメージを与えられるらしい。威力の高い攻撃だと街に被害が出てしまうから、やっぱり封印はなのはの仕事だよ』

『…うん、分かった。それじゃあそれまでどうしたらいいの？』

『ええと、ちよつと待って』

僕は振り落とされないように注意しながら後ろを見ると…。

「あの、大尉さん」

「ん？」

「…豊田さん、ついてこれてませんよ」

「……失礼した」

結構下の方からカンカンと靴音がのぼってくる。明らかに鍛えているように見える大尉さんと違って豊田さんはそこまには見えなかったから仕方ないと思うんだ。准将という階級からしてもきつと大尉さんより年上だろうし。

「…ふう、あまり体力には自信が無いんだ」

「ええと、豊田さん。なのははどうしたら？」

「とりあえず危なそうな箇所を身振り手振りで示してくればこちらでなんとかするよ。大尉、問題ないな？」

「はい。我々の位置は艦隊も把握していますから誘導はできるでしょう」

「そうか。では安全が確保されたかの判断は君たちに任せる。封印とやらがどんな作業なのか我々には分からないからね」

「分かりました」

なのはに豊田さんの指示を伝えて、僕は深呼吸した。さあ、ここがらが大事だ。なのはのことに気を配らなきゃいけないしこの人たちは魔導師ではないから万が一のときは僕が守らなくちゃいけない。…これまでの非常識な出来事からすると大丈夫かもしれないけれど少なくともこの大尉さんはこの前、暴走体にやられていたんだから生身では対抗できないと考えた方がいいよね。豊田さんが大尉さんより強いとは…正直思えないし。

海鳴港沖 第十三任務部隊 駆逐艦Z51 ゲイトルード・ベント
大尉

「あんな小さな子を戦わせなければならいなんて…。澤風からの砲撃指示はまだ？」

「データ受信しました。射撃用意よし」

私は唇を噛み締めつつ、もう一度双眼鏡で空を飛ぶ少女を見た。我々は彼女のような子供の未来を守るために存在を許されているはず。そして私の両親のように…二度と超兵器（暴力）によって虐げられる者を出さないために私はここにきたというのに…。

再び現れた超兵器を犠牲なくして倒すには守るべき対象であるはずの彼女の手を借りなければならぬのです。

これを皮肉と言わずしてなんと言うのでしょうか。

「…街に被害を出さずに秘匿装備は撃てますか？」

「大尉、それは…！」

「お気持ちは分かります。…ですが、不可能です。間に建造物が多すぎます」

「…そう」

せめてもの抵抗も、意味はなさず…それも当然ですね。豊田司令が考えなかったはずはありません。私ごときの浅慮は何も生み出しはしないのですね。あの超兵器は、彼女に任せるしかない…我々は…無力です。これだけの装備を持ちながら、結局守れていないじゃありませんか。

「…撃ち方始め！彼女に当てないで下さいね」

「了解」

私たちに迷いは許されません。せめてあの子が怪我などしないように、今の私にできるのは最善を尽くすことのみ。思うようにならない現実には嘆いている暇などはないのです。できるのは目の前の出来事を片付けて、一步一步、進むことだけです。所詮、人間にはそのくらいしかできないのです。

海鳴市街地 ユーノ・スクライア

それは圧倒的な光景だった。爆発、爆発、爆発、また爆発。もちろん一発一発の威力ならこれを超える魔法を操る魔導師は沢山居るだろう。けれども砲撃はほとんど間断なく続き、ミサイルも正確に指示された位置に着弾していく。再生はするけれど火力がそれを上回っている。果たしてこうもあっさりとこの暴走体を鎮圧できる魔導師がどれだけいるだろうか？

「…これが、あなた方の力…」

「過ぎた力と思うかね？」

僕は…少し迷って、穏やかな表情で答えを待つ豊田さんに素直に頷いた。私もそう思うよ、と言って彼は座り込んだ。なのはが指差すのを見て大尉さんはまた通信機で指示を出しているみたいだ。内容は僕にはよく分からないけれど、声色は僕と話していた時とは明らかに違った。

「しかしね。こういう圧倒的な力をお互いが持つていれば無闇に相手を殴ろうとは思わないのではないかな？無論、相互理解は必要だがね」

「…そうかもしれませんが、誰かが何かの間違いを犯してしまったりした時は？」

「そうだね。それが問題なんだ」

抑止論、という考え方がある。簡単に言えば十分な力を持つ者同士がお互いの力を把握していれば戦った結果のことを理性的に考えて実際に殴りあたりはしない、という考え方かな。

何も軍事的な意味だけではなく日常生活でもこの考え方は成り立つ。腹が立つても目の前の相手を無闇に殴ったりはしないのも一種の抑止だ。

「だからこそ常識であれば殴りあわないという結果を得るはずの理論が非常識から身を守るために幾重もの防御策を講じなければならぬ」

「理性に立脚しているはずの理論が…非理性的なものを恐れる、と？」

「私は学者では無いし、軍人としてその理論の中のピースに過ぎないのだがね」

「……」

管理世界では質量兵器は一種アレルギーとさえ思えるほど嫌われて

いる。歴史を追い、過去の遺跡を発掘するスクライア一族という世間から少し離れた立場にいたせいか僕にはそこまで質量兵器そのものの強い嫌悪感はない。

歴史を紐解けば分かる。結局、魔法にしろ、質量兵器にしろ、使う側の問題なんだ。でも魔法は使える人間に限られる。誰でもちよつとした訓練さえすれば扱えてしまう質量兵器に比べれば規制がしやすい。これは治安を守る上では利点になる。その点では管理局の言う質量兵器規制も間違いではないと僕は思う。

でもふと豊田さんたちを見て僕は思った。僕を含めた魔導師たちは彼らのように苦悩しているのだろうか？いや、その悩みは彼ら以上に深くなければならないはずだ。

質量兵器は誰でも扱える。だけど魔法は限られた人間にしか扱えない。であれば魔法を扱う人間は力を持つとしても持てない人々のことを思えばより自身の行動に責任を持つ必要があるんじゃないだろうか。

そう考えて僕は俯くしかなかった。僕のとつた行動は軽率だった。管理局に協力を申し出るなりした方が良かったはずだ。彼らの行動が遅いと思うなら自分で訴えればよかったんじゃないか？僕の行動は、傍から見れば自分ならできるといふ自惚れか、自分も何かしたんだという安心感が欲しかったからと思われても仕方ないものじゃないか。

でも僕はいつまでも俯いているわけにはいかないんだ。

ジュエルシールドを止めて、そして誰も傷つけさせはしない。僕はそのためここに来た。その思いは今でも変わらない。

なのはに、この街の人に、豊田さんたちに。僕は迷惑をかけてしまった。それはジュエルシールドがここに漂着したからじゃない。僕が軽率な行動をとったからだ。だからこそ、逃げられない。目を背けちゃいけない。

自分のしたことに本当の意味で責任を持つ。そのために僕は覚悟を決めたんだ。

なのは、待たせたね。僕も、覚悟完了だ！

第十四話 持てる者の責任（後書き）

クロノに言われるまでもなく自分で気付いたユーノです。彼は強い子だからそのまま落ち込んでいたりはいしないのです。強いぞ凄いぞカッコいい！あれ、なんか残念な子がいたような…？

○博士の功績

大戦中の非常識なまでの軍事技術の向上は非常識な天才「博士」によるものという設定。

○ゲルダ代行

真面目で常識人です。あくまで鋼鉄世界人基準ですが。

○艦隊による対地攻撃

地上にあるだけの巨木には破滅的なダメージを与えたことでしょう。

○魔導師による治安維持

一部に権力と責任を集中させる形態です。騒乱の時代には才気溢れる人物にとっては有利ですが平和になれば腐敗の温床になりかねません。

○二人の覚悟完了

なのは…お手伝いではなく、成り行きでもなく自分の意志で。

ユーノ…きっかけはどうあれ自分が始めたことには責任を持つ。

4・11 全面改訂に伴い、旧第十二話を再編集。

4・29 改稿 一部表現を修正。

5・11 改稿 後書加筆修正。

7・20 改稿 誤字修正。一部加筆修正。

第十五話 博士×博士×博士（前書き）

砲煙の宴の背後で舞台裏。

第十五話 博士×博士×博士

第296管理外世界付近 第4次元艦隊第2分艦隊旗艦 M級次元
航行艦マサチューセッツ ギルバート・スターレット准将

「やれやれ、無事二号機を回収できたか」

「今は安定しており、特に魔力を放出している様子も無いようです」

俺は副官の報告を聞いてようやく肩の荷がおりる気分になった。第296管理外世界の崩壊。それ自体はあり得ない話ではなかった。しかし世界に安全をもたらすであろうピースメイカー計画…その実現の為には多少の技術的冒険も必要だったのだ。失敗したところで元々あれは連中が望んでいた計画だ。こちらが責任を取る必要など無い。

もつともその失敗の後始末に俺が奔走しなきゃならんというのは面倒この上ないことだが。跡形もなく消え去っておればいいものを…。まあいい、俺のような無能でもこのくらいはできる。上司の尻拭いは俺の得意技だ。

「しかし存外頑丈なモンだったんだな」

「仮にもロストロギアの産物ですからね。搭載していた艦は藻屑と消えたようですが」

「レムレース、だったか？」

「はい。H L G 対応攻撃型原子力潜水艦レムレース…でしたか。幸い装置自体に影響はありません」

「なら問題ない。他にあの世界からの残骸は？」

「確認されていません。どうやら一号機は搭載していた艦もろとも消滅したようです」

片方残っていれば幸いというところだな。技術情報はこっちにバックアップがあるし、心残りがあると言えば…。

「あの博士はダメか」

「あの天才が失われたのは痛いかもしれませんがね」

「…天才ねえ…俺には狂人にしか見えなかったがね。あの才能だけは本物だと思うが」

現地のあの女技術者はとんでもない奴だった。あの世界が知らないはずの魔法技術にもすぐに精通して数々の発明をしていた。掛け値なしの天才…だが一方で情緒不安定な人物でもあった。温和な時もあれば凶暴な時もあり…まるで多重人格者。ま、死んだならそれで別にいい。奴は魔導師の才能もあつたからな。いずれこちらの計画にとっては邪魔になる。

「要は…うまいこと素体さえ手に入ればいいんだろう？」

「適合者がいればまた無人世界なりどこかで実験は可能でしょう」

「フン…実験が成功すれば魔法の才能にあぐらをかいた阿呆どもを叩き出せるな。驕った魔導師どもに“管理”される世界などクソ喰らえだ」

ミッドチルダ陸上警備隊本部 レジアス・ゲイズ少将

「やはり駄目だな。戦力さえあればもつと効率的な手が打てるものを…」

私は頭を抱えた。10年前、友人にして同志であるゼストと地上の平和を勝ち取ることを誓ったあの日から状況は変わらない。優秀な魔導師はみな、次元航行部隊にとられていつてしまう。

苦肉の策として各地区の陸士隊の対抗心を煽ってみた結果、彼らは精力的に働いてくれている。そもそも陸士隊では実力以前に、空戦魔導師になれなかった自分たちを落ちこぼれと卑下して真面目に働かない者が少なくなかったのだ。ここではゼストのような志も実力もある局員は稀である。

だがこの方法は諸刃の剣だ。陸士隊同士の連携は悪くなり、担当地区の境では犯罪発生率は下がっていない。縄張り意識が邪魔してその周辺ではうまく活動ができていないからだ。

他にもいろいろ手は打ってはいるが…やはり戦力が足りない。それに尽きる。次元航行部隊の中でも次元巡察隊では同じような声を聞

く。次元艦隊に戦力をとられていると。だが我々はそれ以下だ。その残りカスの戦力で人々を守らねばならない。

…今でもあのようなことに手を染めてよかったのか。迷いはある。だがあれば必要悪なのだ。私とて…自分に力があつたらと思う。勿論、一人の力で誰も彼も救えて地上が平和になると思うほど頭がお花畑ではない。だがそれでももし自分に力があつたらと思つてしまふのだ。力の無い者が何かを守るにはどうしたらいい？守るために働いてくれる力を手に入れようと思つるのは間違いないのだろうか。

「…フン、欺瞞だな。私は地獄に落ちるだろう、ゼスト。だがな、想いは…同じなのだ。地上に平和を…そうだろう？」

10年前、ゼストと交わした約束。この地に誓つた想い。忘れはせぬ。

「少将」

「む、オーリスか。入れ…どうした？」

「第296管理外世界での実験は失敗し、同世界が虚数空間の海に消えたそうです」

「…だから言つたのだ。私は反対だと」

馬鹿が。内心私は吐き捨てた。誰かに平和を託すようなあのやり方が成功するものか。私とて力は外に求めたが、それを振るう責任を放棄するつもりなどない。ましてや生きているかも怪しい相手にそ

れを任せるようなやり方は認めん。世界の平穩はそこに生きている者によって守られねば意味が無い。あんな他人任せの平和はたとえ成功したとしても長続きはしないだろう。

「で、あの馬鹿どもは何と？」

「二号機は回収され、計画は続行される模様です」

「フン…好きにさせておけ。どうせ私は手を引いた話だ」

根底から狂っている計画をまだ続ける気が…。まあ、じきに情報が漏れて周りから消されるだろう。こちらの痕跡は完全に消した。関与は明らかにはならない。

第4次元艦隊が潰れてくれれば少しは戦力がこちらに回らないだろうか。うまく立ち回れば少しは戦力を確保できるかもしれない。そう上手くはいかんだろうが…一応準備はしておくか。

「ですが、問題が」

「何だ？」

「現地の巡察隊が伝えなかったため彼らは気付いていませんが次元転送でかなりの質量がどこかの世界に送られたようです」

「…それに気付けないようではあの連中もその程度ということだな。一応、行方を探っておけ。もしあの博士が脱出していたなら確保する」

「はっ…しかし、あの女は…」

「…ヤツ以上に扱いにくいだろうが、ある意味ヤツよりはマシだ。うまいかないようなら次元巡察隊に身柄を掴ませろ。あそこならまだなんとかなる」

「…分かりました」

オーリスが退室した後、私はあの計画に関わる気になった原因であるあの博士のことを思い出していた。魔法に関わりの無い管理外世界の人間でありながら管理局との接触以降、瞬く間にこちらでも十分通用するいくつもの発明を行ったあの女性。まるで知識の源泉…とどまるところを知らぬ発明家。

だがその姿とは裏腹に時に狂気すら見え隠れする女性。普段は温厚そのものの、どこかのおっとり加減の少将殿と茶でも飲んでいそうなのだが。まあ彼女にしても外見通りの人物ではないのだからそういうものなのかもしれない。

海鳴港沖 第十三任務部隊 H L G 支援艦スバルヴィエロ 博士

「ふ…焦らせてくれおるのう」

ワインを瓶から直接飲む口。ふむ、我ながらシユールな画だ。空になったビンごとりと“棺桶”のそばにおいて私はベッドに飛び込んだ。幸い、いい方向に暴走してくれた。これで二号機のような“事故”を起こしていいたら冗談ではない事態になっていただ

ろう。

もっともあれは恐らく意図的な事故。データを回収して解析できれば何が起こったのかは分かるだろうが…まあ、間違いなく連中の仕業。コレが自分の手足となって思い通りに動かせるなどと思っている大馬鹿者どもだからな、奴らは。

「…しっかしお前も物好きじゃな。そんなにあの世界の人間が大事じゃったのか？それとも、わしらの方が大事だったのかの？」

まあ、大事だったのかもしれない。あるいは自分が大事だったのか。そもそも誰にも死んで欲しく無いならどうして二号機を止めなかったのか。

「ああ、忘れておった。出力は二号機の方が上じゃったの」

ふむ、酔いが回っているとついつい忘れごとが多くていかな。…まあ、飲酒に逃げる習慣は今に始まったことではない。クスリに逃げるのをやめただけマシというもの。シュルツに言われてやめてから少しは自分を保てるようにはなったが…。いやそもそも私に自分などというものはあるのだろうか？

…いかな、つい感傷的になる。これだからシュルツに泣き上戸などと言われる。

「どうせ助けるならシュルツたちを助ければよかったものを…なんでこんな口クデナシの女を助けたんじやろうなあ」

流石に一気はまずかった。砲撃の音がまるで子守唄。…少し、眠る…わけにもいかな。見届けねばなるまい。

第十五話 博士×博士×博士（後書き）

舞台裏ではみんなで博士の話をしています。どれが誰の話をしているんですかね？（棒

○スターレット准将
自分を無能と思える無能はいない。意外と人を見る目はあるのかも
しない。

○第296管理外世界
WSG2鋼鉄の咆哮の世界。2〃2、9〃く、6〃ろ。劇場版には
全部で200に届かないという設定がありますが…見なかったこと
に。

○レムレース
シリーズ第一作WSC1にてプレイヤーが初めて遭遇する潜水艦型
超兵器。誘導魚雷を連射してくる上にミサイルまで撃ってきます。
その頃のプレイヤー艦だと一発当たれば中破は確実。鋼鉄の魔女た
ちでは名前だけ拝借。

○みんな大好きレジアスのおっちゃん
後の陸士隊の縄張り意識の強さは彼が原因に。

○ヤツ
犯人はヤツ。ドクターと比較対象にされる博士自重。

○ロリ飲酒
お酒は二十歳になってから。博士は30代なので何も問題ありませ
ん。お外で飲むと補導されますけど。

- 4 13 全面改訂に伴い、旧第十三話を再編集。
- 5 11改稿 後書加筆修正。
- 7 20改稿 誤字修正。一部加筆修正。

第十六話 戦いが終わったら相互理解を深めましょう（前書き）

図体の割にはあっさりとケリがついている相手なので戦闘描写はこんなものだと思います。

相互理解を“OHANASHI”と読んでしまった人は頭、冷やした方がいいと思います
（SLB直撃）

第十六話 戦いが終わったら相互理解を深めましょう

海鳴港沖 第十三任務部隊 駆逐艦澤風 日野那岐中尉

「撃ち方やめ！…さて、後は空飛ぶ少女にお任せ、か」

「…本当にほとんど建物も壊れませんでしたね」

かなりの砲撃とミサイル攻撃が集中したにも関わらず、本当に被害はないみたいです。私には実戦経験はなかったので分かりませんが一般的に都市部への攻撃というのは被害が大きくなるものだといいます。…だから私はほっとしていました。人が死なないとしても人が生活している都市が壊れていくのを見て平静ではいられないでしょうから。心なしか副長も安堵しているように見えます。

『まあ、そんなに便利なものではないからの？謎の訓練用装置も』

「のわつ、博士え！？那岐君またか！？」

「ええ！？わ、わたしじゃないですよ！」

うう、前科一犯だったので信じてもらえてませんよね。一体誰が…肩をトントンと叩かれて振り向くと、凄くいい笑顔でサムズアップしている少尉。…そういえば博士さんと少尉はお知り合いでしたっけ…。

「博士…酔ってるな？」

『けふ…いろいろあるんじゃないか。わしは戦闘員じゃないからよかるう？』

「…まあ、深くは聞きませんがね」

『そうしてくれると助かる。司令に伝言じゃ。調整がうまくいかなから使えないこともあることと、どうも干渉するのか艦隊用光学迷彩装置が今のところは使えない点じゃ。解決の目途がないではないんだがの』

「了解。承りましたよ」

あの博士さんもよく分からない人です。今回のように自分の発明の成果を見に現場まで出てくるかと思えば、何日も自室にこもって出てこなかったり、次の日にはアニエツリ大佐とお酒を飲んでいたり…

ちなみにこういうお話は私たち通信士が艦隊内の定時暗号通信の解読対策に入れる無意味な部分^{マジ}を使って作っている情報網から得たものです。通信の私的利用かと言われると…あはは、ちょっとアレかもしれないですけど。平時ならと豊田司令が黙認していたことですから流石にこちらに来てからは使っていません。

…って、アレは、一体なんでしょう？

「ふ、副長、あれ、あれ…」

「おいおい…まさか光学兵器か？」

空に浮かぶ少女から桃色の光が伸びて行って…光が…広がっていく

！慌てて覗き込んだリーダーには超兵器付近に大きな反応が…。

そして、光が、収束していく…。

「な…なんだったんだ…今のは…」

『こちら鷹の目、協力者の攻撃による目標の沈黙を確認した。封印作業成功とのこと』

「こ、こちら鋼鉄の魔女、こちらでも…超兵器ノイズ消失を確認…ですが」

私は、もう一度リーダーに目をやりました。確かに、超兵器ノイズは消えています。けれども、謎の装置やH L G設計装置特有の極少ノイズがまだ…。

「エラーコード296 - 2アンノウンを確認しています」

エラーコード296。一般には伏せられている極少ノイズの発生を意味するこの部隊で使用されている符丁、その後に続く数字は確認できる数、そしてアンノウンは発生元が未識別…私たちの艦隊の発するものではないという意味です。ただしアンノウンでない時は後で報告書を書くだけだったりします。そうでないと事情を知らないクルーからはしょっちゅう故障を起こしているように見えてしまいますからね。

『…了解。修正プログラムを走らせるようにとのことです』

これは周りに怪しまれないための返答。私は了解と答えて“修正しているように見えて実は何もしないプログラム”を立ち上げます。

ちなみにこの極少ノイズ、どういふわけか私の担当時には結構遠くでも捉えてしまうことが多くて、そうなることとの艦の装置に反応しているのかが識別できず、アンノウンになってしまつて報告書を書かなきゃならなくて大変なんです。他の艦とそこまで装備も変わらないはずなんですけど…。

海鳴市街地 ユーノ・スクライア

なのはが撃つたのは直射型の砲撃魔法だね…。元は魔力を直接放出する比較的シンプルな術式ではあるけれど、凄い出力だった。封印効果はレイジングハートの補助なんだろうけど…。だからと言って魔法に触れて一月も経っていない人間が普通にできることじゃない。努力していた姿を見ているとはいえ、いざ目の前でこうしてまざまざとその威力を見せられると…。

『ユーノくん、うまくいったよ！』

『あ、ああ。本当になのはは凄いね。びつくりしちゃったよ』

『そんな事無いよ。豊田さんたちのお陰で邪魔されずにゆつくり狙えたからだよ。やってみたら、できちゃった』

やってみたら、できてしまつたって…。うん、やっぱりなのは才能がある。レイジングハートが補助してくれているからいいけれど、後で感覚で組んだ術式の怖さを説明しなきゃならないかなあ。僕はもしかしたらとんでもない弟子をもってしまったのかもしれない。

そもそもなのはを弟子と呼ぶ資格が僕にはあるんだろうか？少なくとも僕は適性が無いのかああいう長距離攻撃魔法は使えないからなあ。

「驚いたな。封印は近付く必要があったんじゃないのかい？」

「あ、いや。僕も予想外でした。彼女の才能を測り損ねていたみたいです」

「これは我々は必要なかったかもしれないな」

「いえ、なのはも弱っていたからゆっくり狙えたと言っていますから」

「そう言ってもらえると助かるね」

豊田さんと大尉さんは顔を見合わせて苦笑している。どうも大尉さんはあまり表情が変わらないので何を考えているのか分かりにくく、豊田さんにもここに笑っているけれど、その裏で何を考えているのか…つまり、二人がどういうつもりなのか僕には分からない。でも僕はこれからこの二人を相手に“お話”をしなければならぬ。

「お待たせしましたっ！」

「お帰りなのは」

「ご苦労だったねなのは君。怪我は無いかね？」

「はいっ、大丈夫です」

なのは……うん、こういう時には頼りにならないかな。思っていることが顔に出るタイプの子だからね。それは悪いことではないんだけど。……僕がこんなに神経質になってしまつのは彼らの素性が分からないからだ。本当ならここまで協力させてもらつてしまつた彼らに事情を説明しないというのは考えられないのだけど、時空管理局でもなく、魔法も知らないような顔をしているのにジュエルシードを知っているかのような素振りを見せるのが僕に不安を抱かせている。一体彼らは何者なんだろう？

でも彼らのことを知るためには正直に話し合うしかないだろう。少なくとも彼らは悪い人には見えない。それが僕の心を少しだけ軽くしてくれていた。

豊田浩二准将

目の前で器用にも腕組みして考え込むユーノ君。なんというか、仕草の端々がどこことなく人間臭い。

しかしどうしたものか。図書館で調べた時には年端もいかぬ少女がしゃべるマスコットと一緒に空を飛んで魔法を使い、街を救っているなどという話は見つからなかった。となればこの一人と一匹はこの世界の常識から離れた存在だろう。

腹を割って話し合うべきかもしれんな。相手を何者なのかと思っ
ているのは向こうとて同じことだろう。超兵器と彼らが呼んでいるかは分からないが、少なくとも彼らはアレを止めようとしていた。そ

の点では手が組めるはずなのだ。であれば他の部分で協力が出来ないとは言えない。特にあの超兵器機関を止める“封印”、そして超兵器機関の位置を正確に知る事が出来る力…魔法は凄いものだ。超兵器とこれからも相對するのであれば彼女たちとの共闘というのは悪い話ではない。

「腹を割って話し合おう」

「え」

「なに、お互い非常識の世界の住人だろう？」

「そうですね…僕も正直にお話しするつもりでしたから問題ありません」

「わ、わたしは普通の小学三年生で…」

「普通の小学三年生は変身して空を飛んで街を救うために戦ったりはしないと思うが」

「にやはは…そ、そうですね」

どうやら普通の小学三年生はやはり空を飛ばないらしい。あまりにも当然のことなので逆に見つからなかったのかもしれないという極々小さい可能性はこれで潰れた。もっともそんな世界なら我々や彼女たちが手を出すまでもなく大人がアレを倒していただろう。いくら才能があるにしろ、子供の彼女より強い魔法使いがいるのだろうから。

「…我々の正体だが…我々はこの世界の住人ではない」

「そうだろうと思っていました」

「そこは戦乱が終わったばかりだがまだ争いの種がくすぶっていてね。我々は国連軍として平和を守るために活動していた」

「なるほど」

「こ、国連軍ですか…」

正確にはこの世界における国連軍のように各国の国軍が寄り添って何らかの目的のために名乗るそれと我々は違うのだが…まあ、その辺りは追々話せばいいだろう。

なのは君がとんでもないことに関わってしまったという顔をしている。先ほど否定はしたが、彼女は魔法を操るという点を除けばごくごく普通の子供にしか見えない。どうやらこれには込み入った事情がありそうだ。ユーノ君ならその辺りのことも知っているのだろう。

「でもどうしてそんなあなたがここに？」

「…言っても信じてもらえないかもしれないが、突然光に包まれて…気付いた時には艦隊ごとこの海鳴市の沖合いにいたのだ」

「…んー…もしかすると、次元漂流者なのかもしれませんね」

「にゃ？」

相変わらずなのは君はちんぷんかんぷんという表情だ。…うーむ、ここまで来ると演技では無いだろう。彼女は詳しい事情を知らずに

ユーノ君に協力しているのだろうか？そして次元漂流者とは何だ？
どうやらユーノ君は答えを知っているか、ヒントくらいは掴んでい
そうだ。

「まずはこの世界の仕組みを説明しなければならないのですが」

「分かった。少々長くなりそうだな」

「まず、あなたたちの世界も含めて僕らが住んでいる世界は多々あ
る次元世界の一つなんです。世界と世界の間は次元空間という空間
でつながれていて、その空間を航行したり、飛び越えたりする方法
を持っている世界もあってそういう次元世界の多くは管理世界と呼
ばれています」

「世界がいくつもある、か。君はその数ある管理世界の一つの住人
なのかね？」

「はい。なのははこの世界、第97管理外世界の住人ですけど」

「ふむ、管理外世界…次元空間を越える技術を持たない世界かな？」

「そうなります」

普段なら到底信じ得ない話だが…信じざるを得ないな。事実、我々
は自分たちの世界ではない別の世界をこの目で見てしまっているの
だから。しかし管理という言葉には引っかけかりを覚えるな。どうい
う意味でつけられたのだろう？

「あなた方は魔法を知らないようなのでどこかの管理外世界から何
らかの原因で次元空間を飛び越えてしまった次元漂流者なのだと思

います」

「なるほど、我々は次元世界の迷子というわけだ。となれば保護してくれる警官を探さなければならんな？」

冗談めかして大尉と笑い合う。…笑えるような状況ではないが。我々は姿を隠し続ける事も技術的には可能で移動するための油にも明日のご飯にも困らない。だがいつまでも根無し草で放浪できるかというそれは話が別だ。

艦内生活というのは厳しい。目的意識も無くただ漂流し続けるのは無理だ。士気が崩壊していないのは超兵器を追っているという使命感があったからこそなのだ。だからこそ私はアニヅリ大佐に攻撃を許す電文を送った。ここで海鳴市の人々を見捨てたなら我々は何のために航海を続けるのか分からなくなっていたからだ。

「それは恐らく大丈夫でしょう」

「ふむ？」

「それらの次元世界は時空管理局によって守られているんです。彼らに事情を話せばきっと元の世界に戻るために力を貸してくれますよ」

「時空管理局…なるほど、だから管理世界か。世界の警察のようなものかな？」

時空管理局…か。技術的に進んでいる世界の人間がよちよち歩きの他の世界を見下しているように聞こえなくも無い。だからと言って彼らを非難しようとは思わない。そんなおせっかいをするのにどれ

だけの労力が必要のかを思えば彼らをよくも知らずに嫌うことなど
できようはずが無い。

「元々は…質量兵器の根絶と先ほど封印したようなロストロギアと
いう過去の文明が作り出した危険な遺物の規制を行うために作られ
た組織です。今では次元世界を跨ぐ犯罪が増加したのを背景に警察
機能が強化されて、更に裁判所としても機能しています。他に文化
の保護や次元世界への災害出動などもしていますね」

「なるほどな。過去の遺産を兵器転用などしないようにするのは大
事なことだろう…しかし質量兵器というのは何だ？」

「魔力によらず破壊を生み出す兵器です。過去の争いで次元世界を
消し飛ばすようなこともあったのでその反省から管理世界では個人
用の携帯火器に至るまで厳しく取り締まられています」

過去の文明が残した技術である超兵器機関を世界を管理するために
持ち出したあの独裁者のことを思えば、ヴァイゼンベルガー彼らの気持ちは分からない
ではない。管理する側が奴のように暴走せず、自制心を持ってけれ
ば大丈夫だろうが…。少々組織が肥大化しているように聞こえるの
が気になるな。まあ武器の取り締まりをすればおのずと治安
維持機能がついてくるのは当然の話だが。

そして彼らは我々の世界で言うNBC兵器規制の先までいつている
わけだ。しかしなのは君が使った魔法とてかなりの威力があったの
ではないか？その点を指摘すると…

「魔法は相手を必要以上に傷つけずに無力化することが可能なんで
す。傷つけようという意味があれば話は別ですが」

「殺そうと思つて使わない限りは人死に出たりはしないわけか」

「怪我をしたりということはありますが…基本的には大丈夫です」

なるほどな。そういう魔法というものが一般的な世界なら子供でも使える銃に頼らずとも治安を維持できると時空管理局は考えたのだろう。ユーノ君が我々に驚いた理由が分かった。

「なるほど。質量兵器で人を殺さず建物も壊さないというのが驚かれたのはそういうことか」

「そういうことです。凄い技術ですね」

「いやまだ実験段階で効果も少々不安定なのだよ。特に物体非破壊の方はね」

それでも驚きですよ、と言う興奮気味のユーノ君を見ていて私は少々まずいことになったと思つていた。時空管理局は質量兵器の根絶を旗印に掲げている。しかし武器なくして治安を守るのは難しい。代替手段として魔法が優遇されているであろうことは想像できる。しかも魔法は行使者の心一つで不殺が可能なので軍隊はともかく犯人を逮捕しなければならない警察組織にとっては利点だろう。であればその優位性を脅かしかねない我々の存在はどうなるのだろうか？

第十六話 戦いが終わったら相互理解を深めましょう（後書き）

説明フェイズになるとどうしても長くなります。しかもまだ半ばですよ…。

○艦隊内通信士情報網

家政婦じゃないけど何かいろいろ見聞きしていそうで怖いです。流れているのは害の無い噂話とかゴシップネタとかばかりですけど。

○普通の小学三年生

A、s ポータブルで過去なのはが同様のことを言っていたのでついツッコミを入れてしまいました。ミッドチルダではよくあること、とか言われたりして。ミッド市街地では飛行魔法には使用許可が必要。

○話についていけないのは

突然目の前で自分とは縁遠いはずの組織の名が出たら思考停止してしまうんじゃないかと。あと忘れがちなのはさんきゅうさい！

○船内生活

揺れない地面って素敵です。三拍子で言うなら“狭い、危険、うるさい”でしょうか。

○フリードリヒ・ヴァイゼンベルガー

WSG2 鋼鉄の咆哮の登場人物。クーデターをもってウィルキアを独裁下におき、超兵器の圧倒的な力を背景に豊田たちがいた世界を戦争の嵐に引きずり込んだ。一時は優勢に立つも抵抗する国々の前に徐々に劣勢となり、最期まで抵抗するもウィルキア解放軍に敗れた。過去にウィルキアを救った英雄でもあり、列強からの圧力を受

ける祖国の未来を憂うゆえに暴走したとも言われる。

○質量兵器

技術そのものは失われていないようですし―使われない技術なので管理外世界より遅れている可能性があります―許可さえ得られれば管理局員でも使用できたり。でも一方で管理世界では一般に嫌われていて、規制されているのも事実。

○博士

次元世界に激震をもたらすレベルの変態天才科学者です。そりゃあみんな手の内に置こうとしますよね。でも実態は酒飲んで現実逃避に走るダメ人間…。

4・15 全面改訂に伴い、旧第十四話を再編集。

5・11 改稿 一部表現修正。後書加筆修正。

7・20 改稿 誤字修正。一部加筆修正。

第十七話 魔法少女、始めちゃいましたなの！（前書き）

なんとなく名（迷） 台詞っぽい発言があつたので「なの！」つけました。

しかしなのはってそんなになのの言ってますたっけ…？

第十七話 魔法少女、始めちゃいましたなの！

海鳴市街地 ユーノ・スクライア

普通、管理外世界からの次元漂流者の人たちはなかなか自分の置かれた状況を把握できなくて意思疎通が難しいという話も聞くのだけれど、この人たちは全く物怖じしないな。

あれ、そういえば彼らの話す言葉はこの世界のものと同じみたいだ。うーん…もしかして、祖先が同じだったりするのかな。考えられるのは次元世界を飛び越せる古い文明が自分たちの世界を捨ててあちこちの次元世界にばらばらに逃げ出したケースだ。たしか第97管理外世界と第296管理外世界は奇跡的にほとんど変わらない言語を持っているということでスクライア一族も含めて学会が大騒ぎになったと先輩が言っていた。一方文化継承はあまり行われてなかったとか…おっと、つい歴史に考えがスライドしてしまった。今は目の前のことに集中しないと。

「えっと、じゃああのロストロギアについてなんですけど」

「時空管理局が管理している古代の遺物だったかな」

「はい。アレの核になっているものを僕らはジュエルシードと呼んでいます。手にした者の願望を叶えるという触れ込みのロストロギアなのですが…実のところ、どの思いをどう叶えるのが本人にすら制御できないシロモノなんです。それどころか自ら使用者を求めて暴走することもあるくらいで…」

「…実に傍迷惑な遺産だな」

豊田さんは呆れ顔で肩を竦める。僕もそう思う。ジュエルシードの持つ規格外の力を考えれば、制御技術を後世に伝えることもできずに自らの文明ともども発掘されるようなことにはならないだろう。僕の見立てではあの遺跡は研究所か何かのようだったから、作って見たものの結局使い物にならずに保管だけされていたのかもしれない。とっておきたいという気持ちは分らないでも無いけれど、自分たちが滅んで管理もできないような状態になるのならきちんと後始末はしておいて欲しかったな。

「なのは、ちょっと見せてあげてくれるかい？」

「あつ、うん。レイジングハート」

> All right . My master . <

「…ふむ、なるほど宝石ジュエルと呼ばれるのも分かるな」

豊田さんはしげしげと宙に浮くジュエルシードを眺めている。たしかに知らない人にとってはただの綺麗な石にしか見えないだろう。危険物なのだからそれらしいモノにしてくれていたらよかったのだけど、願いを叶える石のつもりだったのだとすれば仕方ないのかもしれない。豊田さんはジュエルシードが裏返しになったところで表情を変えた。大尉さんもわずかに表情をしかめる。…どうしたんだろ？

「これは…超兵器機関の欠片が入っている…」

「超兵器機関？」

「ああ、その反応を我々は捉えていたんだ。原理不明ながら膨大なエネルギーを取り出す事が出来る我々の世界の古代文明が残した一種のジェネレーターだ。元々、軍事兵器だったらしく我々の時代でも兵器として利用され、戦争を引き起こしてしまったものだ」

「ジュエルシードにそんなものが…？こんなに小さなものでもその超兵器機関は力を持つのですか？」

「手の平サイズに寸断しようとも稼動し続ける。我々の技術だとこの大きさでは大した出力にならないが、本当の力を發揮していると考えれば…ね」

「そんな…ことが」

「私も驚いたよ。戦争の終結とともに全ての超兵器機関は動きを止めたのだが…まさか稼動し続けているものがあるとは…」

そうなると豊田さんたちの世界はロストログアに組み込まれているような、もしかすると単体でも十分危険かもしれないものを戦争に使用していたということ？そんな危ない状況を管理局は見逃していたのかな。管理外世界へは不介入が原則とはいえ、それどころじゃない事態のような…。

言われて僕もよく見てみると、ジュエルシードの中には何かの機械のように見えなくもないものが埋め込まれている。…もしかすると、ジュエルシードの持つ膨大な力の源は豊田さんたちの言う超兵器機関というものに由来するのかもしれない。ジュエルシードについては魔法的にも技術的にもまだ解析は進んでいないから―これから管

理局で進められるはずだった―もしかしたら複数の技術の融合体という可能性だってある。

「なんというか…運命すら感じますね」

「そうなる、この話は我々にとっても他人事ではないな」

「そうかもしれませんが…あ、すみません。まだ僕らについて詳しくお話していませんでしたね」

ああ、またうつかりだ。一番大事なことじゃないか。…やれやれ、歴史が関わるとどうも調子が狂うな。聞くところによると血縁関係がない割にはスクライア一族はこういう面で、誰も彼も似たようなものだという。よくよく考えれば元々そういう“どこかぶつとんだ研究者”の集団「スクライア一族」なのだから、ある意味血縁関係よりも強い業なのかもしれない。物心ついたころにはスクライアだった僕には責任はないと思いたい。

「だいたい想像はついていらつしやと思いますが僕らは管理局員じゃありません」

「だろうね。もしそうだったら私は時空管理局とやらの上層部の脳味噌を疑うぞ」

「にやつ？　なんだか失礼な事を言われているような…」

うん、なのは。その認識は間違っではないけれど豊田さんの言うことももっともだと思うよ…。これだけの事件にたった二人しか送り込まないなんておかしいもの。

「その、僕はこのジュエルシードを遺跡から発掘した発掘隊の責任者なんです」

「発掘の責任者…？」

訝しげに首を傾げる豊田さん。あれ？僕が責任者だと何かまずかったのかな？まあいいや、話を続けよう。

「はい。それが輸送中に事故でこの世界にばらまかれてしまい、僕はいてもたってもいられなくて…」

「おいおい…それは…」

「いえ、僕も分かっています。それは僕の仕事じゃないことくらいは…」

「…まあ、若者は勢いがあって悪くはないが」

苦笑しつつ、豊田さんは僕の肩の辺りをぼんぼんと叩きました。力が入りすぎている時に里の年長の先輩に同じような感じで諭されたっけ。責任者を任されるようになったんだから、もっとし落ち着かないと駄目だよな。しっかりしないと…。

「それで、僕も魔法はそれなりに扱えたのでジュエルシードを封印しようとしたのですが…」

「この状況を見るに、うまくいかなかったのかね？」

「ええ。どうもこの世界は僕の体質に合わなかったみたいで魔力をうまく回復できなくて…それで助けを求めたらなのはが来てくれて」

「それでレイジングハートを渡されて、魔法少女、始めちゃいました…」

豊田浩二准将

…もしかすると時空管理局というか他の次元世界における常識は我々のそれとは少しずれがあるのかもしれないな。だいたい知的生命体は人型だけではないのだろうから当然じゃないか。事実、目の前にユーノ君という実例がある。

一瞬、あのレイジングハートという杖をユーノ君が振るう姿を想像しかけた。いや無理だろう。物理的に。今はふよふよ丸い宝石のような状態になって浮かんでいるのでたぶんその状態で渡されたのだろうな。杖が宝石に一瞬で変形したり、それが浮遊しているのを平然と受け止められるようになったあたり、私も既に毒されているのかもしれない。

「その、実のところなのはは僕以上に魔法の才能があるみたいで」

「この世界の人々はみなそうなのか？」

「いえ、多くの人たちは魔法の素養をほとんど持っていません。あなたの方の世界では分かりませんが」

「ふむ。少なくとも魔法などというのはファンタジーやオカルトの産物だというのが一般常識だったから同じようなものかもしれんな」

私の知らないアンダーグラウンドではどうなのかは分からないがこんな立場にいる以上、私とて世界の裏側を少なからず知っている人間だ。だがそういう話は全く聞いたことがない。自惚れるわけではないがこれで裏では魔法をガンガン使っていましたとか言われると困る。

「こう言うては何ですけど…僕は運が良かった。なのはのような才能のある子がいなかったら僕は命を落としていたでしょう。もしそうでない子だったら巻き込んで一緒に…」

ユーノ君は沈痛な表情で俯く。実際そうだろう。もしほんの少しの才能しかなくて暴走したジュエルシードに対抗できないような子が導かれていたならば大変なことになっていたのだろう。あるいは誰もいなくて一人寂しく人生を終えていた可能性もある。

「で、でも。ユーノくんは悪くないんです。ジュエルシードを放っておいたら海鳴市だけじゃなくてこの世界が危なかったかもしれないんだから」

「なのは…」

彼は十分反省している。そしてフォローも小さな協力者がしてくれている。…これは認識を改めねばならないな。この二人は立派なコンビだ。下手な大人よりもっさりしているではないか。まあ、ここで私が怒っても仕方があるまい。彼と彼女を怒るべき人間は他にいるはずだ。私の仕事ではないだろう。それに…少なくとも時空管

理局とやらが来ない間にこうしてジュエルシードは厄介事を起こしている。彼女たちがいなければ海鳴の人々に犠牲者が出ていてもおかしくはなかったのだ。

「…超兵器機関…いや、ジュエルシードの封印を我々にも手伝わせてくれないか？」

「それは…」

「えっと、豊田さんたちにとっても、ジュエルシードはその…」

「ああ、因縁がある。止めなければならぬという気持ちは強い」

「だったら、一緒にやろう？ ユーノくん」

やはり、意思の強い目をしている娘だ。いきなりしゃべる動物に話しかけられて杖を手に魔法を使って危険なロストログアを封印したというだけはある。だが年齢不相応にしっかりとしすぎてはいないだろうか。9歳といえはまだまだ親しい人々との世界だけの住人であってもおかしくはないのだが。

「…そうだね、なのは」

「決まりだな。…ただ、我々には弱らせることしか出来ない。どうして我々の世界で超兵器機関が止まったのかも実は分からないのだ。封印は君たちに任せるよ。その状態なら安全なのだろう？」

「はい。この状態ならよほどのことがない限りは安全です。よろしくお願いします」

「よ、よろしく願いします」

本当のことを言えば、あんな危険な物を子供に預けたくは無いし、我々大人が預かるべきだ。だが我々はジュエルシードをよく知らず、しかもここは彼女の世界だ。この世界の理に明るいユーノ君が持っていた杖の中に保管しておくならば安全と考えて差し支えない。となれば無理にこちらで預かるわけにはいくまい。

その後のユーノ君の話ではこれだけの事態なのだから管理外世界への不介入を原則としている時空管理局も直に腰を上げてこの世界へやって来るといふ。彼らとも話し合いをして我々の世界に帰るために私は交渉をしなければならぬ。司令官として部下たちの命を私は預かっているのだから。

だが、それまでは。この勇気ある一人と一匹の手助けをしよう。我々にとっても因縁のあるジュエルシードを止めてこの世界を救おうではないか。

第十七話 魔法少女、始めちゃいましたなの！（後書き）

魔法少女、始めちゃいましたの巻。

っ超兵器機関 Ω<ロストロギアだこれー！？

ぶっちゃけて言うところの話はこれが言いたかったただけだったりする。今となつては他にいろいろ書きたいことをぶちこんでますが。

○言語の問題

ユーノの推測が近いところをいつています。フラグ。

○つい歴史に思考がそれるユーノ

なんだかんだで彼は歴史&遺跡バカなんだと思います。なのはに好意を持っていたのに無限書庫（本に埋もれること）を選ぶ子ですから。

○超兵器機関〃ロストロギア

この話の思いつきの発端。膨大な出力、過去の文明が残した遺物という共通項から混ぜちゃえというぶっ飛び設定が飛び出した。

○豊田の認識

ユーノ的には二人というところが問題なのが豊田にとっては子供と動物という面子が問題だった。さらにその動物が発掘責任者と聞いてなにそれこわい状態。

彼の中ではユーノは非人型知的生命体扱いになりました。ユーノは不憫。

○超兵器機関が休眠状態になった理由は不明

鋼鉄原作プレイ後に88式が疑問に思った点でもあります。全ての超兵器の原型という設定の究極超兵器が止まったから、と作中では言われていますが論理的ではありません。そもそも超兵器を撃破しても超兵器機関は止まらないという設定があるのですから。

○豊田の決断

なんとも感情的に決めたように見えますが管理局との交渉においてこの協力が効果を持つという打算といつになるか分からない管理局到着までの艦隊の士気の確保手段として利用しようという腹でもあります。腹黒腹黒。

- 4・15 全面改訂に伴い、旧第十五話を再編集。
- 4・16 改稿 一部表現修正。
- 5・11 改稿 一部表現修正。後書加筆修正。
- 7・20 改稿 誤字修正。加筆修正。

第十八話 リリカルマジカルロウラン中將（前書き）

タイトルに突っ込んではいけない…年甲斐も無いとか言うてはいけない…。

第十八話 リリカルマジカルロウラン中将

第97管理外世界付近 L級次元航行艦アースラ リンディ・ハラ
オウン少将

「リンディ提督、お休み中すみませんがちょっとこれを」

「気にしないでいいわ、どうしたのエイミィ」

平時においては艦長のシフトというのは特に定まっていなかったりする。これはずっと寝ていていいという意味ではなく好きな時を選んで定められた時間の間、艦長席に座っていれば良いということ。大抵の場合、普通の人たちの生活スタイルに近い形で職務に励むのだけと航行の難所などや出入港時など、必ず艦長がいなければならぬ時間もあるのでそれも考慮してシフトにあたることになる。だから自由なように見えて意外と選択肢は狭い。

…で、アースラの艦長と第5次元巡察隊司令を兼任する私は司令業務もあるので普段から自然とシフトは厳しいわけで…。それなら艦長はきちんと別の人を用意すればいいと思うだろうけど、この次元巡察隊も管理局の人手不足の煽りを受けて司令官が座乗艦の艦長を兼任するのがほとんど慣習になってしまっている。

長くなったけれど、今の状況を説明しましょう。

ほんの二時間前にベッドに入っただけで私の判断を求める案件があったのか夢の世界から連れ出されました。

あはは…気にしないでいいと言いつつきつと私の顔には“面倒ね”とか“もう少し寝させて”と書かれているのでしょうね。後のスケジュールからするとどっちにしろすぐ起こされたでしょうけど。せいぜい三時間睡眠が二時間になったただけなのだから気にしない、気にしない。…もうちょっと、寝たかったわね…。

「…まずいわね。またジュエルシードが小規模な暴走を…。ええとこちらは…救難信号？」

「はい。こちらも問題なんです」

「発信者は…本局情報部ナディア・ローレンヒル三等海佐…どこかで聞いた事があるような…本局に照会はしたの？」

「まだです。ちょっと怪しいなと思ったので提督の判断をと」

管理外世界は本来非介入が原則。事故以前には第97管理外世界は危険なロストログアも次元犯罪者の侵入も確認されていなかったのだからわざわざ本局の諜報員が出張するような場所ではないはず。三等海佐ともなればかなりのやり手でよほどの大事件でもなければ現場に出ることも少ないからますますここには似つかわしくない。そして現地の次元巡察隊の司令である私に話を通していないのだから恐らくは何らかの秘密作戦…？それにしても救難信号を出すのもおかしい話よね。どういうことかしら。

エイミーが疑問に思っ て指示を仰いでくるのも当然だわ。…まあ、そもそも彼女は本来第5次元巡察隊の所属じゃないという問題もあるけど…実質部下のようなものなのだから気にしないことにしましょう。本来の直接の上司であるはずのクロノをスルーして私に話が

回ってくるのはもっと気にしてはいけないことのような気がする。

「妙ね…とりあえず、詳しい位置情報の捕捉をお願いね」

「了解。あつ、あと提督。そろそろアースラは第97管理外世界付近で停止します」

「…はあ、寝る暇なさそうね」

これならこのまま寝てしまふよりすっぱりと諦めて起きていた方が良さそうね。気の毒そうな顔でエイミィはお待ちしております、と敬礼してモニターが光を失う。…レティにちよっようお願いをしなくちゃいけないかもしれないわ。これで一杯奢らされるのは確実…彼女の底なしの肝臓を思うとげんなりとする私だった。

時空管理局本局運用部 レティ・ロウラン中将

やれやれ、やっとお偉方の説得は終わったわね。とはいえちよっと意外な人物たちからの援護もあったから早い早い。現場からは身を引いていて普段はご意見番に徹しているグレアム中將もそうだけども、まさか陸からもあるとは…。

どういうつもりなのかは今後注意しなければならぬでしょうけど、これでリンディもそこそこ自由に動けるはず。派手なことになったら私が書類を片付ければ済む話よね。そのときは一杯奢ってもらわないと…さてと、それじゃ早速リンディに連絡を…。

おや、その彼女からのラブコールじゃないの。のんびりさんで催促するような子じゃかったはずだけど。

「ちょうど良かったわりンディ、こっちから連絡入れようとしたところよ」

「あら、もう許可が出たの？」

「ま、概ねわね。ただ気をつけたほうがいいわ」

「どういうこと？」

「陸からの支援射撃があつたわ。レジアス少将の差し金だと思う」

「あら、あの有能な娘さんの手でも伸びてきたの？」

「そんなところよ」

そういえば齒に物着せぬ物言いのあの少将はリンディの悪口も言っていたわね。彼女の性格からすると全く気にしていないでしょうけど。やや馬鹿正直なところのある少将とは違ってその娘のオーリスは裏で手を回す…まあ、つまるところ私と同類のタイプだ。しかも部下に欲しいくらいに有能。あれ本当に親子なのかしらね？…ま、あくまで性格上の問題であって、少将自身も結構なやり手だからその背中を見て育った結果、飛び越えたということなのかもしれないけれど。

「ふうん。後で何か見返りを要求してくるかもしれないということかしら」

「だったらいいんだけどね。それなら私の領分だから」

「…彼らが何らかの形でこの案件あるいは付随する問題に絡んでいる可能性？」

「あるいは、何か事情を知っていて貴女に処理させたい可能性」

リンディも少将まで上り詰めているのだから、この手の話には敏感。私みたいなのと親しくしているから余計にかもしれないわね。私の都合で彼女を裏に巻き込むこともあるし。それでも怒る素振りすら見せずに友達付き合いを続けてくれる子なのよねえ…。いつの間にか周りを味方につけてしまう。そんな才能があるのかもしれない。これが計算した上でのことなら怖いんだけど、彼女に一度その疑問をぶつけてみた時の答えがコレだ。

「もしそうならもつと出世していると思うわ」

ごもつとも。自慢じゃないけど私を味方につけているんだからもつと無理だって利くはず。次元艦隊への貸しだって一つや二つじゃないのだから。もつと積極的に周りを利用すればそれこそ次元艦隊の提督にだってなれそうなもの。そういうことをしないからこそその交友関係なのかもしれないけれど、どちらにせよ打算と駆け引きで物事を考えて友人すらその天秤にかけてしまう私には無理な生き方ね。

「ま、気をつけなさいということよ。大抵のことならこつちでなんとかするけどね」

「そう、分かったわ。レティ」

「それよりそっちから連絡ということは何かあったんじゃないのかい？」

「あ、そうそう。これなんだけど」

「救難信号？…またキナ臭い名前が出てきたわねえ」

ナディア・ローレンヒル三等海佐。本局情報部の諜報員じゃないの。私服を肥やしていた上官を告発したエピソードの持ち主だったわね。だからといって任務においては甘い子ではなかったようだけど。件の上官が第4次元艦隊の息がかかっている奴だったのでお怒りを勝つたらしく結構前にどこかの次元世界の監視業務に左遷されたと聞いていたけれどその彼女が渦中の第97管理外世界から救難信号を出すとは。

なんともまあ…臭うわね。

ジュエルシードの落着。

崩壊した次元世界からの次元転送。
落ち目だけどやり手の諜報員。

こちらが知りうる彼女のデータを送っておく。最後の経歴は…本局での勤務で途切れているわね。その後は極秘任務…って10年前？やり手の子を嫌がらせで長期任務に送るほど管理局に余裕は無いと思うんだけど…。ますます怪しいわ。

それにしても彼女の話ってそんなに昔だったかしらね。はあ、年をとるのは嫌ねえ…。

「あら、10年前から真っ白ね」

「うーん、ちょっとそこは難しいのよ。どうも彼女の上司たちには第4次元艦隊の息がかかっていてね。他の次元艦隊だったら手も打てるんだけど…」

第4次元艦隊は半ば司令のロバート・タスカン大将の軍閥になっていて人事関係もいろいろと横槍が入るので私でもなかなか手が出せない相手だ。技術開発部や情報部、更には一部の大手企業なども抱き込んでいて癒着が酷いとも聞く。他の次元艦隊からさえも係わり合いになりたくない嫌われているぐらいだ。

ローレンヒル三佐はそんな中で軍閥内の人間を告発してしまったのだから無謀としか言えない。消されなかっただけマシというものだろう。告発自体はもみ消されないよう手が込んでいたので件の上官は犯罪者として今も収監中。表向きは彼女も不正を見逃さぬ勇士として賞賛されている。

ただ、やり手と言われていた彼女にしては少々間抜けな話だ。もしかすると、左遷はフェイクで本当に何かの極秘任務についていたのかもしれない。

「ああ、どこかで聞いたと思ったたらあの告発の人ね？」

「そういうこと。まあ、末路はこんな感じだったようね」

「英雄のその後は大抵そういうものでしょうね…」

あちゃ、まずったわね…。あれはクライドのことを考えている顔だね。どうも私はこういう時の配慮が足りない。その上、気の効いた一言も言えないのだから我ながら始末に終えないわ。

「で、どうするの？…分かっているでしょうけど、きな臭いにもほどがある」

「…捜査許可も出たことだから接触しましょう。とつくに捨てられたのなら拾っても文句は言われないでしょ？」

そんな私の性格を考えてか無理に笑った上で、リンディは私に難題を吹っかけてきてくれた。

テキストに搜索して…あるいはしたふりをして見つかりませんでした、と申し訳程度の報告書を作って、その旨を彼女の上司に回すのが賢いやり方だろう。第4次元艦隊が関わっている本局情報部の人間の問題にたかだか次元巡察隊の司令官風情が首を突っ込むなんてとてもじゃないけど普通なら考えられない。

けれど少なくとも彼女は捨てられた存在で今は第4次元艦隊にとっては益にも害にもならない。…だからこそ生かされている、と考えるならば関わっても問題は無いだろう？とこの女豹は言っているわけ。

彼女がまだ諜報員として生きているならば藪をつついて蛇を出す可能性だってある。その時は否応無くリンディも私も彼女の関わる陰謀に巻き込まれるだろう。リンディはその危険を冒しても彼女を拾ってみたいと言っている。…いや、むしろ生きていると読んだ上で今回の事件を一気に解決しようという腹かもしれない。拾う云々はあくまでリンディのいつものお茶目か…。お茶目と思っていると本当に獲物を釣り上げるから怖いんだけどね。

「はあ…分かったわ。その件はリリカルマジカルロウランさんに任

せておきなさい」

笑顔でお願いをしてくるリンディは正直、どんな交渉相手より手強い。何しろその場では私の打算も取引も通用せず、ただひたすらお願いしてくるだけなのだ。そしてその思惑はいまいち読み切れないことが多い。けれどもなんだか言ってしつかりと見返りを彼女は用意している。

だから私はいつも彼女のお願いにはため息一つついてYESと答えるしかない。おちよくった言い方になってしまうのは私のひねくれた性格の産物だ。リンディには毛ほども響かないのだろうけど。

第十八話 リリカルマジカルロウラン中将（後書き）

暗い！汚い！怖い！の3Kでお馴染みの鋼鉄の魔女たち恒例舞台裏劇場です。

○司令官は眠れない

この話のお約束かもしれない。

○ローレンヒル三佐

オリキャラ。キーパーソンの一人。

○リリカルマジカル困った時のロウラン中将

リンディとの対比でこんな感じになりました。ハラオウン関係者は奇人変人の巣窟の予感がします。

○陸からの援護

グレアムどころかレジアスに一期で言及するあたり88式はおっさん好き。

○レティがグレアムについて言及していない

彼女自身が多少の疑問を持ったというだけで不審さを感じていないからです。もちろん調べはしますがまだリンディに伝えるような状態ではないと彼女は見ています。

4・16 全面改訂に伴い、旧第十六話を再編集。

5・11 改稿 一部表現、誤字修正。後書加筆修正。

7・20 改稿 加筆修正。

第十九話 二人の母と二人の娘（前書き）

プレシア周りはかなり設定が変わっています。

狂う前は優しく、情に厚い人だと思っんです。そして、だからこそ狂ったんだと思っんです。…ならば母性を刺激されるであろっきっかけであるいは…と思っんです。

第十九話 二人の母と二人の娘

??? 時の庭園 プレシア・テストロッサ

「…っ！…くっ…」

まどろみの中にあつた意識が、強烈な嘔吐感で覚醒する。しかし、吐くのは消化途中のナニかではなく、胃液でもなく…

血だ。

どのくらい前からだっただろうか。

最愛の娘だったアリシアを失い、以来狂ったように研究を続けてきた。恐らく、かなり前から体は変調を訴えていたように思う。リニスに何度もたしなめられた記憶もある。

…リニス。そう、彼女はいつ頃から一緒にいたのか…。そもそもここしばらくは研究にしか頭がなかった私がこんなに客観的に自分を見れていた事はあつたかしら。

いや、そもそも今はいつ？私は何をしていたのだろうか？

「プレシア…」

「リニス、ゴホッ…ゴホッ…状況を、説明してくれる…？」

「はい、プレシア」

そしてリニスからの説明を聞きながら、私は思い出した。そうだが、これは何度目の説明だったかしら…？

当時のリニスの手記より

私を作り出したマスターであるプレシアは、普段は素直ではないけれど、その実、自分を省みないほどのお人好しで、厳しく激しい一面もあるけれど、その本質は穏やかで心優しい女性であり、母親です。

これは状況だけを知る私の勝手な考えなのでしょう。

娘であるアリシアを失うに至った事故の責任の全てを背負わされ、素直で無い性格ゆえ元々少なかった周囲の理解者を失っていた。

魔導師として優秀だったので再就職にこそ困らなかったが、その経歴から本来の自分の研究分野で二度と声がかかることはなかった。

仕事、自分を認めてくれる社会、友人、そして生きがい。
アリシア

プレシアはそれをあの事故で同時に全て失ってしまった。生きようという心が砕けてしまっていた。

しかし彼女は娘を愛していた。それこそ自分の身以上に。だから死んだ心のまま無理を重ね…いつしか死んだ心を捨てて目的を果たす為の心を作り出した。

そしてついには…人を造る。その領域に手を出すまでに彼女は狂ってしまった。

そのような状況にも関わらず彼女は強靱な精神力をもつて冷静に死んだ心に鞭を打ち、正気を僅かながら取り戻した。そして狂ってしまった自分を受け入れて、それでも尚自分が為すべきことを探した。

私が生まれたのはその正気の彼女の手によつて。そして彼女の願いを聞いた私はそれを受け入れ、あの子の育ての親となりました。

プレシア・テストロッサという偉大な魔導師。いえ、誇り高き母親と云うべきでしょうか。彼女の折れぬ意思によつて生み出されたこと、そして彼女の想いを受け継ぐ存在として生を受けたことを、私は誇りに思っています。

四年前　　???　　プレシア・テストロッサ

「ママどうしたの？」

はっとして顔を上げると、目の前にはアリシア。なんでもないわ、と答えて周囲を見回すと、一面の草原。ああ、そうか。これは夢ね。そう、いつも夢見ていた光景。

「アリシア…お誕生日のプレゼント、何か欲しいものある？」

「んーとねえ…あ、私、妹が欲しい！」

「っ！」

…時間は残酷ね。よく考えてみればそう、私はいつも仕事に追われていた。たとえあの事故がなかったとしても果たして本当に私は…
アリシア
あの子と一緒にいてあげることができたろうか？気持ちは本物だったのは今でも分かる。

失って初めて分かること。当然だと思っていたことは当然ではないということ。

考えてみればあれだけ愛した娘の夢を私はこじばらく見ていなかったのではないか。娘の背中を追うばかりでアリシア自身を私はしつかりと見ていただろうか。そう、あの事故までと今の私は全く変わっていない。

「いつもそうね…いつも私は、気付くのが、遅過ぎる…」

夢の中のアリシアが大人びた微笑を浮かべる。

「ママ、まだ遅くないよ。いつだって、人はやり直せる」

「…私にできるかしら？」

「できるよ！だってママは、約束守ってくれたもの」

「え？」

「妹。いい名前、つけてあげてね…」

「アリシア…！？」

意識が覚醒に向かうのが分かる。ああ、これはやはり夢なのね。でも…。

「う………」

ベッドから起き上がり、顔を洗うために洗面台に立つ。鏡に映るのは、疲れた顔をしているけれど、どこか憑き物が落ちたような自分

の顔。…一気に今まで自分のやってきた所業が頭をよぎる。

「…そうか、私は…」

そう、私は霞がかかったような状態でずっと“起きていた”。ついに、と言うべきか、なるべくしてというべきか、私は狂ったのね。こうして正気を取り戻したのは…あの子のクローンが完成に近づいたから…それでアリシアのことを思い出したから…。

「アリシア…貴女が、伝えに来たのかしら…いつも、気付くのが遅い、最後まで…気付くのが遅かった私のために…」

あの子は優しい子だった。こんな母親にはもつたいないほどの。けれども胸の中で“今までの”私がまだ生きているのは分かる。そう、私が母親でいられるのはそれこそアリシアの贈り物…長くは無い。

「…アリシア…御免なさいね。最後の約束は守れそうに無いわ…」

私が、私でなくなる前にやらねばならないことがある。足元にアリシアが飼っていた、今は年老いた山猫が寄って来た。随分前からこの子は私に近寄らなくなっていたけれど…私が変わったということに気付いたのかもしれないわね。

…そうね。そうしましょうか。あの子をアリシアの身代わりではなく、アリシアの妹にするために。

しばらく後 時の庭園 リニス

「マスター、これを覚えればよいのですね？」

「ええ、でもマスターはやめなさい。プレシアでいいわ」

「し、しかし」

「言い訳はなしよ。どうして他の物覚えはいいのにそこは直らないのかしらね？」

「…すみません」

「いいのよ、責めている訳じゃないわ」

私は魔導師プレシア・テストロッサの使い魔、リニス。

少々特殊なのは使い魔の身でありながら主からの魔力供給がなくとも活動し続けることができるという点でしょう。マスター…プレシアの研究成果の賜物なのだそうです。

うう、ついマスターと…。

ぶ、プレシアが研究に打ち込むのは娘さん、アリシアさんを失ったからです。プレシア曰くは、元々研究ばかりに打ち込んでいたそうですが。私は当時アリシアさんが飼っていた山猫をベースに作り出されたのですが…残念ながら当時の記憶はありません。プレシアが言うには年老いていて耄碌していたのではないかというのですが…失礼な話ですね！必ずしも記憶が残るわけじゃないんですから仕方が無いじゃないですか。…残念だと思う心は本物ですけど。

最愛の娘さんを亡くしてからの日々。プロジェクトF・A・T・E。非人道的な実験の数々。プレシアは私に淡々と語り、日記や研究記録を見せながら続けます。それがどういう意味を持つのか私には分かりません。でも私にはプレシアが非人道的な行為に手を染めている危険な科学者にはとても見えないのです。

私が生み出され、こうして彼女の生きてきた道を教え込まれているのには理由があるんだと思います。それが彼女が穏やかで優しい女性に見える理由でもあるはずです。

そうしてしばらくの時間が経ってからのことです。私はプレシアに連れられて今までデータと言葉でしか見聞きしていなかった彼女の暗部に触れることになりました。一定の間隔で鳴り続ける電子音。薄暗い研究室。そして私は自分のそれからを決めることになる相手に出会いました。

「アリシアちゃん…？」

「いえ、残念ながら違うわ。アリシアに近い存在かもしれないけれどね。…私も馬鹿ね。狂って誤魔化してまで、今も娘に執着し続けている。あの時、自分で会いに行こうとする事ができなかったから」

液体に満たされたカプセルの中で青白い顔の彼女は眠っていました。…そう、彼女こそ、狂ったプレシアが造りだしてしまったもう一人の娘。名前はまだ決まっていらないのだそうです。狂っていた頃のプレシアは、アリシアとして扱っつもりだったのですから当然ですね。でも、もうすぐ彼女は起きる。プレシアの見立てでは実験は成功、

このままなら彼女は何食わぬ顔で自分はアリシアだと名乗り、そして当時の記憶を語るのだそうです。

でも心と一緒に手元も狂っていたのか、はたまた人を造るなどという行為が許されざることだったからか、単に技術力が足りなかったのか。彼女にはアリシアでない特徴が多々表れるのだといいます。

プレシアはそれに接した時、今は眠っている自分の狂気がまた頭をもたげると言います。自分が狂ってしまう未来を見据えて尚、彼女は死を選ぼうとはしなかった。選べない理由があったから。

「リニス、貴女との本契約、今決めるわ」

「え？あ、はい」

プレシアが命を断てない理由…それは…

「生まれてくる彼女を幸せにするために…私が相応しい最期を迎えられるように協力してちょうだい」

「…はい」

それが、私とプレシアの契約。そう、彼女はそのために私を生み出した。そしてプレシアは私に初めての仕事を与えた。

「…そして、契約に沿った最初の仕事よ…この子の名前を決めてあげて」

「えっ」

「私にはこの子に名前をあげる資格なんか無いわ。この子の親を名乗る権利も無い。私はこの子を死んだ子の身代わりにしようとした人間よ?」

それは違う、と私はプレシアに告げたかった。全てを共有した今の私には分かります。プレシアは、この子をアリシアの代わりだなんて思っていない。でも、プレシアが今思っている“自分に相応しい”最期を迎えるためにはその想いをこの子に伝えるわけにはいかない。そういう、契約です。

死んだ人間を恨むことはできない。であれば生きてその姿を見せる必要がある。つまりプレシアはこの子は恨まれるために生き続けているのです。このような生まれをこの子に与えた自分をプレシアは許せない。彼女を愛おしく思えてしまう自分をプレシアは認められない。だからこそ正気を取り戻したのにアリシアを葬ることもできず、この子を娘として受け入れることもできないのです。

だから恨みも時として生きる気力になることを彼女は知っているから、恨まれて死ぬことをプレシアは選んだのでしょう。しかしそれだけではこの子は自分のように壊れてしまう。また最後まで演じ切ることが出来ずに自分が再び正気を失うこともプレシアは恐れていました。いえ、彼女は自分が必ず狂うと確信しているようだった。

だから私が必要なのです。自分が、自分の思う通りにこの子に恨まれて死に彼女の礎となるために。この子が、プレシアにはなかった“居場所”を得るために。

なんという…なんという悲しい愛情なんでしょう…。

「プレシア、私にそれを任せるのは逃げですよ。本当はご自身の想いに気付いていらっしやる」

「…契約を忘れたとは言わせないわよ」

キツと私を睨みつけるプレシア。貴女がそうやってムキになるのは図星だからですよ。そう伝えたのは貴女自身じゃありませんか。やはり、貴女は彼女を愛している。でも私は契約を果たさなければならぬ。私は貴女の使い魔だから。…ひどいじゃないですか…私は、貴女と同じ思いを共有しているんですよ？

「…私にはネーミングセンスはありません。元となったあのプロジエクトの名前でいいのではないですか？」

「…私のような人間が生み出した産物には相応しいかもしれないわね。それもまた、私を恨む理由になるわ…分かった、それにしましよう」

だから私の想いを伝えたのです。遠回しに。表向きは彼女との契約に従う使い魔として。そして裏に込めたのは現実に立ち向かおうとしない彼女への意趣返し。

私は悪い使い魔ですね。プレシア。契約に面従腹背するなんて。

表面だけ見ればこの名前は契約通りの冷たい女性としてプレシアがなんの感慨も覚えず、ただ失敗作にプロジェクト名をあてただけに見えるでしょう。プレシアは気付いたでしょうか？いえ、貴女は聡明な女性です。気付かなかったはありますがありません。

私の提案を受け入れたのは貴女です。恨まないで下さい、プレシア…。この時、私の中で貴女との契約は僅かに変質していたのです。

プレシア&リニス

f a t e そう、彼女の名前は、フェイト。

プロジェクトF A T Eによって私が生んだ、もう一人の愛する娘。母を名乗れないと思っているプレシアの運命（f a t e）を切り開く子。

フェイト、貴女は私ノプレシアの娘よ。

悲しい愛かもしれないけれど、生まれは普通では無いかもしれないけれど間違いなく、祝福され、望まれて生まれてきた子。

だからフェイト…強く生きてちょうだい…！

第十九話 二人の母と二人の娘（後書き）

多くは語りません。

○吐血プレシア

魔改造リニスを造り出すという無茶をやったので病状が原作以上に悪化しています。

○リニス

プレシアのウルトラCで一期でも生存。いろいろ特殊ですが彼女自身は使い魔を持つことはできないのでSS02に影響はありません。リニスの素体に関して

事故に巻き込まれずに生存した（独自設定）そもそも使い魔の元々の設定からして当時死んでいればフェイト誕生の頃に彼女が生まれるのは無理なんですが…。その辺り、どこかの資料で書いてませんか？

○フェイト誕生の経緯、時期

小説版の設定とそれを元に考察したNanohawikiの記述などを参考にしています。

フェイト誕生Ⅱ 一期4年前。既に5歳まで生育済み。リニスはその直前に誕生とします。

○年老いて耄碌

真相は不明。プレシアしか知りません。

4・16 全面改訂に伴い、旧第十七話に加筆して再編集。

5・11 改稿 誤字修正。後書加筆修正。

7・4 改稿 後書リニスの部分に説明追記。

7
・
2
0
改稿 一部表現修正。

第二十話 面倒くさがりの似たもの主従（前書き）

つまり、プレシアがツンでリニスがデレなんです。

その主従を見て育ったもう一組の主従が精神的に逞しくなるのは仕方ないです。

第二十話 面倒くさがりの似たもの主従

現在 時の庭園 プレシア・テストロッサ

リニスの説明が終わって私は小さくため息をついた。最近はどう狂っている間の記憶が全く無い。いよいよもって本当に狂ったままになるかもしれない。状況そのものはそこまで悪くは無いのがせめてもの救いだ。最悪よりはましという程度だったけれど。案外狂っても自分は自分らしく冷静だったようだ。一つ一つの行動そのものはそこまで整合性のないものではない。

リニスのサポートを受けてスクライアー族の情報網にハッキングを仕掛け、新たに発掘されたロストロギア情報を入手。それが望みを満たす可能性があるモノだったため管理局への引き渡し前に中継港での奪取を検討したものの、輸送船はロストロギアの暴走と見られる事故で貨物を放棄。輸送会社と事故船の通信から第97管理外界への落着いたことを知り同地での活動拠点を確保、ロストロギア入手のためにフェイトとアルフを送り出した。

だが問題なのはそこではない。そのロストロギア、ジュエルシードの性質だ。恐らく遺跡に残る資料やある程度の現地での解析から推測したのだろう。コーノ・スクライアー発掘責任者の報告によると生物全般の願望を叶えるものではあるが、その制御は極めて難しく出力も膨大、場合によっては複数の次元世界を巻き込む大規模次元震を引き起こしかねない危険な物で嚴重に封印することを求めている。

そんな危険でどうにもならないものをどうしようというのか？見て

みるとそれを利用するための研究はろくに進められていない。…もしかすると手にして願えばアリシアが甦るとでも思ったのだろうか？手に入れるまでの方法はともかく手に入れてからどうするかが五里霧中だ。

この責任者の推測が当たっているならば願いが叶う可能性はゼロとは言えないだろうが、運任せに過ぎる。そんな自殺同然の方法に他人を巻き込んでどうするのだ。…狂った人間はそんなものは気にしないか。藁にもすがる思いで一筋の光明に賭けているのだろう。

「…我ながら酷いものね」

「それも仕方ありません。これを…」

額に手を当ててお手上げとばかりに嘆いている間にリニスが端末を操作してデータを呼び出す。私の体の状態だ。なるほど焦るわけだ。私が正気であった間に病状が一気に悪化している。恐らくフェイトがアリシアではなく、フェイトとして生まれるようにするための調整とリニスを生み出すために相当の無茶をしたからだろう。フェイトは記憶喪失で眠っていた私の娘、“一フェイト（アリシアの妹）”として“生まれた”。彼女が真実を知るのはまだ先でいい。

「…自業自得…か。…見方を変えれば死にかけて狂った女に見えるわ。母と思い込んだ狂人に操られていたとなれば詳しい事情を知らないあの子たちが重い罪に問われる可能性は低くなる」

「二人に対する態度も酷いものでしたよ。あの子に与えたデバイス…バルディッシュが記録しています。貴女が狂っていた証拠として申し分ないほどに」

「覗き見趣味のインテリジェントデバイス？感心しないわね」

「教師が良かったものですから」

「口の減らない使い魔ね」

「造ったのも教育したのも貴女ですよ？」

軽口の応酬をしながら思う。やはりリニス：貴女に任せていて良かった。それを口には出来ない私は、そつと心の中でリニスに頭を下げた。こんな重荷を背負わせてしまったことに私は後ろめたさを感じているのだろう。それは自分が立ち向かうべきものから目を逸らし続けている代償なのだ。

リニス

プレシアは安心したのか、安らかな表情で穏やかな寝息を立て始める。“正気のプレシア”はだんだんと表に出ている時間が短くなってきたいます。死期が近い事を悟り、理性が緩みつつあるのでしようね。もう少し、もう少しだけ、頑張ってください…プレシア。

フェイトは確かに優秀。教師役の私が保証します。あの子は紛れもなく大魔導師プレシアの娘。溢れる才能と優しい心。記憶喪失という説明を何の疑問も持たずに受け入れてしまうあたり、もう少し人を疑うということを教えた方が良かったかもしれません。変にひねくれさせてプレシアみたいな意地っ張りみたいになったら大変です

けど。

アルフも主にべったりでフェイトのためならなんでもするでしょう。彼女とフェイトの契約内容は純粹かつ真っ直ぐで…実にフェイトらしいと思います。使い魔として羨ましいと思えるほどに。プレシアも優しい女性ですが素直では無いですからね。

私にできた反抗といえばあの時、あの子にフェイトという名前を送れたことだけ…。

アルフとは違い、私は主のためになることをするのではなく、主の大切な娘のために主をないがしろにしなければならぬ。主がその娘に恨まれるようにしなければいけない。

それが、私がプレシアとかわした契約…。

… いけませんね… 一番泣きたいのは、プレシア… 貴女のはず…。

でもあの子は貴女を母と呼ぶ。慕う。どんなに冷たく振舞っても。

… 私は、悪い使い魔です。契約の字面だけをとって、真意に反するなんて。

フェイトを幸せにするためにプレシアに相応しい最期を用意すること

それが、私と貴女の間にかわされた契約。

私はこう見えて面倒くさがりなんです。プレシアは私を教育する際に、自分の過去を全て伝えました。その時のデータはプロジェクトF・A・T・Eなど一部を除けば、消去はされていないような気がします。

私はフェイトの教師役でした。いろいろ社会常識とかも教えましたね。この時の庭園は広いのですがプレシアは研究以外には割とずばらなところがあるので使えるようにしてある部屋は意外と少ないんです。で、私も面倒くさがりでしたから元々あつた部屋を利用しました。

ちらりと思い出の部屋へのドアを見やります。短い間でしたけど、プレシアと二人だけで過ごした部屋。そして私とフェイト、途中からアルフが加わって過ごした部屋。どんな気持ちで貴女は私を造り、私にあの子を託したのか…。その想いは、分かっているつもりです。

けれど、私は悪い使い魔です。面倒くさがりの。

海鳴市 フェイト・テストロッサ

「第97管理外世界：地球。ここに、母さんが手に入れたい物があるんだよね」

「はあ、フェイト、本当にあの女のためにやるのかい？」

いつも通り、私の顔を見ようとせず、理由も告げずに母さんは用件と方法だけを言っただけでさっさと行ってしまった。それが素直じゃない性格から来る照れ隠しの産物なんだと私は思っている。アルフもそれを知った上で私をからかう。

リニス先生に言わせればアルフは捻くれているけどその根本は“フェイト好き好き星人”だとか。状況を客観的に見ていれば分からないでもないけれど、それは当事者である私に言うことなのかな？魔法の師匠や家庭教師としてお世話になっている身でこんなことを言うのはあれだけど、リニス先生も十分捻くれ者だと思う。

「母さん研究で大変なもの。それにこれは私に任せてくれたんだよ」

「へいへい物好きなことで。アタシはフェイトの将来が心配だよ」

「アルフ！…もう」

将来が心配だと思うなら自分の過去の言行を振り返ってみて欲しい

なと心の中でため息をつく。けれども私が母さんの本心に触れたのはアルフの悪戯心込みのお節介と好奇心が原因。だからいつもこういう時は言い返したりせず、アルフに花を持たせて話を終える。

「悪かったよフェイト。んじゃあの素直じゃない女の鼻を明かしにいきますか」

「……うー……言い方が引つかかるけれど、まあいいか。行くよアルフ」

「はいよ」

そして彼女も恐らくそんな私の気持ちに気付いた上で話を本題に戻す。その時に一言多いのが玉に瑕だけど、それは私が気にしなればいいよね？

そんな感じで、私が生涯忘れない事件の舞台になった海鳴市での初めての一日は始まったのでした。

第二十話 面倒くさがりの似たもの主従（後書き）

結論：テストロッサー一家はフェイト以外はみんな捻くれ者。

○ジュエルシードばら撒き

話の都合上、プレシア攻撃説は没。病状が悪化し過ぎていてホイホイ雷を撃てない。

○リンス

ある意味彼女が黒幕かもしれない。全てを知り、全てを動かせる立場にいるのだから。しかし彼女は忠実な使い魔で、面倒くさがりだったのです。

○覗き見趣味のインテリジェントデバイス

裁判になった時とかのために証拠用途で記録をとっていたりしていてもおかしくないと思います。想像しにくいならば我々の世界でいう車載カメラみたいなものと思っただければ。

デバイスは日常にも持ち込むので常に記録し続けるのは容量的にもお互いの心情的にもよろしくないので職務中の管理局員でもない限り、普通は常時記録ではないとは思いますが。

○フェイトによる家族の人物評価
だいたいあってる。

○フェイトがプレシアの本心の一部を知っている
どこかの面倒くさがりの主従かとある母娘の愛の記録をすっかりそのままにしておいたのをすっかりどこかの使い魔が見つけてしまったから。

○悲壮感が抜けている二人
ややフランクなやり取りになりました。フェイトも原作に比べると
一見かなり明るめです。

- 4・16 全面改訂に伴い、旧第十八話を再編集。
- 5・11 改稿 一部表現、誤字修正。後書加筆修正。
- 7・20 改稿 一部表現修正。加筆。

第二十一話 アースラの切り札はマスコットなの？（前書き）

「なの」がつくのは残念な題になるのが恒例となりつつあります
（ブレイズキャノン）

第二十一話 アースラの切り札はマスコットなの？

海鳴港沖 第十三任務部隊 H L G 支援艦スバルヴィエロ フェデリカ・アニエッリ大佐

信じられないことの連続ね。空飛ぶ少女の時点でいろいろ覚悟はしていたけれど…。

次元世界、時空管理局、ジュエルシード、魔導師…。

アニメの世界の登場人物にでもなったような気分ね。超兵器だって似たようなものかしら。非常識という意味では。案外、こんなことにも慣れてしまうのかもしれないわね。

「博士、戦闘中ですよ」

「固いことを言うでない。とつくに敵は倒しているだろう？」

「いえ、そつちじゃありません。…その、顔が赤いですよ…」

あら、博士が艦橋に上がってくるなんて珍しい。副長が博士を押し留めたのは足元が怪しいからね。ふらふらと危なっかしいわねえもう。まあ、抱きしめたくなくなるくらい可愛いのだけど。

「…どれだけ飲んだの？アナタ」

「…一本」

「アナタ軽いんだから許容量考えた方がいいと思うけど」

「それでも科学者のはしくれじゃ。致死量くらいはわきまえておるよ」

アナタがはしくれならこの世の科学者は全員はしくれ以下ってことになると思うけど、という言葉をやつしは飲み込んで、やっぱりこの子は酔っているのね、と内心苦笑する。でも足元がおぼつかなくなるほど飲むような飲み方をするような子じゃなかったと思うのだけど…何かあったのかしら？

「謎の訓練用装置、そろそろ止めてもいいかの？」

「構わないけれど艦隊用光学迷彩装置はすぐ復帰するのかしら？」

「それは心配せんでいい。干渉の問題はもう解決した。同時起動しても大丈夫じゃよ」

「…仕事の早いことね。でも、あまり意味は無いと思うわよ？こっちの頭の使い方次第なんでしょうけどね」

「うまいやり方があれば教えてくれるとありがたい。こちらでもフオローできるかもしれんしの」

結局のところ、艦隊用光学迷彩装置はあくまで視覚的に相手を惑わす程度が関の山で、十分警戒している戦闘中の相手には大した効果が無い。あくまで光学迷彩でしかないので赤外線ならば丸見えな上に、艦の姿を覆い隠すだけなので効果圏外になっってしまう航跡はしつかりと見えてしまう。発砲炎なども消せないことは無いのだが、

少々処理が難しいなど運用面で考えると問題が山積みなのだ。どちらにせよ音など他のものは隠せないというのもある。

その辺りは頭の使い方次第でカバーできなくはない。相手が光学照準でこちらを狙っているならばもちろん有効だろうし、意表を突くタイミングで消えればやりようはある。相手が冷静になってしまえばろくな効果は無いだろうけど。

「では司令にその旨を連絡なさい。これより第十三任務部隊は一般船舶の航路圏外に離脱する！」

「了解」

「うー」

「…完全に出来上がってるわねえ…後で自室まで運んであげてちょうだい。手にかかる自称30代だこと」

「…了解しました」

海鳴市街地 豊田浩二准将

「謎の訓練用装置、停止するそうです。艦隊はこれより離脱するとのこと」

「うむ。なのは君も元の姿だから問題あるまい」

世界に音が戻り、人々の喧騒が帰ってくる。彼らにとっては先ほどまで逃げ惑っていたのだから困惑顔だが。恐る恐るという感じで周囲を見回している。装置の効果は問題なく発揮されたようで、街にほとんど被害はないようだ。怪我をしているような人も周りにはいない。

「本当に何もなかったみたいだ…」

「あー、ユーノ君。しゃべるペットというのはあまりよろしくないと思うのだがね」

「あ」

彼―かどうかもあるところ分らないのだが…一人称が僕だったのでそう呼んで差し支えないだろう―は発掘責任者を任されていたというし、応対に大人びたところがあつたのだが…どうもうつかりというか…日野中尉と同類の香りを感じてしまう。

「さて、我々もジュエルシード…だったか？アレの探索はこちらが行おう。昼は学校、夜も探索では体が持たんよ」

「そ、それは…」

思うところがあるのか言いよどむなのは君。子供だからと言うつもりは無い。自分で意思を示して、実行している相手にその理屈を持ち出すのはあまりに失礼というものだ。だが自分の限界を超えた無理は駄目だ。自分だけでなく周囲にも迷惑をかける。ユーノ君も顔を伏せた。無理をさせているという思いがあるのかもしれない。自分の暴走に巻き込んでしまったという自責の念もあるのだろう。

「こちらは人手が多いからね。社会には役割分担というものがある。封印は君の仕事。探索とフォローは我々に任せてくれないか？」

「は…はい」

どうも彼女たちは…何もかも背負いすぎるところがある。人間、その手の届く範囲だってろくに守れない事が多い。何もかも自分だけでできるというのは無理という以前にただの思い上がりだ。それを学ぶには…まだ早いのかもしいないが、彼女たちがこれから関わることはそういうことなのだという事は分かってもらわねば困る。

あまり納得したようには見えないなのは君の返事を聞きながら、私は小さくため息をついた。頑固者…という言葉が頭をよぎった。

ユーノ・スクライア

連絡用と言って渡してくれた近距離用だという小型の通信機を受け取って僕は豊田さんたちと別れた。考えさせられる事が多い一日だったと思う。探索については僕も協力する旨を打診したところ、豊田さんは受け入れてくれた。魔法などについて知りたいこともあるそう、昼の間はこっそり高町家から抜け出して彼らと一緒に行動するか、通信機によるサポートをすることにした。…こここのころ、なのはは疲れていたようだったから彼らの申し出はありがたい。

『うー…ほんとによかったのかなあ』

『探索のことかい？』

『うん…』

『彼らの言うことももつともだと思うよ。…自分にしかできないという思いは捨てた方がいい。それで僕も痛い目を見たからね…』

『ユーノくん…』

誰かに頼るということ。それは恥ではないし、そうしなければならぬ場面というのは必ずある。僕はスクライア一族に拾われた孤児で、育ててくれた彼らのために早く一人前にならなければという想いが強すぎたのだと思う。族長は僕を発掘責任者という人を使う側にして一人だけではどうにもならないことがあるということのを学ばせようとしたのかもしれない。

『なのは、一人だけじゃだめなんだ。誰かに頼ることは決して悪い事じゃないよ』

『ユーノくんがそう言うなら…』

なのはは納得していない顔のままだ。…何故かは分からないけど、なのはは全部自分で背負おうとしているふしがある。あの事故に僕が責任を感じていたように…。なにもかも自分だけで背負おうとしている。思えば僕もそうだったんだろう。

なのは…何故君はそこまで…心の中に本心を隠しているんだい…？

「司令は今日戻ってくるんだっただか？」

「はい、夜に内火艇で帰艦予定です。交代人員及び搜索隊も上陸するとのことですよ」

現地での活動は少数精鋭。地元の警察などと問題を起こすのはまずいからな。しかし司令も行く時はあれだけ聞かん坊だったわりにはあっさりと戻るのか…やはり、何かあると思ったのは杞憂だったか？まあ、ともかくこういう状況になった以上、いつまでも指揮官が艦内にいないというのもまずいからありがたい。なんだかんだで司令は締めるところは締める。普段ばやんとしているようでもあの人も軍人だ。

「しかし…例の件はどうなってる」

「まだ分かりません…」

「那岐君の悪い予感によく当たるから嫌なんだよ」

やれやれ、と俺は背中をかきつつばやくしかない。あの戦闘の後に発生した極少ノイズ。あの二人の位置でもなくほぼこの澤風と重なる位置、パターンは艦隊の所属艦のもつものでもなく…もっと別種の、はるかに小さなもの。それが一定の規則性を有していたこと。

「これがどういう意味を持つのかは微妙なところだが…どうも俺も

嫌な予感がする」

「…副長もですか」

「嫌な予感がするんですぅって言って俺に泣きついたのは那岐君だろ」

「そ、それはそうなんですが…」

やれやれ…参ったね。ただでさえ厄介事続きだったのに、これで給料が出ないっていうのがねえ…。ま、仕方ないか。働かざる者食うべからずとも言っしな。士官らしく少しは頭を使っお仕事しなくちやな。

第97管理外世界 L級次元航行艦アースラ クロノ・ハラオウン
三等海佐

「リンディ提督…眠そうですね」

「あらやだ…顔に出ていたかしら？…あらクロノ」

「捜査許可が出たと聞いたので」

母さんのことだ。恐らくロウラン中将あたりに話をつけて裏から手を回したのだろう。よほどの緊急事態で無い限り管理外世界にこんなに早く介入が許されるなんてそうでもしなければ無理というもの

だ。

「気が早いよクロノくん」

「現場に入る前に少しでも状況を確認しておきたいんだよ」

あの時あしておけばというのは十分な準備をしていなかった人間の言い訳だ。少しでも失敗の可能性を減らしておくのが僕のような立場の人間の仕事なんだから。

「例の救難信号は？」

「あれつきり音沙汰なしだよ」

本局情報部…あまりいい噂は聞かないな。面倒な事にならなければいいが…と考え込んでいたら、エイミイが悪戯っぽい笑みを浮かべている。あれは何か悪巧みをしている時の顔だ。…となると、標的はいつも通り、僕か？って頭に手が…ああ、エイミイの笑みの意味はそっちな。

「提督…」

「まーまー、難しいことはこっちに任せて、ね」

「僕も執務官です。いろいろ裏に何かあるかもしれないって事ぐらいは—」

「クロノくんじゃまだ難しいと思うけどなあ。嫌な人相手でも表情一つ変えずに挨拶できるようじゃなきゃまだまだだよ？」

相変わらずの笑みのエイミイ。士官学校の頃からこの調子だ。どこか抜けたような顔をしているのに強かというか…それが僕をからかうことに向いてばかりなのは勘弁して欲しいな。アースラ配属になってからは母さんまでそれに加わるから手に負えない…。

「そういうエイミイはどうなんだ？」

「えっへへ今まさに実践中だよ」

「なっ」

「あっはは、慌ててる慌ててる。冗談だよクロノくん」

「エイミイ、君ってやつは…」

今まさに僕のからかいを実践中…ということのようだね。ここところこの辺りでは特に事件もなかったので常に二人がこの調子なので頼むから何か事件よ起きてくれと不謹慎ながら願ったこともある…まさか本当に起こると思わなかったので少しだけ自己嫌悪に陥ったのは秘密だ。

とにかく大事にならなければいいという僕の願いとは裏腹に事態は明らかにきな臭い感じになりつつある。崩壊した第296管理外界から転送された大質量に、本局情報部員の救難信号、ロストログアの落着。これだけ問題が重なってめでたしめでたし何も無しとは問屋が卸さないだろう。

エイミイも母さんも僕をからかいつつも目は笑っていない。クルーの仕草にもどことなく固さがある。…緊張をほぐすのは別に構わないのだけど…僕をだしにするのはできればやめて欲しいな…。

第二十一話 アースラの切り札はマスコットなの？（後書き）

随分早めの管理局到着です。第296管理外世界の存在から妄想した結果ここまで原作から乖離しました。

○光学迷彩

実際のところ、陸戦ならともかく有視界戦闘をすることがあまりないであろう現代の海戦で役に立つかと言われると怪しいものです。

○ユーノの心理

原作だと自分がやらなくちゃの一心だったユーノも頼ることを覚えたので自分の周りが見えてきています。

○クロノの階級

現場に出て指揮をとることもあるようなので相応の階級が必要なので後の昇進も考えて設定。執務官もデスクワーク中心とか毛並みの違いはあるようなので一律に階級を設定はしません。どう考えても平ではないでしょうけど。

○アースラの切り札改めマスコットクロノ

小難しい理屈はこねくり回しているけれど、原作同様ポーカーフエイスがまるでなっていないクロノでした。女性クルーからは恐らく妹分扱い。男性クルーからは分かっているよという顔で肩を優しく叩かれる。…クロノ…強く生きろ！

5・11改稿 誤字、一部表現修正。後書加筆修正。

7・21改稿 加筆修正。

第二十二話 仕事中毒協奏曲（前書き）

V S フェイトを早めるにしても動きがないはずのないアースラ組中心にどうしても舞台裏が増えるのです。

第二十二話 仕事中毒協奏曲

第97管理外世界 L級次元航行艦アースラ エイミー・リミエツ
タ一等海尉

「そういえばエイミー、救難信号の発信場所は絞り込めたかしら」

「んー、それがですね」

私は解析結果をモニターに出しつつ、左手で口元を隠して欠伸をかみ殺した。二時間前にはリンディ提督に落着いたロストログア、ジュエルシードの小規模暴走とそれに伴って発生した謎の結界についての報告を上げたばかりで…実を言うと提督が仮眠をとっている間もその精査やら何やらで寝ていなかったりする。そしてさっきの本局情報部員の救難信号と来て、ずえんずえん寝てないのだ。

そういえば士官学校時代の先輩からのメッセージとかで、執務官補佐はやりがいがありますとか、大変でしょうけど頑張ってくださいというのがあったなあ。オブラートに包まれてはいたけれど、あれは今にして思えば執務官補佐はむっちゃ激務だからやめておけという忠告よね…。

「海上？先のジュエルシード暴走時に展開された結界展開位置と近いわね」

「発信位置の移動速度からすると水上船だと思われます」

「第296管理外世界からの転送のトレースは？」

「付近の海上と思われます。特に現地で何か問題が起こっている様子はないので転送失敗等があったとは思えませんね」

「救難信号に次元転送は関連性がありそうだな。それにジュエルシードの落着。偶然の一致と見るのは無理がある」

「クロノ君の言う通りだと思うよ。ただ、残念ながら結界内の状況は確認できませんでした。桁外れの大魔力で形成されているみたいで…ちよつと本腰入れて解析してみないと分かりませんね」

「エイミイが時間をかけて解析できないならすぐには無理だろう。気に病むことはない」

まったくクロノ君はこういう時にカッコいいのよね。いつもはからかわれてすねたりして可愛いのに…。その屈託のない笑みに応えるためにもここはエイミイさんの意地にかけて解析して…ふああ…うん、正直限界。このままだと“かる うし”とか書き残して安らかな眠りについてしまいそう。そういえば執務官補佐の殉職理由トップ10に過労死が入っていたような。

「あーすみません提督、水上船の捕捉やら何やらは通信副主任にデータと指針は預けたので仮眠に入っていていいですか？」

「いつもごめんなさいね」

「頼りにしているけど無理はしないでくれよエイミイ」

「はい」

ふふ、むすつとした顔だけどしっかり心配してくれているあたり相
変わらずのツンデレだよねクロノ君は。ふらふらとした足取りで私
は自室に転がり込んで、ああ、着替える気力もないね。上着とスカ
ートだけ脱ぎ捨ててベッドにダイブイン。

「もーだめ…それじゃ私はおやすみなさい…」

最後の気力を振り絞って二時間後に目覚ましのタイマーをセットす
るあたり、大概私もワーカーホリックなのかもしれない、と薄れ行
く意識の中で思っただけでした。

リンディ・ハラウン少将

「それにしても…よりもよって海鳴市とはね…クロノ、資料は読
んだかしら？」

「はい…ですがこれは本当なのですか？」

クロノはまだ第97管理外世界には関わったことがないから疑問に
思っただけでしょうね。エイミーも信じられないと言っていたか
しら。

「現地の裏社会の巣窟みたいところで迂闊に手が出せないのよ。
もっとも相手を害するつもりがないのなら基本的には中立というの
が救いね」

本局ではどうかは知らないけれど、次元巡察隊の間では魔法は万能ではないし、最強ではないというのが共通認識。世の中は広いというか…非常識にもほどがあるというか、魔法で身体強化した魔導師と対等に体術で渡り合ったり、魔力誘導弾を感覚でかわす戦闘機乗りとか、側転で攻撃をかわした直後に正確無比な射撃をしてくる兵士とか…虚実入り混じった経験談がうちに限らず次元巡察隊にはごろごろ転がっている。

この海鳴市も嘘か真か彼らを利用しようと潜りこんだ本局情報部員がほうほうの体で逃げ出したなんていう逸話があるくらい土地だったりする。正確に把握できているわけではないが危険そうな集団が一つや二つではきかないのも事実。今回の救難信号は瓢箪から駒が出たんじゃないかと一瞬思っただくらいだった。

幸いなのは彼らはこちらが何かしていてもほとんどちよっかいをかけてこないこと。自分たちに不利益をもたらす存在ではないと思っただのかしらね？事情が分からないのでは目隠しチキンレース同然だから私としては彼らの本音を知りたいのだけど、藪蛇になりかねないので仕方なく放置しているというのが現状。もっともそれを口に出すわけにはいかないので“彼らは中立”と言っておく。

「あまり気にしすぎても問題だけど頭の片隅には置いておくべきね」

「はあ」

分かったような分からないようなという顔で頷くクロノ。私にしても事情は正確に把握しているわけじゃないのだからあまり偉そうなことは言えないのだけど。はあ…だいたい現場の一指揮官にある程度なら現地での政治交渉まで任せてしまうなんて上層部はおかしい

と思わないのかしら。下手な人物なら軋轢を生みかねないと思うのだけど…。結局は人材不足が何から何まで響いてくるのよね。武官だけじゃなくて文官も足りないわけで。

う…また胃がおきちゃったかしら。コーヒをやめてお茶にしたのだけど…そもその原因はどう考えてもストレスだから仕方ないわよね…。

「提督」

「どうしたのアレックス？」

「また砂糖の量が増えています。目算で山盛り六杯くらいですね。お茶入り砂糖と言う方が適切では？」

「……」

周囲の顔が一齐にこちらを向いて…同情に変わる。息子にまでそんな顔をされるなんて…。同情するなら休みを頂戴！と思ったけれど、よく考えればその私と一緒に働いている彼らも実は立場は同じわけど…もしかして彼らはそのことに気付いていないんじゃないかしら…。

そういえば前にレティが言っていたかしら。貴女のところの部下は貴女と同じで仕事中毒なところがあるんだからほどほどにして休まないと部下も道連れに倒れるわよ？と。私も他人事のように考えていて気付かなかったけれど…できると思われて仕事を投げられていたのではないだろうか…。

『近くに管理局がいれば動きそうじゃな』

『貴女のレーダー、思った以上に高性能なようですね。あの程度の出力の発信で気付かれるとは思いませんでした』

念話ごしでもあの女の不自然なまでに自然体な笑みが見えたような気がして私はわずかに苦笑する。普段は人畜無害そうな顔をしておいて裏の顔はこうまで違う。やはり光の当たらない道を往く人間はこうでなくてはいいかな。

『恐らく別の要因じゃと思うがの。わしにしても予想外じゃよ』

『貴女に予想外という言葉を吐かせることがこつも続くとは…』

『買いかぶりも大概にしろ。私は所詮ただの技術屋、そうだろう？』

『どうでしょう。私には貴女は同じ種類の人間に思えますよ？“生きたロストロギア”』

やれやれ、この女はどうしても私を同じ側におきたいらしい。私という人間という本質を知らぬからこそ言えることなのだろうな。人は自分にとって都合のいい部分しか見ようとはせん。相手の本質などおかまいなしじゃ。

『ふん、お前はどつするつもりだ？このまま第4次元艦隊には戻れ

まい』

『ロウラン中将あたりなら拾ってくれるかもしれませんがね。貴女だつて身の振り方を考えた方がいいと思いますよ？』

口の減らない女だな全く。起き抜けの迎え酒を煽る。景気付けになるのは酒くらいか。ハイになれるモノはなしつてのが皆で出した結論だからな。仕方ないつてどこか。

『まあ、好きにせい。お主との会話は精神衛生上よくないのでな。ここらで打ち切らせてもらつぞ』

『私も死にたくはないですからね。せいぜい足掻いてみせますよ』

“正義官”

かつてこの女はそう呼ばれていたらしい。そんな人間でも、狂う。どんなに高潔で、理想に燃え、家族を愛していても…狂うのだ。いや、そんなものがあるからこそ人は狂うのかもしれない。何も無い、空虚な状態なら狂うことはない。それがヒトと呼べるのかはまた別の問題だろうが。

「…ふん、私のような全てを持ち、何も持たない人間が言えることではないな」

第二十二話 仕事中毒協奏曲（後書き）

ますます博士がダークな雰囲気一直線。念話の相手は誰でしょね。禁断症状でネタが多々入っていますが気のせいです。

○エイミィ

A、sで現場指揮官までやっているので階級がやたらと高く…。サービスシーン（？）は街大被害直前のなのはシーンのオマージュ…。のつもり。

○管理外世界について

管理外と判断するためには科学力を調べなければいけませんし、現地で活動する可能性もあるのである程度は探りを入れています。諜報活動の9割は公開情報のすり合わせと言われています。危険な橋を渡らずとも情報は手に入るものです。豊田たちがしたように。

○海鳴裏社会

捏造率高。詳しい話は次話にて。

○アースラの現在位置

地球の観測技術は誤魔化し中。A、sだと衛星軌道上で待機とかもできたので問題ないでしょう。時の庭園に関しても同様の扱い。

○リンディ茶

コーヒーからの惰性というフォロー。ただし量に関しては弁解の余地なし。定番ネタと胃にクくるネタの関連性でこうなったという。

○登場オペレータAもといアレックス

眼鏡の方（酷） 割と毒舌でデスクワークが得意、というのはお

茶入り砂糖発言ともども某スペースオペラが元ネタ。

○ “生きたロストロギア” 博士

今までも微妙に見え隠れしていたので既にお気づきの方もいるかもしれませんが発言及び独白において彼女は人称や口調が一定しません。今のところ言えるのは特にダークな思考をする時ほど崩れがちという程度です。

5・11 改稿 一部表現修正。 後書加筆修正。

7・21 改稿 一部表現修正。

第二十三話 奇奇怪怪都市海鳴（前書き）

海鳴には都市伝説がある。

曰く、白い服を着た少女が空を飛ぶ。曰く、前触れも無く建物が壊れる。曰く、付近の天候が急に崩れ、急に回復する。曰く、小さな妖精が街を守っている。曰く、…

第二十三話 奇奇怪怪都市海鳴

翌朝 海鳴市 高町士郎

「原因不明の事故、ね。怪我人がほとんどなかったのは幸いだな」

「なのはは出かけていたんだろう。大丈夫だったのか？」

小さく欠伸をしながら新聞を閉じて食後のコーヒーを啜る。うーん、少し失敗したか…これは店では出せないな。

一面で報じられていたのは昨日の騒ぎに関してだ。原因不明の建物の損壊がここところ相次いでいる。今回は破壊が白昼に街中で起こり、多数の人々を巻き込んで広範囲に及んだ。目撃証言や監視カメラなどから街が一面木に覆われたとかいう話が出ているらしいが…その痕跡が全く残っていないのも混乱に拍車をかけている。原因についてはテロやガス爆発など情報が錯綜しているのが実情のようだ。

生憎とこちらは風呂に入っていたので事態は全く把握できていなかったりする。なのはは丁度出かけているところだったが何も見えないという。この海鳴で何かやらかすような人間はいないとは思うのだが…昔の伝手に何が起きているのか聞いてみた方がよさそうだ。

「う、うん。でも近くにはいなかったから大丈夫だよ？」

「…ならいいんだが」

あからさまに動揺する我が娘。…正直なのはいいが、どうも自分の中に想いを溜め込む癖が…。しかし何かを言おうにも、しようにも――親としては断腸の思いだ――この家族でなのはに遠慮をさせずにいられる人間はいない。なのははこの家族の中で浮いてしまっている。それになのはが独りでいることが多くなり今の性格に至る原因を作ったのは“仕事中”の怪我で長期入院してしまった昔の自分だ。

どうもなのはのこととなるとうちの家族は空回りしてしまう。それではいけないと思うのだが…現在進行形でなのはが何か表沙汰には出来ないようなことに関わっているのを確信しているにも関わらず、何もできず見守ることしかできていない。

「ちよつといいかしら士郎さん」

少し固い表情で手招きする桃子に従って廊下に出る。後ろ手でドアを閉めると桃子は不満げな目で顔を寄せてきた。

「ちよつと怖い顔、してましたよ」

「…そうか？参ったな」

桃子は小さくため息をついて額を軽く小突いてきた。全部お見通しか。やれやれ、敵わないな。

「…なのはのためなんですよ？」

「ああ。危ないことはしないつもりだ。許してくれるかい？」

「もう、一度決めたらみんな止まらないんだから…駄目って言える

訳、ないでしょう？」

「…すまない」

胸に顔を埋めてきた桃子の肩を軽く抱きつつ、謝るしかなかった。これで約束を破ってしまうのは何度目だったか。桃子に今まで与えてやらなかった分、苦勞をかけた分、せめてなのはには平穩な世界で暮らして欲しかったが…血は争えないのかもしれないな。ならばせめて非日常の世界の先達として少しはできることをしなければならぬ。

地球衛星軌道上　L級次元航行艦アイスラ　リンディ・ハラオウン
少将

「提督、やはり護衛をつけるべきだと思いますが」

「そういうわけにはいかないのよ。いつも通り私一人で行きます。サーチャーの類もなしよ」

心配するクロノに念押しして私は転送ポートに入る。これから向かうのは一瞬も気を抜けない戦場…呼吸を整えて精神を集中させる。術式発動…うん、これでいいわね。

「提督、転送準備完了しました…しかし…その…」

「彼はいるのね。なら大丈夫、転送してランディ」

「はあ… なんとというか本当に年齢不詳生命体だよな提督は… 了解。幸運を祈ります」

前半部分は声が小さくて聞き取れなかったけど… 彼も疲れているのかしらね？ 俯いていたと思ったら突然凄くいい笑顔になって私に手を振っていたランディの姿が掻き消え、昼間だというのに薄暗い、すえたにおいのする地下室に私は転移を果たした。ここに来るのは何回目だったかしら。

「やれやれ、M s ・リトル。ノックくらいはして欲しいんですがね」

デスクに足を投げ出して新聞を広げていたトレンチコートの中年男性は別段驚いた様子もなく、新聞を畳んで居住まいを正した。M s ・リトルというのは恥ずかしいのだけど… 私のこと。海鳴の裏社会の人間は人外だろうと気にしないというのでフレンドリーにいけるかなと… 変身魔法で手の平サイズになって彼を初訪問したせいだった呼び名。魔がさしたとしか言いようがないわね…。

「ノックしたら最初逃げ出したじゃないですか、探偵さん」

彼はここ海鳴の裏社会の関係調整役。本名不詳、年齢不詳。通称“探偵”。ステレオタイプなくたびれた探偵という風体ゆえらしい。かなり昔から海鳴にいるらしいが誰も彼の前歴は知らないという。沈黙と中立を何より大事にするこの土地では詮索する者があまりいないというのもあるのだろう。

「あの時は失礼しました。僕でも驚くことはあるですよ。で、用件は？」

物腰はおつとりとしていて穏やかそのものなだけで、初対面の時にはにこりともせずじいっと見られてにらめっこになって…結局根負けしたのは私の方で、それで彼が嘖き出して…その後は名前も聞かず、何をするかも聞かずにあっさりと好きにしていいいと言われたのには驚いたわね。

「最近厄介事がいくつか舞い込んでいるんじゃないかと。これから人を回したいのですが…」

「案の定、そちらの関係ですか。そうだろうと思って手は回してありますよ。貴女のフリーハンドで構いません。ただイレギュラーがあるから気をつけたほうがいいですよ」

一体どこからどういう情報を受けてこんな対応が取れるのか。管理局に情報提供者でもいるのではないかと疑ってしまうくらい。もしそうだとしたら私は道化もいいところね。

「もしかして被害者が出てしまっているのですか」

「怪我人の類だったら別に気にするほどじゃないですよ。ただ、一人、こちら側の人の娘さんが関係してしましてね。表の世界の子だったもので僕らでは迂闊に手が出せなかったんですよ」

彼は表情を一切変えること無く淡々とした口調のまま私の心に爆弾を放り込んだ。海鳴はお互い干渉しない限りは平和な中立地帯。けれどもその平穏を崩す相手には容赦なく牙をむく。私は背筋が寒くなるのを感じつつ、いつでも展開できるようにしたままだった防御魔法の術式を再点検した。ルーキーではあるまいしミスがあるかもしれないと思っただけで確かめているのではなく、心を落ち着かせるための儀式のようなものだ。

「そちらには貴女がすっかり話をつけて下さいね。貴女のご同類が三人…いや一人と二匹ほど関与しているようですし。あと毛並みの違うのが数人…そちらも貴方の協力者ですか？」

「いえ…あなたに話もせずそんなことはしませんよ。その件も含めてこちらで対応してみます」

「すみませんね。こちら側と言っても娘さんの父親は引退した身ですね。こつちから連絡を入れるわけにもいなくて。私もはこれ以降もこの件には関与しません。貴女なら穩便に事を済ませてくれるでしょうから」

「…分かりました。事が終わりましたらまたお伺いします」

彼の手を借りずにその娘さんの関係者に話を通さなければならぬというのは厄介ね。その娘さんが表の人間なのだから余計にややこしくなる。更には私の同類…？誰かここに来ている人間がいるということね。後で調べないと…二匹ということは変身魔法か…あるいは使い魔でしょうね。毛並みが違う…？もしかしたら第296管理外世界からの脱出者かもしれないわ。ますます寝る暇がなくなるだろうなと思って私は小さくため息をつき、にこやかな笑顔で手を振る彼に見送られてアースラの遠隔転送で艦に戻っていくのだった。

M s・リトルは嵐のようにやってきて用件を済ますとすぐに還っていった。小さくともレディはレディ、たまには茶の一つも出したいのですね。ものぐさな私にそんな考えをさせるあたり、あの女性は天然の人たらしなのかもしれません。

「久々ですね高町なんとかさん、もう入ってもよろしいですよ？」

相変わらず人の名前を覚えない奴だ、という彼の答えを予想しつつ私は彼の真っ直ぐな娘とあのレディが何を見せてくれるのか少しわくわくしてきました。M s・リトルのもつてくる話はどれも私の好奇心を満たしてくれますからね。もっとも知りたがりは死を招きますので、私は漏れ聞こえてくる噂だけでお腹一杯になるよう務めていますよ？これはこの世界で生きていくために大事なことです。それに少しくらいミステリアスのままにしておいた方が楽しいじゃないですか。

「相変わらず人の名前を覚えないな君は」

「引退した人間をいちいち覚えていられるほど暇じゃないんですよ
こう見えても」

「…手短に用件を言う」

おやおや軽口には乗ってくれないみたいですね。でも久々に触れたら斬れてしまいそうな彼のアノ顔を見れたのでよしとしましょう。一線から身を引いて尚、あの表情が出せるとは…懐かしいですね。いやはや僕も年をとったかもしれません。

「高町家は今回の案件には関わらない」

「…おや、子煩悩な貴方がですか？」

「子供の喧嘩に親が出るほど無粋じゃないつもりだ。…それに高町の家で日の当たる道を二人分も用意できるほど器用じゃないんだ」

やれやれ、引退したこの人をどう止めたものか気を揉んでいたのですが無用の心配でしたね。

昔からこの人は不器用でした。仕事関係ではにこりとも笑わなかった彼が家庭で柔和な微笑みを浮かべている光景は未だに僕には違和感しか感じられません。彼が変わったのだとすれば奥さんの影響だと僕は踏んでいますけどね。彼女は僕らとは違う世界の住人ですから。その甘さが引退に繋がるあの事件と言う人もいますが僕はあれがあつたからこそその変化とも思えますね。

「この海鳴で暮らすなら可能と思いますが？」

「娘は外界を求めている。外に出たら誰も容赦などしないのではないか？」

「嫌ですねえ。ここを戦場にしたい馬鹿でも無い限り、貴方がここに留まるのなら大丈夫ですよ。僕もそこまで薄情じゃありません」

「なるほど、確かに。だが本音は修羅を三人もここから放つたとなれば君の管理能力と海鳴の存在意義が問われるか」

「…これは一本とられました。いつのまにか処世術も身につけたようですねえ」

少なくともあの朴念仁の彼がこうまで変わったのは悪いことじゃない

いと僕は思います。むしろ昔よりこの世界の住人としてはいい顔になったと思っているくらいで。外に出たら引く手数多ですよ。ま、今の彼はそんな事は望まないでしょうけど。

あの家族は日常と非日常の境界が家庭内にある歪な形をしている。それは彼が奥さんとともに暮らす事を決意して、身を守る術の無い身内がどうなるかという事を考えて海鳴に移り住み、それでも心配だったのか恭也君たちに鞘に収めたはずの剣を教える一方で末の娘さんと奥さんには何も手を入れなかったからです。

元々彼にとつての平穩の象徴だった奥さんはともかく、なのはお嬢さんに挺入れしていないことに突っ込むほど僕も無粋じゃないですよ？ 氣付いたんですよ彼も。“外に出る準備をしている”ようにしか見えない自分に。奥さんがそれとなく示したのだと僕は見ています。引退したと言いつつ抜き身で剣を持ち歩いているも同然だったので僕も関係調整に手を焼きましたよ。末の娘さんを一般人として扱っていることでようやく周りも静かになったので助かりました。

おや、こうして考えると一番こちらの世界の空気に聡いのは日常側のはずの奥さんなのかもしれませんね？ 近くに要注意人物がいるから氣付いていなかった人は僕も含めて多いかもしれません。まだまだ修行が足りないようです、僕も。

「変わったな君も」

「貴方ほどじゃありませんよ」

「…そうだな」

どうも僕の人生というのはは女性に振り回される運命のようですね。

高町家の奥さん、M s・リトル。女性は怖い。裏社会では案外女性が強いのというのは本当の話ですよ。力だけで押し通せるほど甘くは無いですし、時には力こそが邪魔になることすらありますからね、少し前の高町家のように。

「そういえば貴方にはM s・リトルの話はしましたか？」

「…厄介な案件を処理してくれる妖精、というアレかい？」

「ええ。今回も彼女が関わってしましてね」

ふつと彼は表情を崩す。おやおやその顔では翠屋のマスターにしか見えませんね。彼の淹れるコーヒ―は絶品らしいですから一度くらい飲みに行きたいのですが…流石に裏家業の顔見知り、それも現役バリバリの僕が表の世界に出て来るような無粋な真似はなしですね。ああ、勿体無い。

「与太話だと思っていたよ」

「僕も初めて会った時は頭がお花畑になったと思って慌てて黄色い救急車を頼もうと思いましたよ」

そう、うつかりこの妖精さんのためなら一仕事してもいいか、と思ってしまうほどに。ううむ。本当にあの女性は不思議な方ですねえ。今度は本当にお茶にでも誘ってしましましょうか。僕はもうあの人の手の内に落ちているのかもしれない。

久々の再会に長話になってしまい、彼がまた翠屋のマスターの顔になって早く帰らないと言いだした時はのろけですかと余計な一言を加えてしまったけれど、僕は悪くないと思います。ああ、カフェ

インだけはきつい安コーヒーが唇にしみますね。久々なので僕と話している時には恥ずかしがるかわりに手が出る癖が彼にあるのを失念していました。不覚ですねえ。これもまた懐かしい感覚の一つですが。

「ではまた御用があるときはいつでもどうぞ」

「もう少しまともなコーヒーを用意できるようなら考えておくよ」

第二十三話 奇奇怪怪都市海鳴（後書き）

これリリカルなのはだったよな…と書いている88式自身も首を捻ってしまった第二十三話でした。アースラ組が現地情報を入手して、海鳴裏社会が中立を表明しました。

○海鳴裏社会

極東地域の裏社会上層部やら引退した人間やらの中立地帯というぶつ飛び設定。なので基本的には慎重な対応、静観が多く話には深くは関わってきません。…よくある一期とA、Sの間の誘拐ネタはこれではば使えないだろうなあと思ったり。

なのはたちや豊田たちの動きをスルーする理由補足

豊田たちとなのはたちの初邂逅その他諸々もバレてます（聖祥とかどう考えてもVIP関係者の巣窟）ばれていないのは艦隊の存在くらい。ただ、彼らから見ると高町の表街道を歩いていた娘に妖精筋っぽいフェレット、正体不明だけど害意はないっぽいおっさんども、そもそも意図がまだ分からないフェイト組という構図だったのが様子見してただけです。“探偵”はなのはが既に表の人間でなくなつたと解釈していますが、士郎がそれを知らずに表を歩けるとは思っていないと言つたのを誤解してしまい、なのはのことを彼に對しては言及しませんでした。勘違い怖い。

○リリカルマジカルテクニカルなリンディさん

可愛いは正義。茶目っ気のあるヒト…素敵だと思います。

○こちら側の人の娘さん

みなさんご存知高町なんとかさんのこと。“探偵”の呼びかけの高町なんとかは士郎パパの方。

○ “探偵”

彼に話を通せば情報統制とか裏社会の動きはある程度あつさりと処理されます。描写を簡略化するための妥協。

要するに彼の仕事は何かやらかしたり、やらかそうとする馬鹿が出た時にまあ落ち着けと周りを押し止めつつ、穏便に事態の収拾をつけられる人に仕事を丸投げすること。リンディのように自分たちと関係を持たず、実力はあるというタイプは使いやすい。

○ 土郎パパ裏モード

この辺りは口調、設定ともに完全に捏造。そして案の定高町家最強は桃子さん。

5・11 改稿 後書整理。

7・20 改稿 加筆修正。

第二十四話 不器用なわたしが見えない未来を見るために（前書き）

ようやく話がまた前進します。まだアニメ版第四話なんですよね…。

真面目なフリしてネタが入るのはもうこの話のお約束としか（おい

第二十四話 不器用なわたしが見えない未来を見るために

“探偵”とリンディの接触より二日後 海鳴港沖 第十三任務部隊
駆逐艦澤風 豊田浩二准将

ユーノ君―高町家ではフェレット扱いらしい…仮にも知的生命体としてそれはどうなのだろう―が語るところによれば魔法とは、我々の思うような荒唐無稽な夢物語というわけではないらしい。どちらかといえば科学の発展系なのだろう。高度に進化した科学は魔術に等しい、とはよく言ったものだ。

事実、我々が暮らしていた世界も似たようなものだ。天候を狂わせ、圧倒的な力で全てを蹂躪し、大陸すら割る。そんな超兵器との戦いは空想戦記としてみるならば一部の特殊な趣向の人間にしか受け付けられない、多少そういった方面に知識のある者から見れば笑止千万な物語になるだろう。

「所詮、人間の空想は現実を超えることはないということなのだろうな」

『歴史を紐解けばそういう事例はいくつも見かけると思いますよ』

ちなみにユーノ君とは軍用小型無線機―分かりやすく言えば強力なトランシーバーといったところか―で通信を行っている。流石に出力が足らず、単体ではこちらと連絡は出来ないで現地の隊員が持つ中継器を介している。昼間、フェレットしかない部屋で人の話し声がするのはまずいので人間のイヤホンは付けたのだが…彼が

どうやって使っているのかは少々気になるところだ。

「黄昏ているところ失礼します司令とフェレット君。上陸隊が超兵器ノイズと思われる反応を捉えました。郊外の広大な森の中のようなですね。私有地でかなり厳しい警備があるとのこと。…月村？地元じゃ有名な名家？森の中に屋敷とか金持ちの考えることは分かん…」

相変わらず職務に関わる部分と自分の世界との落差の大きい男だな副長は。こうまで切り替えが一瞬だと外づけ発言装置―“スイッチ”とは真面目な態度と普段のおちやらけた態度を切り替える、という意味だったらしい―をつけているという日野中尉の言もあながち冗談とも言い切れない。金持ち云々に関しては私も思うところが無いわけではないが。

…つい流しそうになったが昼間から黄昏るほど年をとったつもりはない。…いや、ユーノ君の話の端々に出る歴史の語りに触発されて魔法文明と戻れるかも分からない世界の関連に想いを馳せていたり、間違っではないのかもしれない…。いや、まだ慌てるようなトシじゃない…。

『月村…？』

「知っているのかユーノ君」

『…なのはの友人と苗字が同じで、彼女もお嬢様らしいのでもしかすると。詳しい場所を教えてください。今から念話で聞いてみます』

「授業中かもしれないが…事が事だ。聞いてみってくれると助かる。ただ、まだ動くような状態ではないことは言い含めてくれたまえ」

ただ落ちているだけで誰かの手の内にならないのなら発動前に穩便に確保するのもそこまで難しくはないだろう。友人宅だとすればなのは君が訪問して適当な理由で散策するなり、あるいはそうでないとしてもフェレット姿のユーノ君に任せるなり手はいくらでもある。

万が一発動した場合は…謎の訓練用装置の新機能、謎の訓練用地確保機能とやらを使うことになりそうだ。海鳴砲撃から三日目の今朝、博士は褒めてくれと言わんばかりの満面の笑み―アニエツリ大佐談―であの時に発動した機能が安定したと報告してきた。

…なんというか、あの博士は本当に変態じみた開発者だ。一晩でこそないが、そんなに簡単にたった一人でなんとかできるものなのだろうか。…そもそも私の指揮下にある四隻のHLG対応艦を建造したHLG設計システム自体、本当なら理解しかねるモノだ。国連軍に入って真実を知ったときはそれこそ魔術か何かでは無いかと思つたものだ。魔法が実在するというを知った今ではいっそ魔法だと言ってくればまだ理解が出来るような気もする。

HLG設計システム。それは博士にしか扱えないシロモノで過去に存在したのはスパルヴィエロ搭載の簡易版を除けばたったの1基、ウィルキア近衛海軍が保有していた浮きドック艦スキズブラズニルに積まれていたもののみである。同艦は戦後に国連に接收される予定もあつたが、大戦中には近衛艦隊と共に世界を駆けずり回っていたために老朽化が酷く廃艦となっている。

その仕組みは艦が出来上がる経緯に疑問を挟まなければ極めて簡潔だ。

博士に仕様書を渡す。彼女が要求した資材とともにシステムに籠る。

翌朝には出来上がる。

：な、何を言ってるか分からないと思うが私も何を言われたのか始めは分からなかった。訂正しよう。今でも分からない。だが目の前にそういう現実があるのだから仕方ない。受け入れるしかない。理不尽の塊のような超兵器を葬り、もう不条理はないと思っていた戦後にまさかそんな衝撃を受けるとは思いもよらなかった。

ちなみにシステムの仕組みや設計中の様子を説明しようとする試みはことごとくが何故か頓挫している。曰く、隠しカメラの類は何も映さず。曰く、投入された人員は必ず眠りに落ちる。曰く、解明を指示した者たちは数日間悪夢にうなされる。

触れてはいけない事が世の中にあるとこれほどまでにリアルにくれる出来事はないだろう。これらの事象に関して博士本人は見るなどとは言うが自分は何もしていないから分からない、としているが誰も信じてはいないだろう。恐らく何らかの手段で彼女あるいは協力者により撃退されているのだ。女には秘密がつきものという美学でもあるのかもしれない。またそれが許されるだけの比肩し得る者のいない稀代の天才でもある。ちなみにユーノ君に聞いてみると結界魔法じゃあるまいし、と笑っていた。：博士が魔導師と言われても驚かない自信が私にはある。

短い付き合いの私でも分かるが、彼女は刹那的快楽主義者なのだろう。自分が興味を持った事にはとことん入れ込み手間を惜しまないが邪魔する者には容赦はしないし、自分の興味でないことには目も向けない。一方で自分を利用しようとする事には無頓着だ。ただ彼女の方向性は常に突飛で無軌道なので利用するのも一苦労だろうが。

『どうやらその月村邸はなのはの友人のすずかさんの家で間違いないらしいです。僕が搜索してみますか？』

「念の為、なのは君の帰宅後に動いた方がいいだろう。万が一ということもある」

『分かりました』

現在、彼女たちが確保しているジュエルシードはこちらに来た後に一人でユーノ君が封印に成功した一個、その後なのは君とともに封印した四個、そして我々と協力して確保した一個の計六つだ。残念ながら発動前に確保できたものはユーノ君が封印した一つ目だけだ。

逆に言えば発動時に何が起るのかという情報が多いということなのだが…実のところ人や動植物の意思など計り知れないものなので効果的な対処法を練ることを我々は早々に放棄した。

ユーノ君曰く、封印術式にはかなりの魔力が必要であり、特に暴走している際にそれを止抑えつつ封印するのは困難を極めるといふ。極論すれば相手が放出している魔力以上の魔力で無理やり抑えつけるようなものらしく、封印の強度そのものも基本的には注ぎ込んだ魔力に比例するそうだ。ただし最終的に発揮できる魔力そのものは術式の組み方や本人の資質、魔法を行使する際の補助具たるデバイスの性能により異なるので一概には言えないらしい。

…科学の発展した形としては乱暴な理屈のような気はするが、要はエネルギーとエネルギーのぶつかり合いなのだから最終的な力の強い方が残るといふことなのだろう。まあ、物理現象やら何やらは説明するのには何だかんだと小難しい言葉と理論を振りかざす必要が

あるにも関わらず、起きている現象そのものは一目瞭然という事が往々にしてあるのだからそんなものなのかもしれない。

そついう側面があるからこそ素人であつても知識のある経験者に勝ることがあるのだらう。目の前のなのは君とユーノ君がその証左だ。……もつともユーノ君も大人びた言動からたまに零れ落ちる彼本来のものらしい部分を鑑みるにまだ若いという印象を受けるのではあるが。

放課後 海鳴市街地 高町家 高町なのは

「ただいま」

たとえ誰もいなくてもわたしはただいまを必ず言うようにしているの。何か特別な理由があるわけではないのだけど、わたしの心の中で決めた決まりごとのひとつ。

「……あ、ユーノくんは今日はいないんだよね」

ユーノくんはさすがちゃんの家にあるかもしれないジュエルシードを探すために今日はお出かけしています。わたしは自宅待機。まだ発動していないものが見つかったのでうまくいけば簡単に封印できるかもしれないそうです。

自分がしなくちゃいけないことが、やっと見えてきたような気がしていたのだけど、豊田さんたちはできればわたしとジュエルシード

があまり関わらないようにしているような気がします。わたしだけが兄妹の中で道場で練習をしていないのと同じ理由なのかな。鞆をおろして着替えもしないままベッドに仰向けになって、何も無い天井を見上げながらそんなことを考えていたら、イヤホンが繋がったままのランシーバーからわずかに音が漏れてきているのに気付きました。それと同時に、あのなんとも言えない感覚が…。これは、ジュエルシード！？

『ユーノくん！？』

『ごめんなのは！えっと…その…猫が…あわわわわ。と、とにかく豊田さんたちが結界を張ってくれたから急いでえ！』

『ふえ？う、うん。分かったよ！』

なんだかよくわからないけどわたしがぼうつとしている間に大変なことになっているみたいなの…。豊田さんたちと連絡するためのランシーバーを持って…忘れ物は無いよね？うん、大丈夫。戸締りをちゃんとして…。

「レイジングハート、お願い」

> All right, my master. <

「行ってきます！」

> Let's go together. We can do it. <

豊田さんたちが、ユーノくんが。わたしを心配してくれているのは

わかるけど…わたしは不器用で、真っ直ぐぶつかることしか知らないから、止まらない、止められない。ただ自分にできると思うことをして…その先に何かあるのかは分からないけれど、確かめたいんだ。そうすればまだ見えない、わたしの未来が見えるような気がするから。

第二十四話 不器用なわたしが見えない未来を見るために（後書き）

月村家数日前倒し、アリサすずかの出番はまた別の場所で…。さて何故ジュエルシードは発動してしまったのか…とりあえず次話で怒られる前に謝っておきます。ユーノごめん（え

。フェレット扱い

割と本人は気に入っているフシがある。

。HLG設計システム

鋼鉄原作で考えれば本当にこんな感じ。敵艦隊とこれから接触するというブリーフィング直後に設計することもできますし一晩どころか紅茶飲んでいる間にできるレベル。

。スキズブラズニル

プレイヤーが散々お世話になる艦。実際、ウィルキア近衛艦隊はウィルキア（極東ロシアと思って問題ない）から日本、ハワイ経由でパナマ運河を渡って欧州、その後地中海などで暴れつつまた米西海岸に戻り、再びハワイ経由で日本を経てウィルキアに…という流れなので戦略移動だけでほとんど地球を一周しています。

。封印済みジュエルシード

一つ目の封印経緯についてはユーノ単独という以外、特に語られていないので独自設定。

。封印術式とジュエルシード

メディアにより多少設定の揺れはあるけれど鋼鉄の魔女たちではこんな感じ。魔力による力技がある程度通ってしまう分かり易い事例ということ。

。戸締りと持ち物確認する魔法少女
家に一人〓鍵っ子。出かける前には大事。なのははまだまだ日常世
界の気分が抜けていない。

5・12 改稿 一部表現、誤字修正。後書整理。
7・21 改稿 一部表現修正。

第二十五話 それは気まずい出会いなの？（前書き）

「なの」がつくと残念な題になる確率が着実に上昇中。どうしてこうなった。

第二十五話 それは気まずい出会いなの？

海鳴市郊外 フェイト・テストロッサ

「アルフの見立てだとこの辺りのはず」

発動前のジュエルシードの僅かな反応を追って郊外まで来たけれど…恐らくこの森の中。けれどもここはどうやら私有地のようなのでできれば面倒は避けたいな。

『アルフ。私有地のようなだから結界、お願いできる？』

『ん、分かったよ。今からそっちに行く』

急がなければならないけれど、確実に。焦っては元も子もない。常に冷静につてリニスはいつも速度に頼って拙速になりがちな私に教えてくれていた。

…っ、これはジュエルシードの暴走！

『ごめんなのは！えっと…その…猫が…あわわわ。と、とにかく豊田さんたちが結界を張ってくれたから急いでえ！』

受け取り者を限定しない念話？…誰か他にジュエルシードを探している魔導師がいるのかもしれない。話している本人となのは、豊田という三人のようだけど…。会話相手はオープンで話してはいないのか、それとも返答を避けたのか。そう思うと同時に、周囲の雰囲気

気が一変する。

『フェイト、この結界は…？やたらと堅くて入るのに時間がかかりそうだよ。さっきの念話といいなんなんだいこれは』

『分からないけど…誰か他にも探している人がいるのかもしれない。先行するね』

『無茶はダメだからねフェイト。あの鬼ババだって…流石に怪我したら心配するよ』

相変わらずアルフは素直じゃない。ああ見えてアルフと母さんは似た者同士だってリニスは言っていた。今ならなんとなく分かるような気がする。

『うん、分かってる。あとアルフ、言葉が汚い。またリニスに怒られるよ』

『う、それは勘弁。急いで行くから黙っておいておくれよ？』

『うん、私も無茶はしないよ。相手の様子を見て考えろってリニスも言っていたから』

そう答えながら私はほんの少し胸がチクリと痛むのを感じた。リニスは厳しいけれどとても優しい。いつも一緒にいてくれて、アルフを叱ったり…悪戯っ子だったもんね、アルフは。

でも私のそんな楽しい記憶の中に…母さんはいない。

母さんが私を愛してくれているのは本当…リニスはその為に母さん

が造り出した使い魔。だからリニスの優しさは母さんの優しさでもある。分かっているのだけど…それでも母さんと一緒に時間を過ごしたいという私の思いは、我が俤なのかな…。

…でも今は考えるのはやめよう。ただ母さんの願いのために。ジュエルシードを手に入れる。そのために私はここに来たんだ。

海鳴市郊外 月村家敷地内 ユーノ・スクライア

…僕は自問する。どうしてこうなったんだろう？

探索魔法で僅かな反応を追う。それは僕の得意分野の一つ。一つ目のジュエルシードは多少の幸運はあったけれど、紛れもなく僕が自分の力で探し当てて封印したものだ。それで魔力を大量に消費してこの世界の魔力素が僕に合わず、魔力回復が遅いせいで二個目には失敗してしまったのだけだ。

あの時は暴走体相手に戦いながらなんていう無理をしたからという事情もある。でもなのはのお陰で僕は十分な休息をとれているから未発動のジュエルシードを探して封印するくらいはできるはずだ。僕は、僕に今できることをするんだ。

「…この辺りで反応があった…どこだろう？」

草むらの中で周りから見えないようにして魔力にジュエルシードが反応しないように慎重に術式構成した探索魔法を発動させた僕は反応があつた地点付近を歩いてた。この姿は楽ではあるんだけど…視線が低いから見渡せる範囲が狭いのが困るね。見落としは少ないのかもしれないけれど…木にでも登ってみようかな。…ああ、地面じゃなくて木の上つてこともあるのか。意外と大変かもしれないぞこれは。

「にゃー」

へ？

動物の鳴き声で振り返る。ああ、これはこの世界の猫という生物だつたつけ。よく似たのが一部の他の次元世界でも見られる割とポピュラーな生き物。…問題なのは、その猫が僕を好奇心そのものという目で見ていることだ。

「にゃああああー！」

！

かくして僕は猫と森の中を延々と追いかけてこをする事になり…。

も…もうだめだ…。

地面にへたりこみかけたその時…。なあっ、じゅ、ジュエルシードお！？僕が啞然としていた間に…興味が移ったらしい猫が近付いて行き…。止める間もなく、ジュエルシードが発動してしまい、辺りは光に包まれて…

…あれ？

猫は全く外見上変化が無い。…おかしいな、もうあの猫の願いを叶えたのかな。一体どんな願いだったんだろう…。ってまた興味が僕に…に、逃げなきゃ！

って明らかにさっきより走るのが速いよどういことなの！？

“とても素早くなった”

…ああ、僕を捕まえるために素早くなりたいたいという願いを叶えたのか…。

『ごめんなのは！えっと…その…猫が—』

で、現在に至る。フェレットはイタチの仲間だけど、なんだか猫に追われる鼠の想いが分かったような気がする。よ、よし。覚悟を決めよう。凄くすばしっこいけれど僕にだってやれるはずだ。冷静になつてよく見てみるとまだ子猫で、どうやらじゃれて遊びたいだけみたいだ。豊田さんたちが張った結界も展開されているし、これなら心配することは—

その時だった、風に運ばれて、かすかな声が聞こえてきたのは。

「バルディッシュ。フォトンランサー、連撃」

> Photon lancer・Full autofir
e・<

「なっ！？魔法の光…」

これは…直射型の射撃魔法！飛び退いた子猫の足元に連続して突き刺さる。弾速は早いけれど、素早い動きで避けられてしまったみたいだ。

放ったのは…黒を基調とした薄手の衣服―バリアジャケットなのだろうけど…少々際どい気がする…―を身につけた…なのはと同じくらい年齢であろう金髪ツインテールの女の子。髪の色は同じくらいだけどアリサちゃんではないね。瞳の色が違うし彼女はこんなに落ち着いた感じの子じゃない。彼女はふわりと木の上から僕の側に降り立った。

「君、大丈夫？誰かの使い魔なのかな」

「…あ、いや…僕は…」

僕は返答に窮した。まず自分が使い魔ではないと答えるべきか、助けてくれてありがとうと言うべきか、何故ここにいるのかと聞くべきか。どうしたものかと考える前にとりあえず深呼吸をして落ち着こう。子猫は少し離れたところで様子を窺っているから一息つけるんだし。

「ユーノくん、大丈夫…ってあれ？」

そこになのはも到着して…こ、これは波乱の予感がするよ…。

『こちらバックアップ01、ジュエルシードの暴走を確認。ユーノ君と高町嬢、ジュエルシードをとりこんだ…猫と対峙中。ただ、もう一人…現場に人がいます。高町嬢と同年代と思しき少女です』

「猫…はともかくどうということだ。訓練用地確保機能の不具合か…？」

やはり急ごしらえの機能、完全には当てにはできないのか？とにかくその少女も含めて暴走体から引き剥がさなくては。後はなのは君が持っている無線機で落ち着いたユーノ君から情報をもらわないことにはどうにもならん…。彼女たちで単独対処が可能なのか、それとも我々による攻撃が必要なのか。念のため、HLG対応駆逐艦4隻は艦砲射撃が可能な位置にまで進出しているが…。

『こちらユーノです。彼女は…彼女は魔導師です。恐らく僕と同じ世界からやってきた…』

「時空管理局か？」

そうであれば話が早い。ユーノ君たちには悪いがロストロギア回収の専門家の彼らに任せた方が安全確実だろうし我々も元の世界に戻る算段がつく。

『それにしても様子がおかしいです。…もしかしてここに観光でやってきた魔導師が善意で僕を助けようとしてくれたのかもしれない』

ん
『

「観光… っていいのか？」

『… あー、僕もそういう口実でここに来ていますしきちんと信用のある人なら魔法の行使制限とかはあるけれど結構緩いんです。僕の場合はスクライア一族が社会的に信用があるのでそれを利用したと言っつか…』

「……」

期待と異なるその返答に落胆する前に、本当に大丈夫なのか時空管理局、と一瞬思ってしまった。どこかのハリウッド映画ではあるまいし気付いたら地球は異星人ならぬ異世界人で溢れていたなんていうオチがあつたりするんじゃないだろうな。この件に関してはいづれじっくり話したいが… 今はそれどころではないな。

「であれば協力を要請しても問題あるまい。君に交渉を一任する。状況は知りたいからそのまま繋いだままで頼む」

『はい。… 僕はユーノ・スクライア。危ないところを助けてくれてありがとう』

『… 怪我が無くてよかった。下がっていて』

『あ、いや、それはジュエルシードというロストログアの暴走体で…』

『大丈夫』

『え、あ、ちよつ。君、話を聞いて!』

続いて轟音。バックアップが先ほどと同じ黄色の閃光を確認したと報告してきた。その間もユーノ君は相手に訴えかけているがこれは効果がなさそうだ。しかしなのは君とそう年がかわらなそうな少女という割には随分と落ち着いた感じの声だった。

「…一任してよかったですか?」

「ユーノ君が悪いと言うより向こうが話を聞く気がないようだ。…日野中尉、暴走体を捕捉できるか?」

「あ、はい。はつきりと…何で…こんな造影、よっぽど大きくなきや有り得ないのに!」

「ちよつと待て。普通の猫サイズだってバックアップは言っているぞ? 超兵器ノイズとはいえどうしてレーダーに鮮明に映るんだ。地上にいたら映るはずがない!」

副長の言葉はもつともだ。私も駄目元で聞いたのだから驚いた。海からだと都市部の建造物の陰になっており、作戦地点の地上にあるものをレーダーでとらえるのは不可能に近い。どういうことだ。たしかに超兵器ノイズについては発生原理すらよく分かっていないのだが…。

「そ、それは私にも分かりません。それに他の艦のレーダーではここまではつきりとは捉えられないみたいで…あーもう、あの規則性のある微少ノイズといいどうして澤風ばかり!」

日野中尉の泣き言も分かる。これが澤風の故障ならいいのだが…む

しろ逆に他の艦よりもレーダー性能が高いようなふしすらあるのが困る。これは後でまとめて博士を問い詰めなければなるまい。信頼できない兵器で戦うことなどできるはずがない。

「やはりリアルタイムで現地情報が分からないのは厳しいな…一応攻撃準備はしておこう」

「了解」

歯がゆいな…ユーノ君たちに任せるしかないか…。

第二十五話 それは気まずい出会いなの？（後書き）

艦隊が活躍すると見せかけて戦力外通告の巻。目標と味方が近過ぎるのでどっちにしろ暴走体を彼女たちが振り切らない限り攻撃は難しいです。

○海鳴市郊外

月村家は明らかに市街地から遠く山側っぽい。森、むっちゃ広そうですし。

○フェイト組の一般常識、アルフの結界術式

リニスがずつと一緒だったので戦闘一辺倒ではなく、あっさりと行動がばれて管理局などに追われないようにこの辺りもきちんと教育されている。

○ユーノの念話がオープンだった

それだけ慌てていたため。他に魔導師がいないと思っていたのもある。はやては結界から除外されたので今回も出番無し。

○ジュエルシード発動とその願い

アニメでも猫に追いかけられていたので。ユーノは不憫。

○フェイト登場

原作アニメだと明らかに森の中なのにも関わらず電信柱に乗って登場。あれ？

○フェイトとアリサ

フェイト登場当時、一部では言われていたらしいです。

…バーニングする予定は今のところありません。

○管理外世界への渡航

なんというか…続編などを見るに管理局員とか身分がある程度保証されている場合、ザルですよね。

○黙っているのは

ユーノが念話で状況を説明中。まだマルチタスクを使いこなせていないのでそちらに集中しています。

○リアルタイム情報

ビデオカメラでもあれば別でしょうがTVクルー状態では隠密活動には向きませんし、少なくとも今回は無理ですね。現状、バックアップは伝言ゲーム、ユーノの方はSoundOnly状態です。

4・24改稿 誤字修正。

5・12改稿 一部表現、誤字修正。加筆修正。後書整理。

5・16改稿 後書にてオープン念話時のはやてに關して補足。

7・21改稿 一部表現修正。

第二十六話 引けない想いが衝突…するのはお預けなの？（前書き）

暴走する経緯の時点で真面目な戦闘になるわけがなかったですね。

題の「なの」はもう開き直りの証のような気がします。

第二十六話 引けない想いが衝突…するのはお預けなの？

海鳴市郊外 月村家敷地内 高町なのは

「ユーノくん、大丈夫…ってあれ？」

レイジングハートに助けてもらいながらまだ慣れない飛行魔法を使って駆けつけてみたら…これはどういう状況なのかな。あの子猫がジュエルシードに取り込まれてしまったのはユーノくんの念話で分かっているけれどあの女の子は誰だろう。猫…暴走体はじつと無表情な女の子とにらみ合いをしているのでその間にユーノくんから事情を聞こうかな。

『ごめんなのは。心配かけたかな』

『ううん、大丈夫そうでよかった。ごめんね遅くなっ』

『ああそうだ。トランシーバーは持ってきてくれたかい？』

『うん、ちよっと待ってね。今からベルトをかけるから…でもこれなんだかシユールだよユーノくん』

ユーノくんの手では到底持てないサイズなんだから仕方ないんだろうけど…流石にこれはどうなのかな…。ひとつ間違えたら動物虐待って言われちゃいそうなの。無線機背負ったフェレット…うーん。

『あはは、まあ仕方ないよ。…その彼女の魔法のお陰で助かった

よ。たぶん僕と同じ世界から来たんだと思う』

「ふえ？」

「きゆう！？」

「あわわ、ご、ごめんねユーノくん」

ユーノくんの思いがけない一言はちょうどトランシーバーを背負えるようにベルトを締めてあげている時だったので…思わず力が。謝りながらも頭は混乱したまま。ユーノくんの世界から来た魔導師なら魔法の扱いも素人同然のわたしより上手なはず…もしかして、もうわたしは要らないのかな…。何かが見えたように思えた矢先のことに目の前が真っ暗になりそうで…。

『なのは』

『ほ、ほんとにごめんね？大丈夫？』

『そ、それはいいんだ。それより僕の言うことをよく聞いて。助けてもらっておいてこんなことを考えるのはどうかとは思っただけ…彼女が本当に味方かどうかは分からない』

『にやつ！？』

思わず気の抜けたときに出てしまう恥ずかしい声が口から出そうになったけれどなんとか抑え込む。たぶん、表情にも出ていないはずだよ。ユーノくと会話でお話しているところを見られた時に、なんだか難しい顔をして考え込んでいるように見えたってすずかちゃんに言われたし…。アリサちゃんもむすつとした顔をしていたか

ら心配かけちゃったかな。

『それってどういう意味？ユーノくん』

『管理外世界では無闇に魔法を行使しちゃいけないことになってい
るって教えたよね？』

『うん、魔法を知らない世界になるべく影響を与えないようにする
ためなんだよね』

わたしと話す間もユーノくんは豊田さんに連絡を…うーん、マルチ
タスクって言うんだよね？一度にいろいろなことを同時に処理する
技能。魔法限定というわけではないし、そもそも概念としてはわた
したちの世界にもあるものらしいの。できるようになったら便利か
もしれないなあ。いろいろずるい使い方がほんのちよつと頭に浮か
びかけたけれど、慌てて打ち消しました。…流石に授業中に別のこ
とを考えるとこういう使い方はよくないと思うの。

『彼女は魔力攻撃設定とはいえいきなり生物に攻撃魔法を撃ちこん
だんだ』

『ええと、それって大怪我しないようにする魔法の使い方だったよ
ね。それでもいきなりはおかしいかな。…驚かせて逃げてもらおう
としたのかも？』

『いや、明らかに当てようとしていたよ。あれが暴走体じゃなくて
ただの子猫なら間違はなく直撃していただろうね』

たしかにユーノくんの言う通りちよつとおかしい。管理外世界で魔
法を使っちゃいけないのはその世界になるべく干渉しないためなん

だから、やむを得ず使う時でもできるだけ影響が少ないような使い方をしないと場合によっては何年も刑務所で過ごさないといけなくなってしまうらしいの。

だとしたらユーノくんが得意な相手を傷つけずに拘束できるバインド系魔法とか、もうちょっと穏便な方法があるんじゃないのかな。魔法には得手不得手があるからあの子が攻撃系の魔法しか使えなかったとしても、直接子猫を狙わなくてもよかったはずなの。あの子猫はぱつと見たところでは何の変哲もない…というより事情を知っているわたしにもあの子猫が暴走体と言われてもすぐには信じられないのに…あの子は躊躇なく攻撃した…。

実のところ、ユーノくとわたしもやむをえずというところはあるにせよ魔法を使ってしまっているので人のことは言えないけれど…ちょっとあの子のやり方はおかしいよね？

『ちょっとお話聞きたいな…』

『そうだね…なんか声が怖いよなのは』

フェイト・テストロッサ

白っぽいバリジャケットの魔導師―この使い魔の主かな―が降りてくるのを見ながら私は密かに焦っていた。アルフ曰く私は感情があまり顔に出ないらしいので気付かれていなければいいのだけど。

問題なのはオープンで念話で助けを求めていた使い魔らしき小動物が暴走体に襲われているのを見て、攻撃魔法を撃ち込んでしまったこと。ジユエルシードを知らない人から見れば私はいきなり現地の生物に攻撃魔法を撃つ危険人物でしかない。せめて威嚇にしておいたら言い訳もついたのに。焦ると判断力が落ちると散々注意されていたのにこれだ…。

なにやら彼女は使い魔に機械を背負わせ、耳の辺りにイヤホンを当てて…使い魔がバインドで固定した。なんという力技。彼女は何も言わなかったのでおそらく何があつたのか念話で聞き出しているのだらう。使い魔がぼそぼそと小さな声で喋っているけれどよく聞こえない。焦りは募るけれど変に動くのもよくない。ここは様子を見よう。

「…僕はユーノ・スクライア。危ないところを助けてくれてありがとう」

私が態度を決めかねている間に相談があるいは報告が終わったのか彼、ユーノ・スクライアは今度は私に聞こえるようにしっかりと名乗った。スクライア一族…という事はこれは彼らに伝わるという変身魔法…。使い魔扱いしてしまった。慌てて頭を下げる私に彼は気にしていないという風に首を横に振った。

「…怪我が無くてよかった。下がっていて」

「あ、いや、それはジユエルシードというロストログアの暴走体で」

「大丈夫」

彼がジユエルシードを知らなければ…と思ったけれどどうやらそれ

も叶わぬ願いらしい。適当に誤魔化して回収してしまうのはもう無理。けれどスクライアの一族は学者肌で戦闘には不慣れなはず。もう一人の女の子も飛び方がまるで素人。念話に集中していた様子からするとマルチタスクにも不慣れなようだから魔法そのものの初心者かもしれない。

時空管理局かもしれないという最悪の可能性はこれで消えたと言っている。連絡相手が分からないことだけが不安材料かな。ジュエルシードについて母さんは膨大な魔力出力を持つとしか言っていないかったけれど、リニスによれば不安定で危険なロストログアなのでもたたしていれば時空管理局が回収に乗り出すという話だった。発掘したのはスクライア一族だというから彼が一足先に知人と来たのかもしれない。あるいは彼女もスクライア一族？

分からないことは多いけれど彼らは既に私に不審感を持っている。となればジュエルシードの危険性を知っている以上、話し合いで私に渡してくれるとは考えにくいし、管理局に報告せずにいてくれるとも思えない。

「え、あ、ちよつ。君、話を聞いて！」

リニスが言っていたことを思い出しながら深呼吸して精神を集中させる。暴走体そのものへの攻撃はさほど危険はない。ジュエルシードを露出させた後の封印の際には細心の注意が必要。一つ間違えば次元震を引き起こす。それでも、どんなに危険でも母さんが求めたもの。研究を叶えてくれるかもしれない希望。

「バルディツシュ」

> Yes , Sir . <

無理はしないようにとリニスは言ったけれど、アルフも無鉄砲な私を諷めてくれるけれど…母さんと一緒にいたいという想いは、止められない。母さんの頼んだのが悪いことなのは分かっている。これから私がするのはもっと悪いことなのも分かる。

でも、それでも…止まるわけにはいかない。…リニスもアルフも…そして母さん自身も何も言わないけれど…母さんは病気なんだ。顔色も悪いし、今回のことを伝える時に咳き込んで口に当てていた手に血がついているのを私は見た。母さんには…私たちには時間が無いんだ。

ユーノ・スクライア

「ユーノくん、わたしも行くね」

「…分かった。援護するけど無茶はだめだよ」

なのはも暴走体に向かっていった。元々僕とじゃれたかったから素早くなっただけで本質はただの猫なのだろうから暴走体自体はそこまで危険ではないはずだけど…僕は鎌にも似た魔力刃を形成しているデバイスを手に空を舞うあの子に目を向けた。ミッド式には珍しい接近戦に秀でた魔導師なのかもしれない。

無線からは建物の陰になっていてレーダーがきかず直接に援護できない旨を伝えてきている。つまり僕らだけでなんとかしなくちゃい

けないってことだけど……なのはは案の定、暴走体の早さに翻弄されている。それは単になのはが魔法にまだ不慣れというより戦うということそのものに慣れていないからだろう。

「なのは、上だ！」

「ふええ！？」

暴走体がこちらばかり狙うのはあの子に向かつても軽くあしらわれてしまうからだ。あるいは慌てるなのはの様子を面白がっているのかもしれない。落ち着いた対処を見る限り、あの子はそれなりに経験を積んでいるみたいだ。最初の攻防では暴走体がかなり素早いのでほとんど高速機動戦みたいになっていた。

スクライア一族の僕が戦いを見る目があるのがおかしいと感じるかもしれないけれど、ある意味僕らも戦いの最前線にいる。たかが歴史、遺跡と馬鹿にしてもらっては困る。“明るみに出てはまずい歴史的事実”やそれこそジュエルシードのようなロストロギアを発見することもある。だから一族の面々は最低限自衛できる程度に訓練をしているし、状況に応じて管理局に警護を求めたり、魔導師を雇うことすらある。遺跡内部も守護者やトラップなど危険はてんこもり。発掘は戦争だ！とは先人が残した言葉だったりする。

ちなみにレイジングハートは万が一の時も防御魔法を独自判断で展開してくれるから少しでも危険を減らせるだろう、という族長の計らいでプレゼントされたものだ。ただ発掘品の中にあつた彼女をプレゼント買うのを忘れていたから丁度いいと思って渡したという情けない事実と、拳句レイジングハートが僕に適合しないことが発覚するに至り、一族総出でフルボッコにされたというオチがついていたりする。

プレゼントは計画的に。あと靴とインテリジェントデバイスは合わないこともあるからやめておいた方がいい。自分の誕生日に育ての親たちがフレットモードになって半ば本気で戦い出したので仲裁する羽目になった僕からのお願いだ。

「は、速すぎて狙いがつけられないよユーノくん！」

「うう、なのはに張り付かれて迂闊にバインドできない……」

…そんな僕だから分かる。僕となのはの二人で立ち向かってても…あの子には勝てない。

ジュエルシード自体はそこまで有名というわけではないけれど、全くの無名というわけでもない。何しろ願いを叶える魔法の宝石だ。けれどもこの暴走体はほとんど見た目は変わらないし、魔力量もさほど多いわけでもない。これがジュエルシードの産物ということを見ただけで確信できるかと言えばそれは甚だ怪しい。

…やはり通りすがりに僕を助けた善人というには彼女の行動はちぐはぐだ。最悪の場合、彼女はジュエルシードを狙う次元犯罪者で、僕を使い魔と思っていたので口封じのために主が近くに来るまで待つていたという可能性すらある。怪我が無くてよかったという彼女の言葉を信じたいところだけど。

「ふにやあ。レ、レイジングハートなんとかしてえ」

> Uh... But it doesn't intend to hurt you... < (あー、いえ、害意がなさそうなので…)

完全にじゃれつかれているねなのは…。うん、あれだ。ほんとに悪戯好きの子猫がじゃれてるだけなんだ。もうこの際暴走体そのものについては考えるのをやめよう。あの子がたぶんなんとかする。ジユエルシードを僕らで確保して彼女の正体を少しでも探る方法を考えよう。そうしよう。…まあ、戦闘後に口封じ、という可能性もあるから警戒はしなきゃならないだろうけど…困惑しているのはどうやら彼女も同じみたいだからなあ。

第二十六話 引けない想いが衝突…するのはお預けなの？（後書き）

ユーノ、現実逃避に走るの巻。そしてスクライアー族フェレットフ
アイト自重。

微妙に重なる時間軸を別キャラ視点で次々と書いていたので話が進
まない上に分かりにくいという…疑問点等ありましたら感想まで。

○無線機背負ったフェレット

ユーノ哀れ。

○授業中に別のことゝ

なのはさん良心回路オン。フラグ。

○魔力攻撃設定

いわゆる非殺傷設定。術式の調整はデバイスや使用者に依存し、あ
まりに威力の高い、あるいは素人による術式では相応の危険がある
とします。

○ちょっとお話聞きたいな…

少々フェイトの行動が迂闊だったので頭冷やされるフラグが建ちま
した。10年くらい早いのは気のせいです。

○フェイトはジュエルシードを奪って逃走するつもり

どうせ管理局に警戒されてやりにくくなるなら今のうちにという判
断。二人を適当にあしらって逃げるくらいの自信があったのもある。

○ユーノとレイジングハートの馴れ初め

独自設定。それなりに値が張るはずのインテリジェントデバイスな

のだから、何かの間違いがないと適応しないユーノの手に渡り、そのまま所持するということにはならないはず。

○ 愉快的スクライアー族

彼らは地味にいろいろな意味で強いんだけど行動原理が残念なのであまり役に立たないです。これから毎日遺跡発掘して歴史研究しようぜ？

○ VS 子猫暴走体

なのはは訓練を始めたばかりで手も足も出ず、害意がまるでないの
でレイハさんもそう邪険に扱えなくて困っています。ユーノもふら
ふら飛んでいるなのはの周辺をうるちよろされてタイミングがつか
めない状態。フェイトも覚悟を決めたつもりだったのにどうしたも
のかと困惑中。…ま、タイトルの時点でまともな戦闘期待した人な
んていないですよ…。

5・12 改稿 一部表現、誤字修正。後書整理。

7・21 改稿 一部表現修正。

第二十七話 魔導師がいつばいの！？（前書き）

ライバルと三人目とその他大勢が一気に来たという。

ここまで遅かったけれど恐らくこれで一気に加速します。とこころどころギャグっぱさはあるけど久々にまともな「なの」回ですよ！

第二十七話 魔導師がいつぱいなのです！？

海鳴市郊外 大尉

「ちい…狙いがつけられんな」

小学校での出来事の反省として今度の上陸では多少なりとも火力をということとで小火器を持ち込んでいる。私はスコープ付のアサルトライフル、今ツーマンセルを組んでいる部下は対超兵器レーダーを持っているので武装は拳銃のみだ。もつともこれでも大して役には立たないだろうが…。

「魔法とやらで多少は大丈夫らしいですが…」

「だからと言って誤射していいものではないだろう。それにもう一人魔導師らしいが…状況が分からん」

この距離なら止まってさえいれば撃ち抜く自信はあるが…どうもあのもう一人の魔導師は胡散臭いな。助けたにしては妙に行動が一方的だ。いきなりの攻撃といい…アレが何か分かった上で行動しているように見えなくもない。…あの魔導師が“敵”という可能性も考えておいた方がいいな。その時は…子供であろうと…。自然と、グリップを握る手に力が入る。

「ユーノ君」

『ど、どうしました？大尉さん』

「なのは君では対処できそうにないように見える。こちらで狙撃するぞ。少しの間でいい。動くなと伝えてくれ。それで暴走体が止まれば撃つ」

『え、ええ！？でも効果があるかは…』

「このまま遊んでいるつもりか？」

『…う、わ、分かりました。伝えます』

呼吸を落ち着けていく。…OK、いい感じだ。いつも通り、いつも通りだ。

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ リンディ・ハラウン

ようやく現地での活動の目途がついたところでジュエルシードの暴走…ね。心の休まる暇がないわ。幸いなのは極めて小規模で現状全く危険がなさそうなところ。暴走体も攻撃性はなし…というより暴走と言えるのかしらあれは？この世界の人からすれば飛行する上に魔導師にすら追従できる速さ、というのが問題でしょうけど。空飛ぶ猫なんてニユースになっちゃおうわ。

ただ…問題なのは関わっている人たちの内訳ね。

「エイミィ、この世界への渡航者及び現地滞在者に彼らのデータは

あるかしら？」

「あ、はい。一人は…旅行者としてデータがありました。変身魔法を行使中のあの小動物はユーノ・スクライア、ジュエルシードが発掘された遺跡の発掘責任者です」

「このタイミングで休暇…か。回収するつもりでこの世界に来たと見るべきだな。事故そのものは知られているし、落着の状況も輸送を依頼したスクライア一族なら分かるはずだ」

彼の書いたジュエルシードに関しての報告書からすれば気持ちは分からないではないわね。今のうちに大した危険がない可能性もあるけれど場合によっては次元世界丸ごと滅ぼしかねないモノ。一早く現地に飛んだ彼の行動は必ずしも非難できない。私の立場から責めることがあるとすれば連携をとろうとしなかったことかしらね。リスクを考えれば単独行動は危険が高すぎる。

「…気持ちは分からないではないわ。やっぱりこういうときに組織は動きがどうしても、ね」

「それでも十分早いですよ。それに個人でできる事は限られて…」

「でもクロノくん、この二人は魔力量が尋常じゃないよ。どちらも名簿にはないので…現地人が無許可滞在者だね」

「…どんなに魔力量があつたって使い方次第だ。黒い方はともかく白い方の子はまるで素人だぞ」

どちらもクロノと魔力量だけなら同等か…あるいは上？こんな小さな子たちが…。様子からすると白い服の子がスクライアの子と顔見

知りでもう一方はどちらとも面識がなさそうね。素人…ね。白い服の子は“探偵”さんが言っていた裏の世界の人の娘さんかもしれないわ。念話以外の方法で誰かと連絡をとっていたところからすると非魔導師の協力者もいるのかしら。あるいはそちらが娘さん？まだ判断がつかないわね…。

「非魔導師が結界内にいないかも調べて頂戴。結界もちょっと特殊な術式のようなのでできる限り情報収集を。それから万が一に備えて転送も準備して」

「結界の術式は…うーん、凄く複雑、封時、強装？他にも何かありそうです…しかも使われている魔力量が凄く…。多分個人による展開ではなく何らかの設備によるものかと。解析には時間がかかりますね。転送もかなり魔力を食いますけど…アースラの設備なら問題ありません」

「エイミイ、非魔導師が結界内にいるぞ…というかなんだこの結界展開範囲は」

「そうなのよ、探索も大変。後回しにしているけど海まで広がってるのよ？近くに二人、映像に出しますね」

管理外世界にこんな大掛かりな結界魔法を展開できる設備が存在するとは信じられないわね。これは…本局の訓練施設より上等なんじゃないかしら。市街地がすっぽり包み込まれてしまっているなんて…。そもそも彼らだけのためにここまで広大な結界が必要な理由はないように思えるのだけど。

何故、が頭の中を回っている間に件の二人が映像に映し出される。運動着のような地味な服装で、一人はトランクを開き、双眼鏡で暴

走体の方を…もう一人は…私は息を呑み、クロノが声を上げた。

「し、質量兵器だ！」

月村家敷地内 ユーノ・スクライア

『なのは、大尉さんが暴走体を狙撃する。少しの間動かないで』

『そ、狙撃？…だ、大丈夫なの…？』

『大尉さんはなのはに当てたりしないよ。バリアジャケットがあるし、防御魔法もあるから…』と言っても怖いよね…』

そうだよ。目と鼻の先にいる暴走体を狙って撃つんだから。大尉さんも暴走体にだけ当てる自信があるから言っただろう。なら…僕はなのはの肩に飛び乗った。こういつときの度胸は発掘作業でついている。自慢にはならないけれど。

『大丈夫、僕がついているよ。なのは』

『ユーノ…くん』

なのはは目を見開いて、ついで表情を崩し、大きく深呼吸して…キツと鋭い視線で暴走体を睨みつけた。

うわあなにこのしょうじょこわい

…今いたい僕は何を…。ちょっとぼうつとしている間に、レイジングハートがプロテクションを展開して…そして視線に晒された暴走体が一瞬、固まった僕と同じように動きを止め…銃声？大きく飛び退いた？いや違う、狙撃されたんだ。そうだ、チャンスは今しかない！

「チエーンバインド！」

動きは…止めたっ！なのはからは十分離れている。これなら…。ミッドチルダ式の魔導師には珍しい近接戦闘用の魔力刃をデバイスから出してタイミングを計っていたあの女の子が素早く動き、一閃…子猫からジュエルシードが弾き出された。状況判断力もある、やはり相手にはしたくないな。僕は内心ため息をつきつつ、一瞬の事で何が起ったのか分かっていないなのはに声をかけた。

「なのは、封印を！」

「あ、う、うん。ユーノくん…ええと、名前は知らないけどあなたも下がって！」

> Stand by ready . Let's shoot .
<

「え、ほ、砲撃魔法！？」

「ってなのは、砲撃じゃなくても！」

終始表情があまり変わらなかったあの子も驚いている。じゅ、十分近いから普通に封印魔法でいいのに…！レイジングハートも何で焚

きつけてるんだい！？学校から帰った後はマルチタスクの訓練を兼ねて僕と話しながらレイジングハートがイメージ上の仮想空間で戦闘訓練をつけてくれていたはずだけど…もしかしてこの前の街で撃った砲撃魔法の完成系を試し撃ちするつもりじゃあ。…いや、確かにいわゆるイメージトレーニングだけじゃなかなかうまくいかないし、実戦で通用しないのは事実だけど時と場合を…あわわ、でも止まりそうにないっ！に、逃げないと！

「デイベイン…」

「ストップだ！」

「にゃ…ば、ばすたあ？」

> Oh... <

…あー…なんか急にジュエルシードの前に黒髪の男の子が転送されてきて…うん、砲撃は急に止まらないって言うしね。…言わないかためらいがちだったけどしっかり撃ちました。なのは…ストレスでも溜まってたのかな…。レイジングハートもその辺りを考えたのかも。ジュエルシードに向けて撃ったのだから多分封印効果を重視した術式オプションをレイジングハートが選択しているはず。…今だけは族長、感謝します。もしストレージデバイスだったらと思うと手の震えが止まりません。

そして光が晴れた後…いつの間にかあの女の子はいなくなっていた。やはり何か後ろ暗いことがあったのかもしれない。

「う、ごめんなさい…」

> Sorry . . . I considered circumstances . < (すみません、周囲の状況から手加減はしたのですが…)

「だ、大丈夫ですか？」

「も、問題ない。ラウンドシールドがなければ危なかった…なんて馬鹿魔力だ…」

肩の上から見ていたけれど、凄かったよ…。まあ僕でもその気になれば止められたとは思っけど…。で、なのはの砲撃をあっさり防ぎ切った今度の魔導師は…一体何者なんだ？

「時空管理局執務官、第5次元巡察隊に出向中のクロノ・ハラオウン三等海佐だ。次元漂流者保護のための活動中に現地に漂着したロストロギアの反応を捕捉した為来たんだが…登録のない魔導師二人…いや一人は逃げたか。あと休暇中のはずのユーノ・スクライア…更には協力者の方々…まとめて話を聞かせてもらおうか？…いやその前に封印か」

そう言っただけで彼はデバイスから浮かび上がった身分証を仕舞うと手馴れた様子で封印術式を施してジュールシールドを回収する。執務官といえばエリートじゃないか。もしかして思った以上に事故が大きく扱われて執務官が本局から現地パトロールの次元巡察隊に派遣されたのかもしれない。

子猫は掠り傷で済んでいたので大事なさそうだ。たぶん大尉さんがわざと致命的な部位を外したんだと思う。神妙そうにしていたなのはもこれには顔をほころばせていた。

「こんなに早く管理局が動くなんて…」

「気持ちは分からないでもないがこれで認識を改めて欲しいな。管理局も頭の固い人たちばかりじゃないということさ」

終始やや固い表情だったクロノさんは僅かに唇の端を吊り上げた。頭の固い、というところに自覚があるタイプなのかもしれない。でも悪い人には見えないな。

『ユーノ君』

「あ、はいどうしました？」

『外部スピーカーに切り替えてくれ。彼と話がしたい』

「分かりました」

クロノ・ハラオウン三等海佐

やれやれ、特殊な結界に質量兵器、挙句ジュエルシードに撃ち込まれかけた砲撃魔法…驚かされっぱなしだな。砲撃魔法については封印効果のあるものだったらしいが…あの至近距離、それもジュエルシード単体に撃つ意味はあったのか？まあ平謝りする女の子にぐちぐちと言うつもりはないが。しかし結果的に早とちりになったわけ…後でエイミィと母さんにまたからかわれそうだ。今から頭が痛い。

「エイミィ、あの魔導師は？」

『ごめんクロノ君、追跡できなかった。御丁寧にダミーをいくつもばら撒きながらで…ミラージュハイドが何かで隠れたか、もう境界の外に出たかしているかも』

やや戸惑っていたように見えたけれどやはりしつかりと訓練を積んだ魔導師か。それも戦闘だけじゃなく隠密行動もできるタイプとなると厄介だな。ゲリラ的に動かれると難しい。どういつつもりなのか今のところ何とも言えないが…アースラの追跡を巻くほどの用心深さからすると何か裏があると見て間違いないな。

「あ、あのハラオウン執務官」

「ああ、クロノでいい。その、苗字だと提督と被るんだ」

「よいしょっと…第5次元巡察隊司令、リンディ・ハラオウン少将です。できればあなた方にお話を聞きたいんですけど」

「にゃ、よ、妖精さん？」

「あらやだ」

変身魔法で妖精形態になった母さんが転送されてきて、僕の肩の上で―ユーノ・スクライアと奇しくも構図が同じだ―首をかしげて微笑んでいる…。

まずは生真面目な僕を送り込んでからできる限り友好的に、というのがいつものやり方でエイミィ曰くは飴と鞭ということらしい。そ

んなに僕はぶつきらぼうか…？二人の前で言えば全力で肯定された後、でも可愛いところが、などとその…男の威厳がただ下がりするような話をされるだろうな。

…できれば母さんもそろそろ年齢を考えて欲しい。こればかりは本人も出来心だったと認めているけれど。僕が以前上から下まできちりと報告書に書いたのでロウラン中將にばれて散々からかわれたらしい。その後、顔は笑っているけれど目が笑っていない母さんが本気で模擬戦を仕掛けてきたのは…思い出したくない。

そういえば元々エイミーにはあれこれとからかわれてはいたけれど、それに母さんまで便乗した拳句、今のようなマスケット扱いにまで酷くなつたのはそれからのような気がする。報復か、報復なのか！？

「ええと、彼女は僕に協力してくれている現地の人で…」

「た、高町なのはです」

「あと他にも協力してくれている人たちがいます」

『無線越しで失礼する。こちらは二人のジュエルシード回収に協力している国連海軍第十三任務部隊司令、豊田浩二准将です。次元漂流者には心当たりがあります…我々ですね』

「あらら…あっさり口実が解決してしまったかしら」

ユーノの背負った無線機からの爆弾発言を母さんは表情一つ変えずにさらりと受け流した。僕は恐らく少し驚きが表に出てしまっているだろう。ロウラン中將が笑っている母さんは本心がまるで見えないので怖いと言っていた。僕はこういう交渉の場面ではまだまだだ

な。こればかりは経験がモノを言うのだから、これからだと分かっているけれど。

第二十七話 魔導師がいつばいななの！？（後書き）

イジられすぎて既に苦勞人の気があるクロノの巻。大尉はギリギリじゃない。そもそも狙撃銃じゃないし。悪しからず。

○大尉たちは状況が分かっていない

ユーノはフェイトに疑念を持ったものの、本人を目の前に声に出して言うわけにもいかなないので管理局員ではない魔導師らしいとの情報しか伝えることができていません。 第二十五話

○その時暴走体は見た

近代ベルカ式作画のなのはさん@9歳。近代なのに一古い（一期）とはこれ如何に。

○至近距離で砲撃魔法

普段やりたい事を抑圧されていた人なら一発ぶっぱなしたいと思っても不思議じゃない。トリガーハッピー疑惑のRHが煽った可能性は否定できない。なのはの訓練は映画のアレ。

○レイハさんがストレージだったら

そもそも魔法がまともに発動できたかどうかも怪しい。

○やたらと長いクロノの台詞

一応、建前上はそういうことになっている。

○管理局の所属部署についての一般認識

日本の警察で例えれば、次元巡察隊に執務官が来るのは言わば所轄に警視庁の刑事が来るようなもの。次元艦隊が出てくるのはSATが出てくるような本気でやばい状況。陸士隊は交番のお巡りさん。

○ M s ・リトル状態

リンディさん一生の不覚。一度始めると今更引けないんです。…半ば本人も楽しんでいるのは否定できません。

5 ・ 3 改稿 誤字修正。

5 ・ 4 改稿 一部表現修正。

5 ・ 5 改稿 誤字修正。後書追記。

5 ・ 8 改稿 クロノの砲撃阻止理由加筆。

5 ・ 1 2 改稿 子猫の顛末加筆。一部表現、誤字修正。後書整理。

7 ・ 4 改稿 リンディが全体の責任者という部分が改訂によりそぐわなくなったので削除。

7 ・ 2 1 改稿 一部表現修正。

第二十八話 笑顔で左手で握手なの？（前書き）

わたしは左利きだから左手握手は友好の証なの！

でも変身シーンでブンブン回しているときは右手だったような…

RHに関しては右手で持ったり左手で持ったりと一定しません。

日常生活では概ね左手を使う様子が描写されているので真面目に考察するならクロスドミナンスと考えるべきなのかもしれません。…
ネタにセルフマジレスこわい…。

第二十八話 笑顔で左手で握手なの？

海鳴市郊外 月村家敷地内 リンディ・ハラオウン

「ちょっと待ってくれ…いえ、下さい。どういう経緯で協力することになったのか説明してもらえませんか？」

クロノは相手が准将ということ思い出して慌てて言い直したようね。純真そうなのはさんはともかく彼らに関してはスクライアの少年の言う通りなのでしょう。第296管理外世界は私が行くはずだった世界だから彼らの事情などを私は知っている。終戦後の超兵器機関に対する彼らの感情を考えれば“兵器になり得る危険な遺失技術”という存在を許すことなどではしなはず。

しかし軍事組織というものが命令もなくそう簡単に自らの判断だけで動くものかしら。そういう意味では非常に緩い時空管理局に身を置いている私がどうこう言う立場にはないのかもしれないけれど。…まあ、彼らがどういふ部隊なのかも分からないうちにあまり考えすぎても仕方ないわ。街に何チームか彼らと思しき兵士たちがいることがアースラの索敵で分かっているものの、それ以外にも戦力があるのはほぼ確実でしょうし。流石にこの時の私は解析が後回しにされていた海上に艦隊が展開しているとは思ってはいなかった。

『それは…少々長くなります。どこか場所を移して顔を合わせて話した方がよいのでは？』

「できればアースラまで状況説明ができる方に来て頂きたいのです

が」

『…いいでしょう。ちょうど適任者がいますので』

適任者…とはどういうことかしら。なんにせよ、彼らはこちらが信用できるかどうかを試すカードを切ってきたようだわ。ならばこちらも対価を払うべきというもの。クロノがやや納得できない顔をしているけれど彼らと争って得になることはない。だから私は僅かな疑問を覚えつつも、その適任者について追求することはなかった。

「では後ほど…ところで遅れましたが魔法や時空管理局のことは…？」

『ユーノ君から概ねは。…我々の技術が特異なものであるというところがそれで分かりました。ですから慎重にならざるを得ないのです。ご理解頂きたい』

おそらくあの謎の結界についてのことでしょね。単身こちらにやってきたスクライアの少年は優秀な結界魔導師ではあるものの、アースラの解析では到底一人で張れるようなものではないことが分かっている。結界破壊にどれだけの魔力が必要なのか検討もつかないのだ。アースラの搭載魔導砲に魔導炉からめい一杯魔力を回して撃ち抜けるかどうか、というエイミイの報告をきいたときは耳を疑ったわ。

…それに先ほどの自己紹介で唯一の一般人と思えたなのはさんの正体も分かった。この件に関わる一般人で、親が裏社会の住人。高町という姓。そちらにも私は話を通さなければならぬよね。

ユーノ・スクライア

「あの、少しよろしいですか」

局員の二人ががやや怪訝そうな顔で、なのはがきよとした表情で僕を見る。

「なのはの家族に事情を説明するべきではないかと思うのですが」

「え、でもユーノくん。魔法のことは秘密にしくちやいけないんじゃないの？」

「いや、なのはを危険なことに巻き込んでおいて知らない振りして帰るなんて僕にはできないよ。きちんと謝りたいんだ」

そう言つて頭を下げる。リンディさんたちが思案顔で顔を見合わせ――恐らく念話で相談をして――いる間、豊田さんは何も言わなかった。ジュエルシードの封印には手を貸してくれたけど、それ以上のことには手を出さないでいるべきだと思っているのだろうね。

族長が僕にいろいろ考える機会として発掘責任者を任せたのは立場に応じた言動を学ばせるためだったのかもしれない。組織の代表者として余計な軋轢を生みかねない行動をなるべくしないように、何か事を起こすにしても相手方への配慮を忘れない。時には自分の考えや想いを押し殺さなければならない。

豊田さんたちがジュエルシード封印に手を貸したのは難しい判断だ

ったと思う。できることなら何もせずに管理局が到着するまで身を隠すのがベターだからだ。恐らく僕らを手助けしたのはリスクとメリットを計った上での行動であって100パーセント善意での行動ではないと思う。でも豊田さんたちは賭けに勝った。少なくとも管理局の彼らに対する態度はそう悪いものではなさそうだ。

その点、僕は失点続きになる。独断専行、情報伝達不足、挙句現地人を事件に巻き込んでしまった。けれどもだからといってここで放り出すわけにはいかないんだ。してしまったことの責任はできる範囲でとらないといけない。それが責任者というものだと思う。

「わかりました。その際には私たちも立ち会います」

「よろしくお願いします」

「え、でもでも」

「ここまで事件に関わってしまった以上、なのはさんが才能のある魔導師であることは早晩明らかになってしまうわ。その時ご家族が魔法について何も知らないのは危険なの。大丈夫よ、きっと受け入れてくれるわ」

リンディ提督がにつこりと笑いかけると、不安そうにしていたなのも表情を崩して頷く。…完全に納得した様子ではないけれど、これはやっぱり必要なことだと思う。

たしかになのはには魔法の才能がある。でもこれは小説やゲームの世界じゃない。絶対無敵の主人公はいないし、やられ役の敵キャラもない。怪我をするかもしれないし、最悪、命を落とす可能性だってないわけじゃない。僕は魔法や僕らの住む世界の仕組みを説明

はした。けれどもそういう危険を…なのはどこまで分かっているんだろうか？

前日夜 海鳴港沖 第十三任務部隊 駆逐艦澤風 鈴木和人少佐

「…ああ、これは魔導師が使う遭難通信魔法の一種ですね」

俺たちはユーノ君から魔法や世界のことについていろいろと教えてもらっていた。彼は人―そう言っているのかはいまいち謎だが―が、いいようで、比較的中立的な視点であれこれと解説してくれていた。

俺たち同様魔法の知識が全くなかったのは君に短期間で自分の世界や魔法について教えた上に、魔法の使い方まで教えた手腕を考えると、将来良い教師になるのではないだろうか。もともと魔法の使い方や実際の運用についての教育はインテリジェントデバイス―驚くべきことに高度なAIを積んでいるらしい―であるレイジングハート嬢によるところが大きいらしい。…ただ、短いながらもなんとなく理解できた彼の性格からすると謙遜の可能性は否定できない。

その中でもしかして、と思いい例の通信について駄目元で聞いてみたのだ。機密にあたる部分をことごとく黒く塗り潰された虫食いだらけの資料。せいぜい魔導師の視点からの推測が、魔法が関与しているかどうか程度が分かれば御の字だと思っていたのだが。

「何らかの原因で次元世界を飛び越えてしまう次元漂流者についてはお話ししましたよね」

「ああ、俺たちのような存在は稀ではあるが全くないというわけではないんだろう？」

「はい。非魔導師はもちろん、魔導師にとっても次元漂流は場合によつては致命的なんです」

何らかの膨大なエネルギーによつて引き起こされる次元震や、はたまたロストログアの一種によつて別の次元世界に飛んでしまう、一種の“神隠し”とも言える現象は決して多いわけではないが、少なからず報告されているという。管理外世界の人間はもちろんのこと、管理世界の人々にとつても次元世界を越えるような転移魔法の類は誰もが使えるというものではなく、転移先が管理外世界であった場合などはそのままそこで一生を終えていたというケースもあったらしい。

次元世界を越えるほどの転移魔法はそれなりの実力者でかつ適性のあるものが、あらかじめ転移元や転移先を調査した上でなければ魔力や術式構成で相当の無理をしなければならしく運用は現実的ではなく、その辺りから個人が自身の位置を把握できないままに転移することは危険であり、堅く戒められている行為なのだという。転移先に人や建物がある場合などはきちんと術式を組んでいればエラーでキャンセルさせることも可能らしいが、たとえば車の前に突然転移したりすれば事故を引き起こすことになるからだ。

「まあ、術式がとんでもなく複雑になり、かつ膨大な魔力を消費してもいいというならこれでもかと安全対策を施してしまえば知らない場所から転移するのでもできなくはないらしい。ただどのくらいの安全基準が要るのかと考えればキリがなく、また必要とされる魔力もそれに応じて際限なく増えるので実力のある魔導師でもあまり転

移魔法をホイホイと使うことはなく、あくまで他にどうしようもない、緊急避難的に用いることがある程度らしい。

ちなみに管理局の次元航行艦―空も宇宙も飛べる万能艦艇が多いらしい。なにそのSF――なら魔導炉から潤沢に魔力を使えるので、ある程度は力技による転送が可能だそうだ。基本的には管理外世界に不介入にも関わらず、管理局が現地調査をしているのはそのため。データ収拾の目的もあるらしい。：UFO騒ぎって一部はソレなんじゃないのかとふと思ってしまった。まあ俺たちからすればタダで安全を守ってくれている人たちなんだから文句を言うつもりはないんだが。

「ほぼ安全と言われてもホイホイ常用しようとは思わないわな」

「同じ次元世界内で安全を確保した地点同士を相応の設備で運用するなら交通事故以下の確率で飛べる信頼性があるんですけどね。条件にもよりますけど個人で知らない土地から飛ぼうとするとせいぜい70%くらいの安全性らしいという統計があります」

つまるところ管理世界の人々にとっての転移魔法というのは一般的には公共交通機関の延長上にある存在ということなのだろう。：まあ、次元漂流自体、転移先座標が狂ったものの奇跡的に助かったというケースもあるので一種の転移魔法の結果といえなくもないそう。他には古いその手の装置によって転送されてしまった、という場合もあるとか。もちろんそのときは転送先の装置が使えるか、そもそも転送先が存在するのかという問題もある。

「そういう風に周知されているのでそれ以外の方法で助からないと確信できない限りは無闇に博打同然の転移魔法は使わない、というのが一般的なんです」

「…ああ、なるほどそれで遭難信号か」

遭難したときは自分の位置や避難先が分からないうちは無闇に動き回らず、じつと救助を待つというのも手である。ただそうして待つ間、自分を見つけてもらうための手は打たなければならない。船も遭難した際にはそうした通信を用い、万が一沈んだときも自動的に位置情報を発信する装置を積んでいる。個人でもGPSなどの手段で位置を知らせることは可能だ。次元世界を渡り歩く管理世界の人々がそういった考えに至らないとは考えにくい。

「そういうことです。実はスクライアー族の発明なんですよ」

「発掘つながらなのに何故か役に立つ発明が本当に多いな」

俺が苦笑するとユーノ君も視線を船窓に逸らして何故なんでしょうねえ、と呟いた。彼はスクライアーの中では変り種らしいから無理もないのかもしれない。というより、変り種だからこそ常識人なのだと聞けば聞くほど納得したものだ。

スクライアー族。

それは極めて特異な集団なのだ。

第二十八話 笑顔で左手で握手なの？（後書き）

なんというチート結界。博士自重。そして第十三任務部隊側の背景事情ばらし開始。同時に魔法や管理世界関連の独自設定が垂れ流しになる予定。設定語りになると鬱陶しいので軽く流したいところなんですけどこの話の根幹設定なので勘弁していただきたい。

○管理局及び第十三任務部隊の会話

お互いを尊重。階級相応の対応や言葉遣いは友好関係を築く第一歩。原作クロノが登場時に妙に高圧的なのは“管理世界人^{ユリ}が近くにいます”“あの場で戦う危険性はなのはも知っている”という認識から、何をしているんだと怒っていたのではないでしょうが。

○高町家@裏社会

士郎は引退していますが恭也と月村家の関係上、リンディが海鳴での事件に関わる上で高町という名が出て不思議はないかと。本家はもちろんのこと。88式がとら八に詳しくないので描写は薄くテキトーになります。

○魔法ばらし予定

状況を把握しつつも見守る士郎と事実を告げるかを悩むなのはいう形でA、s終了まで引つ張るというのも検討したもの書き切る自信がなかったため没。というか士郎さんをアグレッシヴにした余波被害。

○転移、転送系魔法の扱い

独自解釈。運用に制約を設けることで決着。*いしのなかにいる*は慌てて安全対策もしないで飛んだ場合に起こるかもしれません。

無制限だと“どこ。もドア”になるというメタ理由もあり。実際設定あやふやなまま原作でも何故かあまり使用されなくなりましたし。

○スクライアー族

独自設定。次回で詳しく説明。フェレットファイトとか族長とかレイハさんの由来とかの時点でアレなのはお察し下さい。

7・21改稿 一部表現修正。

第二十九話 タグ：またスクライアか（前書き）

○類似タグ

だいたいこいつらのせい

全ての元凶

変態が知識を得た結果がこれだよ

なにこれひどい。

第二十九話 タグ：またスクライアか

海鳴港沖 第十三任務部隊 駆逐艦澤風 ユーノ・スクライア

その一員である僕が言うのもどうかとは思っけれど、スクライア一族はその成立経緯において人種や種族的な背景もなく、宗教や利権によって集まったわけでもない極めて特異な集団……としか言いようがない。まあ後天的に利権は絡んできたのだけだ。

生まれながらのスクライアというのは存在しないし、スクライアは姓ではなく一族の一員であるという証明でしかない。スクライアの名は本人にその意思があり、族長以下主だった一族の有力者による認定によって名乗ることが許されている一種の称号でしかない。

そのはじまりは時空管理局が管理世界を増やしていき、数々の次元世界の歴史研究者たちが世界や文明の歴史研究の成果の交換、議論をし、交流を深めていくために作られた一種の意見交換サークルのようなものであったと言われている。

ある次元世界の言語で“過去を識る者”という意味を持つスクライアという名がその集団につけられたのはその黎明期であり、後に構成員が洒落で姓の後にスクライアとつけて名乗ったのが現在に引き継がれる一族の伝統になったらしい。この逸話を聞いたときの副長さんの反応はこうだ。

「ろくでもない裏話が多いな」

「反論できませんね」

そしてそのうち研究者たちはお互いの研究を伝え合ううちにいつそのこと自分たちであちこちの世界を回って一緒に研究が出来ないかと考え始めた。交流の中で自分たちにはない発想や考察が出てくるなど、各世界の歴史研究に弾みがついたのもそれを後押しする理由になり、かくしてスクライアの名を名乗る一族がお互いのコネクションなどを活用して各世界を回る多世界遺跡調査及び歴史研究隊、通称スクライア一族を形成し、その後の幾つかの歴史的発見などの成果によりその存在を世界に認めさせるに至る。

で、これだけなら研究者たちが自ら動き、自分の世界だけでなく全ての次元世界の歴史研究のために世界の壁を越えて手を取り合い、ともに立ち上がった素晴らしい逸話：なのだけでも、そうは問屋が卸さないのがスクライア一族。

そのうち彼らは定住せずに遺跡から遺跡を渡り歩き共同生活を営むようになつていったのだ。そして研究や発掘のために魔法や科学に手を出してあるうことかその分野の権威になる者や、逆に同様の理由でスクライアに手を貸した魔導師や科学者がスクライアの一員になるなど、スクライアという集団の広がりは一単なる研究者の互助組織の枠を超えた歴史研究のための研究者と他の産業関係者の複合体とも言つべき―これを研産複合体、と後に呼ぶようになった―ものとなつていった。

「そういえば翻訳魔法とやらもスクライアの発明だったか？」

「常駐型翻訳魔法“分かるんです”ですね。ちなみに機械式で最も普及しているのもスクライアが開発に関わっています」

「博士といい勝負の変態集団だなおい」

「僕から言わせれば一人でそれを為し遂げている博士さんほどじゃない気がします」

「それは言わない約束だ」

ちなみに“分かるんです”は時空管理局の次元航行部隊などで採用されている。デバイスなしで行使可能で不要な言語への対応機能を削ぎ落とせば消費魔力が極限まで落ちる上にマルチタスクをほとんど圧迫しないのがウリ。

でも開発しようとそのスクライアが思った理由が“現地人と発掘交渉をするため”であったことは少なからぬ人が知っているけれど知らない振りをしている事実だと思う。取り扱い説明の冒頭に開発者の署名付でわざわざ書いてあるからだ。読まない人は知らないだろうけど。

「家に帰る暇があつたら研究だ！」スクライア初代族長の家訓

「これから毎日遺跡発掘しようぜ」一族の栄えある第一次調査隊長の訓示

「研究以外したら負けかなと思っっている」食事も採らずに研究に勤しんだ結果倒れたある一族の言葉

スクライア一族というのはそういう“偉大な”奇人変人の集まりで、余談ながらミッドチルダ語—どういうわけか比較的この世界の英語という言語に近い。これも一族の興味をひいている研究テーマだ—には天才的ながらどこかおかしいところがある人物を“スクライアのような”と表現する慣用句があるほどだったりする。

「まあそのなんだ…変わり者ばかりなんだろうが、いい人たちなんだろう？」

「ええ…まあ」

曖昧に答える僕を見て副長さんはニカツと笑ってやや乱暴に僕の頭を撫でた。彼は多分、気付かない振りをしているんだと思う。魔法や次元世界の説明をする上で彼は些細な疑問点などを度々指摘していた。そのことについてだけ何も言わなかった。そして今の“いい人たち”という言い方。

スクライア、とは本来の姓ではなく多くのスクライアには他に名乗るべき姓が存在する。

もちろん文化的に姓のない地域や人々もいる。しかし僕は度々族長やその周囲の人についての話は口にしたけれども、家族や自分のことについて、そして彼らの名前を言わなかった。僕の背伸びした姿勢…なんとなく副長さんは感じ取ったんだと思う。

「鈴木少佐、日野中尉から調査事項に進展があったとのことですが、何かあったのですか？」

「気にするようなことじゃないさ。ベントレー少佐の素行調査みないなもんだ」

「そうですか」

『スクライアの少年』

僕は思わず声を出しそうになった。この女性はたしかソナー担当官の少尉さんだ。たしか…レベッカ・オルソン少尉だっけ？何故この

人が念話を…。非魔導師であろう副長さんは全く気付いた様子もない。

「ん、そうか…もう時間も遅いしな」

『ジュエルシードに関しては協力するが、この艦隊には深入りしない方がいい』

副長さんの言葉に被せるように彼女は淡々と告げた。無線越しだけでは失礼だろうし、僕も彼らを信じる姿勢が必要なのだろうと思っ
て自ら赴いた結果がこれなのか。ますます彼らの存在がどうい
うものなのか分からなくなる。

「気をつけます」

『何故管理外世界の軍事組織に魔導師がいるんです』

僕はなるべく平静を保ちつつ、副長さんに笑いかけた。フェレット
姿なのであまり表情は分からないかもしれないけれど。少尉さんは
…僅かに口元を苦しげに歪ませた。僕の方を見ていた副長さんはそ
れには気付かずいい笑顔でぐっと指を立てた。

「まあ動物―フェレット扱いだったか？相手にちよっかいかけるの
は猫くらいだろうがね。気をつけるんだぞ」

『聞けば引き返せなくなるぞ少年。…私もあの少女を巻き込みたく
はない』

「猫ですか…そうですね気をつけます」

『…わかりました』

スクライア一族は“灰色の賢者”と呼ばれることがある。大抵の問
題に関して協力や見解を求められても一族としてははっきりとした

ことを一切口にしないからだ。族長はもちろんのこと、構成員のほとんどは一方に肩入れするような発言をすることはしない。

たしかに一族の力は強い。その気になれば管理局の中枢にだって食い込めるだろうし、次元世界一つくらいなら手中に収めることだって可能だろう。…なんというデタラメ。…そもそもスクライアー族というものの形成過程を考えれば、その結束が極めて脆いものであるのは明白なのだ。だからスクライアー族は灰色になった。能動的に他の権力機構に働きかけることを放棄した。彼らの興味の対象のことに関わる時以外には。

今回、スクライアー族がすぐに動かなかったのもそれが念頭にある。既にジュエルシードは自分たちの手を離れ、管理局に渡る途上の出来事だったために動く余地がある一方で介入すべきではなく管理局に任せるべきとの論調もあったからだ。そして僕はそんな中で…飛び出してしまっていた。僕は、族長の想いを裏切ってしまったんだろうか…。

だからその時、僕は少尉さんに何も言うことはできなかった。族長の思いを裏切り、なのはの親切心につけ込み、拳句一族を危険に晒す可能性。そこに足を踏み入れかけたのを彼女が制止したことに気付いたから。僕は何故こうも子供なんだろう。でも、子供だからこそ頼れ、頼っていいんだという声も僕には聞こえていた。

頼って、悩んで、思っ…いつから誰かに頼られて、悩むのを見守り、思われる。そんな日が、大人になる時が僕にもいつか来るんだろうか。

第二十九話 タゲ：またスクライアか（後書き）

一話まるつとユーノ視点。…ううむ、わざわざ時間戻すくらいなら入れ替えた方が自然かもしれないね。

○スクライア一族

気付いたらこんなことに。どうしてこうなった。

○常駐型翻訳魔法“分かるんです”

魔導師の言語問題についてはこれで決着。次元航行部隊なら高位魔導師だろうし、地上部隊なら一世界に留まるのだから覚えるか出身者で固めれば済む話。

○調査事項

謎の極少ノイズに似たレーダー反応…もとい遭難通信魔法のこと。

○少尉

そういうこと。

○ユーノの艦隊への行き来

夜陰に乗じてこっそり海面スレスレ飛行魔法。スカイフィッシュと見間違えた人間がいたかもしれない。

7・21改稿 一部表現修正。

第三十話 主観の現実 客観の通告 真実は何処に在りや（前書き）

気付いたらP V 1 0 0 0 0ユニーク1300超えていました。鋼鉄
クロスなのに砲煙の香りよりも謀略の調べの方が濃厚な拙作にも関
わらずありがとうございます。

影の薄い誰かさんもそろそろ出番がくるんじゃないですかね。おや、
桃色の光が…

第三十話 主観の現実 客観の通告 真実は何処に在りや

ユーノが高町家への帰路に着いた後 海鳴港沖 第十三任務部隊
駆逐艦澤風 豊田浩二准将

「で、安眠妨害された理由を聞かせて欲しいんだがね」

私は突然内火艇で澤風にやってきた博士を自室に迎え入れていた。ベッドに入って5分後にやってくるあたり計算したんじゃないかと疑いすら持つてしまう。側に控えている少尉の気の毒そうな表情でその疑いは確信に至った。事情を知らない人間から見れば愛らしさすら覚える容姿だが…悪魔の尻尾を見落とせば酷い目に遭うだろうな。このロリコンどもめ。…いかん寝起きで思考回路がおかしい。

「ん、魔法について、じゃな」

頭を振ってアホな考えを追い出す。…魔法か。ユーノ君からみつちりと各艦長を中心に講義を受けてはいるが…もしや博士も興味を持ったのだろうか。この人なら魔法ですら手玉にとってしまいうな気はする。だが次なる彼女の言葉は私の想像を超えていた。…いやなんとなくそんな気がしていなかったかと言うと嘘になるが。

「黙っていてすまない。わしは…魔法を知っておった。その少尉を含めてな」

「…なに？どういうことだオルソン少尉」

疑問の矛先が少尉に行く辺り、私も博士だと今更驚いていないのかもしれない。少尉は先ほどの表情は引つ込めて氷のような無表情になっていた。…雰囲気がるで違う。下士官上りの澤風ソナー担当官、レベッカ・オルソン少尉はもうそこにはいなかった。日野中尉をからかったり、副長とジョークを言い合う姿は…目の前の彼女からは想像もつかない。

時空管理局本局情報部、第296管理外世界担当官ナディア・ローレンヒル三等海佐。それが彼女の本当の名であり、管理世界出身の魔導師なのだという。いい加減驚きを感じる神経が麻痺しているのか、私はすんなりとそれを受け入れた。少なくとも目の前の女性が発している雰囲気は真つ当な人間のそれではない。

「本当は身分を明かすつもりはなかったのですが、次元航行部隊が来る前にお話ししておかなければと思いまして」

本局情報部というのは恐らく他の部署とはあまり仲が良くないのだろう。時空管理局自体、各部署の関係が薄い恐ろしいまでの縦割り組織らしいというのがユーノ君の説明から私が受けた印象だ。それがなかったとしても諜報関係者と前線部隊の間柄というのは悪いものと相場が決まっている。

次元航行部隊と争いを起こしたくはないのであらかじめ私に話を通しておこうという腹づもりか。あるいはあわよくば我々の処遇の主導権を握ろうと思っているのかもしれない。あとは…我々に不信感をもたれたくないのだろう。身分を偽り、内部にいたのだから。こう考えると少なくとも本局情報部という部署はすぐに腕力に訴えるつもりはないのかもしれない。我々がどうなるか、どう扱われるか皆目見当がつかない現状では考えても仕方ないのだが。

「よくよく考えれば監視されていて当然か。我々はロストロギアの部品を戦争に使用していたんだからな」

非介入と放置は違う。技術力で遅れていようが、その世界にロストロギアがあり、何らかの事故なりで暴走、周辺次元世界を巻き込んで消滅、という可能性はゼロではない。恐らく管理局は各世界に少なからぬ数の諜報員を送り込むなり、魔力観測機を飛ばすなりしているはずだ。

「状況把握と現状認識が早いと説明が楽ですね」

知っていただろうと博士に言われてオルソン少尉——ああ、ローレンヒル三佐か——はそうですね、と軽く肩を竦めた。見たところ普段の佇まいは魔法によるものでなく訓練によって培ったものだろう。私にしても今までもこういう手合いとの付き合いがなかったわけではないが全く見抜けなかった。…やはり魔導師たちの世界といっても何でも魔法で解決されているというわけではなさそうだ。

「私が第296管理外世界——貴方たちの世界にいたのはもちろん超兵器機関のこともあります。博士にはその関係で協力をしていただいていたのです」

「どうもわしは魔法の才能があつたらしくての。世界の行く末を案じてのことじゃから高町嬢とそう変わらん」

博士が魔導師、とはな。この女性の非常識な発明の数々を思えば別に不思議でもなんでもない。それどころか魔法の存在を知ったとき、無意識に博士は魔導師ではないのかと思つたほどだった。そこまで考えて私はふと脳裏に浮かんだ考えに気付いた。今までの疑問が魔法という存在によって一つに繋がった。

「まさかとは思うが、博士の一部の開発品は…」

「わしが開発したリーダーに超兵器機関が干渉するのは魔力探知系統を組み込んでおるからじゃ。謎の装置系も超兵器に対抗するために魔導炉を使っておるがシーリングが不十分で漏れてるんじゃないよ。技術的にぶつとんでるモノは大抵魔法が関わっておる」

博士は急ごしらえだから仕方がなかったんじゃないかと不貞腐れながらぶつぶつと文句を呟いている。…瓢箪から駒が出てしまった。つまるところ、度々リーダーに微弱な超兵器反応が出ていたのはそういう理由だったわけだ。実際のところは超兵器反応ならぬ魔力反応ではあるが。

超兵器機関が一見無尽蔵にエネルギーを取り出せるのも魔力と物理エネルギーを交換しているに過ぎず、原理不明な謎の装置にも魔法が関与している。HLG設計装置やHLG対応艦も全て同じであり、そう考えれば今我々が乗っているこの澤風もある意味“超兵器”ということになる。これは兵士たちにはとても知らせられん…。

「…思考停止せずに考えれば当然かもしれないですな。たった一つの解釈でこうまで認識が変わる」

「わしも不思議じゃった。いくらなんでも理解を放棄するのが早過ぎる気がするのじゃ」

しかし、だからこそ圧倒的な暴力であった超兵器に対して絶望すること無く抗うことができたのかもしれない。あれがどういった物なのかを考えれば考えるほど絶望に沈むしかなかったであろう。そんなときに博士がシュルツ少将に示したのが“目には目を”HLG対応

艦だったわけだ。どうやらこの口ぶりからしてウィルキア近衛海軍に随行していたのは間違いないらしい。

ちなみに管理世界でもそういった装置は存在しているものの、独力で管理外世界の技術者がそれを行い、携行できるまでに小型化したということが知れた時には時空管理局の関係者の間でひと悶着あったらしい。恐らく報告者であろう、かいつまんでその話をしたローレンヒル三佐は口の端に呆れ混じりの苦笑を浮かべている。

…どうやら管理世界の人間にとっても博士は規格外の存在のようだ。例の結界についてはそもそも質量兵器を禁止して魔力攻撃設定のある魔法が“公的暴力”として普及した管理世界では発想そのものがないので再現可能かは分からないそうだ。ただ必要魔力量から考えるととてもではないが個人で使えるような魔法ではないらしい。

…楽観視は決して出来ないが、我々の処遇もそこまで悲観しなくてよいかもしれない。だが少しでも気が軽くなって安心した私はふと気付いてしまった。暴走するジュエルシードとそれを封印したなのは君。我々の世界に激動をもたらした超兵器機関とそれを監視するために送り込まれたローレンヒル三佐。

「超兵器機関が止まったのは…もしや」

「…私が、各地を回って封印したからです」

思わず、体が動き、襟を掴んで三佐を壁に叩きつけていた。くぐもった呻き声。…何のために人々は戦っていたのか。命を落としたのか。天城大佐は何故死ななければならなかった？

分かっている。これはただの八つ当たりだ。自分たちの世界に横か

ら手を出されたら不快に思う人は多いだろう。彼らが対等でない、進んだ世界であるなら尚更だ。手が届きそうであっても手を出すべきではないのだ。その気持ちは私にもよく分かる。いや分かるからこそ私は激昂したのだろう。それを自覚すると急に熱が冷めていくかのように冷静になった。

手を離して彼女を解放する。軽く咳き込みつつ襟元を正す彼女。恐らく彼女は私の攻撃を避けることなど造作もないことだったはずだ。私は頭を下げるしかなかった。

「すまない。…分かつてはいるんだ。君たちが悪いわけではないのはね」

「いえ…」

超兵器機関など見つからずとも早晚あの世界では戦争が起こっていただろう。所詮、超兵器は戦争の道具として使われただけなのだから。

当時の超大国同士の競争は熾烈なものであり、欧米諸国が手を結んだのはヴァイゼンベルガーから降伏勧告という名の宣戦布告を受けただからであって、決して仲の良い味方同士であったからではない。最終段階のウィルキア制圧がウィルキア近衛軍を中心としたウィルキア解放軍によって為され、各国軍が介入しなかったのも戦後を見据えて兵力損耗を嫌い、互いに牽制しあった結果でしかない。

時空管理局は時期を見計らっていたのだ。あの情勢下で下手に上から目線の要求をしたところで誰も聞こうとはせず、それどころか協調して反発するだろう。そもそも彼らの目的は我々の世界への干渉ではなく付近の世界にも危険を及ぼしかねないロストロギアの封印、

回収を行うことであり、世界大戦を止めることではない。

下手に強行策をとればそれこそが世界大戦の引き金になりかねない。超兵器機関を封印あるいは持ち去られた国が“犯人”を捏造して戦争が始まる可能性だってあるのだ。それが管理世界に伝われば管理局の責任が追及されるのは必至だろう。余所のために自分たちの首を賭けるほど彼らもお人好しではない。

超兵器機関が暴走して次元世界を崩壊させるような事態にならない限りは、戦争終結の頃合を見計らい、超兵器機関を封印し、役立たずとなつて重要性が落ちて警備が甘くなつた頃に後々偽物にすり替えるなりする予定だつたのだろう。

少なくともこの一件が終息するまで艦隊の中では魔法と我々の世界の関係には口を閉ざすことでお互いに合意した。私たちが今、ここで担っている役割は決して放り出していないものではないからだ。ここでしっかりと働いて彼女を通じて管理局への心象が少しでもよくなければ。部下たちを無事に元の世界に帰するのが今の私の任務なのだから。

ただ私の心の奥底に燦るものがあつた。博士は一体何者なのか。まるで全てが彼女の手の平の上で踊っているかのように感じられるのだ。世界を救つた彼女の功績を考えれば有り得ないと言えないのだが、戦争の始まりから終わりまで全て彼女が関わったことと言われても不思議はないのだ。

そもそも超兵器機関を兵器運用可能にまでしたのは一体誰なのか。それは未だに判然としていない。ヴァイゼンベルガーにそそのかされた当時のウィルキアの技術者はそのほとんどが逃亡し、証拠も抹消されており追跡把握が困難だからである。

ローレンヒル三佐にしても背後にいる管理局の思惑が不透明だ。大きな組織だけに意向も一つではないのだろうが…。派遣されてくるであろう捜索隊がまともな部隊でかつ、そこそこ上に顔が利く指揮官であることを祈るしかない。

何一つ信じられるものはなく、頼れるものはない。私は、部下たちを守り切れるのだろうか…

博士

「良かったのですか、シウルツ少将の計画については何もおっしゃらずに。豊田准将は知らなかったのでは？」

「全てを知ることとは必ずしもよいことではない。それに三佐もわしに全てを話しているわけではないじゃろう」

痛いところを指摘されたのか、それはお互い様でしょう、とナディアがおどけて“少尉”の顔になって逃げた。お互い様というのも事実なのだから別に別に追求するつもりもない。計画に関わっていた第296管理外世界の人間はもう自分しかない。

“私”が“一人”と数えられるかは微妙な問題ではある。これも三佐が知らぬ真実の一つかもしれない。そもそも私自身、よく分かっているのだが。

豊田准将は悩むだろう。何を信じていいのか、何に頼ればいいのか分からないからだ。彼でなくとも職業軍人ならば自分で判断して行動しろ、とフリーハンドを与えられればうるたえるだろう。そこが戦場であれば話は別だろうが、これは政治的問題が絡むのだ。高級将校ならばその経験も多少はあるものだが、それにしたところで自由裁量を与えられることはない。それは政治家の仕事だからだ。

しかし、と私は思う。

自分が何者か分からず、自分が何をしているか分からないことよりはマシなのではないかと。

じつと手を見つめ、握り、親指から開き、小指からまた握る。この手が、自分のものでなくなる。その感覚に比べれば。

同じような悩みを持つ者たちがこの宇宙そふに少なからず存在することを私が知ったのは、これよりしばらく後のことになる。

第三十話 主観の現実 客観の通告 真実は何処に在りや（後書き）

ネタばらしと見せかけてまだ謎はあるんだよと混ぜっ返すの巻。これにて過去時間軸ほぼ終了。

○魔法と鋼鉄世界のオーバーテクノロジー

超兵器の光学兵器は超兵器機関の膨大なエネルギーで力技運用したという推測がゲーム中では語られていますが自艦で使える理由になっ
ていません。超兵器機関が魔法の産物ならそれらも魔法が関わっ
ていると考えるのが自然。

○澤風などもある意味“超兵器”

艦隊を単艦で殲滅して超兵器を時には同時に複数相手取って戦う自
艦こそが超兵器ではないかというのは鋼鉄ユーザーが一度は思うこ
とではないでしょうか。

○ローレンヒル三佐の意図

巡察隊によって正体を明かされ、第十三任務部隊に対する主導権を
握られるリスクを考慮した…とも見えるがそれは巡察隊にとっても
管理局そのものへの不信を植え付けかねない悪手のため根拠薄弱。

彼女なりの別の意図がある。

○時空管理局の対応

よくアンチ系だと上から目線で現れて撃退されたりしてますがそこ
まで彼らはアホじゃないと思います。余計に腹黒くなったのは気の
せい。言わば火事場泥棒ですからこのくらい謀略のうちにも入りま
せん。

○博士

黒幕&中二病臭増大中。合法ロリの時点で今更かもしれない。

7・21改稿 一部表現修正。

第三十一話 眠れない夜（前書き）

大人の深刻な悩み、自分の力に悩む少女、思春期歴史フェチフェレ
ット。

…あれ最後がおかしい。

第三十一話 眠れない夜

猫の暴走体鎮圧日深夜 衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ
ンディ・ハラウン少将

「気の重い話だわ…ほんと」

私は小さくため息をついて調査報告書から目を上げて背もたれに体重を預けた。こうして憂鬱な気分になっているのは、なのはさんが“探偵さん”の言っていた人物だと確証が持てたからに他ならない。

高町なのは。私立聖祥大附属小学校三年生。この事件に関わるまでは間違いなく陽の当たる道を歩んでいた少女。

そんな平凡なはずの彼女の周囲の状況は異様としか言えない有様だった。

バニングス、不破、月村。順に不穏度が増しているものの、本来ならただの小学三年生の周囲に一同に会するようなものではないはずだ。いくら聖祥に良家の子や身を引いた裏社会の人間の関係者が多く居るとはいえ不自然だ。それも当人が裏に関わる仕事をしていた人物の娘となれば尚更というもの。だから私は彼女をわざわざ調べた。しかし間違いなく彼女自身はシロだった。

そんな奇跡とも言える状況が、私たちの世界の不手際で崩れてしまった、それを告げにいかなくてはならない時間が迫っていた。そしてそれが終わればすぐさま第十三任務部隊の方々も含めての状況把

握のための話し合い。もう私の精神力はゼロよー、と弱音を吐きたくもなるけれどそういうわけにはいかないのよね。

第97管理外世界は付近の次元世界への哨戒拠点とされている。慎重に進められた現地への潜入工作と稀に起こる魔法関係の事件への対応が実を結んだ結果、ここまで現地に溶け込めたのだから今までのこの区域の担当者には頭が下がる。グレアム提督の故郷であるイギリスを中心に各地に拠点があり、情報収集が行われている。この世界ではロストロギアは確認されておらず、魔法がないことを除けば生活水準は高く、ミッドチルダ出身の人々が文句を言わないレベルに達しているので休息地にはうってつけであるという事情もある。

実のところ管理外世界への非介入が原則の時空管理局法からすると各地の次元巡察隊が行っているこういった情報収集活動は特例条項などを駆使した結果の違法スレスレの行為なのだけど、現地での行動のために必要なこととして現場では認識されている。また同様に現地で魔導師の素質がある者にどう対処するかも法的にはかなり微妙な扱いになる。

「はあ、頭が痛いわ……」

暴走体との戦闘時のデータからエイミィが解析したところ、魔力運用や術式構築の拙さから初心者であることは疑いのないところではあるものの、魔法知識の無かった人間の所業ではないという所見を彼女は述べている。レイジングハートというユーノ君から譲り受けたインテリジェントデバイスの優秀さがあるにしろ、異常なほどの才能の持ち主なのは私にも分かる。これが魔法を知って一月にも満たない人のできることはとても思えない。また魔力量も尋常ではない。

レティあたりなら目の色を変えるところだろうし、私としても手を出さずにはいられない人材なのだけど。

「そんな厚顔無恥なこと……」

だいたい高町家の一部の戦闘力から考えたら下手を打てば首が飛ぶんじゃないかしら、物理的に。“探偵さん”からフォローはするよ、という伝言が既に展開中の地上要員にあつたと聞いていなければ今頃手元に置かれた湯のみに砂糖がもう三杯は追加されているような気がする。でもそうなると逆に欲も出てくるというもの。喉元過ぎればなんとやら、拳句とらぬ狸の皮算用まで合わさっているあたりつくづく自分の卑しい根性が嫌になる。

「……ろくな死に方しないでしょうね」

海鳴市 高町家 高町なのは

わたしは全く眠れなくて起き上がった。明日、家族のみんなに本当のことを告げなくちゃいけないと思うととても眠れません。

そつとベットから抜け出して机の上を見るとユーノくんは籠の中で丸くなって静かに寝ています。今日の夜、ユーノくんはみんなの前で“喋った”の。みんな驚いていたけれど、何故かお父さんだけはすぐに納得したような顔になったのが少しだけ気になるような……。

ユーノくんは自分のことと、海鳴市で起こっていること、そしてわ

たしのこと、話さなければならぬ大切なことがあるので説明する時間が欲しいとお願いして…明日の夕食後ということになりました。

「なのはは自分の思う通りに伝えればいいと思う」

ユーノくんはそう私に告げました。力を貸して欲しい、というお願いじゃなく、自分の責任だからわたしを巻き込めない、という拒絶でもなく…。

でもね、ユーノくん。わたしはもう決めてるんだ。困っている人を見たら放っておけない。わたしはそういう人間なんだよ？自分に何かできるなら見ているだけなんてできないんだ。

そう…わたしが眠れないのは、何かできるのかが分からなくなってしまったから。

豊田さんたちは魔法こそ使えないけれど、わたしとユーノくんではなかなか見つけれなかったジュエルシードを未発動の状態で見つけた。暴走体を倒すことは難しいけれど、被害を出さずに抑え込むことには長けていた。

暴走体を手玉にとって、苦も無くあしらっていたわたしと同じくらの名前も知らない魔導師さん。目的は分からないけれど、少なくともユーノくんを助けてくれて暴走体を止めようとしてくれた。

わたしの砲撃をあつさりと防いで、まるで道の小石をどけるくらいの簡単な所作でジュエルシードを封印したクロノ執務官。見た目は可愛らしいけれど、その母親で上官のリンディ提督。

そしてユーノくんも私に魔法を覚えてくれた先生で、わたしと出会

う前にたった一人で知らない世界にやってきて、ジュエルシードを一個封印している。こんなに立派な人たちの中にわたしが混じって、できることはあるんだろうか。その迷いがわたしを眠らせてくれません。

>その…眠った方がいいと思いますよ？<

遠慮がちに、やや光量を控えてレイジングハートが明滅する。ちなみに彼女が日本語で話しているのはいくら学校で習っているとはいえ英語で魔法の説明をされてもなかなか難しくて…リンディ提督が挨拶代わりにと翻訳魔法“分かるんです”デバイス版を導入してくれていったという事情があるのです。…実を言うと半分くらい分かってなかったので凄くありがたいの。

「うん。そうだよね」

>…マスターは前マスターの言う通り、魔法の才能がおります。でも本当に貴女が凄いのは見返りも何も求めずに誰かを助けたいと思えるその心です。もっと自分に自信をお持ちになって下さい<

それきりレイジングハートは静かになった。まだ出会ってそう長くないのに、彼女はわたしをずっと見てきてくれたみたいに言ってくれるのが嬉しかった。いつでも隣にいられる存在。後から考えればわたしが求めて止まなかった存在だったのかもしれない。小さくありがとう、と言ってレイジングハートを撫でて、わたしはベットに潜り込んだ。

眠りに落ちる寸前に、あの魔導師の子の目が脳裏に浮かぶ。クールな感じで格好いい子だなと最初は思っていたけれど、あの目には見覚えがあった。そう、少し前まで毎朝鏡で見ていた目だった。誰か

のために何かをしようという目ではなく、誰かのために何かを我慢している、そんな目。

「あの子とお話、してみたいな」

ユーノ・スクライア

実を言うと僕は起きていた。

眠れるはずがない。ジュエルシードが落ちたのは、直接的には僕の責任ではない。僕が勝手に罪悪感を感じていただけのことだ。けれども魔法の世界になのはを引き込んだのが僕なのは疑いようがない僕ではない誰か、あるいは何らかの魔法の関わる事件ががいずれはなのはを巻き込んでいたのかもしれないけれど、それは言い訳にはならない。

娘さんを僕のせいで巻き込んでしまいました。

なのはは自分の意思だと、言うんだろう。目の前に困っている僕が居たから助けたと。なのはの言い分も正しい。少なくとも個々人がどう思うかはその人その人の心の中以外に答えはない。でもそう考えれば僕のこの罪悪感の僕の答えになる。

『レイジングハート』

>>…どうされました？<<

そつと念話で問いかけるとやや間を置いて彼女はいつも通り、礼儀正しいけれどどこか無機質な声で応えた。

『僕は…どうしたらいいのかな』

>>…貴方はマスターにおっしゃったじゃありませんか“自分の思う通りに”と<<

僕ははつとして顔を上げた。…なのははこちらに背を向けている。もう寝ただろうか。

…僕は、なのはの力になりたい。巻き込んでしまったとか、命の恩人だとかそういうの抜きで、そう思っている。感情を整理し切れていないけど、もしかしてこれは…こ、恋なのかもしれない。

>>…大丈夫ですか前マスター？<<

『な、なななんでもないよっ！？』

僕は慌てて籠の中に潜り込んだ。落ち着け僕の鼓動。明日は娘さんを僕に下さい…じゃない、ま、魔法についてとかいろいろ話さなきゃならないし…あ、そっちはリンディさんの仕事なのか？えーとえーと…。

…結局僕は眠れたのかって？ははは…もう陽が昇っていたような気がするよ。

第三十一話 眠れない夜（後書き）

ユーノは初心。“あの”スクライアー族で同年代の女の子と歳相応の関係があつたかどうかは果てしなく怪しい。

アニメ温泉回で鼻血舞いを披露していたのが原因のような気がしないでもない。

なのはの一人称が安定しない…やった方がいかなと取り入れたなの口調と、アニメ第一話モノログ時を参考にした丁寧口調が混ざっているのが原因ですかねえ…。 “なの” だけだとアホの子みたいだし、丁寧語全開だとなんか魔王早期光臨しそうなんですよ。パワーアップした上で。どうしよう…。

。なのの周囲

月村あたりはなんかやばそうだけど敵対しているわけではないので詳しくは突っ込んでいない。妖精さん^{リンディ}にお任せ、で済まされているのと同じこと。知れたがりは長生きしないのである。

。ミッドチルダの生活水準

多少進んでいるところはあるけど地球でも技術的には可能だろうし大差ないだろ… という突っ込みは誰もがすることではなかるうか。

。後ろ向きリンディさん

元々リリカル主要キャラには内罰的な人間が多い気もする。

とりあえずうちのところのリンディさんの砂糖の量はストレスに比例します。

○レイハさん日本語化パッチ導入

…実はこの手は最初から考えてなかったわけではないのですが…まあいろいろ限界でしたorz

そして会って早々ツバつけてるリンディさん抜け目無し。善意ダヨ他意ハナイヨ。

○お話聞きたいな、ではなくお話してみたいな
聞きたがる一方だなのはからお話することって実はあんまりないよ
うな気がします。

○レイハさん大活躍
何気ない過去の一言をふと思い出して影響されることってありませんか？デバイスはみんな覚えています。

…88式はよく忘れるのでデバイスが欲しいです。メモとってもどこにメモしたのか忘れるんです。何かやらかしていたら指摘願いますorz

7・22改稿 一部表現修正。

第三十二話 見守るといつこと 見守られるといつこと（前書き）

…あるえー…話し合いに、入れない、だと…。

嘘みたいだろ…これ、まだ4月半ばなんだぜ…。

第三十二話 見守るということ 見守られるということ

海鳴市 高町家 高町士郎

“探偵”から連絡を受けたのは昨日の夕方だった。例の妖精さんの関係者が近々こちらに説明に来る、とのことだ。なのはを巻き込んだことにわだかまりが無いとは言えないが、なのは自身もよく考えた上で関わったことだと私は信じている。まだなのはは9歳なのだから騙されていないとは限らないが、そんなことであれば“探偵”が事態の解決を向こうに任せようとは思わないだろう。

文句の一つも言って後はこちらも少しは協力してやるべきだろうか、などと考えているとなのはが大事な話があると言ったので、少々早いがいいよいよお出ましか、と思っていたら…。

流石になのはが拾ってきたフェレット…もといユーノくんがその関係者というのは予想外だった。家から抜け出してなのはと一緒に帰宅していたこともあったらしいし、フェレットにしてはおかしなところが少なからずあったので気になっていたのだが。

彼が皆に自分やこの街の事件、なのはについて話さなければならぬいことがあるので説明する時間をとって欲しいと願い…明日の夕食後ということになった。二人ほど関係者を呼び寄せる旨を恭也が決めたものの、私が承知した。恐らく“妖精さん”だろう。

なのはたちを部屋に帰した後、私は残った家族に昔の知り合いと連絡をとり、今回のことについて少なからず知っていることを告げた。

既に事態を終息させるために明日やって来る人間がなのはを巻き込んでしまったのを謝罪に来ることを知っていたことも。

告げた瞬間空気が氷点下になったので本当は今夜皆に話そうと思っていたのに先を越されたことも話した。ふふふ、ユーノくとやら… タイミングが悪過ぎるぞ。いや、薄々なのはの行動に勘付いていた恭也たちに何も言わずに独断で動いた私が悪いのだが… 様子見しつつ事情を把握しようとしている間にこうも先手を打たれ続けたのだから仕方ないと桃子が言ってくれて許してもらえた。

ありがとうマイハニーと言ったらめっ、されてしまった。しょぼん。

海鳴市 私立聖祥大附属小学校 高町なのは

「将来について考えてみるのもいいかもしれない… かあ」

街のお店やお仕事についての調べ学習のまとめに先生が言った言葉をわたしは反芻しながらタコさんウィンナーを口に放り込んだ。困っていたユーノくんを助けることはやりたいと思ったことだけど、これはお仕事じゃないよね。もし仮にだけど、これから先もこういうことが起こるとしたら、わたしの魔法の力とこの想いでなにかできるんだろ。ううん、魔法だってわたしのほんの一面でしかないんだから、そうじゃない方法で何かできるかだって考えなくちゃいけないよね。

「アリサちゃんとすずかちゃんは？」

「うちは…お父さんとお母さんの後を継がないとね」

アリサちゃんはいっきりしてるなあ、と素直な感想を呟くと、ただし、と真面目な顔になって指を立ててずいと顔を近づけてくる。え、なにになに？わたしが驚いてごくつとつばを飲み込むと、アリサちゃんはい二カッと笑う。

「そんなこと今からうじうじ考えなくてもいいんじゃない？」

「え？」

「バニングスには私しかいないから、継がなきゃいけない。そう思っ
つてがむしゃらに頑張ってたのよ。なのはたちに会う前はね」

だから周りの子たちがいい加減にやっているように見えてお友達ご
っこしているだけに見えたのかもしれないわね、とアリサちゃんは
ちよつと顔を赤くして頬をかいだ。…そうだったんだ。うう、そう
なるとわたしはそれを拳で打ち砕いちゃったってことなのかもしれ
ない。あわわ。

「でもある日の夜だったかな。パパに将来何をしたい、って聞かれ
てそれを言ったらパパ凄く怒ったのよ」

すずかちゃんとわたしは顔を見合わせる。お兄ちゃんやお姉さんが
いるわたしたちにはちよつと理由が分からなかった。

「小さいうちはやってみたいな、でいいんだって。自分の環境や自
分に何が出来るかどうかなんて考えて自分で勝手に夢を小さくしち
ゃいけないってね」

結局はできることを増やすためには頑張って努力するしかないんだけどさ、とアリサちゃんは少しだけ遠い目をして言うとお弁当に蓋をしてベンチに置き、立ち上がって空を見上げた。アリサちゃんが凄く頑張ってるのは今も昔も変わらないけれどそんな心境の変化があったなんて知らなかった。

「夢は大きく、努力は怠らず、よ！自分の思う通りの夢を見ればいいの。ちよっとだけ大人な私からの忠告よ」

そう言うアリサちゃんは凄く綺麗な笑顔だったのだけど、直後。

「で、すずかはどうなの？」

と、いたずらっぽい笑みを浮かべながらすずかちゃんに圧迫質問…。ちよっとアリサちゃんが“オトナ”に見えたような気がしたけれど、やっぱりいつものアリサちゃんでした。

「え、ええ？こ、この状況で言うの？」

「ふふふ、私だけ告白させる気なの？すずかは」

「え、あ、ううゝ」

困っているすずかちゃんを見かねてアリサちゃんを呼ぶと今度は矛先が…。

「なのははどっなのかしら？」

「わ、わたしは、ええと…翠屋の二代目？」

反射的に答えてしまった私の頬にアリサちゃんが投げつけた輪切りのレモンが張り付く！

「バカチン！アンタ何も考えて無い顔で答えて…今の私の話聞いてなかったの！」

「うああ、アリサちゃんやーめーてー」

頬を引っ張るのはやーめーてー！ほつぺた伸びちゃうよー！

「あ、アリサちゃんだめだよ、ねえ、ねえってばあ」

あはは…うん、なんだかアリサちゃんの言う通りうじうじ考えるのがバカバカしくなっちゃった。でも最後に、小さな声でバカ、って言ってアリサちゃんは顔を赤らめていた。心配してくれてるんだよね。…ごめんね。

衛星軌道上 時の庭園 リニス

管理局の到着が早い…。どうしたものか…。

どうしたらいいの、と言わんばかりに狼狽するフェイトからの連絡を受けて追跡されていないようだったのでとりあえずセーフハウスに戻るように伝えたものの、私も困ってしまった。

フェイトの対応自体は多少不審な点はあるものの言い訳が利かないわけでもないのが救いだ。少なくとも表面上はスクライアの少年を助けるために魔法を行使し、厄介事に巻き込まれたくなくて逃げたと強弁できない状況なのだ。やや不自然さはあるにせよ、これだけで重犯罪者扱いできるようなものではない。せいぜい気をつけなさいと説教される程度の話なのだ。あくまで表面上は。ジュエルシード搜索にやって来た執務官はそう考えてくれるほど間抜けではないだろうが。

管理局が管理外世界で搜索を行うには準備に時間がかかると踏んで二人を先行させ、私はプレシアの容態や管理局の動きに気をかけていた。事態が事態だけに本局から執務官クラスが次元艦隊所属艦とともに派遣される、というあたりだと思っていたのだけど、この早さはパトロール中の次元巡察隊に執務官クラスがいてそのままこちらにやって来たのかもしれない。例の輸送船の救助活動にあたっていた現地の指揮官はハラウン少将だったわね。たしか一人息子が執務官だったはずだから…もしかすると手元に置いているのかもしれない。これは予想外だった。プレシアとマンツーマン、その後はフェイトたちにつきつきりで外のことに私を含め誰も気を配っていなかったのがアダになりましたね。

管理局の到着が遅く、ジュエルシードをいくつか確保していれば“あの”プレシアの行動も読み易い。理性がやや失われているところがあるのでもっと数を確保しようと思張ってしゃしゃり出て管理局に尻尾を掴まれるだろう。うまく動かなければそれとなくミスを装って私が痕跡を残せば済む話だ。

追い詰められれば今のところフェイトの前では見せていない狂った様も見せてくれるだろうからその辺りでアルフには管理局に接触するように言い含めてある。主の母親が狂うところを見て不安に思わ

ないはずはないのだからさほど不審には思われないう。フェイトは一見冷静そうに見えるけれど実は顔に出やすい子だから演技は難しい。敵を騙すにはまず味方からの一手に限る。

アルフ離脱後のフェイトがどう動くかは微妙なところだけど…最悪プレシアについても情状酌量の余地はある。“あの”プレシアに触れてどう彼女が変わるかは分からないけれど、そこは全てが終わった後アルフがフォローするでしょうし。

状況を鑑みるに不確定要素は多いけれど大筋を変える必要性は薄い。最終段階でプレシア…マスターが“目覚められるか”は分からないけれど…どちらであっても対応できるようにしておかなければならない。

私は規則正しく寝息を立てている主に背を向けて、そつと部屋を後にした。

第三十二話 見守るということ 見守られるということ（後書き）

なのはの物語は全力全開で貫き通す彼女の不屈の意思のお話なんだと自分は思います。でも子供はもう少し大人に頼ってもいいじゃないか、大人はもう少し子供のためだけに頑張ってもいいはずだ、と自分は思うのです。

大人は子供の前でくらは希望であっていいんじゃないかなと。世相ゆえかそんな想いが88式にはあったりします。

根幹部分を揺らがせていいのかなと思いつつ、アンチにならずに書けているか心配です…ぐぬぬ。

○神社回のユーノ外出バレ

飼い主の女性が起きるまで様子を見ていて夕焼け空になっており、誰かが帰宅しているであろうのでバレてます。

彼らはなるべくなのはを“また”独りにしないようと気を遣っているのです。

○マイハニー↓めっ

万年新婚夫婦を表現しようとして筆が滑った。

○将来の夢エピソード改変

アリサをデレさせればなのはの精神安定にならないかと思った結果がこれ。バカチンは言わせないといけない気がした。

なのは

お話砲撃（なにそれこわい）とかしてないので魔法依存度が低いです。想いに忠実で決めたら一直線なのは変わりませんが。

すずか

姉が居たり、血筋の問題とかがあるので言葉を濁している感じです。
アリサ

両親は娘にダダ甘だけどときどき厳しい。墮落も腐りもせずに努力家になるところまで妄想余裕でした。

結論、ツンデレは難しい。

○リニスの行動が後手後手な上に支離滅裂
気まぐれでジュエルシードに標的が定められ、そこに輸送船事故、舞台が地球に移るというイレギュラー続きなのでプレシア組は戦力十分ながら準備不足。

支離滅裂なのは意図的なもの。リニスにはリニスの思惑があるので
す。

○アルフが演技…？

お姉さん格のリニスが長い間健在だったので影響を受けて精神面で
落ち着いている。素直で人を疑うことを知らない誰かさんのフォロ
ーのためにそう仕向けられたとも言っ。

2011.6.8 改稿 後書脱字修正。

7.22 改稿 一部表現修正。

第三十三話 ある執務官の事情と苦悩（前書き）

なのポGOD新プロモーションを見て、フローリアン姉妹…どこ
の逆行オリ主やねんと突っ込んだのは自分だけではないはず。

88式はこの話を書くのに小六法開いたという。なにそれこわい。

第三十三話 ある執務官の事情と苦悩

海鳴市 高町家 クロノ・ハラオウン

「な、なかなか立派な家だな」

『相手はただの喫茶店の店主じゃないのよ。こんなものでしょう』

ブザーを押そうとして一瞬躊躇していると鞆の中から（！）母さんが念話でいつも通りの口調で言う。顔も一見のほほんとしたあの表情なんだろう。たまの休暇で酒に酔ったときなどに仕事関係の愚痴をこぼす姿からすると意識的なポーカーフェイスであるに違いない。僕もこれから先、身につけなければならないと思うと気が重い。

母子二人での訪問になったのは現地パトロールの指揮官としてジュエルシードの到着、それに伴う高町なのは魔法への接触の説明及び謝罪を行う母さんと、到着したジュエルシードの回収について説明をしなければならぬ僕の立場の違いのせいだ。

執務官は単に事件を捜査や事件対処を職務とする一般管理局員とは異なり、そういった事件の際の法務処理も行いう職だ。一応、裁判にあたって検察官になることも制度上可能だけど、証拠を集め、犯人を逮捕する捜査員とその証拠を用いて犯罪を立証する検察官が同一人物というのは問題があるので少なくとも担当事件の検察官になることはない。そもそも人手不足の管理局に犯人を拘束できる戦闘力があり、優秀な捜査員でもある執務官を遊ばせておく余裕はないの

では有名無実化しているという事情もある。

一般的には捜査は現地地上部隊や次元巡察隊により行われ、それを元に本局で検察官が裁判に望むことになる。その作業は膨大だが、現場と法曹の意識のずれから問題が起こることも多い。

執務官にはその法務知識からある程度アタリをつけて捜査を主導でき、裁判前の資料準備も的確にこなせるため、そういった問題を未然に防ぐ役割が期待されている。執務官担当事件は一般的に捜査も難しく犯人検挙が困難であるにも関わらず、検挙率はそうでないものとはほぼ同率という統計結果もある。もっとも、そもそも事件の母数が両者で著しく異なるので高ランク魔導師が多い執務官を独占しようとする本局のインチキ統計なんだろうと当の執務官の間ですら言われているけれど。

そういうわけで執務官は重大事件には必ずと言っていいほど派遣される上に管理世界の拡大に伴って人員不足が深刻化しているためかなりの激務になる。狭き門の執務官試験を突破した人間をもつてしても精神、体力の限界というものがある。また捜査に拘る者もいれば法務処理に偏る者もいる。執務補佐官が全ての執務官に原則付けられているのは執務官の至らないところを補佐し、負担を軽減するためなのだ。

またいくら優秀な人物でも捜査というのは一人ではできないので自分のチームを持つこともあるが、大人数では移動のために艦を借用したりと手間がかかり、また知らない世界での作法や土地鑑の問題もある。そういったことから執務官には捜査のために現地部隊に協力要請をする権限があり、担当事件においては指揮権を持つことになる。その場合、階級が下にもかかわらずより上級の士官に命令を下すこともある。

また逆に現地部隊が執務官に協力を求めることは法で定められておらず、抱えている案件がある際にはほとんどの場合、それを理由に却下されてしまうことが多い。あくまで事件を抱えていないときに善意で動く、ということがあるくらいだ。…というかそうでもしないと過労死するんだから勘弁して頂きたい。

どこまでが執務官の指揮権が認められる案件なのか、現地部隊の抱える事情と執務官の指示はどちらが優先されるかということは困ったことに明文化されていない。そもそも立場と見方によって変わるのでケースバイケースだ。だがこれがしばしば問題を引き起こすこともある。

…話が逸れたがつまり何が言いたいかと言うと…。

この次元巡察隊の指揮系統は日々のパトロール業務や執務官が担当するまでもない軽犯罪などにおいては基本的には母さんが上官なのだが、僕の担当案件に関しては部下扱いとまでいかずとも指揮権で言えば僕より下になるという複雑な状態にある。

なんなんだこの罰ゲーム…。いや、既にここ一帯の案件を常駐で担当するという名目でアースラ配属になつてから何度もやっていることではあるんだがその度にやりにくい思いをしている。

もっともここに呼び寄せられる前ほどではない。次から次へとあちこちの事件を担当させられて死ぬほど忙しいわけでもなく母さん含めて現地部隊も協力的だからな。…当時ストレスを溜め込んでイライラしているのに気付かれたのかエイミィに若ハゲしても知らないぞと言われたのを思い出してしまった。それを聞いた母さんが育毛^{プレゼント}

剤を送ってきたときは首を括ろうかと思った。割と真面目に。

「やあ、君が例のお客さんかな」

「え、あ、はい。管理局の者です」

物思いに沈んでいる間に玄関に家主らしい男性が現れていた。彼が高町士郎…巻き込まれてしまった娘さんの父親だな。今は引退しているものの現役当時はかなりの腕の持ち主だったらしい。イギリスから遙々やってきた現地調査員の集めた資料で確認はしていたが、こうして生で見るとやはり驚くほど若々しく見える。この分だと妻の桃子さんも資料通りの容姿なのだろう。…ハラウン家も人様のこととは言えないが何か魔法でも使っているんじゃないのか？

「もう一人居るとなのはから聞いているんだが」

「ああ、この中に…上司、なんですけどね」

『あらあら嫌だわクロノったら』

手にした鞆をくいと持ち上げると一瞬、士郎さんの表情が引き攣る。そしてなるほどなと呟いて玄関の戸を開いて僕を迎え入れた。母さんの念話に反応したわけではないらしい。アースラの観測では高町なのは以外の高町家の面々は魔導師ではないという結果が出ているのだから当然だろう。だからこそ念話で茶々を入れたのかもしれないが…僕の顔も引き攣っていないだろうか？

だとするとあの顔の意味は…ああ、スクライアという前例を見たからかもしれない。見た目はどうひいき目に見てもここ日本という国の成人である二十歳には届いていない僕とその上司がスクライアの

ような小動物姿という構図を想像してしまったのだろう。こういう文化の違いには気をつけなければならない。特にあちこちの世界を回ることもある執務官が気を配らなければならないことのひとつだ。

…もつとも、僕の場合現地指揮官（母さん）と人事関係者（ロウラン中將）の画策の結果、半ばアースラ配属同然の状態だったりするのだが。

「ようこそ、我が家へ」

『この門をくぐる者、一切の希望を捨てよ』

聞いてはいけない気がしたのでスルーしようとしたが、勝手に母さんは講釈を始めた。この世界の昔の人が書いた作品において地獄の門の扉にそう書いてあるという描写があるとかないとか、宗教絡みでなんやかんやあるので突っ込み無用とか。…なら言わなければいいんじゃないかと思っただけで口には出さないでおいた。

その世界の人と仲良くするにはその世界の歴史や風習を知るのが一番と母さんは締めくくった。親しみを感じさせようとして少々アレなセンスを発揮するので受け手を選ぶ対応になりがちなのはこの部隊で誰もが知りつつも指摘できない母さんの悪癖だが、それで相手を怒らせたことはないようなのでもしかすると狙ってやっているのかもしれない。だとすると原因はグレアム提督か。良いジョークは人間関係を円滑にするとおっしゃっていたような気がする。

緊張を解そうとしたのであってからかう目的で言ったのではないと思いたい。少々被害妄想が入りすぎかもしれないが、こここのところの僕の扱いを考えれば誰も非難はできないと思うのだ。

第三十三話 ある執務官の事情と苦悩（後書き）

“ 時空管理局に勤めているんだが僕はもう限界かもしれない” C・ハーヴェイ名義でスレ建てするクロノを幻視した88式はエターナルコフィンで氷付けにされればいいと思います。酷い電波を受信したものですね…。

まさかのクロノいぢり回。ここまでクロノの内面描写とアースラの事情説明が薄かったので挿入。真面目にいろいろ考えて、どーすんだよと頭を抱え、素直にその感情を表に出す人が他にいないのでついクロノにこういう役回りが…。

○ 執務官と現地部隊の関係

参考：刑事訴訟法第191条～195条 検察官と司法警察職員の関係

ただし検察官と違って捜査が主。執務官補佐の存在といい、執務官の原型は検察官なんじゃないかと。戦前同様どう考えても指揮系統が混乱しますが、STSで問題になったのが指揮系統及び情報伝達なので管理局らしい(?)と言えなくもない。

○ クロノのアースラ配属裏事情

身内で事件を済ませられればやれることがいろいろある。多少強引に誤魔化したりとか。たかだか一巡察隊司令という設定になってしまったリンディが無茶するのにレティだけでは不足と考えたので補強。

○ 高町家資料

裏社会に糸が繋がっていた土郎の筋から漏れている。昨今の個人情報

報保護の関係で一般人だったら逆に難しかったかもしれない。

イギリスを活動の中心としたのはグレアムの出身地だったため。彼の年齢と管理局の成立年代、発見が97番目であることを考えると、彼が保護した局員が新たに発見された次元世界に送り込まれた調査員であつてもおかしくはないかと。

○執務官

凶悪事件やら広域犯を担当。扱いとしては次元巡察隊と次元艦隊の間。

クロノは苦勞人気質。リンディのジョークセンスはきっとグレアムが原因。英国紳士自重。

○リンディの例の出迎え

管理外世界の調査活動の存在やリンディ自身何度か海鳴で活動したことがあると独自設定したため、流石にあそこまでぶっ飛んだ対応はわざとだよなということになった。

7・22改稿 一部表現修正。

第三十四話 子供を愛していない親などいない 前編（前書き）

思いの外長くなってしまったので初の前後編です。

タイトルはこれ以外思いつかず。

士郎となのはの道場での語らい（アニメ第十話）とそれを見守る桃子の様子を見るに、高町夫婦は何かあると薄々気付いていたのではないですかね。

第三十四話 子供を愛していない親などいない 前編

海鳴市 高町家 高町士郎

なのはとそう変わらない背の丈しかない男の子が時空管理局本局執務官クロノ・ハラウン三等海佐、この事件の捜査責任者と名乗った。そして彼の手にした鞆から現れたのは手の平サイズの女性「まるで妖精だ…なるほど“探偵”が言っていたのはそういうことか―リンディ・ハラウン少将、この世界周辺の治安維持を担っているパトロール艦隊の指揮官で、彼の捜査に協力しているのだという。

「…ユーノ君の時点で常識は捨てたつもりだったんだがな」

「す、すみません」

恐縮そうに頭を下げるフェレット…ユーノ君。あららうふふと言わんばかりの微笑を浮かべながらふよふよとクロノ執務官の周囲を飛び回るリンディ提督。考えを読ませないその笑みにはどこか桃子のそれと似た香りを感じる。それを黙って見ているクロノ執務官の微妙に歪んだ口元を見てお互い苦労しているなと思わず心の中で呟いてしまった。

「思ったよりも大きなことに首を突っ込んでいたんだな、なのはは」

「あう、う、ごめんなさい」

「それよりワイヤーも何も無いんだよねこれ。ホントに飛んでるん

だ」

仏頂面の恭也を余所にユーノ君の時同様、可愛いものに目が無い美由希が目を輝かせてリンディ提督を見つめている。…桃子は流石に自重したらしい。この二人の苗字が同じということからこの人がクロノ執務官の母親か親族であり、その佇まいから我々の世界の基準でも大人と見て取れる彼女を可愛いモノ扱いするのははばかられたようだ。恭也にたしなめられてはあいと気の無い返事をして口を閉ざす美由希だが…目の輝きは相変わらずである。

「いや失礼、恥ずかしい家族で申し訳ない」

「いえいえ、うちのクロノみたいに無愛想なのも困りものですし」

「母さ…提督、自重して下さい…」

二人の関係は母子で確定のようだ。二人が実の親子かどうかは…うちと同じくいろいろと事情があるのかもしれない。気にしないことにする。同時にハラオウン家の力関係図も見えたような気がする。うちとあまり変わらないんじゃないか…？

うち？それは桃子が一番強いに決まっているだろう…。

そうしてどことなく緊張がほぐれたところでリンディ提督が自分たちや世界の理について話し出した。一体何がこの海鳴で起きているのか聞かせてもらおうとしよう。

「しかし、魔法にいくつもある次元世界、その治安を守る時空管理

局。世界を崩壊させる危険のあるジュエルシードか」

実演ということで実際に宙に浮かんでみせたなのはとクロノ執務官を見ては魔法の存在も信じないわけにはいかない。そしてそうなれば他の説明にも信憑性は出てくる。時空管理局については…魔法に関することだけとはいえ、わざわざ危険の無いように見守っている辺りまるで某星雲から来たなんたら星人みたいにお人好しな人たちだなとは思ったが。

自分のあずかり知らないところで深刻な事態が進行しているというのは別に珍しいことでも何でも無い。それが世界の崩壊となると話は別だが…本質は同じだ。世界というのは広い。自分のすぐ近くで知らぬ間にこういうことが起こっていることもある。普段から気にしてもどうにもならないが、それを知り、更になのはが関わっているとすれば…最悪、真剣を手には修羅場に踏み込むことも考慮に入れないければならないだろう。“探偵”には悪いが親馬鹿なんだよ。

「娘さんを事件に巻き込むことになったのは我々次元巡察隊の責任でもあります。申し訳ありません」

「いえっ、僕が、僕が独りで飛び出したのが悪いんです。本当にすみませんでした」

リンディ提督とユーノ君は揃って頭を下げる。妖精さんとしやべるフレットに謝罪される父親という構図…何故だかとても怒れない気分になる。先ほどの決意も少々霧散気味だ。どこかのコメディアンメカこれは。まあ馬鹿なことを考えているわけにもいくまい。それが狙いなのかもしれないのだから。視覚的效果をも武器としている可能性は否定できない。ただ熱くなりかけていた頭が冷えたのも事実だ。現役を引いて衰えた自分の腕より治安維持を任務とする彼

らの力の方がよほど信用がおけるだろう。少なくとも“探偵”がこうして事件の解決を任せるくらいには実力がある集団なのだろうか。

もつとも自分たちの所属する組織を部外者相手に悪く言うことはまず無いのだから、彼女らの言う通りなのだと鵜呑みするべきではないだろうが。時空管理局の掲げる質量兵器の撤廃とやらも、かつて命の遣り取りの世界で生きてきた人間に言わせれば魔法も質量兵器も違いは無い。命を奪うのは得物の違いではなく、あくまで振るう者の意思なのだ。

表向きは立派な看板なのかもしれないが、看板が看板たり得るのは掲げる利益があるからこそだ。ただ少なくとも我々にこうして――全てが本当かは別として――事情を説明し、現地パトロールの指揮官が謝罪して担当捜査官が今後の方針を伝えに来ているのは評価できる。組織そのものとはともかく彼らに関してはある程度信用しても問題ないだろう。

「…二人とも謝罪するのはいいけれどその姿のままだと失礼にあたると思うんだが」

「あら、それもそうだったわね」

「すっかり馴染んでいて忘れていました…」

こめかみに手を当ててため息をつきつつ指摘するクロノ執務官に対して、二人は思い出したかのように顔を見合わせる。どういうことだろうかといぶかしんでいる間に二人の体が薄く光に包まれて…

「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりだったかな」

「失礼しました。こちらではいつもこのスタイルなものでついっい」

「母さんの場合は半ばわざとだと思っよ…」

…まあ、今まで社会の一般常識から離れたところでいろいろなものを見てきたが、こういう場で何の心構えもない状態で不意打ちされると驚くしかない。フェレット改め喋る知的非人間型生命体という位置付けに扱いが更新されたユーノ君は晴れて真面目そうなのはと年代の少年になった。リンディ提督は普通の大人サイズに。先ほどより深く息を吐き出しながら苦勞人の表情を浮かべるクロノ執務官に本気で同情したくなった。

「ふえっ…ええっ!? ゆ、ユーノくんって、ユーノくんって!？」

うむ。自分より混乱している様子を見ると人間落ち着くものだ。それは驚くよな。今まで散々フェレット扱いしてきたんだから。…食事がペット用だったのを思い出した。どういうわけか別の次元世界の人間同士でも子供はできるらしいので体の作りそのものはそう変わらないはずで、つまり食べる量も似たようなものだろうから足りていたのか心配だ。早めにこうして正体が分かってよかったのかもしれない。あるいは体に引っ張られて食欲も変わるのか? 少し気になるが聞ける状況ではなさそうだ。

「えーと…見せても、言ってもいなかったっけ…?」

「…えーと、スクライア一族に変身魔法が伝わっているという話は聞いたような。で、でもでもそれがどういう魔法なのかとかは教えてもらってないよ!？」

「うーん…いろいろ教えることが多すぎて僕もよく覚えてないや。ごめんなのは。その、改めて、よろしく」

「う、うん。ユーノくん」

手を握り合い、ややお互いに頬を赤らめる微笑ましい交流の図。いやあ初々しいな。だがユーノ君、なのははやらんぞ」

「士郎さん、途中から声に出てますよ」

「初々しいなの辺りからだねえ…万年新婚夫婦の片割れが言えたことじゃない気もするけど」

桃子があらあらうふふな顔でのんびりと指摘する。おっと、考えが声に出てしまったようだ。桃子はリンディ提督と顔を見合わせてくすくすと笑っている。…うん、やはりこの二人は同種の人間だ。間違いない。…美由希、地味に心が痛いんだが。最近言葉の端々に棘が無いか！？どうやら二人には聞こえていなかったらしい。危ない危ない。なのはに限って…なのはに限って…お父さん近寄らないで！なんて思春期少女な台詞は言わないと信じてるからな！

「真剣に考えて悩んでるのは僕だけなのか…？」

「すまんなこんな家族で。同情する」

ついに崩れ落ちたクロノ執務官の肩に悟った修行僧のような顔で手を置く恭也。おいおいそれはないんじゃないか？お前もなのはに関しては大概暴走するだろうに。

第三十四話 子供を愛していない親などいない 前編（後書き）

初稿だと「そんなことになっていたのか」で済まされかけた高町家説明会でございます。：A、Sでも割とそのレベルだったじゃないかというのはともかく流石にそれはないだろとほぼ一話丸々書き上げることに。具体的説明は読者の方々にとっては繰り返しになるので端折りました。

なのは驚き、ユーノうつかりにようやく辿り着きました。途中まで真面目なのに崩れたのは「ここでボケて」と88式のゴーストが囁いたからです。

蛇足。恭也と美由希が変換候補に出ないので辞書登録。リリなのS書きの誰もが通る道を体験しました。：でもそんなに頻繁に使わないような（禁句

。某星雲のなんとら星人

紅白帽子を開いてつばを立て、腕を交差させて（ピー） 光線とか叫んだ幼き日の記憶が男性諸君にはあるのではないだろうか。

。土郎の管理局評

“そういう” 世界を見てきた人だからということももちろんありますがやたらと辛口評価なのは父親補正です。スーパー親馬鹿パワー！

そして何故か同情されるクロノ。：そのうちうちのクロノは不幸だー！とか言い出すんじゃないのか…。

。ユーノの食事情と変身魔法

変身魔法で体に引つ張られて好みも変わり、減るものと信じたい。魔力回復には影響するのだからそちらも変化するのではなかるうか。原作の描写でもイマイチ原理不明ですが一応、設定はしてあります。真面目に体の再構築術式とか考えるとどう考えても消費魔力が重い（実はユーノは余裕があつたことになる）上に失敗してアボンとか怖い光景が見えたのでかなり強引なことになってますが。

2011.6.15 改稿 クロノの階級ミス修正。一部語調修正。
7.22 改稿 一部表現修正。

第三十五話 子供を愛していない親などいない 後編（前書き）

三つも家族があるんだから全部描写するに決まってるじゃないですかー！

それにしても全部不器用家族ですよ。どの家族も“普通”ではないので仕方ないですが。

第三十五話 子供を愛していない親などいない 後編

海鳴市 リンディ・ハラウン少将

『しかし、提督。本当に彼らに全てを話す必要はあったんですか』

『…高町さんが“普通の”人たちだったら、隠したでしょうね。』

高町家を出てからのクロノの言葉に私は少しだけ手に力が入った。親は子のことには敏感なものだ。なのはさんを見ていれば分かる。あんなに愛されている子の変調にあの人たちが気付かない訳が無い。それでも彼らが日常の世界の住人ならば私は無理を承知で嘘八百を並べて隠しただろう。この世界の人々にとって魔法というのは普通ではないもの、非日常そのものなのだから。

しかし彼らは“普通”ではない。ユーノ・スクライアや第十三任務部隊が展開した結果によって真実にこそたどり着いていないものの、何か異常な出来事になるのはさんが巻き込まれているということには気付いていただろう。だとすればこちら側に引き込むくらいのもつもりでなければ、双方にとって不幸なことになっていたのは間違いない。

士郎さんは今後も捜査の状況を知らせることを条件に謝罪を受け入れてくれた。それどころかできることがあれば可能な範囲で協力してもいいという態度も見え隠れしていたので交渉は大成功と言える。ただなのはさんの今後の処遇などについては豊田さんたちを交えて行うことになっているのでまだ具体的なことについては話すことは

なかった。…あの子の意思の強い目からするとこのまま何もせずにいるとは思えないのが少々気にかかるわね。

「クロノ執務官」

「恭也さん、どうしたんですか？」

私はそつと鞆の隙間から様子を窺う。高町恭也。剣士として鍛錬を積んでいるのはさんの兄。表情の変化は控えめで常に油断のない身構えをしていたのが印象的だった。クロノもその点には気付いていただろうし向こうもそれは承知の上のはず。表向きは友好的に迎えた父親と正直に不信感を露にしていた彼の構え。でもどちらもなのはさんを想つての態度。

その彼がこうしてなのはさんのいないところで声をかけてきたとなると…何か確認したいことがあるということね。…クロノ、分かっているでしょうけど迂闊な受け答えは出来ないわよ。でもこれも勉強…ここは見守りましょう。…というより、この姿では外に出るわけにもいかないのだけど。こればかりは一生の不覚だわ…。

「魔法について聞きたい点がある」

「どうぞ」

「…人の記憶や心を操る魔法はあるのか？」

クロノが息を呑むのが伝わってきた。私たちの世界の魔法の仕組みは軽く説明したものの、魔法全てについて網羅的な説明をしたわけではない。またオリジナルの魔法を作り出す人もいるのでそんなことは不可能。でもこの人たちの世界においては魔法というのはそう

いったこともできる―奇跡と同義語として扱われることすらある―のだという認識があるのよね。ちよつと説明が不親切だったかしら。

「具体的に行動を操ったりすることや特定の記憶を狙って消したり、ましてや変えることは通常不可能です」

術式構築というのはこの世界でいうプログラムに近いところがある。なのはさんは天性の才能があるのか既に愛機レイジングハートと共に戦術に沿った術式オプシオンを構築することを始めているという。魔法と出会って間もないのに驚異的としか言いようがない。

一方で術式構築には一般的な物理的知識も必要になる。現実世界に影響を及ぼす“プログラム”である以上、そういったものを知らないければ何をどう起こせばいいのかも分からず、またどう使えばいいのかも分からない。もっともこれに関してはデバイスを辞書的に運用すればある程度カバーできる。なのはさんもそのクチだろう。更には魔法学院出のユーノ君の監修もある。

魔法が“奇跡”ではなくあくまで“技術”の延長線上である以上、詳細な原理が解明されていないこと引き起こすのは難しい。私たちの世界でも人間の感情や記憶に関しての個々の詳しいプロセスは明らかになつておらず、それを忠実に再現するには一つ一つ操作と実証を繰り返して組み上げる他なく、気の遠くなるような作業になるだろう。もっとも、それが完成すればそれだけのテストケースからあるいはその仕組みが逆に明らかになるかもしれないが、少なくとも一生かかっても不可能であろうその作業に挑もうとする正気の間はないだろう。その点をクロノはかいつまんで説明していく。

「……しかし逆に言えば、そういう細かい点を無視した強引なやり方も可能ではないのか？」

「厳密に言う魔法適性のない人でも体内にある程度の魔力、内部魔力が存在しているんです。それがそういった魔法など一部に対して拒否反応を示すんです」

例えるならそれは体内静電気のようなもの。存在はしているけれど、それを自由に引き出して利用するのは非常に難しく、また他の方法に比べて極めて非効率なので利用する研究自体が進んでいない。また健康面に与える影響も指摘されていて迂闊に触れられないのだ。そしてそういった一部の魔法は体内のそういった“利用できない”魔力と衝突し、生半可な方法では全く効果を発揮しないのだ。

生命体の内部魔力がそうした一部の魔法と衝突する原因は解明されていないものの、生命の生きる意志、防衛反応の一種ではないかというのが通説になっている。そもそも利用可能な魔力の源であるリソナーコアにしてもまだ完全には解析されておらず、この世界で言われる“身近な神秘”生命体の秘密はまだまだ私たちの世界でも明かされていないのが現実だ。

「設備と時間さえあれば膨大な魔力を流し込んで記憶を飛ばしたり、逆に誰かの記憶を転写したりという力技は可能かもしれませんが、そういう方法では操るなんていう細かい作業は無理です。それに人道上の問題で研究も禁じられています」

それを聞いて恭也君はやや表情を緩めて肩の力を抜いた。同時に緊迫した空気も霧散する。こういうタイプには冷静に正しく事実を伝えてあげれば問題はない。ふふ、クロノ、合格点ね。あるいは二人とも似たもの同士かしら。

「それもそうだろうな。…無礼なことを聞いてすまなかった。クロ

ノ執務官」

「いえ、妹さんを思えば当然の反応だと思います。僕も…なんだか分からないでもないです、恭也さん」

恭也君は少しすまなそうな顔をして、クロノは照れ隠しのようにやや頬を赤らめて握手した。…ふふ、青春っていいわね。これで水に流せてしまっただから。目の前で見せつけられると自分が穢れたように思えて駄目ね。

はあ、それにしても機会があれば桃子さんの作るケーキ、食べてみたいわね。夫の士郎氏の淹れるコーヒーも絶品らしいし…。話し合いの間は結界を張っていたから話は別だけど、この姿でいなければならぬ以上はお店に顔を出すのは無理だろうし…誰かに頼もうかしら。

衛星軌道上 時の庭園 リニス

「ケホッ、ケホッ。もう管理局が出てくるとはね」

情報収集から戻ると久々に調子が良さそうなプレシアはベッドの上で片手を挙げて出迎えてくれた。どうやら今日は“こちらの側の”プレシアらしい。状況説明を終えると彼女が咳き込む。背中をさすろうと手を置くと僅かに強張ったのに気付いた。

「プレシア、まさかとは思いますが動こうとなんて思わないで下さ

いね」

「…黙って見ていると？たしかにあの子達は成長している。けれども相手はリンディ・ハラOWN少将。落ちぶれたとはいえ管理局の勇、ハラOWN一族の人間よ」

ハラOWN家。高ランク魔導師は少なかったものの、派手でこそ無いがそつなく事態を收拾させることに長ける政治力に富んだ将校を輩出して管理局黎明期を支えていた有力者。しかし昨今の管理世界での治安悪化により魔導師ランクが高い者が管理局では優遇されるようになってきている。そのため十年ほど前にゆくゆくは次元艦隊司令と目されていた高ランク魔導師であつたクライド提督が殉職して以降、影響力を大きく減じている。

そのクライド提督の妻だつたリンディもまた魔導師としても優秀な人物だつたはずなのだが、夫を失つたショックからか以後精彩を欠き、本局勤務から次元巡察隊司令に左遷されたと聞く。もっとも口ウラン中将、グレアム元提督など有力者との繋がりもあり、決して侮れない政治力を未だ有しているのもまた事実。最近ではあれこれと裏で手を回しているという噂もあるらしい。あ

「彼女は元々夫の補佐のために執務官を目指していたそうよ。前線での戦闘経験もある。流石に鈍つてはいるでしょうけどまだフェイトたちでどうにかなる相手じゃないわ」

「それはプレシアだつて同じことです。貴女は研究者なんですよ」

それもそうね、と答える沈んだ暗い目で答えるプレシア。本当のところは彼女の持ち札を考えれば手は無いわけではないけれど…政治的にも今の彼女の体調から見ても無理だと私はその案を捨てていた。

だがその一瞬の思考の間にプレシアはぴくりと眉を上げて聞き捨て
ならない一言を発する。

「一つ方法はあるにはあるのよ」

「…っ、まさか乗艦ごと沈めるつもりですか」

暗いが、力強さを感じる彼女の視線は廃案にした手を考慮に入れて
いることを物語っていた。

確かにプレシアが膨大な出力を誇る時の庭園の魔導炉からの魔力を
用いて次元跳躍魔法を不意打ちで撃ち込み、防御の薄いところを狙
ってそこから重要部にダメージを与えるようにうまく制御できれば
次元航行艦ですら撃沈できる可能性がある。魔導炉などの魔力媒体
からの直接魔力運用、次元跳躍魔法。どちらも誰にでもできること
ではなく、これをもってかつてプレシアは魔導師ランク条件付SS
を保有していたことすらある。条件付とはいえ管理局のトップエー
スと同等と彼女は看做されていたのだ。

しかしまだまだ現役のL級次元航行艦の設計資料など表はおるか裏
にも出てはいないだろうし、要塞とも言える大きさの時の庭園を動
かすだけの出力を持つあの魔導炉にしても所詮は民間規格、戦闘艦
艇のそれとは性質が全く違う。瞬間的な発揮出力では間違いなく負
けているはずで、当然その分野が専門だったプレシアがそのことを
理解していないはずが無い。

その上、体外からの過剰な魔力入力は健常者でさえ体への影響が大
きく推奨されない。今のプレシアの病状でそんなことをすれば致命
的で、仮に時間が稼げたとしても彼女の体の方の時間が先に尽きて
しまうだろう。全部プレシアは承知の上でのことであろうけど、言

わずにはいられない。

「それが本当にフェイトの為になりますか」

「…そうね。頭に血が昇っていたわ」

「だいたい貴女は先ほどから何か忘れていませんか」

何のことなのかときよとした顔をするプレシア。病に伏しているにも関わらず年齢の割に若く見えるこの主は時々こうして穢れを知らぬ少女のような仕草を無自覚に見せることがある。頭脳明晰なのにこうしたなんでもないポ力をやることもたまにある。たぶん今となっては私だけが知っているこの人の魅力。フェイトたちにも見せてあげればいいのにと何度思ったことが。

…秘蔵ファイルにそうした主の姿の写真を納めてあるのは私の密かな楽しみの一つであったりする。後でフェイトたちに渡す瞬間を思うと心が躍る。その頃は主は三途の川を渡っているのだから私がそちらに行く頃にはほとぼりも冷めていることでしょう。

「私もいるんですよ？それでも大魔導師プレシア・テストロッサの使い魔、執務官の足止めくらいは果たして見せます」

目を見開き、次いで頬を染めて目を逸らすプレシア。…なんなんですか貴女は。年頃の女学生かなにかなんですか！？とても一児…いえ、二児の母とは思えませんね。抱きしめたくなる衝動と闘っていると、彼女がポツリと何事か呟く。

「どうしました？」

「…いえ、家族について少し思うところがあっただけよ」

過ぎ去った日々に想いを馳せているのか、遠い目をするプレシア。私は黙って肩に手を置いて身を寄せた。しばしの、二人だけの静かな時が流れる。ここにフェイトとアルフがいればどんなにいいか…。

それから彼女は端末に向かい、ほどほどにと念を押す私に気のない返事をしつつ、その実、三十分と経たずにベッドに身を横たえていた。…数値を見れば分かる。もうそのくらいしか体がもたないくらいになっているのだ。

終わりの日は近い。そのとき、私は契約を果たすことができるのだろうか。契約に沿う内容で、かつハッピーエンドを迎えるための。

第三十五話 子供を愛していない親などいない 後編（後書き）

三者三様の家族愛の図。さすがにプレシア組ではボケはほどほどに。88式の脳内ではプレシアさんは心は乙女のまま。博士とは違う意味でロリババ…。おや、空の様子が…（サンダーレイジO・D・J）

実際プレシアさんって制限つきながら個人という括りでは歴代でも最強クラスの敵だったと思うのですよ。彼女の設定に関してはMOVIE1stからかなり持ち込んでいます。そりゃ身一つであんなの撃てたら強過ぎですよ。次元転移と同じく管理局艦の存在意義が危ぶまれる魔法ですから。

○リンディの愛情

局員思考が混じってしまっているのが彼女の不器用さか。第五話で母親失格と嘆いて上官命令で抱きしめている辺り、一見距離が近いようでこの家族も歪んでいます。

身近で接しているエイミイが潤滑剤になることを祈りましょう。

○なのはの処遇後回し

家族愛に焦点を当てたかったのだ。他にもありますが。そう不自然さがないといいのですが。

○恭也の懸念

前話最後の士郎の予想通り恭也は陰で一番なのはを心配してやや暴走気味。

○記憶操作魔法

一期の頃にホイホイ使えたらプレシアがあそこまで苦勞しない。と

いうか人権なんだと思ってやがるな魔法なので当然規制対象。

クロノの発言はフラグ。リンディの思考内の“正気の人間はいないだろう”もフラグ。こちらは消化済。プレシアさんですね。

○砂糖脳

ストレス溜まってるんですよ。クロノの成長を肴に甘いものを食べたいんです。

○ハラオウン家

影響力があるようなことを言われる割には年齢から考えるならまだ存命であろう親の話とかが出て来ないのでこういうことに。

次元巡察隊司令という魔導師ランクから考えるならエリートであろうリンディにしては低い、木っ端としては高い地位を設定したのもこの辺りの影響。原因はやはりクライドの殉職が大きい。

○魔導炉出力＋次元跳躍魔法

戦略弾道ミサイルみたいなもんですよねあのコンボ。流石にカートリッジの体への影響の話があったので同様だろうと思いついて、制限をかけた。

きつと健康な彼女なら次元跳躍電磁砲が撃てる。とある大魔導師の超電磁砲ですね分かります。書いてもいいのよ（え

○リニス秘蔵ファイル

フェイトの成長記録とかアルフのお転婆場面集とかもきつとある。盗撮自重。

○プレシアの呟いたこと

フラグ。終盤で回収。

2011・6・13改稿 一部表現修正。

6・21改稿 一部加筆、表現修正。大筋変わらず。

6・27改稿 後書加筆。

7・8 改稿 後書のStSでの洗脳関係の扱いについての部分を削除。辻褄合わせるネタができたからとも言つ。

7・22改稿 一部表現修正。

第三十六話 渡る次元世界は鬼ばかり（前書き）

豊田お父さんと日野ママと鈴木君のホームドラマ…なわけないやろ
）。

第三十六話 渡る次元世界は鬼ばかり

海鳴港沖 第十三任務部隊 駆逐艦澤風 鈴木和人少佐

事の次第を司令から聞いた俺は頭を抱えそうになった。ログから微小ノイズ改め遭難通信魔法が行使された発生時刻を正確に割り出した矢先のことだ。そんなの簡単だろうと思うかもしれないが微小というだけあって始点と終点を見極めるのが非常に困難なのだ。日野中尉、真っ白に燃え尽きるだろうな、真相を知ったら。現在進行形で俺も頭の中が真っ白だ。こりゃあ……兵たちにはとても教えられないよな。

少尉は超兵器機関の活動や利用のされ方を監視するために送り込まれた管理局の人間で数年前から名前を変えて活動していた諜報員らしい。そして超兵器機関を封印し、止めた張本人。……そういうカラクリだったのかあ。ついでに階級は三等海佐。単独で現場に出るにしては少々階級が高いような気もするがクロノ三佐やリンディ少将の例がある。管理局ではそういうものなのかもしれない。

そして博士は現地協力者として魔法の存在を随分前から知っていて発明品の一部は魔法絡み。本人も魔導師らしい。空飛べるのか、博士……。リーダーの部品の特許を持っていた――段違いに性能がいいのでその部位でのシェアは軍用においては100%――のは知っていたが、そこはかなり機能は限定されるものの魔法感知系統が入っていたのが極小ノイズの原因だったらしい。超兵器ノイズが反応そのものは巨大なノイズであるにもかかわらず、通常のリーダー機能に干渉していたわけではない理由はそこにあったわけだ。

まあ、聞けばびっくりなんだそりゃ、まさしくパンドラの箱を開けたような有様だった。目の前では管理局の諜報員、ローレンヒル三佐が上目遣いに俺を見ている。…正体を知った今ではこの仕草も芝居の一環なんじゃないかと疑いたくもなる。しかし日野中尉とバカやりあつてたこの人が俺と同階級とはね。随分若く見えるな。聞いた話だとハラウン少将も子持ちであの若さ―あの大きさでクロノ執務官の母親というのはどういうカラクリなんだ―らしい。…若返りの魔法でもあるのか？

「その、済まないな鈴木少佐」

「俺は聖人君子じゃない。わだかまりがないとは言えんが…その階級章をつけたままである以上、君はまだ澤風聴音長、レベツカ・オルソン少尉なのだろう？」

正体を晒して尚、そのままにいる理由はない。拘束されたいという趣味があるのならば話は別だが。つまり彼女はまだ“こちら側”の人間ということだろう。豊田司令の“相応しい人物”を話し合いの席に送るという発言の意図もそこにあるとみえる。ま、あくまで同じ利益があるので同じ方を向いているだけとも考えられるが。

「しかし何故俺たちに手を貸す。君は管理局の人間だろう」

「一枚岩というわけではないのだよ。組織というものはそういうモノだろう鈴木少佐」

俺の納得していない顔を見てか、“少尉”は一つため息をつく。視線でモノが切れそうな厳しい表情になる。なるほどこれが“三佐”としての顔か？あるいはこれもフェイクなのかもしれないが。人的^{ヒューマン}ミント

謀報の現場の人間というのはどの顔が本物が分かったものではないからな。

しかし魔法まである世界にも関わらずこついうところは早々変わりはないらしい。やはりどこまでいってもヒトはヒトということなのだろう。

「我々の世界の技術力が問題らしいんだ副長」

「どういうことです司令。次元を渡る技術まである世界が俺たちに劣ると？」

「博士の頭脳は彼女たちの世界にとっても規格外ということだよ」

どうやら俺たちどころか他の世界のお偉方の頭まで抱えさせたらしい。博士の脳内はいったいどうなっているのやら。特に問題なのは謎の訓練用装置、及び付随機能である用地確保機能らしい。

魔力攻撃設定は魔力をそのまま相手にぶつけて魔力同士を直接相殺させ、その急激な魔力量の減少によるショックや枯渇によって相手をノックダウンさせる魔法の使い方だ。その性質上、物理的なエネルギーを相手に及ぼす危険性が低く、攻撃魔法が比較的安全な暴力である所以である。…ま、全部ユーノ大先生からの受け売りだ。ただし局所的、あるいは総量として魔力が逃げ場を失い、内部魔力―誰もが微量ながら持っている利用不可能な魔力―と干渉してして相手を傷つけることはある。また急激な魔力減衰も人体への影響が懸念されている。第一全く影響がないのなら気絶するはずがない。

質量兵器というのは物理エネルギーを物理エネルギーとして対象に

伝えている。当然といえば当然の話だ。運動エネルギーや化学エネルギー、位置エネルギーなどいろいろ形の違いこそあれど、本質的にはどれも同じ力だ。

魔法の便利な点は、魔力を物理エネルギーに変換する形、物理攻撃設定も可能な点だ。先天的体質や後天的な努力の結果としてその際に電気エネルギーや温度変化をもたらすことも可能になる。逆に言えば物理攻撃設定も魔力変換の一種なのだが。

こうした魔力変換資質を持つ者も二種類いる。先天的な場合は何故か複雑な術式や余分な魔力を消費することはない。リンカーコア内で蓄えられた魔力がそれらに親和性を持つためではないかと見られているが詳しいことは分かっていない。後天的に訓練で習得した場合はそういった戦術的ハンデを負いつつも先天的資質者の多くが逆に純粹魔力行使において同じ問題を抱えているので一長一短である。ただしいくら訓練しても後天的に習得できないこともあり、これがリンカーコア魔力親和性説に信憑性を与えている理由の一つでもある。

また魔法を行使する際の魔力光が人それぞれ違うのは体内魔力の違いによるものという説もある。体内魔力の違いについては科学的には未だ説明されていないが影響そのものは深刻で、ユーノ君はこの世界の魔力素と適合不良を起こしているのか魔力回復が遅い状態にあるらしい。あるいはジュエルシードによってばらまかれた魔力の影響かもしれないが詳しいことは分からないそうだ。常にフェレット姿なのはその状態だと魔力回復などでいろいろと都合がいいかららしい。…変身魔法なんてかえって複雑そうな気がするんだが…。

長々とした説明だが魔力と物理の変換について理解頂けただろうか。

で、ここで謎の訓練用装置だ。ヒトも建物もあまり傷つけない。つまり物理↓魔力の変換が起きていると見てまず間違いないらしい。こういった変換術式自体はさほど難しい技術でもないそうだ。生活の場でも我々の世界でいう純粋な機械と、魔法技術が関わっている魔導機械は混在しているとか。

問題なのはその経緯だ。本人が行使する場合、魔力↓物理の変換は術者本人がそういう術式をあらかじめ組んで魔力を放出する。しかし謎の訓練用装置は各艦がてんでばらばらに撃ったミサイルや砲弾を相手に着弾するタイミングで物理↓魔力変換している可能性が濃厚らしい。それだけでも膨大な演算や術式構築、魔力が必要とされ、とても現在の彼らの技術では理屈は分かっても実用化するのもバカバカしいようなことらしい。そんなことをするなら魔導炉から魔力をとって魔導砲を撃った方が面倒もないそうだ。

が、そのバカバカしい装置は発展の仕方によっては他人が放った魔法に介入するという常識外れの可能性を秘めている。これは魔法というものの存在そのものに関わる問題なので―何しろいくらでも悪用可能だ―管理局でもその扱いがどうなるか分からないのだそうだ。できることならば存在を秘匿して俺たちを匿いたいというのが彼女の意向らしい。

なるほどね…場合によっては彼女もとも口封じされる可能性だつてあるわけだ。組織のあり方を守るためとなればどういう行動に出るか分かん。そこまで過激な一方向しか見ない組織でなければいいが。少なくともここに一人、打算込みとで完全には信用できないとはいえ例外はいるのだから望みは捨てたくないが。根拠の無い期待は身を滅ぼすが何も見ずに絶望して拒絶するのもまた愚かなことだ。

博士曰くはこれは思い付きによる装置なのでどこまでできるかは分からないらしい。思いつきという発言にローレンヒル少佐がかなり微妙な顔をしていたのが印象的だった。気持ちは分からんでもない我々には現状、防ぎようが無い魔法による攻撃を最低でも物理に変換することで防御重力場や電磁防壁で軽減できないかという打算が一瞬頭をよぎる。今度提案してみるか。

ここまできて魔導師を敵に回す可能性は低いかもしれないが司令もおそらく同じことを考えているのではないだろうか。時空管理局というのは治安組織だ。武力として魔導師を多数擁しているのは想像に難くない。そして彼らが必要とされるということは“敵”も魔導師ということに他ならない。この事件にこれからも関わるとすれば間違いなく魔法とは無縁ではいられないのだ。

やれやれ、だ。俺はため息をついた。豊田司令のすまなそうな表情から彼が求めていることが分かったからだ。結局、政治からは逃げられないということなんだろう。

ウィルキア統治下となっていたとはいえ、形の上では敗戦国である日本は戦後かなり厳しい立場におかれた。そんな中で俺は将校として政治的役割をしばしば求められた。いや、軍の縮小によって行き場の無くなった軍人のほとんどがそういう役目に回されていたといってもいい。

そんな軍人としてあるまじき状態、そして自分の本分を放り出して俺たちを働かせて情眠を貪る政治家に俺は嫌気がさした。彼らの多くはヴァイゼンベルガーと手を組むのを黙認したのにも関わらず、一部の将校の非難の声に耳を傾けることなくあくまで君塚中将の軍閥による暴走によるものという姿勢を崩そうとはしなかった。それが国を捨てる選択…ここに来た理由だ。今ではその態度も国を守る

ためのものだ。たとえ理解はしているが…責任を一切被ろうとせず、死に口無しとばかりに故人に全てを被せるのには納得がいかない。司令もそれについては知っている。だからこそ俺を頼ったのだろうし、だからこそそのあの顔なのだろう。

俺が求めた居場所――純粹に軍人としての本分を果たせる立場――を守るためにあれだけ嫌だった当時の経験が役立つというのも皮肉な話だな。こういう場合、司令の負担にならぬように先にこちらから立候補するのが部下としての仕事だろう。さてリンディ少将、悪いが…敵とやりあうつもりでいかせてもらおうぞ？

それから司令に我々の要求や最低限守らなければならない点などをまとめた書類を渡され、部屋に缶詰になって内容を頭に叩き込んだ俺が“少尉”とともにアースラに向かったのはその三時間後のことである。

第三十六話 渡る次元世界は鬼ばかり（後書き）

少尉を外すあたり司令もまだローレンヒル少佐を信用していません。念話で内容漏らされたりしたら困りますからね。艦内にいてもアースラに向かつて結果は同じなので黙認した形です。

第十三任務部隊の立ち位置は非常に微妙なところにあります。だいたい博士のせい。副長が最後ノリノリですが、彼もなんだかんだ言っただけで政治的立場がそこまで嫌いなわけではないです。どちらかというと無責任な自国の政治家に腹がたっていたのが主でしょうから。時事ネタじゃないですよ…？

魔法関連の独自設定がいろいろ出てます。なるべくそれっぽく説明はしてありますが矛盾点やら疑問点があれば感想なり活動報告にてどうぞ。通常の物理法則の外っぽい扱いの割には物理学的な発想とかが混じっています。そこは気にしない方向で…。

○発生時刻割り出し

日野と副長が司令と博士、ナディアたちとの会話の裏でコソコソやってたのはコレ。

○空飛ぶ博士

ロリババア

魔導師といえば空を飛ぶというのは一期の頃の話。飛ばねえ魔導師はただの…小学三年生なの！

○内部魔力と魔力攻撃設定

相手が非魔導師でも手加減さえすれば魔力攻撃設定で気絶させることは可能。ただし内部魔力に確実に干渉するので怪我や後遺症を負わせる可能性が必然的に上昇する。非魔導師を拘束するもっとも簡

単な方法はバインド系なので大きな問題とはならない。

一方で物体にも内部魔力はあるものの、生命体のそれとは違い反応が薄いので魔力攻撃設定のままでは破壊効果は弱い。つまり壁抜きみたいなことがしたければ物体内でだけ物理攻撃設定になるような術式構成が必要。

大気中の魔力と放出した魔力があまり干渉しないのは空気中では自由に動ける状態で逃げる余地があるため。液体中や固体中では動きが制限されるのでより減衰が大きくなる。

○謎の訓練用装置
発想自体は物語的必要性。気兼ねなく砲撃がしたかっただけとも言
う。

砲弾だろうとミサイルだろうとアームドデバイスだろうと、それが持つ物理エネルギーを完全に魔力に変換できるなら相手に物理的なダメージを直接与えることはありません。魔力↓物理ができて物理↓魔力ができない道理は無いはず。

この理屈ならベルカ組も大丈夫。100%変換は無理としても怪我程度で済むくらいの手加減はできるはず。

○装置の危険性
訓練しているところに物理攻撃設定にさせたりとか、そもそも全然別の術式にしたりとか。大爆発させてもいいし、AMFみたいに使ってもいい。もし携行サイズで実用化されれば技術の存在そのものが危険なレベル。

市街地でなのは封印術式に影響が出なかったのは魔力そのものを

ぶつけたので物理↓魔力に設定されていた装置の機能と干渉しなかったため。

○防衛重力場と電磁防壁

鋼鉄名物の防衛用補助装置。前者はミサイルや砲弾などの実体弾、後者は光学兵器の威力を減衰させる効果を持ちます。どちらもゲーム中ではシールドのように艦から少し離れたところで砲弾やレーザーを弾くのが見えます。

この話の中でも役割は同じです。ですが当然、魔力を防ぐことはできません。艦の外で効果を発揮するものなので艦体に直撃するまで物理エネルギーを持たない物理攻撃設定の魔法にこれらの装置は無力です。

○W S G 2 鋼鉄の咆哮での日本

国王とともにウィルキアを脱出した近衛艦隊に日本の君塚艦隊がヴァイゼンベルガーに引き渡すために敵対するのですが、天城大佐以下一部将校が同盟国に対して不義理であると一時的ながらそれに反旗を翻すなどなかなか力オスです。たかが一艦隊とそのバックボーンの協力だけで国そのものの方針が決まるとは思えないため、政治家がなにかやらかしたとは思えません。

2011・6・27 改稿 前書一部削除、前話後書に同様の内容を加筆。

7・22 改稿 一部表現修正。

第三十七話 s h o w d o w n 前編（前書き）

またしても長くなったので分割。

交渉というのは大抵の場合、席に着いた時点で大筋は決まっているものです。

第三十七話 s h o w d o w n 前編

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ レベッカ・オルソン少尉
あるいは ナディア・ローレンヒル三等海佐

L級次元航行艦が次元巡察隊に配備されているとは…。一番艦就役から十年以上が経っているのだからもう新鋭艦というわけでもないし、次元巡察隊の任務には過剰性能だ。流石に次元巡察隊所属艦だからアルカンシエルこそ積んでいないだろうが探知能力、機動力、火力、人員運用能力、どれをとっても一線で通用し、更には一部は旗艦設備まで有する管理局の主力艦だ。同時に運用コストも洒落にならない。どうやって運用費を捻出しているのやら。

ただしL級も就役当初からケチがついていたクラスだ。十一年前のエステシア喪失の経緯を思えば縁起が悪いと敬遠する艦長もいるだろう。しかしそのエステシアの唯一の戦死者の妻が同じL級に乗るというのも随分な皮肉だ。艦を回した側は半ば嫌がらせのつもりだったのかもしれない。

「アースラへようこそ」

「こいつは…驚いたな」

言葉とは裏腹にさほど驚いた様子はない鈴木少佐。艦隊内ではおよそ士官学校次席という経歴からは想像できない態度が目立つ人物だ。だがよくよく考えてみれば参謀がいらないあの艦隊においてその役目を負っていたのは彼なのだから、あのいかにも軽い男という雰囲気

はカモフラージュだったということだろう。…あるいは素か。

出迎えはクロノ執務官か。堅苦しいかもしれないがこれも礼儀の問題だ。艦隊を代表する将校を出迎えるのだから同じくらいの人物をあてるものだ。彼はグレアム提督のところのリーゼ姉妹に鍛えられていたと聞くから肩書き相応の実力はあるのだろう。実際、高町なのはの封印砲撃を止めたときの逸らし方を見事だった。…勘違いで飛び出した時点で失笑モノだったが。年齢を経て落ち着きが出ればもっと“使える”人間になるだろうな。

だが今ではこういう使い走りが限界だ。少将もその辺りは理解していると見える。こういうタイプは使い潰される。だから手元に置いているのだろう。情けのリンディ、か。今までのハラオウンには無かったタイプの人物だ。厄介かもしれんな。

『ようこそ、ナディア・ローレンヒル三等海佐』

『…あの短期発信でよく気付いたな。腕のいいオペレーターがいるようだ』

『リミエツタ執務官補佐に言ってやって下さい、喜びますよ』

『私の柄ではないな。貴官から伝えてやるといい』

さて、彼らは私の立場をどう見ているか。それ次第で私の態度も変えねばなるまい。相手の出方を見るしかないというのは甚だ不利だが…今回は私は表舞台の側ではなく裾で観戦しているも同然の立場だ。やりようはあるだろう。

少将もよくも“あの”十一年前の状態からここまで立ち直ったもの

だ。今では優秀な人材を着々と揃えているとみえる。ロウラン中將の手腕によるところもあるだろうが、少將の人たらしぶりは有名だ。私もほだされんようにせねばな。この一件は次元巡察隊司令が手を出すような問題ではないということは釘を刺さねばなるまい。

一方、豊田司令は自分の立場をあの短時間でできうる限り把握した上でこの鈴木という食えない男を送り込んだ。この場では味方と言えるかもしれないがこの先どう動くか分からん以上、一番警戒しなければならぬ相手かもしれん。

…卓上は整った。この感覚が私は好きだ。ゾクゾクする。チップがお互いの立場と部下たちの安泰というのは少々軽い―本人の命くらいは積まれているのが私の好みだ―が…久々に心が躍るじゃないか。惜しむべきは私がこの場においては端役であり、今のところは鈴木少佐のお付きでしかない点だろう。こういうときに傍から空気を読まずにつり上げるのが私は大好きなんだがね。

リンディ・ハラウン少將

同じ世界の人間がいるならいつもの手を使うのも考えモノね。私は普段通りの艦長室―旗艦設備が充実しているし綴らしく提督用の部屋も別にあるのだけど無駄に広いので使ったことがない―に彼らを通した。諜報部の人間がいた以上、最低でもあちらには彼女の協力者がいてこちらの手の内は知れていると思った方がいいでしょうね。ただ…彼女の態度は管理局員のそれではなく、あくまであの艦隊の要員のそれ…彼女の正体を知っているのは一部のみ…？だとしても

交渉役の鈴木少佐が知らないというのは希望的観測に過ぎるわ。

でもクロノの出迎えの時の微妙な表情の動き…ローレンヒル三佐は僅かに驚いていた。…エイミィを褒めていたようだけど、どちらかというと…L級の性能だと彼女は思っていたのではないかしら。…次元巡察隊に…L級があるということに驚いていた？ずっと表に出せないような潜入捜査に従事していてこの辺りの情報まで伝わっていない可能性はあるわね。

「第5次元巡察隊司令兼アースラ艦長、リンディ・ハラオウン少将です」

「第十三任務部隊澤風副長、鈴木和人少佐です」

「同じく澤風聴音長、レベッカ・オルソン少尉です」

しれっとなんでもない風に敬礼する“オルソン少尉”。伊達に何年も諜報活動に従事しているわけではないわね。クロノもちよつと堅いものの、普段と変わらない様子で答礼する。ミスは許されないけれどクロノをいつまでもこういう場から遠ざけておくわけにもいかない。難しいわね。

「管理局や魔法、次元世界などについては…？」

「概ねはスクライアの少年から聞き及んでいます。ただ、できれば資料として頂きたいとは思いますがね。口頭の、それも一個人からの教授ではどうしても偏りが生じます」

「分かりました。手配しておきます」

前置きはいいかからさつさと始めるとのことね。三佐だけでも厄介なのに彼もなかなかのクセ者だね。この分だと受け取った資料にも難癖をつけられるかもしれない。エイミィに作成を任せた方がよさそつね。彼女の視点はいわゆる“魔導師の上から目線”ではないから反発も少なくまとめてくれるでしょう。

『単刀直入に聞いてもいいかしら？』

『どうぞ少将閣下』

『…貴女はこの件のディーラーに関わりが？』

『あると言えば、ありますが。無いと言えば、無いですね』

答えがあるとは思わなかった。彼女は自分は正直者で通っていますので、と続ける。諜報員がどの口でと思うけれど、あるいはだからこそなのかもしれない。ただでさえ正体を偽っているのだから一度でも嘘について疑惑の目を向けられるというのは好ましくないはず… もっとも嘘ではないけれど本当のことを言っただけでもないということはよくある話ね。

私は少し逡巡したものの、エイミィに資料の手配を命じつつ彼女との念話続ける。ウィンドウの向こうで了解、と敬礼しつつ小さく口を開くエイミィ。唇を読む。good luck…あの娘、普段は飄々としているけれどこういうのに向いているんじゃないかしら…？

『卓に着いた以上、もう貴女はコールは済ませたのかしら？』

『私はどちらかというと配られたカードの立場だね。手札にしてい

るのはむしろ上の連中だ』

『…貴女が単なる手札に甘んじるタイプとは思えないのだけど』

『買い被りだと思うのだがね。まあ、傍から見ている私からすれば、火傷する前にフォルドすることを勧めるよ。この場はノーリミットだ少将。悪いがテーブルステークスもない』

ありがとうございます〜などと間延びした返事をして少佐に軽く小突かれつつ、毒のない笑みを向けてくる“オルソン少尉”。でも私にはそれが悪魔の笑みに見えた。なるほどこれが本当のポーカーフエイス。常に笑みで誤魔化している私とは違うわね。しかし関わるなどと言われたも同然ね。次元巡察隊司令が座するような卓じゃないと言いたいらしいわ。

この分だとそれこそ第十三任務部隊に対しても偽りの仮面のままでいるかもしれない。だとすれば目的は…？上層部とも異なる思惑が彼女にある…？

…まずいわね。思考がまとまらない。彼女がいるせいで目の前の鈴木少佐にまるで集中できていないわ。彼らの存在、持っている技術こそが本命よ。沢山の部下を抱える豊田准将の気持ちは分かるつもり。彼らが無事に連れて帰る、その一点こそが彼らの要求のはず。そこは私も通さなければならぬ。

一先ず、彼女においては捨て置きましょう。とんでもないジョーカーだとしても、場に出ているかどうかに気をとられすぎて肝心のエースを逃しては話にならないわ。…彼女なりの彼らへの側面援護だったのかもしれないわね、これは。

第三十七話 s h o w d o w n 前編（後書き）

凄く、ドロドロしてます…これホントにリリなの一期なのかと自分でも思わないでもないです。三つ巴どころか四つ、五つの様相を呈しつつある奇奇怪怪都市海鳴。プレシアとかどこいったんだ状態ですよね。でも彼女ならそろそろやってくれるハズ。

○ローレンヒル三佐

心で嗤って顔は笑う。誰しも表の顔通りじゃありません。自分のことを端役としているのはあくまでこの場は第十三任務部隊の今後に関わる話なので厳密には当事者ではないからです。最悪知らん振りしてトンズラできますからね彼女は。その結果どこかでひき逃げに遭うかもしれません（ダメじゃん

○クロノ含め管理局員や艦隊の面々の口調

礼儀は大事。内々ではともかく外向きに馴れ合い態度はよろしくない。

○リンディの異名

順調に増加中。クロノの苦悩と比例する。

妖精さん 人たらし ハラオウンの勇 情けの ↑ n e w !

○エイミィ

彼女の弄り思考は少し見方を変えれば交渉にも使える気がしたので実務に加えてこちらの属性も。でもエイミィが艦長席に座る姿は想像できない。そういうヒト。

間違いなくクロノは尻に敷かれる。アーメン。

○ポーカー用語

次元世界にあるのかと言われるとアレだけど…似たような人間同士なんだから似たようなものはあるでしょう。

この手の用語とかを全部各世界式に翻訳し直すのは面倒な上に読者にも分かり難いのでよほどうまいのを思いつかない限り原則そういうことはしません。うまい案があったら88式に投げるか脳内変換願います。

○ノーリミット、テーブルステークスなし

レイズの上限が無いこと。テーブル上にある手持ちチップ以外にも懐の許す限り賭け金を釣り上げることができるということ。

つまりもつと上の人間ですべき話なんだから首を突っ込むなという意図を伝えている。

7・22 改稿 一部表現修正。

第三十八話 s h o w d o w n 中編（前書き）

世の中OHANASHIで決着がつくようなことばかりじゃないってことですよ。

第三十八話 show down 中編

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ 鈴木和人少佐

…リンディ提督の笑みが少し崩れたところを見ると念話とやらで少尉―提督と話す時は“三佐”だろうが―とやりあったみたいだな。見たところ少尉が一本取ったのだろう。しかし資料の話くらい最初から考えて用意しておくものなんじゃないのか？まさか口頭で済まそうなんて思っていたんじゃないだろうな。あるいはこっちの情報管理能力を疑っているのか…？

…いや、彼女たちの仕事からすれば本来こういう時の説明用フォーマツトくらいあるはずだ。それをボンと渡さずに“わざわざ”用意させることで間を作ったのかもしれない。準備を命じる時と、資料を持ってこさせる時、二度使えるからな。実際、リンディ提督が準備を命じる為に部下と会話を始めたので俺は話を途中で遮られる形になった。そのまま畳み掛けるつもりだったんだが。

食えない女性^{ヒト}だな。やりづらいぜ。もっとも俺がやりに来たのは交渉というよりは要求を突きつけることだ。主導権は本来ならこちらにあるが…俺たちの―より正確に言うならば、博士とその研究の成果であるこの艦隊の―価値がそれをイーブンに持ち込んでいる。いや、こちらが全権大使なのに対して彼女は所詮現地指揮官に過ぎないのだからこちらの方が有利ですらある。だからこそこんな状況下であるのに交渉ではなく“要求”が成立する。

まあ、向こうがどういう態度で来るかだ。言質を取らせないように

立ち回るのかそれとも初めから保護をするつもりで話をするのか。前者であれば要警戒だ。事件が終わり次第背中に気をつける必要性が出てくる。後者だったとしても右手を差し出しながら左手に銃を持っているかもしれない。

…考えすぎかもしれないが俺がここで油断して失敗するわけにはいかない。なんだかんだで豊田司令は情の人だ。高町嬢を助けた判断にも打算はあるにせよ表向きは人情からくる判断だ。隣の諜報員じやあるまいし、俺たちは外面と本音を自在に使い分けるような訓練は受けていない。たとえフリだとしてもどこか甘くなるものだ。だから司令は俺を送り込んだ。情に流されない人間として。艦隊の運命を任された高揚感はない。あるのは何もかも利用してでも俺たちの生存権を確保するという意思だけだ。

それにしても疑問なのは魔法の存在を知り、魔導師でもある博士が何故こんなモノを作り出したのか、だ。俺たちが転移しなかったとしてもいつか管理局の介入を受けてこのような事態を引き起こすことは分かっていたはずだ。ローレンヒル三佐も博士を協力者とした以上、これらの装置の正体には気付いていたであろうにどうして黙認していたのだろう。まあ…管理局も一枚岩というわけじゃないということなんだろう。管理局は治安組織だ。そして民衆を守る手段が魔法でなければならぬという絶対的な理由はどこにもありはしないのだ。

「最初に言っておきますが…我々が行う要求に納得のいく返答がない限り第十三任務部隊は時空管理局との一切の交渉を行いません」

「っ！」

柔和な笑みを保っていたリンディ提督の表情が目に見えて強張る。

クロノ執務官も目をむいている。流石に言葉がないか。ローレンヒル三佐がいることである程度内情を知られているとは思っていただろうが、まさか漂流者がここまで強硬姿勢を前面に出すとは思っていなかったのだろう。

管理局の提督の手前あは言ったものの、ユーノ君から聞いた情報こそが俺たちが求めていた混じり気の少ない素直なものだったと言える。この状態の我々が管理局員の口から“魔法を快く思わない団体がある”なんて話を聞くことはなかっただろうからな。こんな強硬姿勢―半ば脅し―が通るのはそれを知ることができたからだ。我々を懐柔できなければそういう連中にこの技術がいつてしまう。そう思わせることが出来る。

あまりやりすぎるといつそのこと…と、強行手段に走らせてしまいかもしれないが、この提督の様子から見るとそれはないだろう。…というか、ここまでボディチェックもなしで通された時点でないな、と思った。その気になれば銃ぐらい持ち込めたかもしれないぞ。

あるいは俺たちには分からないような特殊な探知―魔法的なナニか―方法があるのかもしれない。念話といい本当に厄介だ。魔法を使われたら非魔導師ではどうにもならん。いつそ博士を連れてくるべきだったか？…いや、彼女も管理局と何らかの繋がりがある人間だ。それに何を考えているか分からないところがある。やれやれ、うちの艦隊の中に魔導師でもいればいいんだが。ユーノ君の話だと第97管理外世界と同様に俺たちの世界にも魔導師資質のある人間は非常に少ないらしいから望みは薄いかな。

「我々に対する管理局全体としての処遇の決定と、その遵守を要求します。できなければ、意思決定の仕組みはどうなっているのか。責任者は誰なのかを明らかにして頂きたい」

我々とていつまでも漂流したいわけではない。しかしその気になればどこかの空白地に入植することは不可能ではないだろう。かつてそうした方法で建国した国があるほどだ。この世界の技術力を考えれば我々は独立戦闘国家として存在することすら可能だろう。

核兵器ほどではないにしろ、都市一つを吹き飛ばすミサイルに、超長距離から水上艦を撃沈できる超音速魚雷、硬化陣地や分厚い戦艦の装甲すら紙のように貫通する光学兵器、艦隊そのものを覆い隠すことすら可能な電子戦能力。

当然、我々だってそんなことをするつもりはない。かなりの迎撃能力はあるとはいえ、潜水艦による攻撃や航空戦をしかけられれば早晩消耗して海の藻屑となるだろう。一方で次元漂流者を保護しなければならぬ彼らが我々を見捨てられるかといえば、Noだ。

これを放置して我々がこの世界で暴れ出せばいくら管理外世界同士の問題とはいえ管理局は次元世界の番人としての資格を失うだろう。なにしろ管理外世界出身とはいえ我々が使う中には魔法技術も含まれている上に、博士が魔導師で更には局の魔導師まで艦隊内にいたなんていうのはスキャンダル以外の何物でもない。現地工作員を養成していたら後にそれがテロリストになってしまったどっかの国の情報部みたいなことになる。

「次元漂流者の処遇は管理局法に則って現地指揮官が決定することもあるのでありますが…あなた方の保有する装備の関係上、私の一存で判断できる問題ではありません」

「まあ、そうでしょうな」

組織全体はおろか社会全体のあり方に影響を与えかねないシロモノの処遇、一少将の出る幕ではないだろう。彼女が言うには、管理局そのものは最高評議会が最高権限を持つものの、普段は有力な将官たちが合議して意思決定をすることが多いらしい。会議で決定されるのであればあればリンディ提督は出来る限り便宜を図るそうだ。

言い方からすると人事関係者など、どうやら上層部にコネがあるらしい。俺たちを直接受け入れた当事者であるという点も有利に働くだろうと語る姿を見て、ああ、道理で俺と同じ政治方面のスメルが漂っていたんだと納得した。ローレンヒル三佐曰く、魔導師としての実力も相当だという話だったから“笑顔で謀って戦える提督”といったところか。

おお　こわい　こわい

うん。俺、この人だけはプライベートでは怒らせないようにしよう。なんだか知らないけれどさっきから蚊帳の外でプルプルしているクロノ執務官に同情したくなった。家族相手だと違うのかもしれないが…この人の素でやってるフシがあるからなんとなく、な。

「失礼だが、小官には正体もろくに分からない人間にそんな権限があるのはにはわかには信じられませんな」

よくわからないのは最高評議会の構成員だ。将官たちのなかでとりわけ求心力がある局の黎明期を支えた“伝説の三提督”――俺たち海軍人にとっての世界三大提督のようなものだろう。存命らしいが――とやらよりも古株の管理局設立以前に相当働いていた人たちらしい。…正直、生きているのか怪しいもんだと俺は思う。リンディ提督の若々しさのように彼らの寿命が長い…わけではないだろう。そもそも若々しさと寿命は別だ。

実際、外部はおろか局員でさえ姿も見せず最高評議会の様子も一切公開されないことを疑問視する声はあるらしい。口ぶりからするとリンディ提督も思うところはあるようだ。ただ権限があるだけで具体的に動くことがほとんどないために問題とされることはあまりないらしい。それって法執行組織としてどうなんだ…。君臨すれども統治せずのどつかの王国みたいなものなのかもしれない。一組織（国）内にいない俺たちにはわからない感覚なのかな。

またたまに出される決定を伝える前には根回しはきっちりされているらしく有力高級将校の多くが賛同する場合が多いそうだ。…実は最高評議会なんて存在せず、上層部が議題に上げにくいことを最高評議会名義で通達させて批判の矛先を逸らすためのカラクリなんじゃないかと一瞬思ってしまった。

リンディ提督は俺の感想に対して答えることなく、時空管理局は艦隊全体で2000人近くになる人間を保護も何もなしで放り出すほど非情ではない、そこは信じて欲しいと訴えた。…まあ、彼女自身は何らかの打算込みではあるものの、だからこそ信用してもいいかもしれない。情で動かれるよりも利害で動かれる方が読みやすいからな。それに彼女には上層部にコネがあるのだから利用しない手はない。ローレンヒル三佐には悪いが表舞台での立ち回りができる彼女とも手を組んでおいた方が裏から裏へと葬り去られるリスクは減る。

「…そしてあなた方の保護を担当する上で私は告げなければならないうことがあります。本当は事件が終わるまでは伏せるべきと思うのですが…後からでは信用を失いかねませんか」

リンディ提督は常に張り付けていた笑みを消した。俺も自然と表情

が引き締まるのを感じる。…向こうにも切り札がある…のか？しかしそれにしても言うべきかどうか一瞬逡巡したのが気になる。心の中で最大級の警戒の鐘が鳴るのを感じる。次の彼女の言葉を聞くべきではない。何故だかわからないが、そんな気がした。

「…あなたたちの次元転移と同時に、第296管理外世界…あなたたちの世界が消滅しました。原因は調査中です」

「…なっ」

俺は文字通り絶句して…隣の少尉の様子すら分からないほどに…狼狽するしかなかった。

自分の生きてきた世界が消える。

国を棄てた俺にとっても、それは衝撃的なことだった。

第三十八話 show down 中編（後書き）

強気でイケイケモードだった副長に爆弾投下。豊田の思惑も根本から崩されます。

○どっかの国

ウケ狙いとは思えないことを時々やらかすあの国のこと。鋼鉄世界でも“他国軍シュルツたちが”撃沈した超兵器ヴァイルベルグを引き上げて復元し、新しい名前ワールウィントをつけて意気揚々と出撃、即撃沈されていたりする。

フォード中佐が反対して左遷された超兵器保有の一件はソレ。裏設定はありますが…語るとしてもA、sかな…？

○クロノ

同情された回数を順調に増やしつつあり。

○管理局最高評議会

若く見積もっても百歳くらいなので怪しいと思っている局員も少なからずいるはず。

評議会なのになった三人しかいないのは突っ込んではいけないところ。当初は他にもいたけれど、鬼籍に入って減ったのだと思いたい。

○どっかの王国

鋼鉄世界ではシュルツたちウィルキア亡命政府を受け入れ、艦艇貸与などをした国。だらしない友軍が多い鋼鉄世界において演出上とはいえ基地司令が戦死するまで奮戦したステージがあるのでちょっと印象が強いかもしれない。

○爆弾投下

流石にこれを後から言うようではリンディは信用を失う。この場の主導権を握るためにも効果的。

仕事に関してはリンディ提督はシビアだと８８式は思っています。たまに私情が入っても打算込みっぽい。そうじゃなきゃ提督なんてやってられないのでしょうか。

7・24改稿 誤字修正。一部表現修正。

第三十九話 s h o w d o w n 後編（前書き）

“ 転 ” に相応しく話を大きく動かします。

そして話が大きく動くということは…彼の出番に違いない！

第三十九話 show down 後編

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ ナディア・ローレンヒル三等海佐

…チツ、やはりそうなっていたか。“あの実験”の結果がどうなるかは再三警告したんだが…連中はやはり樂觀が過ぎるな。だからこそ私がこんな危ない橋を渡れているんだろうが感謝する気にはなれん。最悪、あの世界ごと消えていたのかもしれないのだから。

しかし妙だ。次元世界丸ごと消えたとはいえ、これだけの質量が長距離転移したのだから痕跡が全く見つからないということはないと思うのだが…。現地部隊が情報を渡さなかったのか？第4次元艦隊あいつのは嫌われているからあり得る話だがきちんと自分で調べ直せばいいはずだ。…別の仕事でもあつてろくに調査せずに引き上げたか？スあの腰巾着の間抜けならやりそうだな。タイレット

そういえばあの辺りの次元巡察隊の司令は…バトロールロウラン中将与繋がりのある男だったか。彼から中将経由でハラOWNに話が流れたか…？そもそも第296管理外世界への派遣艦隊の司令はリンディ提督なのだから初めから目をつけられていたのかもしれないが…いや、考えすぎだな。その場合は甘んじて捕まるとしよう。連中の犬を続けるよりはハラOWNの子飼いになるか、刑務所に入った方がな**ん**ぽかマシだ。

私がそんな皮算用をしている間に鈴木少佐は何とか混乱から回復し、第296管理外世界崩壊が事実であることを確認していた。…よく

よく思えばあの世界とはもう十年の付き合いになる。クロノ執務官のような若い人間を見ると随分と自分が歳をとってしまったように思える。真っ直ぐな目をした愚直なまでに真面目そうな少年だ。十一年前のあの事件の関係者とは思えない。私もかつてはあんな目をしていただろうか？

…くだらん感傷だな。その頃から社会の裏側を見る情報部などに属していた私が、あのきらびやかな表舞台で颯爽と自分の足で歩いてゆける実力のある彼と同類だと？…どうも調子が狂うな。曲がりなりに私もある世界に愛着があったということか。理由はどうあれ一度救った世界なのだから当然かもしれないな。…まだ私にもそんな青い想いが残っていたとはね…。

『連中の手札にはジョーカーがやはりあった。今切ったところだ』

『…やはりそうじゃったか』

だが今更戻れやしない。私は私だ！私らしく…やらせてもらおうじゃないか。リンディ提督、騙して悪いが…私は手札であって、同時に“ディーラー”の協力者^{サクラ}でもあったんだよ。半ば見えていた切り札が切られたところでこちらには対策がある。こういうときは場を仕切り直すのが一番だ…。せいぜい足掻いてくれたまえよ、平和を守るためにな。これは次元巡察隊^{バトロール}のお仕事だ。

クロノ・ハラオウン三等海佐

悲報を手札に使うやり方は…あまり見ていて気持ちのいいものじゃない。でも提督が時として非情とさえ思える手を使うのはいつも部下のことを考えた上での行動であるというのは頭では理解している。今回はこの事件への協力を取りつけるくらいで済ませるつもりだと言っていた。

…その間にあの結界の観測データをとるんですね、とエイミイが目を輝かせて、示し合わせたように二人で怪しい笑みを浮かべていたけれど。

僕は常に一步引いた視点から様子を見ていた。状況を広い視野で確認することは戦闘でも交渉でも変わらない。話している相手の顔しか見ていないのでは分らないことだってある。…だから僕は気付いた。ローレンヒル三佐がほんの少し、表情を消す瞬間を。

『エイミイ、ローレンヒル三佐に動きはあったか？』

『ふふ、さっすがクロノ君。誰かに念話を送ったみたいだよ。暗号化がきついから解析中』

エイミイが秘話通信で返答する。アースラの通信機能の一つだ。…まあ、つまるところの誰でも使える念話だ。だが戦闘管制に用いることもあるのでモード次第でセキュリティや通信強度が恐ろしく高くなるし、一方で今のようにはほとんど悟られない隠密性の高い送受信も可能だ。

僕が彼女の念話に気付いたのは簡単な理屈だ。

どんなに慣れた人でもマルチタスクで何かをしている時はほんの少し、注意が散漫になる。特に観面に出るのが顔だ。個人差はあるも

の表情が消えたり、妙な顔になってしまったりする。同時にいくつもの作業をこなすためには感情のコントロールをしなければなら
ないからだ。そうでないで頭の感情を司る部分が同時に様々な信号
を受け取ってしまい、混乱して作業そのものにも影響を及ぼす。こ
れを誤魔化すのは非常に難しい。それゆえマルチタスク行使時には
一般に感情の高ぶりを抑えるために一定の感情抑圧状態に置かれる。

『執務官。人の念話を覗き見るのはいただけないな』

…まあ、同じ理屈でこっちの念話がばれるのも想定内だ。だがこの
様子だと決定的なことは何も言っていないだろうな。無駄足だった
か？いや、念話を誰かに送っていたということ自体が判断材料には
なる。少なくとも近くに彼女と協力関係にある魔導師がいるとい
うことだ。

『…交渉の最中に浮気も感心しませんか？』

『なるほど一本取られたな。しかし君がそういう表現をするタイ
プだとは思わなかったのだが』

『~~~~~っ!?!?』

いや、これは…エイミイとか母さんのせいだ。僕は、僕は…健全だ
…。…落ち着こう。だいたいそんなに気にするような言い方だった
か？慣用的によく使うし問題ないだろう…。…って、何か嫌な目線で見
られている気がする。…この感覚を僕は知っているぞ。最近よく感
じるアレだ。

案の定、ローレンヒル三佐は口の端を吊り上げていた。…か、から
かわれた。今日会ったばかりの人間にまで…。…そういえばあのなの

はとかいう子にしても出てきた途端に砲撃されたっけ。

…僕は女運が悪いのかもしれない…。

そういえばあの砲撃の時にもう一人いた正体不明の魔導師―渡航記録はなく、現地滞在者でもなかったので恐らく密航者―も女の子だったな。ユーノの証言からすると少々不審が点があるのでこちらでも警戒しているんだが…凄く、嫌な予感がする。なんか彼女一人では済まないような気が…。執務官の勘ではなく、これはなんというか…本能かな。何か厄介事が起こる気がする。…女性絡みで。

「てっ、提督！クロノ君大変！」

「どうしたのエイミィ」

「どうしたんだ？」

ウィンドウの中のエイミィは相当慌てている。一体何が起こったんだ。通常通信だったので鈴木少佐とロー…オルソン少尉も訝しげな顔をしている。

「ジュエルシードが複数励起状態に！うち一個は既に原生生物をとりこんで暴走状態です！」

「今になって何故急に…」

小規模暴走や励起状態にない―お陰で魔力反応が極小で搜索が難航するんだが―ジュエルシードばかりであることから、アースラクルの間では輸送時にかけられていた封印術式がある程度は効果を發揮しているものと思われていた。それが急に、それも複数同時にと

なると…人為的なものか、あるいは魔力素が濃い地点に何らかの要因で集まってしまった可能性もあるな。いや、そんなことはともかく…。

「提督、僕が行きます」

「ちょっと待ってクロノ君。既にユーノ君となのはさんが行動を開始してる！」

「なっ、どういっつもりだ。まだ豊田司令たちとの交渉も終わっていない。それまでは自宅待機のはずだぞ！」

豊田さんたちは軍人だからまだしも、彼女たち民間人の手を借りなければならぬほどアースは人手不足じゃないはずだ。これだから、想いだけで突っ走る人間は…くそっ。

まるで昔の僕を見ているみたいだ。

想いだけじゃ何も変わらない。想いを力に変える努力が必要なんだ。そしてそれを支える強靱な精神が。バカ魔力だけが取り得の魔法と出会ってすぐの初心者や遺跡発掘が仕事の研究者の出る幕はないんだ。相手は魔力攻撃設定なんてしてこないかもしれない。命のやり取りをする覚悟も腕もないのに出てきていい場所じゃないんだよ。僕らの仕事場は！

「冗談じゃない！提督、僕は出撃しますので武装隊の準備を！エイミィ、管制を頼む！」

「りよ、了解っ」

「…そうね。今は考えている場合じゃないわ。武装隊、出撃準備！」

僕は後ろも見ずに走り出した。懷からS2Uを取り出しながら呟く。父さんはたった一人で艦に残り、部下と世界を救った。でもそれは誰にでもできることじゃない。

だけど、父さんじゃなきゃいけなかったわけでもない。実際、最後まで退艦を拒み、気絶させられて他の乗組員に預けられた父さんの部下だった。彼は独り身の自分が犠牲になるべきだったと後悔していたという。その彼もその二年後に流れ弾から市民を守って殉職している。

母さんと僕を遺して逝ってしまった父さんを恨んだことがないと言えは嘘になる。だけど今なら…少し父さんの気持ちが理解できるような気がする。後ろ指差されようと志願者に命令して自分は逃げることもできたかもしれない。だけど覚悟ができている人間はそこで逃げるということは考えないものらしい。誰かの為にできることがあるならしなければならぬという想いが胸を満たすんだ。

「…頼むから無事でいてくれよ！犠牲になるのは、覚悟のある人間だけでいいんだ！」

第三十九話 show down 後編（後書き）

今まで散々な扱いでしたが話が動いたのでスーパークロノタイム発動しました。想いの根底が実はなのはのそれとそう変わらないのは88式なりの“元ネタ”へのリスpektといったところです。

ただ、犠牲という発想が先に出てしまう辺り、まだ無意識に彼はクライドを引きずっています。自分の父親の死をそこまで割り切れるわけもなく。

なのはが“不屈”ならクロノは“献身”。

つまりなのはさん漢前。クロノマジヒロイン。ユーノマスコット。

…あれ？（あくまでネタですよ

○ローレンヒル三佐の読み

ややリンディの意図を深読みしたものの、ほぼ的中。“実験”にならず関わっていたからこそですが。

○ローレンヒル三佐の感傷

彼女にもいろいろあったということです。副長が思うほど彼女も冷酷ではありません。人間である以上、感情を排除することなど不可能ですから。

○アースラの通信機能

エイミィやオペレーターズの魔導師資質の根拠にしたっていいんじゃないのかと思わないでもないんですけどね。

○マルチタスクの解釈

メカニズムのよくわからない感情というものを取捨選択するのは困

難だろうから受信性能そのものを下げてしまえという発想。

○クロノの女運

フラグ。この場にいるのに視点がないのはどうなのよと思った結果がこれだよ。どうしてこうなった。

○アースラの人手

原作だとフェイトが明確に敵対存在とされていたのでなのはも戦力として数えられましたが、戦闘力は判然とせずまだただの密航者としが分かっていないこと、豊田たちの存在からクロノはなのはたちが当てにしています。リンディはまた別の思惑のようですが。

○リンディとクロノ

念のため再度確認。豊田たちの相手は次元漂流者への対応なのでリンディの管轄。ジュエルシールド関連は担当官であるクロノの管轄。ここでの二人の変わり身の早さはそういうこと。

○部下さんの話

そのくらい漢気溢れる人が退艦命令のときにもいいと思う。

7・24改稿 誤字修正。一部表現修正。

8・30改稿 誤字修正。

第四十話 義理と人情 本音と打算（前書き）

状況説明でござい。

第四十話 義理と人情 本音と打算

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ 鈴木和人少佐

艦内に響き渡るアラート。慌しく飛び出していったクロノ執務官。そして彼らに無断で現場に向かったらしい高町嬢とスクライアの少年。…言い方は悪いがこれで話は仕切り直した。思わぬボディブローだった。今は考えるのはよそう。この状況を利用するにはどうすればいいか、それが問題だ。

「この件には私たちが対処しますが、念のためすぐにあなた方を艦隊に戻しますね」

「…我々は、高町嬢と約束していました」

リンディ提督が怪訝そうな顔をする。唐突に何を言い出すのかと思っただろう。俺の意図に気付いたのか視界の端で少尉が苦笑したのが分かった。

…俺も司令と似て甘くなっただか？ いやこれはこれで悪くはないはずだ。このゴタゴタは我々の利用価値を示す機会になる。単なる実験材料ではなく実力があることを示せば我々が我々のまま彼らの世界に移住することだってできるかもしれない。

時空管理局は人手不足と聞く。自分で言うのもアレだが俺たちはどいつもこいつもはみ出し者ばかりで魔法知識もないが、あの大戦を生き抜いた精強な将兵や能力そのものは優秀な人間が多い。謎の訓

練用装置さえあれば質量兵器への風当たりだってなんとかなるかもしれない。あるいは表向きは魔導兵器ということにしておけばいいのだ。結果は変わらないのだから。

「ジュエルシードを協力して止めるという約束をね」

「ですが状況は変わっています」

「彼女たちにとっては変わってはいない。だから自宅待機を破ったのではないですか」

俺の問いかけにリンディ提督は沈黙した。そもそも自宅待機にしても管理局側が一方的に告げただけであり、双方の合意の上のことではない。これから具体的にどうするかはこの交渉の後に話し合われるはずだったのだ。つまり今はそれぞれがどうするかが決まっていない宙ぶらりんの状態。

ユーノ君もそれを計算の上で高町嬢にGOサインを出したのだろう。……まあ、そうでなくとも彼が彼女を止められたかどうかは怪しいが、我々が叩いてから封印という話にすら微妙な顔をしていたらしいから、後から来た人間にこれから先はこちらに任せて下さいと言われなくてもいいそうですかとは言わないだろうな、あの少女は。

少尉が肩を軽く二回叩いてきた。そうか、豊田司令も動いたみたいだな。万一を考えて持たせていた秘匿型通信装置がこんな形で役に立つとはね。

リンディ・ハラウン少将

ジュエルシードの状態が比較的安定しているという楽観論が私を含めたクルー全体にあったのは事実。だから鈴木少佐に対して何も言えなかった。何も決まっていけない状態を長引かせたのはこちらの都合であつて、現地の人間であるなのはさんたちには関係のないことなのだから。でも組織というのはそういうもの。体裁をきちんと整えないことには動けない。

現地の情報収集に“使った”だけの人間ならいざ知らず、事件に深く関わり、場合によっては証言台に立つ可能性があるのはさんたちや、今後はこちらで保護しなければならぬ豊田准将たちとはそれぞれきちんと合意を経て協力関係にならなければまずいことになる。

あまり考えたくはないが、管理外世界を“下に見る”人間というのは少なからずいる。その彼らが優秀な魔導師であつたり、革新的な技術を持っていればそれを手に入れようと画策する輩―その点は私とレティも彼らの同類だ―は少なからず居るだろう。事件の際の行動に難癖をつけて自分だけの手駒にしようとする連中もいるかもしれない。

これが私たちの制御下でのことであればせいぜい私とクロノが非難されるにとどまる。そのくらいのことであれば切り抜ける自信は―もちろん、程度によるけれど―ある。恩着せがましいかもしれないが彼らに貸しを作ることにもなる。貸し借りというのは対等な立場で成立するものだと思ふ。だから彼らがそういう存在になれるように助力は惜しまないつもりだ。とにかく何をするにも人手が足りない管理局にとつても彼らの存在は無視できないはずなのだから。

「はあ… ちょっと平和すぎてボケていたかしらね」

「まだそんなトシでもないでしょうに」

つい先ほどまで飄々とした中にも緊張感を漂わせていた鈴木少佐が表情を崩す。本当に捉えどころのない人。あらためて帰艦するかを尋ねたけれど彼は黙って首を横に振った。戦闘行動中にそのような余裕はないだろうと。こちらの戦力を直に見る機会を逃すつもりはないということなのかもしれない。じゃあ彼らの相手は私がするのが筋かしら。全体の指揮はクロノで艦自体は戦闘状態にない以上、私の命令は必要ないわけだし。戦いながらの全体指揮は難しいけれどいつものことよね。

『提督、クロノ君が手近の一つを封印しました！』

「手際がいいですね」

「自慢の息子ですもの… と言いたいところですけど、単に魔力が集まりかけている状態ですから扱いにさえ気を付ければそれなりの実力がある魔導師にとっては難しいことではありませんよ」

それなりの実力、というのが問題でもあるのだけどね。うちの武装隊の平均、B\Cランクの魔導師にははつきり言って荷が重い。小隊長クラスなら大丈夫でしょうけど、向かう途中で思念体になり、現地生物を取り込んだとなると一隊丸々ぶつけて封印できるかどうかというところ。

だから武装隊はあくまで待機。発動したジュエルシードの魔力にあてられて更に暴走が起こる可能性も捨てきれない以上、下手に出し

て消耗すれば危険。クロノも巡察隊こうさの事情をもつ把握できたようね。上しか見ないエリートにはなって欲しくなかったからこれは合格点かしら。

『励起状態のジュエルシード周辺に結界？第十三任務部隊のものじゃないですね。ミッド式の一般的な封時結界です！』

「あの時の魔導師…？こんな時に…いえ、こんな時だからかもしれないわね」

誰も彼もバラバラに動いている。まずいわね…どう收拾をつけたらいいか。

なのはさんたちはジュエルシードの暴走を止めるためならばお互い協力するでしょうし、それは彼女たちに協力している豊田司令も同じ。豊田司令たちは恐らくすぐに結界を展開して街への被害を防ぐ。それまでにいろいろ起こってしまった魔法関係の事象の情報統制は“探偵”の仕事。そうなると動向がつかめないイレギュラーたるあの魔導師が一番の問題。そうなるとこちらがするべきはそのイレギュラーへの対応ね。

『第十三任務部隊の結界、先ほどの結界を包む形で展開されました。海鳴市内全域をカバー！』

「エイミィ、澤風に武装隊を送り込む際は事前連絡するので許可をもらえるよう伝達してもらえる？」

『了解』

基本的に結界の中には術式行使者が許可した者以外は入れず、その

領域内に入る必要がある場合は術式を解析して許可された人物であると誤魔化して侵入するか、構築の弱い部分を狙って貫通、そこから侵入する方法が一般に用いられる。ちなみに安全対策と防犯のために、誰が何の為に作った結界なのかが分かるよう術者と作成理由を解析の際に一番最初に応答するように術式構成するのが通例である。

もともと管理外世界など魔導師がほとんど居ない土地で魔法を行使する際に、非魔導師を巻き込まない為に張る場合などは魔導師の出入りをほとんど自由にすることで魔力負担を軽くすることが多い。結界はその性質上継続して一定の魔力を消費するか、一定時間展開できるだけの魔力を予め込めておかなければならないからだ。

この一連の作業は本人の経験から来る取捨選択と術式構想力に立脚するところが大きく、この点が結界魔導師にはデバイスがあまり必要とされないといわれる理由である。ストレージデバイスには新たな術式を作る能力はなく、インテリジェントデバイスにしても人間ほどの柔軟性はないと一般に言われるからだ。そもそも人間以上の思考が出来るデバイスがあるのならば魔導機械に人間は勝てないという話になってしまう。人間が頭を使わなければ勝てないという点では間違っではないのだが。

「これから私は艦橋に向かいますが…観戦武官と洒落込みますか？」

「魅力的な話ですね。こちらは魔法戦の知識が無いに等しいので解説があるとよいのですが」

「…余裕があれば」

「ありがたい」

ローレンヒル三佐を横に置いておいて白々しいとは思ったけれど、お互い分かっているながら指摘できないのは承知の上。こういう駆け引きの場では分かり切った茶番でも付き合うものよね。そう言えばレティが駆け引きの半分は茶番で出来ていると言っていたかしら。もう半分？…それは打算よ。

第四十話 義理と人情 本音と打算（後書き）

きつとリンディと副長は似た者同士。でも間違っても 友達に、なりたいんだ は似合わない。それは子供の特権で、汚れちまった大人には無理な話です。

トモタチ
陰謀仲間に、なりたいんだ が関の山だろうなあ。

今回はやつと戦闘に入る…ハズです。

○副長の思惑

自分たちの還る世界がなくなった以上、選択肢は二つです。ベルカのように自分たちの文化を少しでも残したコミュニティを形成するか、完全にミッドに溶け込むかです。

彼はベルカと同じ道を選ぶかもしれない可能性に光明を感じました。自分たちの手で平和を守れるというのもあります。

○リンディの思惑

故郷を失った彼らに同情し、手助けしたいという想いと管理局員としての打算が共存している状態です。

○アースラの指揮権序列

流石に原作同様だと三人負傷で指揮統制崩壊という人材不足以前の有様なので各部署の長として名無しの佐官、尉官クラスがいると設定はしています。

○結界

どうということなのか悩んだ末に88式は“左右あべこべにならない

入り込みミラー”という解釈に至ったという。時間信号をずらすと
いうことらしいので「位相がずれているんだよ!」「な、なん(r
y」でも可。

付随設定は諸々独自設定です。

○インテリジェントデバイスの解釈

やたらと人間臭く書かれることも多いですが自分は基本的にはこう
いうスタンスで解釈しています。使い魔に人権がどこまであるのか
というのも絡んでどれだけ高度なAIなら人間並みと言えるのかと
いう問題もあるんですけどね。

8・3 改稿 誤字・表現修正。

第四十一話 混戦の中で その1（前書き）

まさか一期でここまで入り組んだ分断戦闘をやるはめになるとは…。

長くなりそうなので分割分割。

第四十一話 混戦の中で その1

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ 豊田浩二准将

「目標アルファ（暴走体）、例の魔導師とその使い魔及びなのはさん、ユーノ君と対峙中」

「面倒なことになったな」

向こうの魔導師が結界を展開したものの幸い通信機は生きているようにユーノ君との連絡は途絶えることはなかった。一方管理局の方とは二重に展開された結界の影響なのか、あるいは残留魔力素によるものなのか念話が不通らしい。

どうやらあの金髪の魔導師もジュエルシールドを封印するために行動しているようだ。…目的は何だ？こんな危険な物を管理局に敵対してまで手に入れようとするのは何故なのだ。

『とりあえず僕らで対処してみます。豊田さんたちは他を警戒して下さい』

「了解した。クロノ執務官が出ているから他の封印は任せて構わないだろう。…彼はそうとうお冠だったらしいぞ。覚悟しておけ」

『う、了解…』

あの魔導師については彼も疑問を感じていたというから対処は任せ

て問題ないだろう。管理局もまさか戦力がクロノ執務官だけということもないだろうから状況を見て戦力を投入してくるに違いない。だとすれば我々はお膳立てをすればいい。

しかしこういちいち無線では面倒でならんな。博士の存在は今のところは伏せておくということになっている。裏の事情を知らないであろうハラウン少将たちが博士に目をつけるといういろいろ拗れかねないからだそうだ。ローレンヒル三佐は自分の正体は表向き隠しておきたいということだから、魔導師であることもあまり大っぴらにはしたくないだろう。やれやれ、他にうまいこと魔導師でもいれば楽なんだが。

「司令。目標ブラヴオー、チャーリー、デルタが動き始めました。目標エコーはクロノ執務官が封印した模様。反応消失しました」

「思念体と見て間違いないな。射程に入り次第砲撃で牽制するぞ。ただし間違ってもクロノ執務官には当てるなよ」

念のため艦隊用光学迷彩装置など魔法絡みの装備が特に多く、ジュエルシールドに影響を与えかねないアンバスケイドはスパルヴィエロの護衛につく形で後方待機している。相手が我々と同じ現代兵器で攻撃してくるのならばともかく魔法相手にあの艦の電子戦能力はほとんど意味が無いからだ。もっとも、能力が発揮しにくいというのはアンバスケイドに限った話ではない。

秘匿装備の類は結界の恩恵を受けられないが、それは使い方次第である。要は周囲の迷惑にならないところで使えばいいだけの話だ。……まあ、それが難しいのだが。それが今回もネックになっている。

澤風の超音速魚雷は非常に強力である。結界内の何もなかったところで

起爆させれば相手が生物でない限りは問題はないが、魚雷であるため水上目標以外にはほとんど役に立たないという致命的な弱点がある。付近を航行中の船舶への影響を考えてもそうおいそれと使えるものではない。

エルトリッジの特殊弾頭ミサイルは潜水艦以外なら空中目標にも限定的ながら効果が期待できるが、結界の効果を受けられないにもかかわらず危害範囲が広いので超音速魚雷のように周辺被害を限定するような使い方ができない。具体的に言うならば、最低半径200メートル程度を焼き尽くし、更にその周囲にも余波被害を与えるシロモノである。爆発時の威力だけなら小型戦術核にも匹敵するのだから…まあ、とても都市沿岸部で撃つようなものでないことは分かると思う。

Z51の怪力線装置は射程が長いゆえに予想外のところに被害をもたらすことがある。たとえば今のよう到低空を飛んでいる思念体相手に撃てば背後のビルを巻き込む可能性があるのだ。皮肉な話だが本来減衰が早いはずの光学兵器が安定して長射程を得た結果、味方撃ちや周辺被害を考えると運用が難しくなってしまうている。通常の戦闘であればそれも多少は許容されたのだろうが…この状況では致命的な欠点である。また相手の動きが今のところ単純だとはいえ、怪力線装置は本来は対地対艦用であって対空射撃を想定していないという問題もある。

つまるところ現時点では我が艦隊が誇る攻撃用の秘匿兵器は戦術的、政治的制約からどれもこれも使えないという結論に至る。となるとミサイルや砲撃により足止めするくらいしかできないということになる。

ここで問題になるのが思念体には実体がないという点だ。当然なが

ら通常のレーダーが通用しない。幸い魔力探知系統のお陰で目標の
だいたいのは位置は掴めるのだが…残念ながら対空ミサイルの方でこ
の魔力探知系統に対応していないので誘導が不可能であり使用でき
ない。そうなると我々の対空武装は実は艦砲と近接防御火器（C I
WS）くらいしかないのだが、これも本来はレーダー照準が使えず
光学照準で対応することになるので命中率が下がってしまう。

こういう点が魔法が優れているところなのかもしれない。個人の才
覚次第ということにはなるがその場で状況に対応できる術式を創り
出すことすら可能なことから。H L G 設計システムは兵器の汎用性
を拡充する意味もあるが、この艦隊の同装置は泊地以外では使えず
その力は限定的なので今回のような危急の事態には対応できない。

「なるほど…高位魔導師はワンマンアーミーというわけか」

「目標ブラヴォー、移動速度が上がりました。想定攻撃目標はスパ
ルヴィエロです！クロノ執務官が目標チャリーと接触した模様」

『司令、こちらで突撃して攻撃を引きつけて時間を稼ぎます』

「頼むぞフォード中佐。こちらは離れて援護に回る」

エルドリッジが増速して澤風を追い抜いていく。3隻の中で一番機
動性があるのは魚雷を扱う関係上、雷撃位置への進撃の為に速力が
必要な澤風である。だが旗艦を囲にするわけにもいかない。Z51
は機関不調から復旧はしたものの応急修理では不安が残る。エルド
リッジが消去法で囲になるのは致し方の無いことだった。しかしど
の艦も駆逐艦ゆえに装甲は決して厚くはなく、また魔法の産物であ
る思念体の攻撃に我々の防御技術がどこまで有効なのかは未知数で
ある。

「今のところ思念体や暴走体が遠距離攻撃をしてきたという話はありません。今向かってきている相手は動きもそこまで速くはありませんが…」

「油断は禁物だ。たとえばそうだな…鳥でも取り込めば厄介な素早さを発揮するかもしれないぞ」

まったく…これでは超兵器を相手にするほうがよほど気楽かもしれないぞ。前大戦の直接経験者からすれば寝言に等しいことを思っている間に思念体が迎撃ラインを越え、艦首の単装127mm速射砲が猛然と吼え始めた。彼女たちが魔導師となれば我々はさしずめ魔女かもしれないな。そんな埒もないことを考えていたが、この鋼鉄の咆哮が後に次元世界に与える影響が決して小さなものではないということに我々はまだ気付いていなかったのである。

海鳴港沖 クロノ・ハラオウン三等海佐

「よし、これで二つ目だ。エイミィ、状況は？」

『暴走体は三つ巴状態。思念体はクロノ君のすぐ近くの一つがフリーで今のところ動き無し。もう一個の方は—』

「ああ、それはここからでもはっきりと見える。凄い火力だな」

ミッドにも水上艦艇はあるけれどあれほどの機動性はないのではな

いだろうか。追いつめる思念体を右へ左へかわして翻弄し、僚艦がそこに砲撃を集中してしつかりと足止めしている。攻撃を引きつけてる艦も近付かれすぎないように接近された時には痛撃を与えてすぐに離脱している。いくら実体のない思念体とはいえあの圧倒的な火力に晒され続ければ活動停止してしまうかもしれない。ただ、見た目の割りに効果が薄そうに見えるのが気にかかる。

「流石に本当に戦争をしていた人たちだ。…未知の敵相手にこうもワンサイドゲームを展開できるなんて…」

もし彼らを敵に回したらという嫌な想像が頭を過ぎったけれどすぐに振り払う。こんな時に余計なことを考えている場合じゃない。彼らがこうして敵を引きつけているのは恐らく僕の封印作業の側面援護だ。さつさと残り一つを封印して、彼らの攻撃で弱った思念体も撃破。後顧の憂いを断つてからあの金髪の魔導師に対処しないと。

「なのはたちの様子は？」

『とりあえず暴走体を先におさえることで同意したみたい。今は共同で戦っているよ』

「…一応、話が通用しない相手じゃないみたいだな」

使い魔だと思ってユーノを助けようとしてたり、管理外世界で好き勝手するわけでもなくきちんと結界を張ったりする以上、何かやむを得ない事情がありそうだ。その事情次第では逆に説得が全く通用しない可能性もあるんだが。…だめだな。目の前のことに集中しないと。封印術式は気が散っている状態であるようなものじゃない。…っ！？

嫌な予感がして咄嗟に身を引くと、そのままだったら直撃コースだったであろう魔法弾が目の前を通り過ぎていった。振り返ると太陽を背に誰かが空中で静止している。お返しとばかりに牽制で直射魔法を放って距離をとったけれど相手はまるで慌てる様子もなくかわされてしまった。

「誰だっ！」

「お初にお目にかかります。クロノ・ハラウン執務官」

軽く帽子をおさえて一礼する女性魔導師。こつちを執務官と知った上で攻撃を仕掛けてくるなんて…よほど実力にあるのか？まあ牽制とはいえああも余裕をもって避けられた以上、甘く見ていい相手じゃないのは確かだな。

「こんな時にいったいどういっつもりだ！」

「こんな時だからですよ執務官。非才の身ながら貴方の足止めの役目、果たさせてもらいます！」

言うが早いが先ほどと同じ直射魔法を連射してきた。威力はさほど大きくはないが、この距離でかわし続けるには弾速が速い。非誘導なのが救いか？なんとか距離はとれたが…やはり手を抜いていい相手じゃないな、くそつ。

『エイミィ！』

『検索をかけているけれど…今のところ該当データなし！高位魔導師はもう終わってるからランク認定を受けていないのかも』

こちらは相手を知らず、向こうはこつちをある程度知っている。管理局員の戦いは基本的に不利なのは仕方ない。目的は僕の足止めらしいが…だとするとあの金髪の魔導師の仲間なのか？使っ直射魔法もよく似ている。偶然の一致…というのは考えにくいな。

『まずいよクロノ君。残りの一つに使い魔らしき別の反応が接近中！』

「なんだって！？…まさかジュエルシードそのものが狙いか！」

「質問に答える必要性を感じませんね！」

解析も完全に終わっていないロストログアを利用しようという人間がいるという発想が根本から抜け落ちていたのが痛い。でもそうだとすると彼女たちの正体はかなり絞り込めるな。ロストログアを解析、利用できるような力のあるフリーの魔導師や地下組織の数はそう多くはないはずだ。そして関係者が三人もこの現場にいて戦闘を行っているとなればなんらかの手掛かりを得られる可能性がある。戦術的には後手には回ったが…最後に笑うのはこつちだ。

『もう一つのジュエルシードに武装隊を二隊出す！一隊は封印作業、もう一隊は使い魔の迎撃。残りの一隊の投入タイミングはリンディ提督に任せます！』

『了解クロノ君、そっちは大丈夫？』

『返事をする余裕が正直ない！だから投入タイミングを提督に任せただ』

エイミィから情報支援はするから頑張つてとエールをもらった。…

まあある意味いつも通りで安心だ。しかし結局この魔導師の正体は不明。ランク認定を受けていないフリーランスの傭兵か？…だがこの感じは雇われじゃなさそうだ。どちらかというところ…忠誠とか、献身とか、そういうものを持っているような気がする。今までにないタイプだな。犯罪者らしくない性質だ。金髪の魔導師と同じ魔法を使ってくる理由はそのあたりにありそうだ。

中距離でお互いつかず離れずという間合いを保ちつつの射撃戦の中で、彼女がほんの少し呆けたように視線を逸らした。その先にあるのは…暴走体か。やはり彼女はあの金髪の魔導師の仲間と見て間違いない。しかしあちらで何かあったのか？

「余所見とは余裕があつて結構なことだ！ブレイズキャノン！」

「しまっ—」

上手く隙は突いたつもりだが…防御魔法がギリギリ間に合ったか。これでは決め手にはならないな。だけど彼女の帽子が僅かに浮き上がって—

「使い魔か！」

「くっ…」

すぐに彼女は帽子をおさえたけれど猫耳が一瞬見えた。これは大きな情報だ。少なくともこれだけの實力を持つ使い魔マスターを従える魔導師が背後にいるということになる。…やれやれ、どうやら一筋縄ではいかない相手みたいだ。誰でもできることなら管理局はいらないとはいえこれは流石にキツイな。今度レティ提督に増員を申請しよう…。武装隊の何人かを教導隊で鍛えてもらつことも考えなきゃな。

何はともあれ、目の前の彼女を倒さないことには何も始まらないが。

「速い、それに堅いが…攻撃が軽い！」

「なら背中を見せて他に行きますか？」

口元に手を添えて挑発してくるが…そこまで軽視できるような相手ではないな。総合的な戦闘力という意味でなら僕の方が上かもしれないが、単純な魔力量では負けているような気がする。とにかく弾幕のように高速直射魔法を連射してくるのが厄介だ。それにこっちはただ勝てばいいというわけじゃない。これはあくまで前哨戦だ。ここで大きな被害を受けるわけにはいかない。

「君を放置しては武装隊がよいように翻弄される。捨て置けないな！」

「ではお付き合いしましょう！」

第四十一話 混戦の中で その1（後書き）

戦闘の最中に後のことまでいろいろ考えてしまったりクロノはもう完全に馬車馬のごとく働き、背中に哀愁の漂う中間管理職ですね。忘れがちですがクロノは14歳です。

リニスさん宣言通りに登場。ここでクロノを足止めできれば戦力強化されているフェイトがかなり有利となります。しかし管理局側も武装隊を一隊、切り札として残しているので果たして…？そしてその間攻撃に晒され続けるエルドリッジも傍から見ているほど安全なわけではありません。

。通信が生きている

アナログな方法は意外と大丈夫なことが多いとか。

。クロノの動き

日野中尉大活躍。僅かな魔法反応の違いで識別中。ローレンヒル三佐が通信機でアースラの管制情報をこっそり伝えているのもある。

。なのはさんの突撃癖

砲撃型という割には何故か突撃する機会が多いような。主人公が誰かを盾に後ろからバカスカ撃つという構図が美しくないからという大人の事情なのですかね。

。ミサイルが誘導できない

思念体を捕捉できているのは電波ではなく魔力探知系統だったのだからレーザー誘導ミサイルは使えない。艦対空ミサイルはそのほとんどが終末段階においてレーザー誘導です。

。ワンマンアーミー
シュワルツ。ツガー顔の漢らしい魔導師を想像した人挙手 ノ

一人では抱えられそうもない砲撃型デバイスを腰だめで…あれ？ど
つかの教導官殿とあんまり変わらないような気がす（エクサラン
スカノンフルバースト

。リニス

映画版設定だと魔力量AA、魔導師ランク不明…ですがこの話だと
プレシアの病状を悪化させずに済むため出来うる限りのフルスペッ
クで生み出されています。ただし元々の使い魔の性質上、主を総合
力で上回るような個体の生成は不可能と思われるので“そのくらい
”の強さです。

スペック的にはフェイトから攻撃力をとって防御力を上げた感じ。
ちょっとやそつとでは落ちない防御力を持ち、高速で飛び回りなが
ら潤沢な魔力でフォトンランサーを撃ちまくるという非常に鬱陶し
く、ランクの低い魔導師からすれば悪夢でしかない存在と化しまし
た。

。使い魔らしき反応
誰でしょうね？

2011・7・8改稿 “使い魔らしき反応” に関して齟齬があつ
た部分を修正。後書加筆。

8・3 改稿 誤字・表現修正。

第四十二話 混戦の中で その2（前書き）

時系列はジュエルシード同時暴走時に戻ります。

話の都合上、妙に短い分割になってしまいました。

第四十二話 混戦の中で その2

衛星軌道上 時の庭園 プレシア・テストロッサ

「この反応は…」

時の庭園の観測装置はジュエルシールドが複数同時に暴走した―あるいはその兆候を見せた―のを捉えていた。自然と口角が上がり笑いがこみ上げるのを感じる。

「リニス」

「ジュエルシールドの暴走を捉えたようですね」

恐らく使い魔と主とのラインを通して伝わった自分の感情から状況を読み取って現れたのであろう。呼びつけようとした時には既に使い魔は部屋の入り口に立っていた。正直、ここしばらくは記憶が飛び飛びだ。もうこの体にはあまり時間が残っていない。同時に複数暴走するのは見逃せない好機だ。いくら管理局でも全てを押さえるのは難しいはず。立ち回り次第で複数が手に入る可能性は高い。

「フェイトたちに伝えなさい。ジュエルシールドを一つでも多く確保するようにと」

「…分かりました。ただし今回は私も出ます」

私は管理局にここがばれるリスクとリニスの戦力を天秤にかけて、

しばし考えてから首肯した。なるべく近付かず観測もパッシブのみにはいるものの管理局艦との距離はそう遠くはない。時の庭園のメイン魔導炉はアイドリング状態とはいえ稼動し続けている上に、多数の魔導機材も電源が入ったままで今更使い魔一人の転送魔法程度でばれるということもないだろう。半ば暴走状態にあったジュエルシードが落着く過程でこの宙域に大量の魔力をばらまいた影響で魔法関係のセンサーはかなり能力が落ちている状態なのだ。

だとすれば、と例のブツを処理を兼ねてかく乱に使うようにリニスに命じておく。どうせ廃棄処分にするしかない“モノ”だ。見てくれさえ整えておけばこの状況下でなら十分陽動くらいには使えるわ。

「フン、何が幸運なのか不幸なのか分からないわね」

そもそも輸送船の事故さえなければもつと穏便な手段でここまで苦労することもなくジュエルシードは手に入っていたはずなのだ。そうであれば病気なのだから休めと小うるさい使い魔も、顔を見るだけで嫌になるクローンにもとうにおさらばしてアリシアをなんとかする算段がついていたかもしれないというのに。

…なんとか？

…おかしいわね。私は…ジュエルシードを手に入れて…一体どうするつもりだった？

「プレシア？」

視界に駆け寄るあの使い魔の切羽詰った顔が広がって、私は気を失った。

リニス

幸いプレシアはただの貧血だったらしく大事には至らなかった。体自体は既に大事おおごとになっているのだから正確ではない表現ではある。

それにしても、と思う。

狂ってしまったプレシアは一体どういうつもりだったのだろう。何の為にジュエルシードを手に入れようとしたのか。…まさか願いを叶えるモノだからアリシアを生き返らせることができるかと踏んで？それはない…わよね。いくらなんでも。第一それだと複数集めさせる理由が分からない。…まあ、研究する上で複数必要だったのかもしれないけれど。そもそもジュエルシードそのものをどう使うのが研究の状況からまるで見えてこない。ジュエルシード奪取のための計画ばかりでその後の利用法についてほとんど手をつけていないのだから考えても仕方のないことかもしれないが…。

「…何か嫌な予感がする」

とはいえこれといって思いつくようなことはない。狂人の発想を普通の人間が予想するのは土台無理な話なのだから。せめて行動指針が少しでも掴めていれば想像もつくけれど、その指針である研究がほとんど白紙なのだからどうしようもない。さしあたって私ができることは馬鹿なことをしないように監視するくらいだけれど、これから私も外に出る機会が増えるのだからいっそ最後の時まで眠ったまままでいてくれた方がプレシア自身の体調と私の精神衛生の両方の

面から望ましい。かといって睡眠薬の類は今のプレシアの体のことを思うと…。

私は埒もない考えを振り払い、フェイトたちにジュエルシードを確保するように伝えた。ただし管理局員との交戦はなるべく避けるように言い含める。不承不承ながらもフェイトが了承し、アルフが絶対に無理はさせないから安心しろと請け負った。…アルフのそういう絶対は逆に不安になるのだけど。どちらかという貴女は説得が不可能と分かれば一緒に無理をするタイプでしょうに。

フェイトたちは才能に恵まれ、また私との訓練でかなり強くなっている。けれども経験豊富な執務官や指揮官クラス、そして彼らに率いられる集団戦に長けた武装隊と真つ向勝負をするにはあまりに経験不足なのだ。私にしても多少先に生まれた程度ではあるけれど、プレシアの半生を教え込まれる裏で血反吐を吐くような訓練をしていた。二人の魔法の教師役となるためにかつてのプレシアの仮想デ―タ相手に猛特訓をしていたのだ。

…魔導師ランク条件付SSは伊達ではなかった。流石に体のできていないフェイトには無理だったけれどむしろ幸いだったかもしれない。下手にあの訓練をフェイトが受けていたら母親恐怖症に陥ったであろうことは間違いない。何しろ訓練を始めた当初の私は主であるはずのプレシアに言いようのない恐怖を感じたのだから。そもそも仮想敵役が“今のプレシアの姿”をとる必要性に思い至ったのはつい最近のことで、今のプレシアに怒りの鉄拳を叩き込むわけにもいかずこのまま逃げ切れそうである。

あとは単になるべくフェイトたちと管理局員を接触させたくないという事情もある。彼らと争ったとなれば罪に問われる可能性が高くなってしまふ。母親や環境のことから情状酌量があるにしても、現

場捜査員からの心象が悪いだろう。後に管理局で勤労奉仕をするにしても彼らの不興を買うのは好ましいことではあるまい。

フエイトたちの動きを確認しつつ、私は医療機器を点検してプレシアの寢室を後にした。私が洩るプレシアを押し切って用意したこの高性能な機器類は自動である程度は処置をしてくれる。とはいえ早く済ませて戻るに越したことはない。プレシアが命じた“陽動”の手はずの整えると私は先ほどの嫌な予感を無理やり押さえ込んでフエイトたちが先行している現場へと転移したのだった。…あの子たちは“陽動”にいい顔しないでしょうね。まあ適当な理由でごまかしがつかないではないから真実を告げる必要はないでしょうけど。私は…私は割り切っている、そのつもりだけ。

私は後にこの時の予感の意味を驚愕と後悔とともに思い出すことになる。

第四十二話 混戦の中で その2（後書き）

プレシアと同じこと（第十九話）に思い当たったりニス。嫌なフラグが建ちました。もっとも原作を知っているであろう読者の方々には何のことなのかはお分かりでしょうけど。

○残留魔力

このせいでアースラの索敵能力でもなかなかジュエルシードが見つけられず、ユーノもどちらかというと地球の魔力ではなくそれにあってられている、という設定（彼、A、sだと平気っぽいですね）

○記憶の混濁

このプレシアは彼女自身が恐れていた狂気の部分です。果たして彼女は何を求めていたのか…。

一般的にはアルハザードは御伽噺の存在のようですからそこに行こうなんていう発想は狂った末の妄想という方が適切な気がします。スカさんは…素性をばらす理由が見当たりません。

○陽動に使う“モノ”

口クでもない“モノ”なのは間違いないです。

○伊達じゃない

スパルタにも程がある。

第四十三話 混戦の中で その3（前書き）

背景事情説明は終わったので主役の人たちの出番でござる。

第四十三話 混戦の中で その3

海鳴市街地 フェイト・テストロッサ

大きな魔力の気配を感じてどうしたものかとアルフと相談していたらリニス先生から連絡があった。やっぱりあの感覚はジュエルシードの暴走、それも複数が同時に活性化していることによるもので、母さんはこの機会を逃さずに確保するようにと命じたらしい。ただ管理局とはなるべく接触しないようにと再三念押しされた。

「心配性だなあ。あれだけ訓練を積んでいるんだから武装隊くらいならノシちやえろと思うんだけどさ」

「それはどうかな…だってリニス先生はもっと厳しい訓練を母さんにさせられていたって聞いたよ。それだけ実力があるのにあれだけ言うからには理由があるんだよ」

「…厳しい訓練って、リ、リニス姉のアレよりきついのかい？」

流石のアルフも軽口をやめて真剣な顔で尋ねてきた。リニス先生はその…かなりのスパルタだった。そもそも私が魔法のことに關してリニスを“先生”と呼ぶようになったのは敬意を込めてというよりもむしろ戦闘訓練のときの容赦なさへの畏怖によるもののような気がする。私が黙って頷くとアルフは両手で自分の体を抱いてそんなの考えたくもないという顔で首を横に振った。

「…ま、まあなにはともあれジュエルシードを探せと言われたんだ

から探さない」と

「そうだね。でも大きな反応に紛れて他の反応が探しにくい」

「そういう細かいのは“先生”に任せればよくないかい？」

アルフの言うことももつともだけど、反応が大きいということはもちろん管理局も捉えているということだからそれだけ彼らと接触してしまう可能性も高いはず。…でも、現状、他の反応の位置が判然としない―先生曰く、落着時に魔力がばらまかれてその残滓の影響で単独ではよほど探知魔法に自信のある人間でないと搜索は難しい―のでまだまだ鍛錬中の身の私たちでは機材の潤沢な管理局より早く発見、確保できる可能性は低い。

「そうだね。急いで封印してしまえば先手を打てるかもしれない。行くよ、アルフ」

「はいよ、結界はこっちに任せてフェイトは一刻も早く確保を」

表情を引き締めたアルフに私は頷いて了解を示して部屋を出ると丁度この階で止まっていたエレベーターに急いで飛び乗った。開のボタンを押している間にアルフも飛び込む。…今更かもしれないけれど管理外世界で空を飛ぶなんていう目立つ行動をするわけにはいかない。これが元で管理局にこのセーフハウスがばれてしまったら大変だからね。

…急ぐと言っておいてこれはどうなんだろうと思わないではないけれど。ふと視線を感じて横を見るとアルフが微妙な顔をしていた。…考えていることは一緒だったのかもしれない。

「あの時の猫と同じ…現地の生物をとりこんでいる」

「大丈夫かいフェイト。いくら管理局より早くついてもやられちゃったんじゃないよ」

現地についてみると膨大な魔力に惹かれたのか鳥類が元らしい暴走体が空を舞っていた。今なら多少大きな鳥が飛んでいたくらいで済むかもしれないけれどこれが暴れたりあちこちに姿を現せば現地の治安組織が出てくるかもしれない。たださえ管理局は厄介なのに現地の警察―下手をすれば軍隊―まで相手にしていられない。魔法が使えないからといって何も出来ないわけではないのだから彼らを刺激するような真似はするべきじゃない。

「アルフ、結界をお願い。こいつを…封印する！」

「…分かったよフェイト。魔導師向けの妨害術式は削るけどいいかい？」

私が小さく頷くとアルフは目を閉じて結界の術式構築を始めた。管理局の搜索から姿を眩ますには結構な魔力が要るのだから消耗はさせたくない。それに仮に管理局が戦闘中に来たとしてもアルフ一人の結界では多勢に無勢で侵入されてしまう公算が高いから、いくらも時間稼ぎにならない防壁に魔力をつぎ込むよりは初めから何もしない方が合理的なはず。

「バルディッシュ」

> Yes , Sir . Get set . <

「準備よし。もう大丈夫だよフェイ―って早速お客さんかい」

振り向くとそこには…あの時の白いバリアジャケットの少女―たしか“なのは”と呼ばれていたはず―と肩には変身魔法で姿を変えたユーノさんの姿があった。まさか彼女たちが来るなんて予想外だった。最初に顔を合わせたときの反応からすると少なくとも管理局員ではないはずだけど…。

「待つてくれ。僕たちは君たちと戦いに来たわけじゃない」

実際、“なのは”さんのデバイスは待機状態のままなので今にも突っ込んでいきそうなアルフを手で制した。結界を張って早々に侵入されてアルフも気がたつていただけだからすぐに彼女も威嚇をやめる。私も一旦は構えたバルディッシュを下ろした。

『フェイト、油断しちゃだめだよ。管理局が来るまでの時間稼ぎかもしれない』

目を合わせて了解の意は伝えておく。その可能性は考えたけれど素人の彼女が飛んでくる間に管理局が駆けつけられないというのもおかしな話だと思う。何か他の事情…例えば別のジュエルシードがもつと人の多い往来で暴走しているのでそちらを優先しているのかもしれないけど。それよりも私は…あの子の真っ直ぐな、こちらを見通しているような意志の強い目が気になってしまっていた。あの時はまだ迷いが見えたように思えるのだけど。

「この暴走体を封印してからお話できないかな」

「多分、話しても仕方ない。話し合っても解決できないことはある」

甘いことを言う子だな、なんて言うつもりは無い。記憶を失うなんていう大変な経験をした私だけでも母さんは私を愛してくれているし、厳しいけれど優しいリニスがいて、一緒にこれまで過ごしてきたアルフがいる。あの子にだって辛いことがあったかもしれないし、あるいは私のように幸せを感じているのかもしれない。

けれども少なくとも私がしていることは“悪いこと”なんだろうというのはここ数日のことではっきりと分かった。ロストログアを見つけて封印すること自体は何も悪いことではないし、むしろその後管理局に届ければ表彰されるべきことなんだろうと思う。でも母さんは管理局が到着して既に搜索しているものを彼らとは別に見つけると言う。そしてリニスも彼らとは接触しないようにと言う。

「それは私も分かってる。けれどお互い何も知らないでジュエルシードの封印という目的は同じなのに敵味方になるなんておかしいよ」

彼女は続けて言う。方法はともかくユーノさんを危ないところから救ったこと。管理局より早くここに現れてジュエルシードの暴走体の封印を危険も顧みず試みたこと。いろいろ事情があるのかもしれないけれど、私たちが悪いやつだとは思えないということ。

「だから、お互いのことを話そうよ。力になれるなんて言えないけれど…何かを我慢している目をしている貴女を放っておけないの！わたしと…わたしと同じだから！」

「わたしが…我慢…？」

…否定は出来なかった。母さんの胸に飛び込みたい。ただ母さんに一緒にいて欲しい。そう思わなかったことがないとは言えない。私

は母さんが何故研究を頑張っているのかは知らない。私の記憶のためなのか、他の何かなのか、単に生活するために必要なのか。でもそんなことよりも私は母さんと一緒にいたいと思っていないか？

否定できるはずが無かった。毎朝私が鏡の前で笑顔の“練習”をしていたのは何故？いつ母さんと会ってもいいように、私は幸せなんだと見せるためではなかったか。廊下ですれ違うなんていう幸運でもいいから会いたいと、偶然を装うために何時間も廊下で待っていたら眠りこけてしまいリスに怒られたこともある。結局その日は母さんは部屋から一步も出ることがなかった。

涙を流しながら訴える彼女の姿は、いつかの雨の夜にこの本心を告げて、黙って抱いてくれたリスの胸に顔を埋めて泣いていた私の顔と同じではないかと思えて。だから彼女に話を聞いて欲しい、そう思える自分がいるのも事実。

「…そうかもしれない。けれど、だからといって私は！」

「フエイト！」

本当は、記憶喪失なんて嘘なんじゃないかと考えたことがある。本当は、私は母さんの娘ではないのではないかと疑ってしまったこともある。本当は、母さんが私を嫌っているからあまり会わないんじゃないかと思ってしまったこともある。本当は、リスに全て任せて母さんは私なんてどうでもいいと思っているんじゃないかと嘆いたこともある。

…でもそれを口にすることは私には出来ない。もしそれが真実であつたなら私はもう私でいられないから。だからこそ…

「こつするしか、ないんだあ！」

> Photon lancer . Full auto fir
e . <

「フエイト!？」

私が私であるために。たとえ今の状況が私の独りよがりからの幻想であつたとしても、それでも私が母さんと共にあるために。なのは、今あなたと話をすることは出来ない。よく似た貴女には自分の弱い心を曝け出してしまいそうだから。

第四十三話 混戦の中で その3（後書き）

なのはの おはなししたいんだ こうげき こうかはばつぐんだ！
次回明らかになります。が誤解のないように記しておきますと、フェイトの攻撃は暴走体に対してです。なのはたちに対してじゃありません。話が出来ない。敵ではありません。

なのはにとっても盛大な自爆攻撃です。フェイトの方も単に記憶喪失と言われて疑いなく受け入れられるほどの天然さんではないので精神が一杯一杯でした。ある意味リニスの教育の結果なのでプレシアの自爆でもあります。遠ざけようとするほど懐く。プレシアにとってはどんな無理ゲーだ状態。

。スパルタリニス先生

プレシアの覚悟を知っているのもあって悲壮な決意で訓練に臨んでいる。それこそ狂ったプレシアと戦う可能性までリニスは考慮に入っていた。

フェイトにとっては魔法の先生モードのリニスは割とトラウマなのでつい“先生”と呼んでしまう。

。よほど探知魔法に自信のある人間

ユーノへのフォロ。多少の運があるにせよ未発動状態の一個目を発見、確保ができたのは彼がそれだけ有能だったということ。

。エレベーター

ビルから飛び降りたりしたら警察と救急車を呼ばれちゃいます。リニス先生の管理外世界での振舞い方教室の成果。

その前にB Jをどうにかしろという意見は大人の事情につき封殺されました。…多分、リニスも母親のセンスを考えるに深く突っ込めなかったんですよ。

○フェイトの“さん”付け
だいたいリニス先生のせい。

“なのはさん”と打ち込むと背筋に寒気が走るのは何故ですか（S
LB

○フェイトが暴走体やらのジュエルシード関連用語を知っている
リニスが管理局やスクライアにハッキングを仕掛けている。元はプレシアの手口なのでリニスの手では痕跡を完全に隠せてはいないものの短期間で全てが終わると分かっているので問題にしていけない。

○話しても仕方ない
“意味がない”ではなく“仕方ない”。話すことの有用性と解決に至ることもあるという点については否定していない。だからなのは続く台詞を言えた。

○一步も部屋から出ないプレシア
研究のためか、寝ていたのか、それとも会わないようにと心を鬼にしたのか。

○我慢している目
悲しい目はしていないけれど、悲しみを隠すために無理をしている目は結局はそういう目だということ。

第四十四話 混戦の中で その4（前書き）

題が“混戦の中で”な割りに背景事情説明や心情描写が半分以上を占めるのは気のせい。

第四十四話 混戦の中で その4

海鳴市街地 アルフ

「フェイト……」

気迫も攻撃の苛烈さもいつものフェイトより上だけれども、キレがなく動きも直線的過ぎる。そもそもフェイトは速度と攻撃に魔法の才能が偏っていて防御面が心もとないところがある。機動性とフェイントを生かした変幻自在の戦法がフェイトの戦い方であって、こういう力任せなやり方は厳しくリニスが戒めていたことだった。それもこれも先ほどの指摘で冷静さを失っているからだ。

「あんた……なのはって言ったっけ？」

「は、はい」

「最初はどこの温室育ちの甘ちゃんかと思ったんだけど、そうじゃなかったみたいだね。さっきの……アレはつらい想いをしてなきやでてこない」

ややあっけにとられていた表情だったなのはも神妙な顔をして頷く……ほんと、フェイトと同じくらいのトシだろうによくできた人間だよ、まったく。ま、あたしもそんなに多くの人間に接してきたわけじゃないから偉そうなことは言えないけどさ。でもフェイトの周りはあたしを含めていろいろと濃いメンツで、だからこそ見えてくることもある。

「あんたは強いよ。そのつらさに耐えて、その様子じゃ跳ね除けてきたんだろうからさ。でもみんながみんなそうじゃないし、どうしようもない壁があることだってあるんだよ」

「どうしようもない、壁……」

だからフェイトは言ったのさ。話をしても仕方ないってね。たしかに二人は似ているかもしれない。でも生まれた境遇も生きてきた環境も違う。本人の性質も周りにいる人間も違う。話をして変わるのはせいぜい物の捉え方、心境。でもフェイトの目の前にある壁はそういうレベルでどうこうできるものじゃないんだよ。自分が自分であるという誰だって持っているはずの最低限の土台（過去）すらあの子にはないんだ。

「誰もがあんたみたいに強いわけじゃないんだ。誰もが壁を打ち破れるわけじゃない。そこんところを考えて欲しいね。こんなこと言っただけ……なのは、あんたのことは嫌いじゃないからね」

あたしは言われたことの意味を噛み締めているのか拳を強く強く握っている、主にどこかよく似た少女に背を向けた。たとえ何者であろうとフェイトはあたしの主人。だからあたしにできるのはフェイトの側にいること。フェイトが悩み迷い疲れ果てても帰ってこれる場所であり続けること。ただそれだけだ。

ユーノ・スクライア

「なのは……」

なのはは僅かに肩を震わせていた。きつと肩に乗っていなかったら
気付かなかったと思う。そのくらい僅かなものだったから。でも氣
遣わしげに声をかけた僕になのはは笑顔を向けた。

「わたしは氣にしないよ。ユーノ君」

その笑みはカラ元氣から来る不自然なものではなくて晴れ晴れとし
たものだった。僕は今の話の流れからなのはがどうしてそこまで笑
えるのか分からなくて返事をする事ができなかった。

「あの女性ひとは勘違いしていたけれど私はそんなに強くなかないよ。
わたしには…わたしを心配してくれる人が沢山いただけ」

家族のみんなやその周りの人。大切な友達。先生たち。なのはは順
に名を挙げていく。それを聞いて僕は今でも彼らはなのはを見守り
続けてくれているんだろうと思った。そしてなのはの笑みの意味が
分かった。この分だとなのはが我慢をしているのもきつと知られて
いるんだろうな。土郎さんなんて僕が話す前からなのはが何かに巻
き込まれていることに気付いていたみたいだから。

「だからね。わたしはあの子と、フェイトちゃんとお話してあの子
の近くの人になりたいんだ」

「なのは」

ん？と首を傾げるなのはに流石に僕も笑ってしまった。“近くの人”
なんて表現は初めて聞いたよ。純粋な氣持ちをそのまま言葉に出

しているのは分かるんだけどね。なんというか……もうちょっと翻訳のしようがあるというか、言い方があるんじゃないかと僕は思考するわけだ。言い方じゃなくて大事なのはその気持ちの部分なのだけれど、こればかりはスクライアで育ったがゆえの僕の性根の問題なんだろう。

「それって、友達になりたいって言えばいいんじゃないかな」

「んー…でも友達って、なろうとするものじゃなくて、気付いたらなっているものだよ。だから、近くの人でいいんだ」

「だいたいアリサちゃんとすずかちゃんと友達になったきつかけも、おおよそ普通思いつかべる方法とはかけ離れたものだったんだよ、となのは少し苦笑しながら続ける。後に明かされた真相を前に僕の顔は恐らく引き攣っていたことだろうと思う。そんなの絶対おかしいよ。意地悪を止めようとして女の子が拳を振るって、それでトモダチになるとか訳が分からないよ。」

「そっか。でもやっぱりなのは強いんじゃないかと思うけどね」

僕にはなのはほど近い存在はいなかったけれども、周囲には沢山の人がいた。でも僕にはそれが逆にコンプレックスになっていたんだと思う。使い魔の子の言い様からすると周りに誰もいなかったであろうフェイトという子とはある意味真逆だったかもしれない。

僕の周りにいた人々は誰も彼もとても立派——その多くは確かに天才ではあるのだけれど、人格なり生活能力なり社会的協調性などにおいて大いに問題があるような気もするが——で…今の僕には手の届かない存在だった。

僕は…自分で言うのはなんだけどこれでもかなりの才能があるんだと思う。ただしこれは、謙遜の態度をとったら逆に失礼でしかないのだから少しは誇りを持ってと族長に再三忠告を受けたからこそその自覚だったりする。9歳にして魔法学院卒業、結界魔導師としての魔導師ランクA、小規模派遣隊とはいえスクライア一族の遺跡発掘隊責任者。でもこれだけ頑張っても、これだけの肩書きがあっても、スクライアの中では“その程度”だった。つくづくともない集団だよ…。

それがあまりに急ぎすぎた子供の考えであって、背伸びでしかなかったのは今ではよく理解しているし、その結果が今の状況なので反省もしている。でもよく考えれば僕はその後の事態収拾にしか目を向けていなかった。“これから”を考えていなかった。けれどもなのは一つの答えをもう出していた。それは十分に凄いくことで、それができるのははやっぱり強いんじゃないかと僕は思うわけだ。

「そ、そんなことないよ!？」

「……うーん、そうなのかい？ それじゃあ僕も手伝おうかな」

何も大人になるのを急がなくてもいい。それを僕は今回の教訓として受け止めて、一步引いた立場でかつ無責任でもない立ち位置を選ぶことにした。すなわちそれはなのはの横に立つという選択だ。“これから”は今回のことをなのはと一緒に解決しながらゆつくりと考えていけばいい。僕は“まだ9歳”なのだから。

「うん！」

元気のいい返事とともに花のような笑みを浮かべるのはに、僕は不覚にもどきりとしてしまった。心臓が踊るのを感じる。…フェレ

ットモードでよかった。いや、この姿ですら顔は真っ赤かもしれないけれど。ふと族長がしきりに首を傾げていたのを思い出す。曰く、小動物姿だというのに手に取るように――むしろ変身していない時よりも簡単に――感情が見えてしまうのは何故だろう、と。……まあ、どうやらなのはは妙に鋭かったり考え方が大人っぽい割には自分に向けられる好意に疎いところがあるからばれてはいないと信じたい。

「じゃあ、“近く”にいつか？」

「……そうだね。防御は僕に任せてなのははしっかりと暴走体を狙うんだよ」

「うん。……えへへ、先にユーノ君と“近くの人”になれちゃいそうだね」

せっかく落ち着きかけていた僕の心臓はまた大きく跳ね上がるのだった。な、なのは、それはええと……どういう意味でなのかな。いや、うん、たぶん、おそらく、いや間違いなく友達という意味での“近くの人”なんだろうな。なのはだしね。……うん。頑張ろう。いろいろな意味で。

第四十四話 混戦の中で その4（後書き）

原作の台詞や状況を逆利用して違いを表現する。人、それを手抜きと言つ（おい

大人が頑張れば子供も応えてくれるはずだよねという88式の願望第二弾な展開でもあります。かわいいは、正義。とりあえずユーノ爆発しろ。なのはさんの中でどういう扱いなのかは今のところ書いていませんけど。なのはさんは天然ジゴロのケがあるので果たして…。

。フェイトの拙攻

リニスがクロノとの戦闘中に目を逸らしてしまった原因。

リニスは戦況全体を知るためにサーチャーを戦域全体に飛ばしているので気付いた。一方クロノも全体指揮を執っている状況なので実はクロノvsリニスはお互い全力戦闘ではない。弾幕ごっこ。

。アルフの周囲の人間

原作で言えばプレシア、リニス、フェイトだけ。後はせいぜい地球に居た頃の大家と時の庭園に生活用品を届けに来るであろう宅配業者に対応するぐらいじゃなかるうか。

。アルフの心境

最後の述懐は前線から離れてついでに出番もフェードアウトしたStS以降の先取り。リニスの存在によって落ち着いたお姉さん思考になっている。

。わけがわからないよ

意外と小学校女子は拳で語る子も多かったりする。実は体格も低学年だと男子の方が総じて小さい。88式は幻想抱くまでもなくそういうものだとなりました。

。これで共同で戦っていると言えるのエイミーさん!?

映像はきているけれど何を言っているのかは分からない状態。傍目にはなのは言うことをフェイトが受け入れて暴走体と戦い始めたように見えなくてもない。

。ユーノ

彼は今回も無線機背負って耳にバインドでイヤホン固定のフェレット姿である。∴ いいことを言っても締まらないことこの上ない。

8・28 改稿 一部表現修正。あわせて後書修正。

第四十五話 混戦の中で その5（前書き）

R - 15 残酷描写タグ効力発揮回です。

心臓の弱い方はご注意下さい。動物愛護団体の方は回れ右願います。
想像力豊かな人はご愁傷様です。あと食事前に読むのも非推奨です。

それでは覚悟の上でどうぞ。

第四十五話 混戦の中で その5

海鳴市街地 アースラ武装隊第二小隊長

『間もなく使い魔らしき反応と接触します！正面同高度です、警戒を！』

クロノ執務官がアースラに居ついた―リンディ提督の手によって半ば配属状態なのは公然の秘密だ―関係でオペレーター姿が板についたエイミー執務官補に了解と返答すると、正面からローブらしきボロを羽織った人間大の何かが突っ込んでくるのに気付いた。

執務官補の話だと使い魔らしき反応だが魔導機械の反応も混じっているらしく、トラップに注意しろとのことだ。確保しようと不用意に近付いて隠れていた魔導機械にずんばりんされるのは御免だな。小隊員に十分警戒するように伝えた上で一番防御魔法の得意なやつスクランブルのフォローの下でB Jが一番頑丈でこの手の未確認相手の出動経験が豊富な俺が対処することにした。

少しは若い奴にも経験を積ませたいんだが、こちらがミスれば封印作業中の第三小隊が危険だからな。そうなりやギャレット一尉の第一小隊を出すことになって予備戦力がなくなる。最悪リンディ提督が出ることになるが、あの人も司令官としての立場の問題で交渉に出て行く以外は艦から出ないので前線での戦闘はこっちに来て以来一度も無いらしいなあ。大魔力での制圧戦闘がウリの人だからこいういう“当てちゃいけない危険物”がある状況だと戦いにくだるうし。

クロノ執務官もそのあたりを考えて提督を引っ込ませているんだろ
うからここは俺が気張るところだ。…にしても親を冷静に分析でき
るとか、ハラオウン家の人間は立っているなら親でも使うというの
は本当らしい。使われている立場の俺がどうこう言えることじゃな
い。

「よし、行くか。フォロー頼むぞ」

「隊長、お気をつけて」

とりあえず右手を掲げて身分証明を示しながら大声で呼びかける。
…まあ、この状況でのん気に何も考えずにここに突っ込んできてい
るとは思えんが形式というやつだ。

『こちらは時空管理局だ！　ここより先は危険空域だから引き返す
んだ！　こちらの指示に従ってくれ』

これで止まったり引き返すようならそもそも、だよな。既に同じよ
うな警告は執務官補が艦から度々発信している。案の定、相手は止
まらない。仕方ない、と小さくため息をついて止まらないのなら実
力をもって排除するぞと警告した上で威力を十分に抑えた直射魔法
を相手の上空に撃ち込む。威嚇射撃だ。

チツ、回避運動無し、スピードを緩めもしないか！　だがこちらに
反応が全くないというのも妙な話だな。変則的だが直射魔法に見せ
かけた誘導弾で後ろから追い立てるということだつてあるんだが後
ろを確認した様子もない。…本当に使い魔か？　支援隊員から探知
魔法ではアースラからの観測以上のことはまだ掴めないと言っ
た。まずいな、これ以上は行かせられん。

『仕方ないな。とりあえずあのロープを引つpegして正体確かめる。相手の動きを見逃すな。下手な動きをしたら容赦なく叩き落せ！
トラップの可能性もある、全員防御を怠るな』

『アイアイサー。しかしやることは“スカートめくり”ですか』

『人聞きの悪いことを言うな。というか、今の発言戦闘詳報に残るぞ』

『し、しまったあーっ！』

阿呆だ。阿呆がいる。俺の給料査定にも下手したら響くんだが。特にこの事件に関しては報告書の作成者が真面目一徹のクロノ執務官なんだぞ。何て言われるか今から憂鬱になるぜ。自分の息子くらいの相手に怒られる身にもなれってんだこの馬鹿野郎。エイミー執務官補がやったのにも全部目を通してるらしいからなあ。まあ当然のことなんだが忙しい身なのに本当によく働くよな。その辺りは執務官補とか現地の人間に丸投げっていう執務官もいるんだが。

緊張感をほぐす軽口の応酬くらいは大目に見てくれると思っておう。最近、クロノ執務官もだいぶ丸くなったし。でもあれどう考えても女性クルーに弄ばれた結果だよな。主に執務官補と提督に。強く生きるよ少年。

そんな埒もないことを頭から振り払う。よし、集中しろ。いつでも身を翻せるよう警戒して接近する。が、全く反応が無い。こいつはもしかすると囷かもしれんな。だとすればますます畏を警戒しなくちゃならんが、あいにく時間がない。ここは行くしかない。

「正体を、見せろっ！」

すれ違いざまにロープの端にデバイスを引っ掛ける。下手に絡むとお互いきりもみ落下なんていう面白くない結果が待っているが、こちらもそこまで素人じゃない。うまくふわりとロープが浮き上がった…。おいおい、今日は最悪な日だぜ。

「くそっ！爆発物だ！」

「離れてください！プロテクション！」

いつでも発動できるように待機させていたフォローの隊員の防御魔法が発動した瞬間、爆発。その直前の光景を俺は目に焼き付けていた。吹き飛ばされながら、毒づく。思った以上の、大爆発。いやこれは…魔法の暴発に近い。魔力そのものを叩きつけられた感覚だ。だが普通の爆発も混じっていたのは確かだ。そして俺は最後の最悪の光景を目にしてしまった。そう、魔導機械の破片に混じって、爆ぜた“ソレ”を。

「畜生…小型の飛行魔導機械に…動物、だと…！？」

防御魔法と咄嗟に爆発の影響が比較的少なくなる——まあこれは物理的な爆発に限った話だが——下方へと退避したのが功を奏したのかなんとか俺は気を失わずに済んだが、魔力と爆風の混ざり合ったエネルギーの奔流は十分距離をとっていたはずの小隊全体を巻き込んでいた。俺ほどじゃないがみな被害を受けたかもしれない。

もしこれがジュエルシードの近くで爆発していたら…その想像ですら胸糞悪い最後の光景以上ではなかった。実際に起こったら洒落にならないのは分かるが…目の前で見た惨劇と有り得た想像は違う。

とりあえずこみ上げてくる嫌悪感をねじ伏せて俺は各員の状況を確認する。

「おいつ、全員無事か」

「自分は大したことありません。隊長こそご無事ですか」

「ふん、その怪我でよく言う。まあ俺も戦闘はこれじゃ無理だな」

「しかし隊長、今は」

言うなと目で制した。恐らく使い魔らしき反応とエイミー執務官補が判断したのはアレのリンカーコアの反応を拾ってしまったせいだ。優秀さを逆に突かれるなんてな。もっともあの様子をしっかりと見ていたのはめくった瞬間に横目で見てしまった俺と状況をよく確認するために正面からややずれた位置で防御魔法を準備していたあいつとそのバディだけだろう。バディの方は無言で頷いて堅く唇を噛み締めている。あいつもだめか。役割上、防御が堅いとはいえ庇われた方があの怪我だからな。

他はもう少し離れていたから被害も少ないが…困ったことに中衛指揮ドクトである俺と支援に長けていて後衛支援役のまとめ役のあいつ、その守りについていた壁役の最前衛の筆頭株の三人が使い物にならないという有様である。万が一の事態を想定して戦力を集めていたのが見事にアダになった。つまりところ第二小隊は最強の盾と後方支援のエキスパート、そしてこの損失を招いた間抜けな指揮官を失い、小隊としては壊滅状態になってしまったということだ。

あー、給料査定の話題の原因を作ったアイツが悪い。そういうことにしてしまいたい。畜生。こりゃ給料査定どころの話じゃないぞ。

拳句、見たモノがアレか。バリアジャケットの端についた“欠片”に気付き、俺は小さくため息をついてそれを手の中に隠す——解析次第で何かわかることもあるかもしれん——とアースラに第二小隊の戦闘能力喪失と帰艦要請をするのだった。詳しい話は提督にだけ念話で伝えておく。艦橋の若い連中にはちと刺激が強すぎる。…そういう俺もしばらく肉料理は食べそうに無いがな。こういうのは…慣れん。

第四十五話 混戦の中で その5（後書き）

というわけで見事に“陽動”成功です。プレシアもここまでの結果は期待していなかったでしょうが、慎重になり過ぎた第二小隊長が見事に策にはまってしまいました。

胸糞悪い話ですが今までの常識を覆すようなリニスの実験が何の失敗も無く一発成功なんてしないと思います。その結果、ナニがあったのか。ナニが残されたのか。まあ、そういうことです。

リニスが気にしなかったのは全てプレシアから教えられていたからです。フェイトの誕生経緯を知っていればどうせ気付くことですからね。彼女もいろいろと思うところはあるのですが、それについてはまた後ほど描写します。

…これ、R-15タグで大丈夫なんですかね…びくびくしてます。

○ギャレット一等海尉

A、Sで名前を呼ばれる武装隊員。隊長かはともかくリーダー的存在らしい。この話では武装隊は三個小隊がアースラ常駐で彼は第一小隊長兼武装隊長となります。階級はそれにあわせた捏造設定。

○リンディの戦い方

史実だと次元震を抑えたりしているが、この話の解釈だと封印・抑止系は術式による搦め手込みにしる、基本的には魔力同士のぶつ合いになる。つまり短時間とはいえ次元震レベルの魔力の暴走を抑えた彼女はそういう大魔力運用に長けているということ。

○クロノ

またしても同情される。クロノだから仕方ない。

○ “スカートめくり”

スラング的に使われてたりしないかなと（しないしない）ググったら（2011.7.8現在）wiki。ediaのスカートめくりのページで“画像提供依頼”が出されていました。

それはひょっとしてギャグで言っているのか！？

いやほんとどうでもいいことなんですけどね…。あまりに暗くなりそうなので笑える話ということ。

○ ポジション名乱舞

StSのアレ。当てる漢字は見ただけでおおよその役割が分かるように微妙に変えてある部分もあります。

○ “欠片”

魔導機械の破片ではない。

8・28改稿 一部表現修正。

第四十六話 混戦の中で その6（前書き）

10…9…8…7… ヒャア がまんできねえ 0だ！

そろそろ真面目という名の燃料が切れる気はしていた。今は反省している。

第四十六話 混戦の中で その6

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ リンディ・ハラウン

モニターで第二小隊が罠にかかる様子を見ていた私はギリリと奥歯を噛み締めていた。第二小隊長の報告では動物——使い魔か、あるいはリンカーコアを持つ——を“使った”モノだったらしい。“欠片”も回収したので解析主任に回すように指示を出しながら考える状況からジュエルシード確保のために現れた新たな使い魔という推測をしたエイミイは責められない。罠の可能性はあるにしろ、迎撃しないという選択肢は元より存在しなかったのだから。

現場の小隊長は出動経験も豊富で罠を考慮していただろうけれど、だからこそ慎重になり過ぎた結果罠に嵌った。しかし起爆のタイミングが正確すぎる。ローブをめくった程度で容易に起爆するようでは高速飛行していたのだから誤爆の可能性が高い。何も無いところで爆発させては本末転倒、これは不意打ちだからこそ効果がある。早期発見さえ出来れば精密解析で正体を判別するのはそう難しいことではないからだ。この戦闘空域内にいる誰かがスイッチを握っていたと考える方が自然だろう。

「負傷者は回収、残った隊員は第三小隊長指揮下で周辺警戒を。エイミイ、結界内に同様の反応が無いか広域索敵急いで。二の矢がないとは言いい切れないわ」

「了解です。あーもう、切り替え切り替えっ」

乱暴に頭を掻き回してモニターに向かうエイミー。うん、大丈夫そうね。少なくとも表面上は冷静さを取り戻しているし、仕事に支障もきたしていないわ。私はクロノと対峙する使い魔に目を移した。お互いの様子を見るに全力ではなく中距離で牽制を繰り返しているだけ。もう一組の魔導師と使い魔のコンビは鳥型暴走体相手になりの猛攻を加えている。やはり周囲に目を配る余裕があったのはクロノと対峙している使い魔だけ。だけど。

「待つしか、ないわね」

この膠着状態では先に動いたら負けだ。向こうは魔導師が最低一人、こちらは武装隊一隊と…最悪の場合は私が控えている。判明している実戦力はこちらの方が多いものの守るものも多い以上、予備戦力を枯渇させられれば相手の動きに対して打つ手がなくなる。さっきのような自爆攻撃は二度は通用しないが…他に手がないとは言いつれない。相手の指揮官はなかなか狡猾な人間らしい。向こうの正確な目的と戦力が分からないうちは迂闊に動けないわ。

とはいえ時間はこちらの味方なのだから焦ることはない。ジュエルシールドを全て封印してしまえば一応“建前上”は管理局が守らなければならぬものはここにはない。それに相手の目的がジュエルシールドの確保——流石にあの爆弾は陽動目的だったと思いたい——であれば戦闘を続行しようとはしないはずである。相手が理性的な頭のいい相手である限りはこの読みはそう外れてはいないはずなのだ。無論、最悪の事態も頭においてはおくけれど。

「そちらの考えは分かるんですが…このまま膠着状態が続くとなるとまずいですねえ」

「…どういう意味です？ 鈴木少佐」

鈴木少佐が口をへの字に曲げて海軍帽を被り直した。そして続くエイミーの報告がここまで考慮の外にあった彼らの存在を思い起こさせた。私は彼らの見事な戦いぶりを見て忘れていた。彼らは優秀な軍人であり、戦うための部隊だがそれは同じ思考で同じ兵器を操る同じ世界の人間と戦うための軍隊であって“魔法”という彼らにとって未知のモノを携えた相手と戦えるという根拠にはなりはしないということ。

「提督、エルドリッジが思念体にとりつかれています。振り切れない模様」

「そういうことです。多少足が速くて小回りがきこうが二次元運動しかできない水上艦は自由に空を飛べる相手にとっては的ではないんですよ」

挙句、こちらの攻撃も効果薄で阻止も出来なければ、相手の攻撃――魔法的なモノに対して我々は有効な防御手段を持っていませんからね、と鈴木少佐は淡々と続ける。モニターの向こうでは体当たり攻撃を受け始めた駆逐艦エルドリッジが映し出されていた。エルドリッジは至近距離にまわりつかれ、僚艦からの援護も受けられなくなり、一方的に攻撃を受けている。

私は彼らを知らず知らずの間に管理世界の軍人と同じ扱いにしていたのに気付いた。確かに第十三任務部隊の軍人たちは理不尽に立ち向かい、理解できないものを目の前にしても思考停止せずに戦う術を模索する強い精神力を持っている。その姿勢は信頼に値するものだ。けれども彼らのことをあまりにも知らなすぎた。彼らがどれだけの實力を持ち、何に立ち向かえるのかを知らなかった。

だからといって私に打つ手があるのかと言えば…無い。状況は文字通りの膠着状態であって迂闊に動くことはできない。唯一突破口があるとするば…それはなのはさんたちしかない。二重に結界が展開された影響なのか、あるいはあの使い魔の高位魔導師がばら撒いたサーチャーが副次的に妨害もしているのか、彼女たちの戦いは映像しかアースラには届いていない。音の無い戦いを私は見守るしかなかった。

海鳴港沖 第十三任務部隊 駆逐艦エルトリッジ ジョン・G・フ
オード中佐

「ついにつかまりましたね」

「遅いくらいだ」

俺は思念体の体当たりの衝撃で振動するエルドリッジの艦橋で副長と顔を見合わせ、軽く肩を竦めあった。今のところは少々大きな波が来て揺れていると勘違いしかねない程度だが、この状況がいつまで続くものやら。

エルドリッジは駆逐艦と銘打ってはいるものの、基準排水量4015tという巨体は戦前の基準で言えば小型の軽巡洋艦に匹敵する大きさになる。52Ktという船足と、船体の大きさ割りに舵のききがよく、急発進急停止が可能というおよそ従来艦では考えられない機動性をもつても空を自由に飛び回る相手から逃げ切ることにはかなわなかった。どうあがいても水上艦は二次元運動しかできない

のだから仕方のないことではある。

特殊弾頭ミサイルという危険物を抱えている関係上、エルドリッジは艦の装甲だけでも通常の砲戦距離であれば6インチ（15・2cm）クラスの艦砲に耐えられる設計になっていて、部隊内でも一番タフな艦だろう。もっとも電磁防壁や防御重力場が効果を発揮するのであれば、その程度の威力の兵器はそれらに遮られてしまい、たとえ戦艦主砲クラスでも一発直撃即撃沈ということにはならない。これについては他の艦も同様だが。

「魔法に対して電磁防壁も防御重力場も通用しないという事例になっってしまったな」

元より推測はされていた。どちらの装置も艦に到達する前に敵弾に作用するものだからだ。それに魔力という別の形態のエネルギーを認知すらしていなかったのだから仕方ない。もしかすると世界の超常現象の類はほとんどがこの魔法の産物なのかもしれないな。埒もない考えを振り払い、被害を報告させる。

今のところは暴走体は船体の側面にただぶつかってきているだけで航行に支障の出るような損傷はない。そのエネルギーの源が魔法とはいえ、物理的な破壊を起こすのはあくまで魔力そのものではなく、物理エネルギーである。従ってその物理エネルギーに耐えるための船体は単なる衝突程度では傷をつけることもできない。むしろ程度の問題はあるがそこまでのエネルギーは生じていないようだ。

迎撃の方と言うとあまりに近いために127mm速射砲が既に沈黙している。この距離では破片でこちらが損傷を受ける可能性があるからだ。20mmCIWS（近接防御火器システム）ならばその危険性は薄い^{リスケ}が、威力も相応で決定打に欠けるため今は本来の自動

迎撃ではなく遠隔手動操作でチマチマと撃たせている。もつとも、レーダーではしっかりと捕捉できず、光学照準で対応しているが相手に実体のないモノというだけあってあまりアテにならずほとんど勘で撃っているので効果は薄い。

実際、先ほどまで三隻で速射砲による対空射撃がおこなわれていたが…実を言うと見た目こそ派手だったものの直撃は一発もない。破片が被害を与えた様子があったのがせめてもの救いだ。

実験艦としての性質が強かったこの部隊の艦はどれも新式の武装を装備していたのだがそれがあだとなっている。砲もCIWSもレーザー照準が基本であって、流石にそれだけでは危険と申し訳程度に補助として光学照準が用意されているに過ぎず、またそういった方面に強い砲術の専門家が乗船していないという問題も抱えている。ミサイルが各国の新型艦でも主兵装になる今、砲兵装自体の重要性が落ちていたというのもその原因の一つだ。

そういえばシュルツ少将が最後の超兵器を撃沈した航空戦艦の主兵装は光学兵器ではなく信頼と実績のある従来砲——聞くとここによると口径も今まで採用されたことのある16インチ（40.6cm）——だったという。流石にレーザー照準だったらしいが光学照準装置もきちんと積んでいたとか。意外と枯れた技術を使っているものだなと知った当時は思ったが、妙に奇をてらわない方が往々にして良い結果をもたらすということなのかもしれない。

「しかし超兵器も非常識でしたが何ですかこの黒いモヤモヤは」

「もう兵器ですらないな。まったくもってやりにくいことこの上ない」

上官と部下のする会話ではないが俺は副長のボヤきにボヤきで答えた。これがボンキュッボンのネーチャンなら大歓迎で受け止めるんですがねと通信長がボソリと言うと艦橋に軽く笑いの輪が広がった。軍人としてどうかと思わないでもないが、少なくとも今この瞬間は俺たちは軍人ではなくて悪者から街を守るコミックヒーローなのだからいいだろう。少年向けのコミックのヒーローの言う台詞ではないがそこは勘弁してもらいたい。

「ところでエルドリッジは軍艦^{フネ}であって、つまりはレディなわけだが」

「なん……だと……」

副長が非常にどうでもいいことに突っ込む。どうやら気付いていなかったらしく通信長ががくりと膝をつく。そこまでショックだったか。いやそれはそれでとか聞こえたような気がするが聞かなかったことにしておく。人の趣味をどうこう言うつもりはないというか、この空気に俺まで毒されてはいけない気がする。

ちなみに突っ込みを入れた副長は女性である。いろいろと女を捨てるような発言をしているし、本人も女らしくないというのを別段気にした様子もないのだが彼女自身は通信長の言うところの“ボンキュッボン”だったりする。世の中いろいろ不公平だと思う。この頼もしくも緊張感に欠ける部下たちはこんなノリでもきちんと仕事をしているのが恐ろしい。この部隊に来て以来、いろいろな意味で軍という組織の常識が破壊されたなと思いつながら俺は小さく嘆息するしかなかった。

「とにかくできるだけでもたせろ」

「一応、被害を度外視すればゼロ距離射撃で吹き飛ばして距離をとることは可能と思いますが」

さっきまでの雰囲気は何のその、副長が至極真面目な顔で進言してきたがまだ焦るような状況ではないと却下した。そう言うと思いましたが、と言って彼女も下がる。コミックのヒーローの無茶つてのは本当にどうしようもない時まで待つものだが、本当にどうしようもない時つてのは何をしてもどうにもならない時だ。無理無茶無謀であろうが打開できるならそれはどうしようもない時じゃないのさ。

つまるところだ。無理つてのは基本的にしなくてもいいというのが俺の持論だ。逆に言うなら“無茶”で状況を打開できたのなら、それは“奇策”なんだからな。それを履き違えた間抜けにはなりたくはない。熱血だなんだと言われるが、俺としてはどこまでも冷静なつもりなんだがなあ。まあ副長は分かった上で言ってきている。理解溢れる部下を持って俺は幸せだということだな。うむ。

第四十六話 混戦の中で その6（後書き）

意外とローテクの方が応用が効くという。最適な環境下では現代兵器は非常に強いんですけどね。

第十三任務部隊としては戦術的には特殊弾頭ミサイルで問答無用に焼き払えば簡単に勝てますが、当然そんなことはできないがゆえの苦戦です。また本来の相性としては実体を持つがゆえにレーダーで捕捉可能でミサイルを容赦なく撃ち込める暴走体相手の方がいいんです。

なのはたちが独断で行動したツケがここに回ってきています。つまるところこうなった以上はこの事態を収拾できるのは魔導師だけですよという話。頑張れ主役。

○リンディ

鈴木少佐やローレンヒル三佐との交渉やなのはたちに考えがいき過ぎていて頭の切り替えができていなかったために読み違えた。クロノに戦闘指揮を任せて自分は彼らを牽制しようとか思っていたあたりがまさにソレ。

○インチ

ヤード・ポンド法。艦砲に限らずメートル法で換算すると中途半端な数値が軍用兵器に多いのはその名残。身近なところではTVの“型”。

ちなみに現代では一部の例外分野を除けば未だに使いにくいーおかげで88式もこの話を改訂するハメになったーヤードポンドに拘っ

ているのは米国くらいだったりする。鋼鉄世界は大戦中の科学技術発展がアホのように進んでいるので技術力の割にはその辺りの改革が進んでいないのではなからうか。

○127mm速射砲

鋼鉄の咆哮で登場するのは外見と基本の連射速度からOtto Melara 127mm砲がモデルと思われる。ゲーム中ではそれまでの砲と比べると単装のみなので一基あたりの攻撃力では劣るがそれを補う連射速度と命中精度が魅力。

○20mmCIWS

レーダー、射撃指揮システムまで自前で持っている独立型の迎撃システム。フランクス。白い円柱がトレードマークのアイツである。火器そのものは“バルカン砲”として有名なM61A1 20mm機関砲が元になっている。

○ボンキュッボンからの流れ

お米の国だから仕方ない。たぶんフォードはクロノとウマが合う。

各艦、人種や文化などによるトラブル回避のためにある程度乗員の国籍は揃えられている。運用上、旗艦に相応しくない澤風——魚雷攻撃の為に僚艦に比べて敵艦に近づく必要がある——に豊田が将旗を掲げているのはそういう事情。

ちなみに民間船は国際色豊かな乗員で運行されることもある。乗員の給与の問題という世知辛い理由なのが悲しいところ。

7・16改稿 インチ表記関係でミスがあったので修正。一部表現修正。

8・28改稿 一部誤字修正。

第四十七話 混戦の中で その7 (前書き)

ケーキ入刀。

第四十七話 混戦の中で その7

side 高町なのは

わたしはある程度の距離を保ちながら戦況を見守っています。…正確には砲撃魔法を準備

（スタンバイ）したまま、撃つに撃てない状態でまごまごしているのです。ユーノくんがわたしが攻撃に集中できるように前に出て暴走体が来たら防御魔法を出すために警戒を続けてくれているのに…。

「だめだ…フェイトちゃんたちを巻き込んだりゃうかもと思うと撃てないよ…」

レイジングハートと空き時間に―授業中にマルチタスクを駆使してやってはどうかという提案がレイジングハートからあったけれど、それは何かが違う気がするの…―ずっと訓練はしていてこういう条件での練習もしたけれど現実では初めてのことだから…。でも初めてだからなんて泣き言は言っていられないの。訓練ではできたことなんだから…なんとかしないと。

街を、友達を守るためにユーノくんと一緒に戦うことをわたしは選んだのだから。家でおとなしくしているようにというクロノ執務官の言いつけを破って―ユーノくん曰く、別に強制されたわけではなく“お願い”に近い話らしい。でもあとでちゃんと謝ろうと思います―まで出て来たのは何のため？そしてさっき言葉に出したことも忘れてしまったの？迷いを振り切って、冷静に練習の時のことを思い出す。こういうときに有効な戦術は…。

「…レイジングハート！正解、分かったよ」

>> やつと思いいせましたね。合理的な判断です。やりましょう<<

あうう、どうやら試されていたみたいなの。これが実践というやつですよ、とレイジングハートが言う。練習を現実に役立てるのは大変なの。でも冷静に状況を見渡して、自分が出来ることをする。それが大事だってユーノくんも言っていたものね。

高速移動目標と交戦する同じく高速型の魔導師への援護。両者の対峙は一瞬。味方も相手の動きを見て戦術を組み立てているから移動中の敵への不用意な攻撃は読みを複雑化させてかえって負担になる可能性がある。互いの連携がとれていない、実力も分かっていない状態では尚更。今のわたしの技量だと動き回る相手に有効な打撃を一回で与えられるかは微妙だから直射砲撃魔法は×。

「お願い、うまくいつてね…」

>> 練習では完璧でしたよ。自信を持って下さい<<

「うん、そうだね。そのために頑張ってきたんだから」

つまり正解は誘導射撃魔法。動き回る相手にも対応でき、かつ味方にとって都合がいい状況を作り出すために最適なタイミングで攻撃を仕掛けやすい手段。誘導に魔力を割くので威力は低いけれど、あくまでわたしの役目はアシストであって撃破は任せていい状況だから問題ない。

>> Divine . . . <<

「シューター！」

誘導弾を暴走体の背後にゆっくりと回して…仮に気付かれても行動に制約を加えられればフェイトちゃんが無事になる。少なくともフェイトちゃんにはこちらの行動の意図は伝わるはずだね。一瞬フェイトちゃんが動きを止めてはとした表情になり、使い魔さん、次いでわたしの方に顔を向けて小さく頷く。わたしは笑顔を返しながら、少し心が軽くなるのを感じた。

うん、大丈夫。気持ちは伝わっている。まだフェイトちゃんは受け入れてはくれないかもしれないけれど、わたしの言いたいことは分かってくれている。目を背けていた辛いことをわたしがい出しさせてしまったのに。うん、やっぱりフェイトちゃんは強いな。わたしは独りだったらきつとダメになっていたと思う。

…でも、ほんとにフェイトちゃんの周りにもきつと近くの人はいないはずだよ。すぐ側にも一人いる。フェイトちゃんのことをずっと見守って側にいる使い魔で、わたしにまで気遣いを忘れなかった子。子なんて失礼かな。どちらかというとお姉ちゃんみたいな感じのものね。

そして何回目か分からない暴走体とフェイトちゃんの交錯、そして両者が離れて反転して、睨みあう一瞬の隙。本当ならここを砲撃で突けばいいんだけど…直撃させるには術式の微調整、射撃修正まで必要なのでまだ経験不足のわたしには無理がある。だから、これが今のわたしの全力！

「今はこれが精一杯だけど…受け取って！わたしの気持ち！」

「フェイト！ダメだよそんなじゃ！」

アルフの制止する声が聞こえる。けれど、頭では分かっているも止まらない。自分で自分の感情を抑えきれない。どうしようもない現実にはただただ逆らいたくて。自分の抱いてしまった疑念にただただ腹が立つて。差し伸べられた手を握ることもできず、振り払うこともできず。自分の近くにあったいらだちをぶつけても何ら問題が無い相手に行き場の無い想いを振るうしかなかった。

「あの子たちはどうしたかな」

前ときは空を飛ぶのもあまり慣れていない感じで、どう見ても素人同然の動きだった。ユーノというスクライアの子も腕は悪くないにしろ経験不足らしくまごまごしていた。でも力だけで真っ直ぐ正面からぶつかりにいったいいようにいなされている今の私では彼女たちといい勝負なのかもしれない。

視界に桃色の誘導弾が目に入る――時間をかけすぎて局員がこっちに？うつん、そういえば去り際に見たあの子の砲撃魔法の光と一緒に。幾分冷静さを取り戻して周囲を確認すると、アルフが小さく肩をすくめて苦笑していた。そしてようやく気付く、アルフが要所要所で牽制を加えてくれたから私は無事なんだと。

『落ち着いたかい？』

『ごめん、アルフ…』

『…いいんだよ。今度のことが終わったら、もう遠慮することない。研究室の扉蹴破つてでもプレシアの胸に飛び込みまいな。リニスも止めやしないよ』

今回のこと…か。アルフは笑っているけど、少し笑みに無理があるよ。私はもう分かってるからいいんだ。こんな“悪いこと”をするということは、母さんはもう後のことを考えていないか、あるいはそうなつてでもしなければならぬ何かにとりつかれているんだよ。それが私のことなのかは分からないけれど…どちらにせよ気付いていて何も言わずに従っていた私も、同罪だ。

浮かんできた暗い考えを追い払い、視線を巡らすとあの子がデバイスを構えていた。明らかに緊張した表情で―まともに戦うのは初めてなんだろう―誘導弾の制御に集中しているみたいだったけど目はこちらを向いていた。戦いはともかくマルチタスクの扱いには慣れているのかな。意図は理解したという意味で小さく頷きかけると花の咲いたように笑みを浮かべた。

あの子は何も悪くない。悪いのは私だ。母さんを止めることもできず、自分が見たく無いモノがあるかもしれないという理由で目を背け続けている私だ。いつまでもそのままだから、私は空っぽのままなんだろう。だからあの子の手を握ることができない。気を楽しんでくれようとしたアルフの冗談に笑みを返すこともできない。

あの子のように、嬉しいときに笑うこともできない。

そんな壊れた私でも、目の前の暴走体を倒すことくらいはできるよね。アルフと、あの二人も一緒だから。バルディツシュを軽く握り直す。リニスから贈られた―内緒だと言い含められたけど、製作には母さんも一枚噛んでいたらしい―彼は軽く明滅して短く必要最低限の返答をする。喋り出すと止まらないところのあるあの魔法の先生の手によって作られたとは思えない。何故だか分からないけれど、そのオーダーを出したのは口下手で不器用な…優しい母さんのような気がした。

「行くよ、バルディツシュ」

>> Yes , Sir . <<

アルフの射撃魔法はさっきまでは私に勢いを保ったままぶつからないような牽制だったけれど、今度は逃げ道を塞ぐように撃ち出されていく。ユーノ・スクライアが進路が限定されたのを見定めてそこにバインド系の魔法を置いていく。それを避けようと進路を変えたところで隠匿式のバインドが襲い掛かった。勢いを弱めたところで今度は接近したアルフに元の進路に叩き戻される。

二人がいい笑顔で―アルフは人型のままだけどユーノの方は相変わらずスクライアの変身魔法の小動物姿―ぐつと親指を立て合つのが見えた。私が決意を固めるまでの間に念話で相談でもしていたんだと思う。会ったばかりとは思えない凄い連携…ユーノに対する評価は見直さないといけないね。

鳥型とあって勢いがあるので流石に完全に捕捉することはできてい

ないけれど、随分勢いが弱まった暴走体と私は対峙した。防御魔法で相手の最後の勢いを殺して弾き返す。そしてその直後の一瞬の隙を突いてあの子、なのはの誘導弾がきっちりその背中を捉えていた。いくらアシストがあったにせよ、ほんの少し前まで素人丸出しだったのに……凄いい子だね、なのはは。暴走体がたまらず態勢を崩す。こゝも息が合うものなのか、と私は驚きつつバルディッシュを振るった。

小さくなり、飛び去った鳥を見送ると、私となのはは向き合った。太陽のように朗らかな笑み。私も――到底上手くできているとは思えないけれど――今の精一杯の、取り繕った笑みを返しておく。なのはが苦笑して仕方ないという風に小さくため息をついた様子からするとどうやら見破られてしまったらしい。やっぱり、同じ想いを抱えている彼女には通じないよね。

そして下ろしていたデバイスをどちらからともなく持ち上げ、シーリングモードを起動する。お互いのデバイスが会話するように明滅し合う。穏やかな表情の寡黙な男性が、利発そうだが額に皺を寄せて困ったような顔をしている女性の愚痴に付き合わされる光景がふと浮かんだ。

「リリカルマジカル」

「ジュエルシード」

「封印」

今の状況を考えれば一笑にふされてしまう想いなのは明らかだけど、何故か私にはこれからも同じようになのはたちと一緒に手を取り合う未来が見えたような気がした。後にアルフに指摘されるまで気付くことはなかったけれど、心の内を表すかのようにこのとき私は久しく見せていなかった混じり気のない笑みを浮かべていたらしい。

第四十七話 混戦の中で その7（後書き）

前書きのは初めての共同作業という意味。

例によって微妙に一人称視点を被せてみるの巻。状況描写が拙くて88式は泣きそうです。誰か、語彙を、語彙をブリーズ！図書館の類語辞典は強い味方です。禁帯出なのも分かる気がする。

フェイトさんかなり自己嫌悪入ってます。もともと母親至上主義なところがあるので、原因を^{フレンジア}放置してそれをどうにもできないorしようとしないう自分が悪いという思考に至っています。しかも全てを自覚した上でというのだからタチが悪い。

原作だと鞭打たれても悪いのは自分とか言い出す子なのでこんな感じではないかと。各所でマ。とか言われてネタにされてしまうのも分からんでもない。

・授業中に訓練はしていない

一緒に守ろうとしてくれる人々が沢山いるので焦りが少ない。でも熱血レイハさんに手抜きは無い。

・クロノが役職付で呼ばれる

「砲撃を撃ち込んでしまった申し訳なさ+実は偉い人だった+そこはかとなく漂う中間管理職の哀愁

この話の男連中はオチ担当だということに今更気付いた。艦隊側で言えば副長がボケて豊田でオチる。アニエッリ大佐がからかってフオード中佐でオチる。ベントレー少佐は自分でボケて自分でシメる。

・冷静に状況を

ユーノ自爆。失敗して学んだことを伝えるべきだと思った。レイハさんとの戦術云々は映画版インスパイア。

・こんな状況想定してたの？

元はユーノ前衛の戦闘くらいだったものの、管理局が絡んだことから彼らとの連携も考えた訓練を前日夜から始めていた。

さわりだけの一夜漬け状態なのでぶっつけ本番同然なのはいかにも一期のなのはらしい(?)

・レイハさん日本語化パッチ

流石に魔法名は翻訳しない。理由は…適当な魔法をエキサイト翻訳にでも突っ込んでみるといいと思う。なのはさんのSLBで星が危ない。

・今はこれが精一杯

流石にディバインシユーターで全力全開言わせるわけにはいかなかった。万国旗が出たりはしない。

・鳥型暴走体

原作ではあっさり二人組に拘束されていますが4人の共同作業にするために、拙攻とはいえ強化されているフェイト相手に互角に戦えていたくらいには強くなっています。同時暴走しかけていた他のジユエルシードの影響で持っている魔力が多かったんでしょう。

・途中から心の中でユーノとなのはを名前で呼ぶフェイト

二人の実力を認めた。それまでは場違いな素人とスクライアの少年コンビ、くらいのイメージしかなかった。なのはと近くの人になる

ための重要フラグ。

・どこかで見た光景

この戦い自体、話を加速させるために原作の複数の戦いの要素を継ぎ合わせたもの。この話独自の要素も混じっており、一応この先の展開に関わる部分ではあったりする

・レイハさんとバルディッシュ

擬人化予定はありません。なんか電波受信したんです。仕方ない。

7・17改稿 誤字修正。戦闘の推移にミスがあったので該当箇所を修正。

第四十八話 邂逅 はじまりのとき（前書き）

混戦、決着。それぞれの想いが交錯します。

第四十八話 邂逅 はじまりのとき

海鳴市街地 高町なのは

うん、封印はうまくいったみたい。実を言うと二人で一緒にかけてしまっているものなのか少し不安だったんだけど、にやは…。やつと本当の笑顔になってくれたフェイトちゃんに見とれている間にジュエルシードは徐々に光を失って……って落ちる！？

「あわわっ」

「つと」

同時に手が伸びて、フェイトちゃんと手と手が触れ合う。お互いに見詰め合って…わたしはそつと手を引いた。レイジングハートにも待機状態に戻ってもらふ。瞳に困惑の色が見えた。

「いいの…？」

「ん、仕方ない、かな。どうしても必要なんだよね？」

ややあって、フェイトちゃんはコクリと頷いた。そして母さんがそう言うから、と続ける。フェイトちゃんのお母さんが…？どうしてこんな危ないものを自分の娘に集めさせるんだらう。

「…お話できないんだったよね」

「…ごめん」

「うっん、いいよ。じゃあ自己紹介だけでもしよう？それもダメかな？」

お互いもう名前は知っているけれどこういうのはきちんと相手の顔を見て言わないといけないことだから。今はまだお話はできないけれど。いつか一緒にお話をするために。

「わたし、高町なのは」

「…フェイト、フェイト・テストロッサ」

「えーと、僕はもう一回したけれど改めて、ユーノ・スクライアといます」

「…この流れだとアタシもかい？…アルフだよ」

そして二人は飛び去っていった。最後にはアルフさんが微笑んで小さく手を振っていった。軽く手を振り返すと、二人の姿は掻き消すように見えなくなってしまう。

「ショートレポート短距離転移だね。たぶん市内にいくつも転移地点を用意しているんだろ。用意周到だなあ」

「…やっぱり、敵わないよね。今のままじゃ」

> 気にすることはありません。まだマスターは修練を始めたばかりなのでから <

比べるのも馬鹿馬鹿しくなるくらいにフェイトちゃんとわたしの間には隔たりがある。ユーノくん曰く、もともとわたしののような砲撃魔導師は高速機動型のフェイトちゃんのような魔導師とは相性が悪いのだそうです。しかも今回の状況ならフェイトちゃんはジュエルシードを確保して逃げるだけでいいのだから尚更分が悪いわけで…。

レイジングハートとの特訓は何も実技だけじゃなくて状況を把握する力もわたしに与えてくれるものでした。ただ闇雲に力を振るうだけが戦術じゃない、だったよね。自分と相手の実力を測るのも大事なことです。

「今度は一緒にお話できるように…訓練しなきゃ」

ぶつかり合うのは悲しいことかもしれないけれど、そうしなければ切り開けない未来だってある。まだわたしはフェイトちゃんとお話をするための舞台に立つ資格もないけれど、このまま放ってはおけない。わたしと同じ目をしていた、もう一人のわたし。それは自分と向き合うことでもあるけれど逃げだすことなんてできない。このままじゃわたしも前に進めない。

「レイジングハート、前に進む力をわたしに貸して！」

> 言われずとも。共に進みましょう <

「…あー、水を差すようで悪いけれど、クロノ執務官のお説教が先じゃないかな」

「それは言わないで欲しいの…」

クロノ・ハラウン三等海佐

『クロノくん、なのはさんたちがジュエルシードの封印に成功したみたい。ただ、ジュエルシードは…』

『あの二人では確保は無理だろうな。フェイトとかいう子たちはどうした？』

これで戦況が動くか。向こうの出方次第では結構まずいことになるな。最悪、あの子達が次のジュエルシードに向かうようなら損害覚悟で目の前の使い魔に一個小隊ぶつけてでも僕があの子達を抑えられないかもしれない。

『ジュエルシードを持って短距離転移で遁走中。例によってダミーが多くて…ごめん、あまり期待しないで』

『仕方ないさ。先にここに展開していた以上、地の利は向こうにある』

忌々しい話だが向こうはかなりの手練れだ。目の前の使い魔を含めて人手不足の管理局からすれば喉から手が出るほど欲しい戦力だろう。…まあ、見事に敵なわけだが。相性からすれば目の前の彼女に提督をぶつけて僕があの子達の相手をするのがいいかもしれないな。もう一人向こうに魔導師がいるのが厄介だが…どうしたものやら。

目の前の使い魔も射撃魔法を連射しつつ後退していく。きっちりしているな。まるで隙がない。ここは逃がしておくでしょう。退却が

欺瞞の可能性もある。予備戦力を確保したままでエルドリッジの援護をしなくちゃならないからな。

「今度は逃がさないからな」

「次はこちらも本気でいかせてもらいますよ」

使い魔は一礼すると短い詠唱とともに消えた。…それにしても参ったな。一瞬あの二人の戦力化を考えてしまうほど僕は追い詰められているのか。心理戦では完全に負けていた。“あるかもしれない”増援に踊らされてしまった。常にペースはあちらにあったと言っている。…反省は後だな。

『エイミィ！エルドリッジの位置を』

第十三任務部隊 駆逐艦エルドリッジ ジョン・G・フォード中佐

「艦長、他のジュエルシードは全て活動を停止した模様です」

「つまり後はこいつだけってわけか」

そうは言ってもどうにかできるというわけではないんだがな。こうまとわりつかれては他からの援護も難しい。あいかわらず馬鹿の一つ覚えの体当たりなのが救いだ。

「本艦直上に反応！クロノ執務官と思われます！」

「騎兵隊のご到着か。ヤツのパターンは分かっているな！CIWSを手動で起動しろ！」

「アイアイサー、お任せ下さい」

「思念体、来ます！」

「総員衝撃に備えよ！」

強い振動が艦橋を襲う。こいつはきついぜ…。あまりの衝撃に耐え切れなかったのか幾つかの窓にひびが入るのが見えた。何人が転倒している艦橋要員もいる。艦長席に座っていた俺の横で席にしがみつきながら踏みとどまっていた副長が内線を片手に叫ぶ。

「目標捕捉しました！」

「ファイア
撃て！」

そのまま逆側に抜け、方向転換しようとスピードを緩めるその一瞬。それを俺たちは待っていた。ほとんど止まっている相手に当てられないほどこちらは間抜けではない。毎分4500発の発射速度を誇る20mm多銃身機関砲が吼える。いくら効果が薄いからといって複数弾の直撃に耐えられるものじゃない。連続した着弾にたまらず思念体が動きを止める。

「CIWS、弾薬枯渇！」

「いや、もう十分だ」

思念体を撃破するには至らなかったが、この攻撃は貴重な時間を稼いだ。千載一遇のチャンス逃すことなく、クロノ執務官のバインド魔法が思念体をしっかりと拘束していたからだ。

「なるほどな。彼はやはり戦士だ」

「信用していたからこそ、打ち合わせもないのに連携策をとられたのではないのですか？」

副長が得意そうな顔でにやにやとしている。俺は軽く肩を竦めて、各部署に被害報告を聞いた。転倒による軽傷者が5名出ただけで済んだようだ。それでもこちらは戦闘艦だ。この程度のこと沈むことはない。…まあ、実を言うといつ高町嬢が市街戦で披露した砲撃魔法のようなものが飛んでくると戦々恐々していたわけだが。

封印を施してジュエルシードを回収したクロノ執務官が艦橋横に滞空して敬礼した。こちらでも敬礼を返す。こうして見ると背丈はともかく、一端の男の顔をしている。状況判断能力は見事だった。これから経験を積んでいけば彼ならいい指揮官になるだろうな。さて…では相手にしてもらえなくてぶーたれている我らが…お姫様（副長）の機嫌をとるとするかな。こんな相手ばかりなら楽なんだが…敵対する魔導師が現れたようだ。そううまい話は転がっていないだろうな。頼みますよ…豊田司令、鈴木少佐。

第四十八話 邂逅 はじまりのとき（後書き）

結局着地点は大して原作と変わらないのはさん。まあ話を聞いてくれない人には少々強引でもひっぱたいてでも耳元で怒鳴らなきゃいけないことだってあります。

つまりこうですね。

「お話ができない？まずはそのふざけた幻想を砲撃（SLB）でぶち殺すの」

…あれ、なんか違う…（あくまでネタでs（SLB）

次回からは後始末編の予定。

○封印後のジュエルシード

普通はこうなると思うんですよ。魔力漏れしてたら封印失敗しているわけですし。

○お互い名前は

この4人の中できちんと自己紹介したのはユーノだけ。そして実はアルフは名前を呼ばれていないのでなのは、ユーノからは使い魔としか呼び様がなかった。

○自己紹介

なのはらしいんじゃないかなあと。まあ半ば宣戦布告ですが。

○地の利

本来は観測データを持っている管理局の方が有利だが海鳴という土地の関係上精査はしていなかったため、残留魔力とフェイトたちの実力で引っ繰り返っている。

○内線

CIC（中央指揮所）と連絡をとっていた。タイミングは担当官から伝えられたもの。

○フォード中佐の策

20mmCIWSは使用可能弾薬が1550発です。持続射撃をすると20秒とちょっとで使い切ってしまうため、騎兵隊が来るまではチマチマ撃ちながら耐えていたのです。

第四十九話 魔法とは何か 時空管理局とは何か（前書き）

魔法はクリーンで安全、身一つで使えて維持費もかからないので経済的。

…そんなおいしい話がそこらに転がっているほど世の中甘くありません。魔法に対してピュアな心をお持ちの方には向かない話かもしれません。

第四十九話 魔法とは何か 時空管理局とは何か

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ リンディ・ハラウン少将

「全く君たちというやつは…今回の君たちの独断がどれだけ危険な事態を招いたのか分かっているのかい？」

「申し訳ないです」

「うう、ごめんなさい…」

クロノが苛立ちを隠そうともせずにコツコツと机を叩く。鋭い視線を向けられたのか、なのはさんの肩がびくりと跳ね、ユーノ君も気まずそうに目を伏せた。

会議室にはあのままアースラに留まっていた鈴木少佐とオルソン少尉、それから私とクロノ、そして被告人のように立たされたままのなのはさんとユーノ君。クロノがいらいらするのももったもね。ただこちらにも過失がなかったかというところね。

「まあまあクロノ執務官」

「鈴木少佐、しかし…」

その過失の対象である鈴木少佐に仲裁されて流石に言いよどむクロノ。アースラクルーの認識では第十三任務部隊は質量兵器で武装した戦闘のプロ集団という扱いで、それはクロノにしても同じだった。

あくまでも彼らの世界における戦闘のプロであつて、魔法的なものといえはあの不可解な結界くらいの彼らが魔法的な存在を相手にして十全に戦えるはずがないことを失念していたのだ。

「まあ今回の事に関してはこちらにも落ち度がないとは言ひ切れないですからねえ」

鈴木少佐は第十三任務部隊側にも問題があつたと語り出す。曰く、彼らの持つ結界の効用を読み違えていたと。

「我々は自分たちの武装が“本来の”威力通りに魔力として作用すると思つていたのです」

元々魔法戦を意識していない装備ゆえに、実体を持たない思念体をリーダーが捕捉できないこと自体は彼らの間でも織り込み済みの事項だったという。では何故ここまで苦戦したのかと言うと……。

「少し考えてみれば分かることですよ」

少佐はそう言つてたとえ話を始める。

ある魔導師にその魔力量と同値くらいの純粹魔力攻撃設定で攻撃魔法を放つたとする。きちんと魔導師として教育を受けた者が組んだ術式であれば悪くても怪我をする程度で済む。これこそが魔法が比較的安全な暴力として認められている理由。

しかし同じ魔力を物理攻撃設定で放てば間違いなく死ぬ。もつと少ない魔力量で撃ち込んで怪我によつてリタイアさせることは十分に可能である。魔力と物理エネルギーは対象の“無力化”という観点において等価値ではない。

何も追い詰められた違法魔導師が物理攻撃設定で攻撃魔法を使用することがあるのは相手を“殺せるから”ではない。単純に相手を“倒す上で効率がいい”からなのだ。

「魔導師一人雇って鍛えればそれだけで戦力として通用するわけでコスト的な問題でも魔法にアドヴァンテージがある。平和になればその点も重要となるでしょう。そうして質量兵器は淘汰され、危険だが役に立つ魔法は“管理”された…違いますかね？」

時空“管理”局。管理の二文字にそういう意味が込められているということを知らない局員はいない。時空管理局成立の経緯は全ての管理局員の必修事項だからだ。何も各次元世界は綺麗ごとだけでそれまでの兵器体系を否定したわけではない。よほどのメリットがない限りは全てを捨てて新しいものにしようなどとは誰も考えない。ついでに言うならば、質量兵器の系譜は細々とはあるが現在も受け継がれている。“常に戦いに備えよ”の精神が現在の管理局にも健在であることの証左でもある。

なのはさんたちの世界で冷戦という軍拡競争の末に緊張緩和がなされ、軍縮が進んだように、ミッドチルダを含めた各次元世界もまた管理局設立までの騒乱によって膨れ上がった治安維持費^{デタント}ありていに言うならば、軍事費^{デタント}を圧縮することを余儀なくされたのだ。しかし当時はまだ次元世界に火種が多く燦っていたため、戦力を著しく低下させることはできなかった。限られた予算の中で最も効率のいい戦力として魔法に白羽の矢が立ったのは必然だったのである。

「…そういう側面があるのは事実でしょう。ですが―」

「いや、何もあなた方の先達が誓った理念を否定するつもりはあり

ませんよ。我々にも気持ちは分かるつもりです。同じような立場の人間としてね」

そういう現実的な問題があったにせよ、管理局が掲げた質量兵器の撤廃が広く受け入れられたのは、騒乱の中で広く用いられたそれらに対する嫌悪感と――無論、魔法も使われなかったわけではないが――魔法に対するイメージ戦略が戦後の荒廃の中で人々の支持を受けたからにほかならない。時空管理局がしばしば“理想と現実の結託の産物”と評されるのはそういう事情からなのだ。逆に言えばそんな世の中で理想と現実を同居させられる文字通り“魔法のような手段”が魔法だったとも言える。

「ええつと……つまり、どういことなんでしょうか」

「ん、まとめれば“悲惨な戦いがあったのを反省して平和な暮らしの為にみんなで協力しました”ってことかな」

なのはさんの前の話ではなかったかもしれないわね。ユーノ君がそれとなくフォローしてくれたようだけど。多くの管理外世界の人々が魔法と接触した後に驚くのはミッドチルダを含めた管理世界において彼“魔法”がそれほど身近な存在ではないということだ。

魔法を知った多くの人は生活に密着した便利魔法があるのではないかと想像するのだろうけれど、日常において用いられるのは念話と翻訳魔法くらいのもものだ。ミッドの生活はなのはさんの世界の地球に比べて進んではいるものの、常識が全く通用しないほどかけ離れてはいない。移動手段として魔導師の間で一般化していてもおかしくなさそうな飛行魔法ですら――危険であるという理由があるにせよ――ミッドの市街地では緊急時以外の使用が禁止されている。その理由は魔法の“現実”の役割を人々が知っているからにほかなら

ない。

魔法は安全でクリーンな 現状もつとも効率の良い人殺しの手段
なのだから。

少佐にクロノが非難の目を向けるけれども彼はどこ吹く風という顔で相手にしていない。少佐からすればクロノくらいの年齢の人間に對してもこんな話を理解するべきではないと思っているのだろう。あれだけの戦いがあつたにもかかわらず彼らの世界ではそういう考えが支配的なのだ。：こう言つては不謹慎でしょうけど、私からすれば羨ましい話ね。彼らの世界では幼い自分の息子を戦いの場に送り出すことはなかつたのでしょうから。

「ま、話は脱線しましたがね。要は我々の武装では個人レベルならともかく、ジュエルシードの産物である暴走体や思念体などの強大な魔力を保有する敵を撃滅するのは難しいということです」

鈴木少佐はそう言つて話を締めくくつた。：しかし本当だろうか？彼らはまだ隠し玉を用意しているのではないか。私にはそう思えた。第十三任務部隊は実験部隊とはいえあの世界の国連が世界の平和のための切り札として用意した戦力なのだから。

：あるいはその切り札が使えない事情があるのかもしれない。そんなことを可能にするものなのだからとてつもなく威力が大きいとか魔法の中にも純粹魔力攻撃設定にすることが不可能なものがある。彼らの切り札もまた、そういう問題があるゆえに使えないのかもしれない。もつとも平和を守るのは腕力だけではない。もつと違う何かを彼らは握っているのかもしれない。

クロノ・ハラウン三等海佐

思ったほど第十三任務部隊をアテにできないというのはもう少しよく考えていれば分かっていたはずのことだった。僕らの世界でも質量兵器の魔力ダメージ化というのは考えられていなかったわけではない。彼らの結界のような高度な方法ではないにしろ、同様の手法が検討されたことはあるのだ。しかし結局彼らが須く頓挫したのは彼らと同じ理由だ。

威力不足。

それに尽きるのだ。一流の魔導師や強力な魔導機械、魔法を操るような生物には効果が薄かったのだ。もちろん低級の魔導師相手ならば十分な効果はあるのだが、コストは従来の質量兵器＋魔力ダメージ化のための費用となってしまう。しかもライフルなどのそのまま使っても十分相手を殺傷できる対人兵器を魔力ダメージ化しても一般人すら気絶させられないので非魔導師相手に対戦車砲を持ち出さなければならなかったらしい。元々質量兵器がコスト面で淘汰された事情からすればこれでは話にならない。

もちろん彼らの武装は人どころかもっと頑丈なものを破壊できるだけの威力があるのだから恐らく対人用途であれば十分な効果があるのだろう。もっとも敵艦を狙うようなミサイルが遥かに小さい目標である人に誘導できるとは思えないがそこは使い方次第というものだ。事実ああして機関砲で思念体を礫にするだけの火力はあったのだから。

だが今回の相手であるジュエルシードは多少の例外―初期の頃のジュエルシードの暴走は魔力の集まりが悪かったのか非常に小規模だった。猫については…あれだ、願いがそもそもおかしかった―があるにせよ、今回の鳥型暴走体を含めてかなりの魔力量がある相手が主になる。それらの相手をするには彼らでは力不足なのは明白だった。それこそ彼らのやり方では街一つ吹き飛ばすような威力の武器が必要なのではないだろうか。

「今後は第十三任務部隊にはどういう役割を任せたものが正直こちらとしても困っています」

「それについてはこちらから提案があります」

鈴木少佐はあらかじめこうなることを想定していたらしく―そもそも元はこの話し合いは協力関係の形を決めるためのものだったのだから当然だが―いくつかの案を示した。

まずは地上から戦闘管制を行う案。ステルス機を相手にすることもある彼らのリーダー能力は高く、人間大の目標ですらある程度は捕捉が可能らしい。直接戦闘はともかく魔力探知系統の恩恵もあって位置情報の提供程度なら十分に可能とのことだ。現状、残留魔力素の問題でアースラの管制能力が落ちている―実際、今回の戦闘でも二重に張られた結界の影響もあってか最後までなのはたちの会話を傍受することはできず、念話も不通のままだった―のでありがたい話だ。

ただその案を採用する場合は第十三任務部隊の通信士の中に魔導師素質のある人物がいるかどうかの検査をしてもらいたいらしい。これ自体はお安い御用だ。一応無線機はあるらしいが個人携帯できるものだと電波到達距離の問題もあるらしい。また情報伝達手段が複

数あるに越したことはない。データ共有がアースラとできれば話が早いんだが当然ながら彼らとこちらの機材に互換性などあるはずがないので今はどうしようもない。

次は例の魔導師をおさえるという案。ただ艦対人戦闘など彼らには経験がないという点やステルス機並みにレーダーに映り難い人間相手にどこまでやれるかは未知数とのことだ。実体のない思念体に比べればまだマシ、という程度らしい。提案した鈴木少佐自身、遠慮したいという顔をしている。彼曰く、こうされたらどうにもならないという手がいくつもあつて困るらしい。ミッドの人間からすれば彼らの戦闘能力がどういうものかは知らないからそう都合よく急所は突けないだろうけれど、うっかり向こうの策があたつてしまつてどうにもなりませんでしたというわけにもいかないから彼の懸念ももつともだろう。

「まああとは“くそしてねろ！”という案が」

「…それは案とは言わないでしょう」

唐突にこういう冗談を真顔で吐くのでこの人は困る。ぶっちゃけ情報支援しかできなくてサーセンなどと言っているがどういう意味なのやら。翻訳魔法が翻訳し切れていないぞ。少佐は日本の出身者らしいがどこの方言なんだ。一応第296管理外世界の主要言語と方言対応パッチはあてたはずなんだが…。

エイミイ曰く、正直情報支援くらいしかできなくてすまない、というこらしい。

…なんで分かるんだ？なに、洒落のつもりであてていた公式パッチだが僕は知らなくてもいい？…触れないでおいの方が良さそうだ。

まあ彼らについては協力関係を続けることについては双方依存はない。お互い出し切れない内情はあるにせよ、できうる限りの情報共有をした上で今回の事件にあたるということで一致している。問題なのは…一応お咎め無しとはいえ単独行動をした彼女たちをこれからどうするかということだ。

第四十九話 魔法とは何か 時空管理局とは何か（後書き）

真面目に説明文章を書こうとすると「ここでボケて」とゴーストが囁くのは８８式の基本仕様です。誰かシリラス脳をください。

魔法の扱いに関しては完全に独自設定。生活密着型の便利魔法があまり見受けられない理由はこんな感じで。武器としての刃物を包丁代わりに使いたがる現代人はあまりいないんじゃないでしょうか。スクライアはその限りではありません。連中はフリーダムなので。

第十三任務部隊の立ち位置決定。どちらにせよ時の庭園戦にはどうあがいても艦隊は介入できないのでこんなもんです。WSC3から対衛星砲という案もあったのですが（この話では時の庭園及びアースラが軌道に出張ってきている）どう考えても破片がNASSAに観測されます本当にありがとうございましたということで没りました。

そして艦隊の通信士に素質がある人はいるんですかねー（棒読み

。魔法的なものといえは

まだ謎の装置や秘匿武装の類は管理局側には知られていない。結界についても効果自体はアースラの観測機材で明らかになっているもののそれ以外は不明という状態。

。怪我をする程度で済む

原作でも魔力ほとんどからつけつた状態でSLBをくらって気絶と軽い衰弱で済んだ人がいる。^{フュイト}どう見ても対人、それも個人に撃つような魔法じゃないので全てのエネルギーがフュイトに加えられたわけではないという点は考慮するべきだけ。

物理攻撃設定のSLBが直撃して生きている人間がいるとは思えないのには多くの人が納得してくれることだろうと思う。

○時空管理局成立の経緯

お題目と本音が揃ってこそ、というのが88式の考えなのでこういう形に。

○幼い自分の息子を

鋼鉄世界でも陸などではあるかもしれないけれど、専門分野が多い海軍においては少年兵自体が考え難い。第十三任務部隊の士官は全員二十二歳以上。

○隠し玉

秘匿兵器の類だが、使えない切り札を正体不明のままちらつかせているだけだったりする。リンディの読み大当たり。

○威力不足

猫相手に効いたじゃん、と思われるかもしれないが人間相手に使う武器を遥かに小さい猫相手に使った点とジュールシード効果は速くなっただけという点に留意されたい。その結果がろくにダメージも与えられず跳ね飛ばしただけ、である。

○艦対人戦闘

いくら鋼鉄世界がトンデモだらけでも流石に空を飛んで街一つ壊滅できるような人間相手の戦闘は考慮していません。

○はっちゃけ副長

時代背景的にはまだ50年代であろう第296管理外世界にこの手のネタがあることについては突っ込み無用である。WW2時代に光

学兵器を撃つ艦がいる時点で今更だが。

ちなみに“わかるんです”にはこの手の用語の“公式”対応パッチがちゃんとある。どうやら“文化”に触れてしまったスクライアがいる模様。エイミィは洒落であてていた。

8・2 改稿 推敲の甘かった箇所が多かったので加筆。内容そのものは大きく変わっていません。

第五十話 過去の自分 止められない現在（前書き）

×右腕が疼く

今回はゴーストが嘔きませんでした（今嘔いとするがな

第五十話 過去の自分 止められない現在

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ 高町なのは

「さて…では君たちの処遇なんだが…」

クロノ執務官が苦虫を噛み潰したような表情でやや乱暴に頭をかき回しました。なんというか…背もあまり変わらないのに凄く苦労していそうに見えるの。

「少々状況が変わってしまった。敵対する魔導師が現れたとなると本来なら危険過ぎるから民間協力者にはお引取り願いたいところなんだが」

「そ、そんな！」

「なんだが！ 困ったことに戦力が少々覚束ない」

身を乗り出してしまったわたしを手で制しつつ凄く苦しそうな表情を見せるクロノ執務官。ああ、そうなんだ。この人はわたしのような子供が戦うことをよく思っていないんだ。それはミッドチルダではそこまで珍しくないことらしいけれど、こちらではそうではないということを知っているんだろう。豊田さんたちの世界ではこちらと同じ感覚だったらしく、危ないことはなるべく避けるようにという意図があるのは明らかだったと思う。わたしの家族は…送り出してはくれたけれど、いつも以上に家で気を遣ってくれている。ううん、こうなる前からいつもそうだった。思えばわたしは周

困の“鍵っ子”と比べれば家で独りでいる時間が短かった。

実感する。わたしは幸せ者なんだと。こんなにも優しい人たちに囲まれている。新しく出会った人たちも、出会ったばかりのわたしのことをこんなにも気遣ってくれている。

「実を言うと、既に状況は親御さんに伝えてある」

「お父さんたちに？」

頷くクロノ執務官。そういえば管理局からお父さんたちに、この事件の間は何があったのかを常に報告すると約束していたのだから当然なの。でもほんの少し、わたしは不安を感じてしまった。もしなにが起こっているのかを知ってお父さんたちがこの事件に関わるのをやめるように言ったらどうすればいいんだろう。

フエイトちゃんたちときちんとお話をしたい。ユーノくんの力になってあげたい。助けられるかもしれない力が自分にあるのに、見て見ぬふりはしたくない。

「安心するんだ。彼らは…君の意思を尊重するそうだ。同時に局員が地上で活動する際のフォローを受け入れてくれた。少しでも君の危険を減らせるのなら、とね」

でも、わたしのそんな心配は杞憂だった。もしかしたらまだお話ししていないわたしの気持ちにも、気付いてくれているのかもしれない。わたしの家族は時々、妙に鋭い時があるから。だとすればわたしが話をするのを待っていているんだと思う。

「……クロノ執務官。本当に彼らに全て伝えましたか？」

「ええ。包み隠さず、ね。了承されたことにむしろ驚きましたよ」

鈴木さんが訝しげな顔で問うとクロノ執務官が何故かわたしを見て大きくため息をついてどつと肩を落として、同じく何故だか分からないけれど鈴木さんはわたしを見てはつが悪そうな顔をします。ふええ、な、なんなの？

クロノ・ハラオウン三等海佐

こんなことはこの世界の9歳の子供に聞かせられるような話じゃない。いや、そもそもミッドチルダにおいても本来ならば好ましくなかったはずのことなのだ。たぶん今の僕は感情が顔に出てしまっているだろう。確かに僕はよく分かりやすいと言われる。だけど仕事では別だ。海千山千の“お相手”――母さんがその中に含まれるのが何とも言いがたい――ならともかく、本来なら子供相手に見切られるようなことはない。それがこの事件ではどうにもうまくいかない。

きつと、なのはにかつての自分を重ね合わせてしまうせいだ。父の死というどうしようもない後ろ向きな現実に立ち向かおうとした僕の街の平和のためというお題目の陰に孤独がちらつくのは。周囲の制止も聞かず、独りになった母を放り出して局員になることを選んだ僕。周囲の気遣いを知ってか知らずか、自分にできることだからと走り続ける彼女。

背伸びした自分に気付いても、もう引き返せない僕。まだ引き返せ

る目の前の少女。

「これから先、この事件に関われば辛いことや見たくもない事実に直面することになる。あのフェイトという少女だってどういう人間か分からない。戦力の問題だってどうにかならないわけじゃない。それでも君は―」

「知りたいです。そうしないとお話できませんから。あの子の言った“仕方ない”の意味はきっとその先にあるはずなんです」

一瞬の躊躇もなく、彼女は、なのはは自分の意思を示した。思った通りだ。

「全てを知ったところで相手は話なんかしたからないかもしれないぞ」

「たとえそうだとしても、せめてどうしてお話できないかは知りたいです」

やはり僕には止められない。今なら局員になるために訓練して欲しいと押しかけてしまった時のグレアム提督の気持ちがかかる気がする。止められない人間にはせめて背中を後押ししてやることくらいしかできないんだ。だから僕は、続く言葉を飲み込むことはできなかった。

第五十話 過去の自分 止められない現在（後書き）

短めですがキリのいいところなのでここで切ります。

あまり触れられることがないように思える一期クロノの対なのは感情を掘り下げてみたの巻。昔の自分を思い出すとベッドにダイヴして枕抱えて身悶えしながら転がって頭ぶつけて痛みに涙目になりながら自己嫌悪に陥るよねという話。生きているだけ黒歴史は増えるもの。

相変わらず9歳の思考じゃないなのはさん。公式チート頭脳怖い。小説版とかもう既に後のあく…じゃなかった、まお…でもない、めいお…いやいや冗談ですって、教導官の片鱗が見えるような気が（SLB

。苦勞していそうに見えるの

なのはにまで同情されたと知ったらたぶんクロノは立ち直れない。直前部分とのコンボでかなり精神ダメージが大きいでしょう。

…さて彼に同情していない登場人物があとどれだけいるでしょうか？

。なんだが！

例によって発言先取り。クロノは下げたから上げるタイプらしい。

。独りで家にいる時間が短かった

冷却期間をおいて客観的立場に立てれば、なのはさんは頭がいいのだから気付けなはずがない。

第五十一話 九割の真実 一割の方便（前書き）

この話の大人たちは基本的に ただの親馬鹿 です。少し難しく考えすぎて歪んでいるだけの。

流石にプレシアさんは頭のネジが何本か吹っ飛んで歪みというレベルを超越している気はしますが。

第五十一話 九割の真実 一割の方便

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ 高町なのは

「わかった……では心してこの資料を見てくれ」

元々険しかったクロノ執務官の表情が険しいを通り越して無表情になった。道場で鍛錬をしているお父さんたちも同じような顔をしていることがある。何て言ったらいいのか……そう、ただ目の前で起こっていることを粛々と“処理”するような、そんな表情。そのときは何故か見てはいけないものを見てしまったような気がして逃げ出してしまったのだけれど……。

クロノ執務官が話したがらなかったのはそれだけの“なにか”があるからだったのかもしれない。でも今のわたしは目の前の事実から逃げるわけにはいかないの。

街を守りたい。たしかに大切なこと。立派なこと。

けれど、お父さんがいつか言っていた。何かを為そうとするときに仰々しいものを背負う必要はないと。自分にとって本当に大事なことさえ見えていればそれでいいのだと。

わたしは、フェイトちゃんのことを知りたい。ユーノくんの力になつてあげたい。

「戦闘時の会話内容はユーノから聞いている。金髪の魔導師の名乗

った苗字と、ジュエルシードを解析、運用できるような組織、個人という条件から割り出しを行った結果、相手の正体が分かった」

「プレシア・テストロッサ。フェイトちゃんのお母さん……？」

浮かびあがった資料の内容を見てわたしは呆然とするしかなかった。そう、フェイトちゃんが言った“話しても仕方ない”というのはこういうことだったんだ。フェイトちゃんが直面していたのは、わたしには想像もつかないような世界だったのだから。

リンディ・ハラウン少将

「聞いたことがあります。優秀な魔導技術者で、更には次元跳躍術式等に通じていてかつて魔導師ランク限定総合SSを取得したことがあるとか」

流石にスクライアー族期待の子ね。正直なところ、私も忘れていた結構前の話だというのにスラスラと……。もしかするとその才能からしてスクライアー族入りを打診されていたのかもしれない。その真偽はともかく、そんな優秀な人がいたんだという話を同系統の技術者から聞いていてもおかしくはないわね。

「フェイトとアルフの二人がアースラの探知を撒くほどに連続して短距離転移していたことも空間座標設定に長けた次元魔導師が背後にいることを補強する裏付けになる」

「で、でも、どうして……そのプレシアさんは、フェイトちゃんのお母さんはジュエルシードを？」

クロノが一瞬、逡巡してこちらを見てくる。私は鷹揚に頷いてみせて先を促した。真実は九割。嘘は一割。これは都合の悪い部分を伏せて相手に“問題なく”事実を伝えるための鉄則。……こういうのが好きな人間になってほしくはないけれど、時には必要なことなのよ。たしかなのはさんの国では“嘘も方便”と言ったのだったかしら？　そういうつもりでいてくれるのなら一番いいのだけれどね。

「プレシアにはもう一人、娘がいたんだ……」

「その彼女は^{アリシア}プレシアが開発に携わっていた新型魔導炉の起動実験の失敗に巻き込まれて亡くなっているわ」

「ジュエルシードは願いを叶える……」

言いよどんでしまったクロノの後を継いだ私の言葉に、ユーノ君の呟きが重なる。それを聞いてなのはさんの顔色が変わった。ジュエルシードの持つ力、そしてその危険性については彼女もユーノ君から聞かされ、かつ目の当たりにしている。それだけの力があれば、あるいは“そういった”願いもかなえようとしてしまうのではないか。そのことになのはさんは思い至ったのだらう。同時に今までのその叶え方の歪さにも気付いてしまった。それが驚きと恐れが混じった今の表情。

「そんな……プレシアさんは、アリシアさんを生き返らせよう？」

「その疑いは強い。事故後には責任問題を巡って雇い主相手に訴訟を起こしていたくらいだから娘さんに対する想いは……察するに余

りある」

ジュエルシードの持つ膨大な魔力貯蔵量、出力から魔導炉のコアとしての利用という可能性もあったけれど、その魔導炉の事故で娘さんを失ったということ、事故後のしばらくの経歴によると魔導炉設計からは離れていること——単純に事故と訴訟のマイナスイメージからその手の企業に相手にされなかったのかもしれないが——、またそうまでして魔導炉を設計する理由が見つからないことからその線は薄いとクロノは判断し、私も同感だった。

……正直な話、私としても夫が生涯を終えることになった艦エスティアの同型艦であるアースラに乗ることに忌避感がないとは言えないものね。
彼女にとつての魔導炉も同じような存在なのではないだろうか。できることであれば触れたくない、そういうモノ。

「でも僕が書いたジュエルシードに関する報告書はスクライアー族と管理局しか持っていないからまだ一般には詳細は明らかではないはずですよ。他の古文書に記述があったという可能性はありますが、実物もなくこんな話を鵜呑みするとは思えないし」

ジュエルシードに関して早い段階で危険であると判断がなされ、スクライアー族が慎重に検査をしたのは遺跡にあった古文書に記述があったためと報告書にあったかしら。だとすれば彼の言う通り別所から見つかった当時の文書にジュエルシードについての話がないとも限らないわね。でもこれに関しては……。

「ごめんなさいね。それに関しては私たち時空管理局の手落ちの可能性があるわ」

「どうのことです?」

私自身、つい先ほど聞いたばかりの話を彼らにすることとなった。

ここ数日、管理局のサーバーに不正侵入があり、第8次元巡察隊——つまりるところ私の部隊、それもアースラの動向を中心に情報を確認した形跡が発見され、本局査察部が動き出して大わらわらしい。

しかしわざわざ危険を冒してまで管理局のサーバーにまで侵入して担当区域が管理外世界ばかり——自分で言うのも何だが言い替えれば忙しいだけの場末の部署——である第8次元巡察隊、それもアースラの動向を知りたがったのは何故か。そして不正侵入がこの一回とは限らない。手並みは鮮やかだったらしいが、ほとんど迷いなくアースラの情報に一直線で侵入したらしい。第8次元巡察隊についてはアースラに増援が送られているかどうかの確認らしいとも。

情報を総合すれば、以前にも侵入した凄腕のハッカーが、わざわざアースラの動向を知るためだけに再度侵入したということになる。まるでアースラが何かの事件に対応するために単独行動しているのを前から知っていたかのように。

そしてプレシアには他の功績に隠れてさほど注目はされていなかったのだがこの方面に関しても才能があつたという記録が残っている。

「これについてはまだ分からないとはいえこちらのミスかもしれないわ」

「いえ、管理局のセキュリティを突破するほどの相手であればスクライアの側からという可能性もあります。責任問題は全てが終わってからですよ」

なるほど、ね。こういう冷静な対応ができるあたりがユーノ君がスクライアから期待されていた本当の理由なのかもしれないわ。どうやら彼はスクライア一族がジュエルシードの危険性を知って、時空管理局に半ば厄介払いで引き渡したという裏事情は知らないようだからこうして若さ特有の向こう見ずさでこの世界まで来てしまったようだけれど、案外全てを知っていたのなら肅々と対応していたのかしら。あるいは若さゆえに反発したかしら。いえ、まだ早いと思っただけからこそ彼らはユーノ君に真実を告げなかったのだでしょうね。どうやらそれがアダになったようだけれど。

「そっか……だから、“話しても仕方ない” なんだね」

なのはさんはどうやらこちらの話を聞く余裕もなかった様子。それもそうよね。気になっていた相手の家庭の複雑な問題を突然突きつけられれば誰だってそうなるわ。たしかにこの世界の子にしては利発で大人っぽい様子も見受けられるけれどもなのはさんはまだ9歳。大人の私たちでも息を吞んで言葉を失う情報を前に平静ではられない、か。

けれども、彼女の瞳は困惑でも諦めでもない別の色を映していた。

「でも、止めなくちゃいけないですよね」

「そうだ。子猫の願いですらあれだけの力があつた。人が、それも死人を甦らせたいなどと願ったらどうなるか分からない。下手をすれば死んだことそのものをなかったことにするためにとてつもない影響が出る可能性すらある」

クロノの言うことはやや悲観的に過ぎると思うかもしれないけれど、ロストロギアには時空を操る類のもののすらあり、特にそういったモ

ノは危険度が高い。そしてジュエルシードにはそれをするだけの可能性が秘められているかもしれない。まだまだジュエルシードについてにはわかっていないことが多い。事故の時多少無理やりながらも先を急いだのは単なる私の勘でしかなかったけれど、執務官を目指していた頃に培ったそれはまだまだ捨てたものじゃないらしい。

「尚悪いことにあの後古文書の解読を進めていたのですが、願いが単純であればまだしも、複雑化するとあまりいい結果にならないとありました。……あまり言いたくはありませんが、恐らくアレは作った人々からしても失敗作だったのだと思います」

「だとしたら、きちんと安全なところに保管するか、処分しないとだよね、ユーノくん」

「そうだね。手に負えないようなら廃棄も考えなきゃだけど、まずその方法すら手探りというのがロストログアの怖いところなんだ。その……なのはも無理だけは駄目だからね？」

元気よく応えるのはさんに少し顔を赤らめて気持ち視線を下げるユーノ君。……若いつていいわね。今ならお砂糖無しでお茶が飲める気がするわ。ただ、その気持ちが著しく一方通行に近いのは気のせい？ 頑張れ男の子。クロノもうまくやっているのかしら。

そうしてなのはさんは決意を新たにして会議室を後にしたのだけれど、やはりというかなんというか、ユーノ君が先ほどとは打って変わって厳しい表情で残っていた。これは私の悪い予想が的中したかしら。悪い方ばかりあたるのは勘弁して欲しいのだけれど。

「……それで、クロノ執務官、リンディ提督。一体何を隠しているんです？」

案の定、賢い上に冷静さも兼ね備えている彼を騙すのは無理だったようね。いえ、初めから気付いていたのかもしれないわ。なにしろ彼は最初、プレシアの過去の“暗部”に触れようとはしなかったのだから。それが彼女を語る上で外すことがないであろう末路であったのにも関わらず。

新型魔導炉の試験稼動に失敗し、その事故で娘を亡くして失意の内に消えていった才媛。

それが世間一般におけるプレシア・テストロッサという人物に対する最終評価なのだ。

第五十一話 九割の真実 一割の方便（後書き）

ユーノもなのはも頭はいいけれど、いざという時の判断力は既に一足先に責任ある立場についたことすらあるユーノの方が上でしたという話。スクライア一族ですら彼の成長は掴みかねていた様子。いえ、この事件で彼も成長したということです。

……あれ、でもなのはさんへの好意は空回り？ 頑張れユーノ。なのはさんはあれだ……一つのことに集中すると他が見えない男性型思考っぽいので仕方ない。

○表情

魔法にしる武術にしるスポーツとして楽しむ目的ならともかく、人を制圧する技術として訓練している時にヘラヘラと笑っているようなのはダメだと思います。

○本当に大事なこと

お父さん語録捏造。割と原作なのはさんも最後の方では本音（お話ししたい）丸出しで建前はクロノたちに丸投げしていたような。

残念ながらフェイトさんがINしてユーノ君は次点になりました。妙なところで原作準拠。頑張れ男子^{ユーノ}。

○プレシアの割り出しが早い

そもそもロストロギアを扱えるような同様の公的組織があちこちにあるようなら時空管理局は商売上がった。あるとしても管理局寄りの機関か、管理局下部組織では？

○真実が九割。方便が一割。

アニメでは逆をやらかしているけれど流石に無理かと。

嘘は言っていない、けれど真実を言っているわけでもないなんていうのはよくある話。今回の嘘はなのは本人に不利益を与えるつもりもないので高町一家に後で全部伝えておけば約束にも違反しない。

○不正侵入

前述していたリニスさんの仕業。某ビリビリさんの超能力じゃないんだから普通のハッキングです。たとえできたとしても魔法にしても相応の術式を組む必要があるのだから実は大して労力が変わらない気がします。

状況把握が某P○Nと違って早いのはソレ系の査察官（レアスキル保有者）がいてもおかしくないのではと。対人ならヴェロツサみたいな反則人間もいるのだから。

○なのはさんの納得

実のところ、ここには三つの誤解があるのだから分かりにくく、一人称では書きようがないので補足。

一つは管理局側が予想したプレシアがジュエルシードを集める理由。ただしその通りであった可能性はある。

もう一つはフェイトがその理由を知ってプレシアに協力しているとなのはが解釈したこと。

もう一つは次話で明らかになります。

○唐突に親馬鹿思考が混じる提督

仕様です。割とあの人が考えているのか分かりませんし。表に出さなきゃいいのよ。

8
・
2
8
改稿 一部誤字修正。後書部分一部訂正。

第五十二話 知る必要のないこと 教えるつもりのないこと（前書き）

似ているようで、微妙に違う。

第五十二話 知る必要のないこと 教えるつもりのないこと

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ ユーノ・スクライア

「そうね。貴方なら気付くだろうとは思っていたわ」

「ちよつと母さ……提督、いいんですか？」

軽く肩を竦めて仕方ないじゃないと笑みさえ浮かべて答えるリンディ提督と諦めたようにため息をついて降参とばかりに手を挙げるクロノ執務官。どうやら僕の見立ても捨てたものじゃないようだ。プレシアの過去を敢えて突っ込まないでおいたのが功を奏したとみえる。その後あっさりとその部分を彼らが説明したのは予想外だったけれど、だからこそまだ語られていない何かがあると僕は確信もっていた。

僕が疑念を覚えたのはフェイトについてだ。彼女は何者なのか、何故ここにいるのか。

プレシアはアリシアを失う事故の前に離婚して独り身になっていたと記憶している。その後、再び結婚してフェイトを生んだとも考えられるが、それにしても共犯者である可能性があるにも関わらずその新しい夫の話が全く出てこない。養子では、とも考えたがフェイトの使っていた射撃魔法に電気変換——プレシアと同じ——の気があったことが若干の疑問を持たせる。更には現在独り身で、過去に自分の起こした事故で娘を亡くした、そんな人物がそう簡単に子供を引き取れるだろうか。

あるとすれば……人工授精が一番現実的かもしれないが、プレシアが“母”であればそこまでして手に入れた娘との生活を投げ打って、犯罪に手を染め、亡くした娘の影を追い続けるだろうか。両親の愛を知らない僕だが、それでも一族のみんなの態度を思えばそれはないと思う。第一、死んだ娘を吹っ切れていないのならそもそもそんなことはしないはずだ。

では何故フェイトが存在するのか。その当然の疑問にクロノ執務官もリンディ提督も全く触れない。あまりに不自然だ。だがもしそこになのはには言えないような事情があったとすれば合点がいく。執務官はこの世界においてはまだ責任を負う義務のない年齢であるのはがこの事件にこれ以上関わることをよしとしていない。それもこの考えの補強材料になる。もしそういう“口実”があるのならばこれ幸いとなのはを事件から遠ざけるに違いない。

そうであるとすれば観念したかのような態度で出した先ほどの情報は元々突っ込まれることを承知の上で残していた話してもいい余地であって、100%の真実ではなくせいぜい80%ほどの真実だったとみるべきではないだろうか。なのははその80%を真実と信じただけであり、執務官たちが嘘をついたわけではない。本当に都合の悪い事実から目を逸らさせる為にお涙頂戴のプレシアのストーリーを語ってみせたわけだ。多少頭が回るとはいえ、本気の大人の騙し合いを知らないのはではコロリとやられてしまうのも当然だろう。

「プロジェクトF・A・T・E——主要研究メンバーが逮捕され凍結されたと思われていた人造魔導師計画。要はクロノ魔導師を造ろうという計画だが、これをプレシアが引き継いでいたという疑惑が出てきた」

「広域指名手配犯、ジェイル・スカリエッティ。あの悪魔的天才がその計画に関わっていたという噂がありましたね」

「当時逮捕された面子では到底遂行不能な計画と言われていたからだが、確かな証拠があるわけじゃないぞ、それは」

僕の挙げた名にさほど興味もなさそうに言いつつもクロノ執務官はわずかに顔をしかめた。スカリエッティは数々の容疑で管理局が追っているものの、未だに尻尾すら掴めずにいる次元犯罪者だ。しかし彼の本質は研究者であり、事実幾つかの彼の発明が社会貢献をもたらしたことすらあるというのは皮肉としか言えない。また現場にこれみよがしに捜査員を逆撫でするような言葉を残してみたりとその個性も強烈な人物だ。スクライアー族もその点においてはある意味彼を笑えないのだが、流石に犯罪に手を染めることはない。……実は犯罪者じゃなければ勧誘したいなんていう妄言が一族の内部では囁かれている。実際、彼が居ても違和感を感じないほど個性派揃いなのは事実なただけだ。

「否定しておいてなんだが、どうもプレシアがスカリエッティと接触していたらしいという情報がある」

「彼の専門は生体関連……なるほど有り得ないわけじゃないですね」

浮かび上がった資料を見て僕も考えざるを得なかった。アリシアとフェイトはその容姿が酷似している。そして、プロジェクトF・A・T・Eとフェイト。これが瓢箪から駒が出たというやつだろうか。単なる噂が時として真実を突いている、そういうこともないわけじゃない。クロノ執務官があまり言いたくはないんだが、と前置きしつつ心底嫌そうな顔で続ける。理詰めっぽい彼からすればあまり面

白いことではないのだろう。

「偶然の一致にしては出来過ぎだ」

「それにプロジェクトF・A・T・Eはプレシアにとっては全く畑違いの分野。独力で“成功”したとは思えない、そういうことだね？」

プレシアの専門は魔導炉設計。生命関連にまでとなると独力では無謀どころではない。再生医学などにかこつけてある程度は人の手を借りて研究できたとしても、一線を越えれば完全に違法研究の世界だ。普通なら誰かに師事して学ぶということは不可能だろう。

「スカリエッティから何らかのアドバイス、情報提供があったと考えるのが妥当というものだ。彼に利益があったとは思えないが……」

「まともじゃない人間の行動に理屈は関係ないだろうね」

「そういうことだ」

スカリエッティの言動は時に驚くほど理知的でありながら、一方で非理性的なものも少なくない。いや、むしろ後者に属するものが著しく多い。犯罪者には自分に一定のルールを課すタイプが存在するが、彼は逆に一切のルールを持たないタイプなのかもしれない。あるいはルールを持たないというルールに従っているのか。しかしそこに彼なりのポリシーを感じないでもない辺り、僕もスクライアー族らしくどこか一般人とは感性がずれているのかもしれない。

「なるほどね。これはなのには言えないな」

「気にしていた子が故人のクローンかもしれない。しかもプレシアにとつては“失敗”らしい、とくれば尚更だ。納得してもらえたかな」

苦虫を噛み潰したような顔で僕の表情を窺うクロノ執務官。彼からすれば不本意なやり方なんだろう。けれども今回の損害、相手の形振り構わないやり方がそれを彼に強いたのだ。僕は静かに頷いてみせた。安堵してため息をつく執務官。けれども同時に疑念も提示しておくのを忘れないでおこう。

「ただ、どの道知れることだよ？」

「その前に彼女は引かせるさ。他の艦が到着すれば十分戦力は整う」

それまでの暫定的措置だとクロノ執務官は肩を竦めた。プレシアの居城、時の庭園は既にミッドチルダを離れており、輸送船の事故の少し前に事前申告されていた航路から消え——恐らく庭園備え付けの魔導炉から隠蔽術式込みの大規模な結界魔法を起動させているのだろう——、行方が分からなくなっているという。

けれども途中までの航路情報や流石に庭園そのものを隠し通せはしなかったようどころどころに残されていた痕跡からこの付近に潜伏しているのは間違いないらしい。ジュエルシードによる残留魔力さえなければアースラの探知からは到底逃れられないとのことだからここから離れれば容易に捕捉できるはずだ。最悪、ジュエルシードを回収して持久戦に持ち込むという方法もあるけれど、クロノ執務官は位置が判明次第、部隊を送り込んでプレシアを逮捕する心算のようだ。最低でも向こうにジュエルシードを一個回収されてしまった以上、時間をおけば何が起こるか分からないからだ。

現在アースラの戦力は武装隊二個小隊、クロノ執務官、リンディ提督。提督は艦に残るとして、ジュエルシードを封印するとなれば同時に二個までが限界だろう。その上思念体ならともかく、暴走体であれば武装隊の方は抑えるので精一杯ということらしい。これでは管理局の戦力だけではたえプレシアの居城が分かつてもすぐには逮捕に向かえない。だがなのはと僕をジュエルシード対策にすれば戦力が浮く。そこに増援が来れば十分余力を残した上で強襲部隊を編成できるわけだ。その前にジュエルシードを回収し終えていれば尚良いといったところか。

「庭園への突入はこちらだけでやらせてもらうよ。危険過ぎるから」

「往年のオーバーランク魔導師を相手にしたいとは僕も思わないよ。でもなのはが承知するかな」

「彼女の興味の対象はフェイトだろう？　ならこれからのジュエルシード回収の中で捕縛する機会を狙うさ」

フェイトとその使い魔アルフを捕縛すれば、判明している敵戦力はプレシアとその使い魔だけになる。更には彼女らを尋問すればプレシアがジュエルシードで何をするつもりか、他に戦力を持っているかどうかも確認できるかもしれない。増援を待つ間も無為に時間を過ごさず、敵戦力漸減と情報収集を狙う。なるほど噂通りのキレ者らしい。

……それだけじゃないな。後ろでのほほんと笑みを浮かべている提督殿はまだ何かを隠しているようにも見える。けれどもこれ以上は追求材料がない。彼らが何か悪巧みをしてこちらに不利益を与えようとしているわけではないだろうけれど、何かまだ隠していること

がありそうだということだけは頭の隅に置いておこう。

でも、本当にそれでなのは引くだろうか？ 始めたことには最後まで関わろうとするのではないかな。多分、なのははそういう子だと思う。そうなった時は、僕も覚悟を決めなければいけないかもしれない。

第五十二話 知る必要のないこと 教えるつもりのないこと（後書き）

ここまで調べ上げたエイミーさん有能過ぎ惚れる。クロノが頑張ったり、リンディが笑顔で脅迫したりもしたんでしょ。

プロジェクトF・A・T・Eはある程度一般バレしていることにしました。原作でもプレシアが暴露したにせよエイミーがなのはたちがいるのにあっさり説明始めちゃうくらいです。機密性が高ければ狂人の妄言扱いして知らぬ存ぜぬを通すところです。当然捕まった連中はスケープゴート。犯罪者には変わりはありませんが。

ユーノは追求し切れませんでした。この場合はリンディ提督が特別悪辣（褒め言葉）なのであって相手が悪いのです。

今回は直接はなのはたちには関わりのないところの裏事情でござい。

。プレシアの経歴覚え過ぎじゃないか？

ユーノは秀才型で記憶力バカではないかと88式は思っている。というかプレシアさんのスペックをよくよく吟味すると主人公張れそうなくらいに才気溢れるヒトなのである程度有名でもおかしくない気がする。

。悪魔的天才

と言えばモ。エット博士。設計者の癖に自分でヘリ飛ばせる辺り、研究者だけれどクローンなスカさんにも通じるところがあると思う。

。接触したらしいという情報

この頃のスカさん担当の捜査官がハラオウン寄りだったので流した、としておこう。

。クローン

なのはさんの誤解その三はこれ。フェイトがプレシアの本当の娘だ
と
思
っ
て
い
る
と
い
う
こ
と
。

クロノが今回の話を伝えない方針なのはこの点が、どこかでフェイ
トと通じ合えるはずと
思
っ
て
い
る
で
あ
ろ
う
な
の
は
の
想
い
を
潰
し
か
ね
な
い
と
考
え
た
た
め
。

。ヘタレないフェレット

ユーノはやる時はやるヤツだと思えます。愛玩動物姿が板につき
ぎ
て
い
る
の
が
彼
の
不
幸
。第
一
印
象
っ
て
大
切
だ
。

第五十三話 深く静かに場外で駆け引きせよ（前書き）

とつくに事件は次元世界を巻き込む騒動に発展しているのです。

第五十三話 深く静かに場外で駆け引きせよ

衛星軌道上

L級次元航行艦アースラ

クロノ・ハラウン三等海佐

なのはと一緒に暴走体やフェイトたち向けの対策でも練ってくるよ
と言いついてユーノは退室していった。あの様子だと一応は納得し
てくれたようだ。ただ彼もスクライアの発掘隊長を任されるくらい
だから本心が見えないな。用心はしておこう。そんなことを考えつ
つ艦橋にいるエイミイを呼び出す。

「エイミイ、戦闘解析は終わったかい」

『人使い荒いよクロノくんもリンディ提督も。今、艦長代理までや
っているんだよ私』

声色は非難に満ちているけれどその間も作業する手元は止めていな
い。どうやらしっかり真面目にやっているらしい。ちなみに艦長代
理をエイミイに押し付けたのは提督だ。別に他に人が居なかったか
らではない。アースラにはエイミイより階級が上の士官が何人かい
る。

「時には前線のクロノの意図を汲んで通信席から艦長を操縦する必
要だってあるわよ。艦長の心を知れるいい経験だと思いなさいな」

「だから僕もゴーサインを出したんだが」

『直属の上司に売られるとかどうということなの。クロノ君の裏切り者お』

突っ伏しながらもきちんとして僕の手元には解析資料が回されてきた。添えられた映像に一瞬だが顔を顰めつつ呟く。提督は一瞬眉が上がっただけで何も言わない。あいにくと捜査資料にモザイクなどという精神衛生対策は存在しないので捜査関係者はこうした画像や映像に出会う機会に事欠かないのだ。

「こいつは……酷いな」

『だろうね。手伝いしてくれていた新人さん、途中で戦線離脱した^{リタイア}もの。今は医務室で休んでいるよ』

アースラの管制能力の高さが今回はかりは恨めしい。食事時でなくてよかった。下に添えられた所見に目をやる。どうやらあの爆発そのものは通常の爆弾と“それ”を運んでいた小型魔導飛行機の魔導炉が暴走した結果のようだ。第二小隊長が持ち帰った“試料”^{サンプル}と映像から考察するに、小型機によって運搬されていた“対象”は既に瀕死の状態であったと推測される——というのがエイミイの見立てのようだ。一方、提督はしまったという顔をして額に手を当てている。

「まだ彼女には早かったかしらねえ」

「どうせ誰もが受けることになる洗礼ですよ。他に分析官がいるうちに体験しておいた方がいい」

『それは初任務で洗面所に駆け込むことになった私に対する嫌味か

ねクロノくん』

「その時は僕も駆け込んだろうに。お互い様だ」

そういえばそうだった、とからからと笑うエイミィ。僕が追跡していた違法魔導師が高速飛行中に制御を誤り地面とキスして……後はお察し下さいというヤツだ。今となっては初っ端からハード過ぎるだろうと笑うしかない。こうした事件事故は結構あるのだ。ミッドなど各地の市街地で一般に飛行魔法が禁止されている理由の一つでもある。あの時はいつもは厳しい師匠、リーゼ姉妹がやたらと気遣ってくるという珍しい体験をさせてもらったのだったか。

局員である以上、それ以来そうした事例に少なからず関わってきた。子供であろうと事件は待ってくれない。現実からは目は背けられない。そのことを僕はそうした事件を通じて否応無しに学ばざるをえなかった。

同様に犯罪者は相手が子供であろうと決して容赦手加減なんかしない。管理局員になるというのはそういうことだ。普通に暮らしているのに比べれば格段に死に近い生活を送ることになる。しかし錆付いた死に対する感覚もこういった事態に対しては息を吹き返す。むしろ理不尽な死においやられる者たちがいるという現実に対する憤りはこうした生活をしていれば一層強くなる。たとえ死に掛けであったとしても命を弄んでいい道理はない。今回の場合は単なる自爆飛行機を“使い魔と誤認させる”、ただそのために魔導機械に乗せられたのだ。こんなことが許されていいはずがない。

『クロノ君、落ち着いて』

「……ああ、分かっている」

無意識に力が入って握り締めていた拳を緩める。指揮官は常に冷静でなくてはならない。落ち着いているように見えて意外と熱血漢である。士官学校時代にエイミーが僕を評したことがあった。自覚はないがそういうものなのかもしれない。グレアム提督によると父さんも同じような人物だったという。それはそうだろう。あんなに“英雄的”な死に方をした人間が熱血漢でなくて何なのだ。

……余計な思考が混ざった。まだ心が落ち着けていない証拠だろう。頭を振って切り替える。“英雄的”な父親というコンプレックスを抱える思春期の男子から、冷静に情報を処理して的確な指示を出す執務官に。英雄クライド・ハラオウンの息子から、執務官クロノ・ハラオウンに。

『あと、その動物の魔力パターンが使い魔に近かったのが少し気にかかるんだよね。クロノ君も心の隅にでも置いておいてくれる？』

「まさか使い魔を自爆攻撃に使うとは思えないが……分かった一応気をつけておく」

向こうにはまだアルフに、名前の分からないもう一匹の使い魔——あの實力、恐らくはプレシアが主だろう——がいる。ただ倒すだけでも厄介だろうに追い詰められたら爆弾抱えて突っ込んでくるなんていう事態まで想定しなければならぬのか。フェイトという魔導師の様子からすると、そんなことは起こらないと思いたいが後でユーノにも警告しておこう。なのはに伝えられるような話ではないからな。

「あとは私の話ね」

『ロウラン中將からの連絡があつたんですね』

「一つはさっきのハッキングの話。後は第十三任務部隊に関する話よ」

ナディア・ローレンヒル三等海佐についてはあちこちついでみたものの、のらりくらりとかわされて未だ確かな話は引き出せていないらしい。ただ第四次元艦隊がそうまでして隠したい何かに彼女が関わっているのは間違いない。彼らが第296管理外世界の救援活動に分艦隊を回して第五次元巡察隊を追い返したという話をあわせて考えれば、恐らく鍵は第296管理外世界消滅と第十三任務部隊の転移の真相にあるというのが提督の読みだそうだ。ジュエルシードの一部である超兵器機関の暴走による膨大な魔力に巻き込まれて偶然転移した、という筋書きはお気に召さないのだろう。

「彼女も何かあるのを匂わせるようなことを言っているわけだから、これについては慎重にことを進めるわ」

「あくまで事件の解決が先決ですからね」

念のため釘を刺しておく。もっともこの事件にそのことが完全に無関係かと言われると僕も正直自信がない。彼らの転移のタイミング、ジュエルシードと超兵器機関の関係。偶然にしてはあまりに出来過ぎてゐる。そこに何かがあるということのを常に頭においておく必要がある。

「ただ、一つだけ奇妙な点があるのよね。これは第四次元艦隊とは別口の問題なのだけねど」

リンディ・ハラウン少将

「博士への接触の禁止？」

『第十三任務部隊の運用する結界を発生させる装置とかを発明した人よね。天才っているもんだね』

「最高評議会の意向らしいわ」

クロノがまさかという顔をする。実際レティからその話を聞いた時には私も同じ表情をしていたことだろう。滅多なことでは動かない最高評議会が明確に意思を示した。流石に踏み込むのは躊躇われるけれど、だからこそ疑念を感じざるを得ない。たしかに彼女の存在は次元世界の安定に影響をもたらしかねないけれども放っておいても各派閥にマークされるであろう彼女をわざわざ最高評議会直々に保護する理由は何なのか。君臨すれども統治せずの彼らが何故権力闘争の道具になりかねない彼女に関わろうとするのか。

「まずまずこの事件の背後に何があるのか分からなくなってきたぞ。藪を突いたら蛇どころか龍が出るかもしれないな」

『どうするんですか、リンディ提督』

頭を抱えてどうしてこうなったんだと呟きつつ、ため息とともに突っ伏すクロノ。エイミィは私が博士——あの結界を作る装置の開発者として存在自体は鈴木少佐から聞き出していた——に興味を持っていたのに気付いていたらしく、悪戯っぽい笑みを浮かべつつ聞い

てくる。困ったわねえと顎に手を添えて呟いて横目で突っ伏したままのクロノを見つつ、肩を竦めてみせると、エイミイはにやにやと笑っている。どうやらこちらがとぼけたのには気付かれたらしい。ほんと、彼女は意外と政治家とかに向いているんじゃないかしら。

「向こうから接触してくる分には彼女の勝手よね」

『ですよー』

「……くれぐれもほどほどにお願いします」

もうやだこの上司と部下、という呟きと共にクロノが席を立ち退室する。……ちょっとやりすぎたかもしれない。向こうがこちらに興味を持つかどうかは分からないのだけれど。そういえばエイミイ曰く、クロノの自室で胃薬の空瓶を見つけたそうね。よく効くのを知っているから贈ろうかしら。

第五十三話 深く静かに場外で駆け引きせよ（後書き）

最高評議会、動く。一期でどれだけA、S以降の連中を動かすのかわからないと専らの噂の88式です。でも流石のおっさん推しの88式でも脳だけの老人会はちよつと……。最悪戦争を引き起こしかねない事態なので三脳が動かないわけないよねという話。

相変わらず無駄に囁く88式のくされゴーストは仕様です。次回はレティ側の話とか裏事情とか。リリカル咆哮成分（なにそれこわい）は今しばらくお待ち下さい。

○艦長代理

リンディ、クロノ、エイミィ三人揃って艦長室というシーンがあるのでやれる士官が居るはず。

○新人さん

名前有り男オペ二人はペーパーという感じはしなかったので別の人に犠牲になつてもらいました。具体的に言つと十代後半と設定されているアースラブリッジオペレーターDさん。1st MOVIEの設定資料集を参照のこと（どこの回し者ぢゃ）

○追い詰められたら自爆

サイ。イマンかよという突っ込みは認める。ヤ。チャにはなりたくないね。

○相変わらず黒いエイミィ

あっけらかんとした明るいおねーさんじゃなきゃヤダーという人はごめんなさい。でも一期クロノはこういった方向の融通がきかなそうなのでこういう部下が必要だと思う。

9
・17
改稿
一部加筆修正。
大筋変わらず。

第五十四話 本局統合幕僚会議（前書き）

レティの回。……だったはずのもの。

第五十四話 本局統合幕僚会議

「やれやれ、またハラオウンの縄張りで問題かね」

「はは、当時と場所が変わってもまた起こったということは彼らは厄介事を持ち込むのがよほど上手ということなのだろうよ」

「スクライアも食わせ者だよ。自分の手に負えないと見てこちらに押し付けたそうじゃないか」

今回の事件のあらましについて報告するにあたり、本局では対策会議が開かれようとしていた。集まった将官たちはいくつかのグループに別れ、既に概要は伝えられている第296管理外世界消滅、ジュエルシード落着についての噂話をしている。

ハラオウンへの雑言が一部含まれるのは、十一年前の事件以降の彼らの影響力が著しく落ちていることの証左だろう。ハラオウンのお膝元だった宙域において万全のバックアップ体制の下に展開されたロストロギア、闇の書捕獲作戦は最終段階において失敗し、当時最新鋭のし級次元航行艦エステシア喪失、クライド・ハラオウン准将殉職、指揮官ギル・グレアム中將の事実上の左遷という結果に終わり、ハラオウン派の凋落を決定付けていた。

リンディの恐ろしいところはその後、自身も意気消沈して精彩を欠き、次元巡察隊司令——それも管理外世界ばかりで利権の欠片もなく、一方で責任ばかり多いいわゆる“外れ”部署——に追いやられてしまったからのことだ。左遷されたグレアム提督に息子が師事した頃を境に積極的に行動を開始してハラオウン派の勢力を一部回復し、管理世界の急激な拡大に懸念を持つ穏健派に食い込んで足場を

固め、相応の影響力を持つてしまった点だ。これはもう彼女一流の才覚としか言いようがない。

本局勤めの彼らは気付いていないのかもしれない。たしかにハラオウン派は消え失せた。だが穏健派内の勢力としてしぶとく生き残っていたのだ。

「うむ、ロウラン中将、時間のようだ。よろしく頼むよ」

本局統幕議長が私に声をかける。昼行灯と揶揄される彼は至極のんびりとした様子だが、彼を除けば上層部の面々は表情が引き締まっている。管轄外の管理外世界での事件とはいえ、次元世界消滅とロストロギア落着という非常事態でかつミッドチルダからそう遠くない位置なのだから当然だろう。

「はい。今回の事件は――」

第296管理外世界消滅については列席の提督方は一様に表情を暗くした。監視強化だけで放置したのはこの会議の決定であり、もし我々が何か兆候を見つけられていれば助けられた可能性もある。しかし生存者の情報を伝えるにあたり、動揺が広がった。

既に発動した魔法を“書き換える”という常識外れの可能性を持つ結界の存在。その開発者が管理外世界の研究者であるという事実は受け入れ難く、またどうしたらよいか対処に困ることなのは間違いない。

「その博士という人物、こちらで確保するべきではないのですかな」

「その通りだ。魔法は管理されなければならない。その管理を覆す

ような、魔法を根本から崩すような装置の存在は許されまい」

強硬派は技術の封印と博士の拘束を声高に叫ぶ。一方で私の報告そのものをいぶかしむ声もあったものの、第296管理外世界崩壊もそのような樂觀論から引き起こされたのではないかという追求を前に下火になっていった。

「待ちたまえ。彼らは技術の価値を正しく理解している。買い叩くような真似を許すとは思えんな。それにこうした技術は彼女が作らずともいつかは誰かが発明することだぞ」

「うむ。協力関係を築き、技術を共有すべきだろう。下手に対抗策もないままにテロリストにその装置の技術が流出してみる。次元世界全体の治安に関わるぞ」

「そうだな。彼らは国を亡くしたのだから落ち着ける場所の提供というのは交渉の糸口になるのではないかね」

穩健派は早速と彼らを取り込む算段を始める。彼らにとってはリンディが既に第十三任務部隊と接触している以上、チャンスと見ているのだろう。彼女の立ち回り方次第ではこの功績はそっくりそのまま穩健派のものとなる可能性もある。だからこそ強硬派も性急ともいえる意見を口に出しているのだ。強硬派将校も末端はともかく、中心派はハラオウンの密かな復活に気付いている。今のうちに潰しておきたいのだろう。

「あー、それについてなのだがね」

会議中は滅多に発言しない統幕議長が遠慮がちに声を上げる。一瞬、何事かと面々は話をやめて彼に注目する。ある意味、普段が昼行灯

なだけにかえって彼は皆の興味をひいてしまっていた。珍しく晴れの舞台に立った議長は、しかしながらいつも通りののんびりとした口調のまま会議に爆弾を放り込んだ。

「ここに最高評議会から彼らについての処遇についての通達事項がある。その、第十三任務部隊に随行している博士という人物について不用意な接触を禁ずることだ」

「なっ、最高評議会が」

「馬鹿な、普段何もせずに黙っているだけの連中が何故こんな時に限って」

とらぬ狸の皮算用をしていた将官たちが驚きと失望をあらわにする。最高評議会の通達には厳密には法的拘束力はない。だが事実上の決定事項なのが慣例だ。第十三任務部隊を取り込もうという動きに掣肘が加えられたのは間違いない。怨嗟の声が混じるのは既に齢百歳に届こうという年齢のはずの評議会メンバーに対して“老害”という思いを抱くゆえだろう。普段はろくに命令も下さず、全て丸投げされているのだから気持ちは分からなくもないが、問題なのは私怨がその思いの多くを占めている点だろう。

ただ、私の心に何か引つかかりを残したのは第四次元艦隊寄りの将校の一部がさほど驚いた様子を見せなかった点だろうか。狸の総大將は驚きの色を浮かべていたものの、周りがあれば折角の演技も形無しだ。やはりリンディの読み通り、彼らはこの件にどっぷり浸かっていると見て良さそうだ。

「文句を言いたければ直接言えばよからうて」

「キール、君がそれを言っていると誰も何も言えなくなってしまうだろう」
独白と言ふには大きく、意見と言ふには小さく毒づいたのはラルゴ・キール武装隊榮譽元帥、黎明期を支えた功労者と名高い三将校のうちの一人である。老いて尚、その戦闘技術は下手な武装局員よりも上と言われている。もっとも彼が戦うのを見た人間はここ十年の間皆無らしいが。

それをたしなめたのは同じく三将校の一員ながら事務方だけに未だ現役のレオーネ・フィルス法務顧問。三人の中では常に抑え役だったらしく、その面影は今のこのやり取りにも表れている。何かとこいつった会議でもそれとなく誘導していい方向に持っていくあたり、実は本局は今も彼の影響下にあるのかもしれない。

もっともたしなめたフィルス顧問自身も苦笑を浮かべているあたり、最高評議会の秘密主義——会議の非公開、誰とも合おうとしないメンバーたち、それどころかその構成員すら不透明——に不満を覚えている将校に少なからず共感を持っているのかもしれない。

「それもそうじゃな。もぐらにいくら文句を言っても聞こえмайて」
「そのぐらいにしておきなさいな。彼らなりの考えあつての通達でありますよ」

捨て台詞同然に言い放って憚然とした表情を見せるキール榮譽元帥に苦笑を見せつつ一般論で封殺したのはミゼット・クローベル本局統幕副議長だ。

元は一線で戦っていた人物だが、後方での才覚もあつたようで現在ではこうして上層部に食い込んでいる。三将校の中では武装隊一辺

倒だったキール榮譽元帥や事務方オンリーのフィルス法務顧問と比べてどちらもこなす器用な人物といえる。こうしてまとめ役になるあたりからも透けて見えるが、三人の中ではリーダー格だったらしい。現在でもあまり変わりはないようだけれども。

穏やかに微笑むその姿からは想像もできない策略家でもある。最高評議会の通達の件を私に前もって流したのも彼女だ。どこまで最高評議会の真実を知っているのか分からないけれど、もらったものはあり難く頂戴してリンディに伝えておいたけれど、彼女がどういうつもりなのかは警戒しておくべきだろう。

「うむ。まあそのなんだ。この件に関してはハラOWN少将に収拾した情報を渡して一任という形が適当とわたしは思うのだがね」

その後も喧々囂々、会議はいつ終わるともしれない中、昼行灯の議長が発した消極的解決案“とりあえず現場に投げておけ”が採択されたのは実に二時間後のことだった。しかしそうした会議の流れを誘導していたのは要所要所で動いていた三人の仕業であることに気付いていたのは極少数だろう。

正直、ここまで話が大きくなってしまえば私の力がどこまで通用するかは微妙なところだ。まだまだリンディ・ハラOWNと愉快な仲間たちは動き出したばかりなのだから。私は祈らずにはいられなかった。リンディが政治的理由からの作戦で命を落とした夫の二の舞にならぬことを。

第五十四話 本局統合幕僚会議（後書き）

伝説×3の10年前は88式の中ではこんなイメージ。10年経ったらもつと丸くなります。特にキールのじーちゃんとか。彼が脳内で某無責任艦長のハ。ー提督に変換されるのはきつと88式だけ。

StS10年前なので一部は役職も違うでしょう。キール栄誉元帥はかなりおじいちゃんなので武装隊という荒事部署の性質から既に一期時点で退役と推測。フィルスは相談役を外して未だ現役としてミゼットばーさんは副議長に落ち着きました。

実のところ彼らの描写のせいで予定の三倍の分量になって分割になったという。次回は不愉快な仲間たちの舞台裏です。一応、ネタばらし回かと思っています。

○クライド・ハラウン

提督と呼ばれていた気がするので殉職前の階級を准将に設定。

○統幕議長

軍政家タイプの人間。役どころが地味で効果が見え難いので戦記モノだとよく無能と描写されがちなタイプだけれど、実は彼らが居ないとうにもならないのです。

○三人

フィルスを事務方、キールを熱血前線将校タイプと設定した関係上、提督という呼称は避けています。あとリアルに伝説の三提督とか呼ばれたら恥ずかしくて身投げしたくなる気がします。東郷元帥もそんな思いをしたのでしょうか。

○十一年前の闇の書事件
細かい部分が設定されていないので独自設定が乱舞する気がします。

第五十五話 想いと外面（前書き）

不愉快な仲間たちのターン。短めです。

第五十五話 想いと外面

時空管理局本局 第4次元艦隊司令 ロバート・タスカン大将

レティ・ロウランが持ってきた話は我々にとっては既知の内容でしかなかった。第296管理外世界からの質量転送、生存者の存在は少々厄介な問題ではある。スターレットの間抜けが現地部隊に出し抜かれたのは些細なことだ。それに関しては別ルートから情報は入手できている。問題なのはその生存者の中にあの博士が存在したことで、そしてそれに焦った最高評議会（老人ども）が出しゃばってきたことだ。

第十三任務部隊の生存者であの世界の真実を知っているのは彼女ともう一人、ローレンヒル三佐だけのはずだ。彼女たちはあの時、あの世界で何が起こったのかを知っている。何故第296管理外世界が崩壊したのか、その真実を知っているのだ。そしてそれは我々にとっては明るみに出ては困る情報である。

あまりに彼女たちはあの世界で起こっていたことを多くを知りすぎている。だがローレンヒル三佐はともかく、博士を消すのは無理だ。“そういう存在”なのだ。更にはあの実験において我々が求めた成果は現状、博士以外に実現不可能と考えることだった。――最高評議会（老人たち）の手駒の“無限の欲望”アンリミテッド・デザイアジュエル・スカリエッティすら彼女の前では霞む。老人たちによって実験が強行されなければあの世界もこんな結末を迎えることはなかったのかもしれない。

それにしても老人たちにも困ったものだ。放っておいても注目を浴

びる彼女に対して直々に言葉をかけるようなことをすれば何かある
と言っているのと同じことだということが分からないのだろうか。
特にあのロウラン中將が気付かないはずもない。権力を握るために
老人たちと手を結んではいたが、過去の栄光に縋るだけの彼らとは
そろそろ袂を分かつべきかもしれん。

言いたい奴には言わせておけばいい。所詮、どんなに綺麗事を並べ
立てようが力が無ければ何も為すことはできないのだ。世界のあり方
を変えようと欲するならば金と権力がどうしても必要なのだ。汚名
は甘受しよう。それで世界が安定するのなら喜んで被ろうではない
か。

ミッドチルダ某所 最高評議会 書記

真つ暗な部屋。一定した電子音と明滅するランプ。その中で抑揚の
ない声がかわされている。私もその一員だ。脳髓だけになって尚、
生き続けた自分は正しかったのだろうか。我らがこの姿を選んだの
は、ひとえに世界の行く末を案じてのこと。そしてそれは同時に我
らの傲慢さの象徴でもある。これは彼らの世界なのだ。彼らの未来
なのだ。

こうして体を失って幾年も過ぎたが、徐々にもと同じ道を選んだ
者たちが狂ってきているのを私は感じ取っていた。人の形を失った
者が、人の心を持ち続けることが果たして可能なのだろうか。そん
な疑問を投げかけてかつての同志の一人が去っていったのを思い出
した。彼は叢の陰から我々の姿を見て何を思うだろうか。

「第296管理外世界崩壊。由々しき事態だ。やはり研究を急かしたのが問題だったか」

「だが次元世界に安定をもたらす可能性のある偉大な発明になったはずなのだ」

「だから私は反対したのだ。元々、博士のいたという時代ですら失敗したというではないか」

私の一言で沈黙が流れる。反対した私を多数決で黙殺し、過去の失敗例を挙げて性急な実験強行に懸念を示した博士を無視して結果を焦り、管理外世界の多くの人命が失われたのは事実なのだから。体を失い、寿命という現実から解放——脳の記憶容量が問題になるのはまだまだ先のことである——されたにも関わらず彼らが焦るのは何故なのだろうという疑問が浮かぶが、今は気にしないことにする。

「そうだな。強行するべきではなかったかもしれぬ。スカリエツェイが思うほど役に立たんのもそういう事情だな」

「いくら過去の偉人の才能があろうと衰退した今の技術力では如何ともし難いということだよ。彼女は別格だがな。だからこそ我々もできるかもしれないと思ってしまったわけだ」

既に肉体を失った彼らの倫理観、生死観は随分衰えてしまっているように感じる。私がこうして僅かに生きていた頃の理性を持ち続けているのは何故だろうか。何か大事なことがあったのは覚えていたのだが思い出せなくなってしまった。いつか私もそんなことから忘れて彼らと同じようになってしまふのだろうか。

私が物思いに耽っている間に実験が成功した時の見返りを考えれば妥当な賭けであったという共通見解が二人の間で得られたようだ。何事も無かったかのように彼らは議論を続ける。最高評議会の“この世界に生きる者のため”という意味は歪み、今ではより効率よく世界を統治するための意思決定機関と成り果てている。

「さしあたって情報の漏洩を防ぐために博士への接触は禁じた。普段の彼女なら迂闊な言動は慎むじやろうが発現している人格次第では何をするか分からんからな」

「うむ。ローレンヒル三佐も裏切りはすまい。ジュエルシードを回収し、改めて博士に研究を再開させればよからう」

いつから彼らはこうも腑抜けになったのだろうか。楽観、楽観、また楽観論だ。最高評議会の要請は絶対ではない。慣例というものは守るものがあるから存在するが、一度例外が作られればあつという間に崩壊するのだ。本当に博士との接触を形振り構わず止めたいのなら第4次元艦隊に彼女の拘束を命令すればよかったのだ。

ローレンヒル三佐も長年裏の世界で生きてきた人間だ。私の所感では我々にも第4次元艦隊にも面従腹背だ。条件次第ではすぐにでも我々を売るだろう。タスカン大將は狡猾な人物であるから恐らくすべてはこちらがやったことにして最小限のダメージで凌ぐに違いない。彼は我々を利用するつもりで近付いてきたのだ。にもかかわらず我々は大将に頼らないと実質何もできはしないのだ。こんな状況で世界を動かしているのは自分だと思ひ込める二人が私にはいつぞ羨ましく思える。

「今度は無人世界にでも送って最悪の事態を防ぐべきじゃな。あの装置は記憶やAIからの発動も不可能ではないという報告が上がっ

ていたぞ」

「それならばプロジェクトF・A・T・Eや戦闘機人計画からの流用もできそうじゃな。事態が安定すればすぐにでも検討するとしよう」

「うむ、全ては次元世界の安定の為に」

計器の明滅は止まり、部屋は完全な闇に支配された。私はいつそのま目覚めることがなければどんなに幸せかと心の中で嘆息した。同時にこうした時にため息をつくこともやれやれと首を振って肩をすくめることもできない現状を招いたかつての自分の決断に腹立たしさすら覚えた。

最高評議会、それは死者と生者の狭間に生きる者たちのかくも不気味な、しかし人類の存続という意味では効率的ながら不必要なほどに安全策に走り、時に無慈悲で残酷な者たちの集まりである。いや、私も含めて既に人とは言えない者たちなのだろうが。

だいたいよくよく考えてみれば、脳髓だけになって字が書けない私が“書記”というのも既に何か違う気がするのだ。人生の終焉を新たなスタートラインに見立てたあの時から、我々はどこか狂い始めていたのかもしれない。

第五十五話 想いと外面（後書き）

今までリンディ筋の人間の視点ばかりだったのでひたすら悪く描かれていた人たちも一概に無能で悪人というわけじゃありませんよという話。もつともリンディたちにしても彼らのやり方が受け入れられないというだけで彼らの功績そのものを否定しているわけではありませんが。

次元世界の安定、という言い回しを多用しています。個人的に平和という表現があまり好きではないためですね。戦争が無ければ平和でしょうか。情報統制下で生活が雁字搦めにされても銃を手にする事がなければ平和でしょうか。どうも世間一般に言う平和という表現は歪められている気がします。

最高評議会の描写はそうした歪みに対する88式の一つの解答です。個人的な考えとしては彼らが完全に間違っているとは言えないのですが、彼らの決定による犠牲者となれば……。

世界の安定のために死んでくれと言われて頷くことができるでしょうか？ 即答できる人はいないのでは。

○ハンス・ノルデン大将

体裁を整えないレベルで手段を選ばないおっさん。レジアスが強硬派ならば彼は急進派内過激派といったところ。実際問題として完全無欠に無能で有害な人間が組織高官になるなど普通なら考えられないことです。

○ス力さんすら霞む

博士の正体に関わるフラグ。

○多数決

笑ってはいけない最高評議会。構成員は三人である。笑ってはいけない。

○ローレンヒル三佐

つまり彼女は三重スパイ、トリプルクロスです。彼女も全てを知らされているわけではないので“実験”がタスカン大將らの暴走と勘違いしたり、リンディに拾われればいいかと考えるなど評議会そのものを軽く見ているフシがあります。

○書記

三人で多数決なので二人が狂ったらアウトという発想から出てきた設定。奇数という数字は多数決が採り易いですが誰かが手を組むと劣勢側が事態を打破できなくなる危険性を孕んでいる気がします。

9・15改稿 最高評議会の部分を三人称から書記の一人称に書換、最高評議会そのものの説明を中心に補足。

9・24改稿 第4次元艦隊司令の名前を間違えていたため修正。

第五十六話 人手不足の意味すること（前書き）

フィクションにおいて通信士が何でも屋であることが多いのは何故でしょうね。

第五十六話 人手不足の意味すること

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ エイミー・リミエッター等
海尉

「今日も恋人は書類整理、明日もきつと書類整理、つと」

「リミエッター尉、なんですかそれ」

何とも言えない表情で遠慮がちに通信士のアレックスが聞いてくる。心の中だけのつもりが声に出ていたみたいだ。手を止めて仮眠の時についてしまった寝癖——何度も撫で付けているのだけれどもなかなか頑固——を指先でいじりつつこの歌の由来を思い出す。

「執務官補佐に代々伝わる気が滅入った時に歌う歌だよ」

「余計に気が滅入ると思うんですが」

休み中に押しかけてきた士官学校の先輩に付き合つてと言われて飲み屋を三軒梯子するはめになったのが懐かしいかな。その時にべべれけに酔った彼女が歌った調子外れの替え歌なのだ。元は当時の流行歌だった気がする。真面目一徹で知られていた彼女の乱れっぷりや愚痴やらなんやらを聞いている間に、執務官補佐という役職を進路に選んだことにふつつと不安が浮かんできたのよねえ。

「ドン底だと思えるときでも更に下があると分かれば元気が出ない？」

「知りたくない境地ですね」

心底嫌そうな顔で肩をすくめるアレックス。知らない方がいいと思うよ。何て言うかね、人間って強いなって思えて来るんだよ。丘を越えた向こうに行くとなんか快感にすらなってくるんだな。ワーカ―ホリックとか目じゃありません。もっと恐ろしい何かです。

「何もクロノ君直々に行くような件じゃ無いと思うんだけどなあ」

クロノ君がいてくれればもう少し楽になっただろうにと愚痴りつつまた仕事を再開する。戦闘があっても第十三任務部隊の結界のおかげで昨日の戦闘の跡もほとんど残らず、今日も海鳴市は平和です。今のところジュエルシードの反応もないしね。

「真面目ですからね、執務官。リミエッター尉と違って」

「何気に酷いね君は」

「言う相手は選びます」

全く悪びれないアレックスに私は苦笑するしかない。本当にアースラのクルーは変わり者ばかりだ。トップのリンディ提督からしてそうなのだから上司に似たのかもしれない。そうなるとその中に放り込まれた私もそうなのだけれどそれは自覚しているので問題はないのだけれど。

「しかし第296管理外世界は第97管理外世界同様あまり魔導師適性のある人間はいないという調査結果が出ていたと思いますが」

「なのはちゃんみたいな天才を求めているわけじゃないけれど、いたらラッキーくらいのつもりなんでしょ」

クロノ君は昨日の鈴木少佐の要請を受けて、魔導師適性検査のために数人の技官とともに第十三任務部隊の方へ行っている。武装隊をつけないことで威圧感を与えず、かつ暴走体などの襲撃を受けた際に戦闘力のない技官の安全を保つためということで自分が行くと言い出したのはたしかに合理的で間違っではない。

「間違っではないけれどコレを私に押し付けていくのは何か間違っていると思うんだ」

「でも一尉ならその量でもやってしまうんでしょう？」

「ふと気付いたんだ。やってしまうからまた投げつけられるんじゃないかと」

「今更気付いたんですか」

私の世紀の発見を見事に叩き落してくれやがりました。この鬼畜メガネめ。……疲れているのかな。なんだかどうでもいいことにどうでもいい反応ばかりしている気がするんだけど。昨夜、一晩で資料を集めてハイになっていたのがまずかったのかもしれない……。あれ、視界が斜めに……

「リミエッター尉！？」

かくして私は医務室のベッドの上で目を覚まし、頭のねじが外れたようなやり取りや酷い心の中での独白を思い出してしまい、いっそのまま殺してと医官に泣きついて呆れられましたよ。コレは酷い。

ちなみに診断は睡眠不足と過労。どうやら順調に私も補佐官の殉職理由トップへの道を歩んでいるようです。前線で魔法ぶっぱなすのと同じくらいこつちだって大変なんだよ。ほんと。クロノ君が悪いわけじゃないんだけどね。敢えて言うならこれは“海”共通の問題だから。

実のところ、優秀な隊員を集めているはず——次元巡察隊にしても陸よりは質はマシである——の海でこうも人手不足が叫ばれるのは結構単純な理由だったりする。海では相対する問題の規模が大きい——最悪の場合、周辺世界を含めた一つの次元世界の崩壊の危機——だけにランクの高い魔導師が求められる傾向がある。そのため優先順位において高ランク魔導師の獲得が上位を占めるのは仕方ないけれども人件費を含め、予算は有限なので当然彼らのスカウト、雇いにかかる費用も皺寄せがどこかに行くことになる。いくら優秀な魔導師を雇っても装備が貧弱では宝の持ち腐れとなるので装備調達・整備費は削れない。すると白羽の矢が立つのがデスクワーク組というわけだ。

司法の方は次元航行部隊とは別の部署の管轄であるから——執務官の権限を考えるとまるつきり他人事ではないのだけれど——この話は成立する。ちなみに陸では話が逆になる。細々とした多くの事件を解決する為に多少質が落ちても多数の要員を確保したいのだが、志願する魔導師の絶対数が足りないために非魔導師でも務まる捜査員や後方要員はともかく、武装隊員が究極的に足りていないのだ。お巡りさんに大軍や強大な敵を打ち倒す英雄は必要ない。ただ人々の日々の笑顔を守るための手があれば十分なのだから。

……そんなことよりやすみがほしいよ。と、俗人らしく自分の希望を呟きつつベッドで寝返りを打つ私。

自分の所属組織が抱える問題が分かったとしても、たかが一尉の私がどうこう言った程度でどうにかなるならとくに私より高い位置で情報も権限もある人間がなんとかしているはずなのだ。目の前の最悪は起き得た最悪の中でも最良の最悪、という言葉を残したのは誰だったか。所詮、“最も”などという表現は今いる自分の位置から見た主観的、独善的な表現であるから別の立ち位置や違う未来を辿った人間から見れば案外マシなのかもしれない。

そうでも考えないと胃潰瘍になりかけてまで目の前の仕事を片付けている自分が救われないんだよね。私は不毛になりかえている思索を打ち切ると今少しの“休暇”を無駄にしないためにそっと目を閉じた。

第五十六話 人手不足の意味すること（後書き）

エイミィさん頑張れ超頑張れ。原作だと調査期間はしっかりあつたはずだけれどこの話だと一晩でやっているので倒れました。対クロノの心情をここで掘り下げることとも考えましたがハラウン親子のエピソードをこれ以上一期で書いても消化できないのでA、sに回します。

○仕事

書類が飛び交う戦場もある。書類で指が切れますし重ねれば鈍器にもなります。え、そういう意味じゃない？

○管理外世界は後回し

管理世界の人間から突き上げを受ければそちらを優先せざるを得ないはずです。

○人手不足の裏事情補足

陸……AAAランク魔導師の戦闘は街一つを壊滅させるという。“

お巡りさん”には荷が勝ち過ぎる。

海……予算には限りがある。けれども事件は待ってくれないから対応力が必要。では皺寄せは、という話。

管理世界の拡大の割りにそれらの世界の魔導師の絶対数が少なかったのではないかと88式は考えています。

○倒れたら休暇

自己管理ができないのは社会人としてはアウト。忘れてはいけませんがエイミィさんはまだ十代です。リンディさんは大人なので砂糖が

増えるだけで倒れません。

第五十七話 呪われし研究の落とし子（前書き）

罪の結果の存在は何を想うのか。

第五十七話 呪われし研究の落とし子

海鳴市郊外

リニス

「身動きがとりにくくなってしまったわね」

私たちのような陽の当たる道を歩けない者にとってはさんさんと中天に輝く太陽が時々憎たらしく思えることがある。真上から照らされて隠れられる影がない昼過ぎはまるで今私たちがおかれている状況を暗示しているかのようだ。

プレシアはこの機会が千載一遇のチャンスと言っていたが、実際には尻尾を掴まれかねない危険な試みだった。ジュエルシード一個確保、全員捕縛されずに撤収という結果は向こうがこちらの戦力を過大評価して慎重な対応をしたからでしかない。そう誘導したのはこちらだがもし力押しされていれば負けていたのはこちらだ。いつまでも通用する手ではないだろう。そして高い探知能力を持つ上級次元航行艦の到着は今後ますます私たちの行動を縛ることになる。

こうして息を潜めて魔法を使わず潜伏している分には発見される可能性は低いが、ジュエルシードを確保するために封印魔法を行使したり思念体や暴走体と交戦すれば放出された魔力に気付かれてたちまち管理局員が送り込まれるに違いない。今までの大量にダミーをばらまいて知らぬ顔で現地住民に紛れ込む方法もいつまで通じるだろうか。

「これからどうするんだい」

「こちらからジュエルシードを探すというのは無謀だわ」

この時間になってもフェイトは起きて来ない。数日とはいえ短距離転移魔法の連続行使や暴走体相手の実戦が続いたのはまだ幼いフェイトの体にはかなりの負担になっていたのだろう。アルフがいつも規則正しい生活だったフェイトが！ と半ばパニックになりかけていたのは主想いの彼女らしい。あれは吐血して倒れたプレシアを初めて介抱した時の私といい勝負の慌てぶりだった。

そしてフェイトが居らず、動きが取れないゆえに他にすることがない今はアルフとの打ち合わせには丁度よいタイミングである。念話でもいいのだが、無愛想な母親の影響があつてか人の顔を窺って行動しがちなフェイトに感付かれる恐れもある。最近は強かになってきたとはいえ、ある意味フェイト以上に根が正直で素直なアルフのことだ。フェイトに何を話していたのかと聞かれれば対応に苦慮するだろう。ただでさえ主の母とその使い魔に迷惑をかけられている彼女にこれ以上負担はかけたくない。

「次元航行艦に居座られたんじゃ仕方ないか」

「かといってプレシアがそれで納得するかというと、ね」

プレシアは複数個の入手を期待していた。この状況下では時の庭園に秘密裏に帰還というのは難しい。衛星軌道上までの転移となると必要魔力も追跡を撒くために使っていた短距離転移とは段違いだ。当然、ダミーにも相応の魔力をということになる。と数をあまり用意できないので発見される可能性は高い。どこへ行ったか分からないという意味では別に魔力の大きさは関係ないが探知圏外に脱出され

る危険を考えれば当然大きいものを優先的に追跡するだろう。

ということは、なんとかしてプレシアが満足するであろう数のジュエルシードを確保して時の庭園に帰還するしかない。その後のことはプレシアが決める問題だ。一応、案はないではない。プレシアが魔導炉からの魔力でダミーをばらまけば庭園からどこかに逃げて潜伏するというのも可能だろう。彼女の体がもてばの話だけれど。だが“プレシア”はここでの決着を望んでいる。であればここですぐに帰還するのが彼女の使い魔としては最善なのであるが……。

「一戦してあわよくばそちらがジュエルシードを確保、それでアタシたちがうまく捕縛されれば完璧ってところかい」

「そうね」

あらかじめ打ち合わせていた流れを確認する。現状、フェイトもアルフも管理局員とは交戦していないし、なのはさんたちにも手を出してはいない。管理外世界での魔法行使といくつかの軽犯罪くらいである上に、保護者の意向という子供には逆らいがたい理由による行動であるから情状酌量の余地は大きい。これなら全てが終わった後、フェイトがその後の生活に困るような大きなハンデを受けることはないだろう。

そんなことを考え、視線を戻すとアルフがやや俯いて表情を暗くしているのに気付く。今更フェイトを除け者に行っているこの状況に胸が痛むという訳ではないだろう。しばらく待っているとアルフは私から視線を逸らして小さく呟くように言った。

「……リニスは本当にそれでいいのかい」

「それが、契約だから」

プレシアの罪は決して軽くない。私も使い魔ゆえに酌量はされるだろうけれど、同じように人格を持つとはいえ道具であるインテリジエントデバイスと違い、社会的地位が認められている分、責任も重くなる。フェイトたちに比べれば事情を知る分重い処分が下されるだろう。

「それに、あの囃は——」

「あれは私の罪だ！」

思わず怒鳴ってしまった。アルフがひゃつと声を上げて身を縮める。しゃがみこんだ体勢から恐る恐る上目遣いで見上げてくる。その様子を見て頭にのぼった血が降りてくるのを感じた。アルフはプレシアを非難するつもりで言ったわけではないだろう。恐らく私を氣遣って聞いてくれたのだ。フェイト相手にプレシアの絶対性を崩す意味で批判してみせている——事情を知った上でも腹に据えかねて怒っていることもあるだろうけれど——のとも別だ。

管理局との追いかけてこで気がたっていたことや、まるで道端の木をどけるように無造作に囃に“使用”すること命じた今のプレシアに対する言いようのない感情を抱えていたにせよ、心配してくれた相手に激昂してどうするというのだ。不甲斐ない。

「……ごめんなさい」

「いや……アタシが無遠慮だったよ」

あれは私という存在を生み出すためにプレシアが重ねた罪だ。

プロジェクトF・A・T・Eは人工的に魔導師を造り出す計画だった。しかし生命を一から創造するというのは難題に過ぎる。しかし自然発生に頼っていても優秀な魔導師を効率的に生み出すことは出来ない。倫理観の狂った科学者たちの暴走という割には魔導師不足の管理世界の抱える問題と一致するのは皮肉としか言いようがない。彼らが出した結論は、既に存在する優秀な魔導師をクローニングすることだった。しかも魔法資質だけではない。知識や経験までもコピーして即戦力となる魔導師を造ることを目論んだのだ。流石に同じ姿では問題があるので優秀な魔導師の持つ遺伝子の探求や外面を変える研究、そして全く別の記憶を混入する方法も模索されていた。

単に人間をクローニングする。それ自体は実はそこまで難しい技術ではない。生命の神秘が全て解かれる——現在でも完全に分かっているとは言い難い——以前に人間は他の生物のクローンを作成することに成功している。問題となったのはあくまで倫理的な側面であり、人間だからと技術的に困難な聖域があったわけではない。その点はまだ仕組みがよく分かっていないリンカーコアがあるうとなかろうとさほど違いはない。

しかし記憶や経験の受け渡しという命題は非常に困難なものであった。科学技術的には未だ完全な再現は難しく、魔法的方面からはヒトの尊厳を辱めるとして研究そのものが禁じられており、碌な研究成果がなかった。

しかし彼らは禁忌を犯し、凄惨な実験の末にいに方法を見つけ出した。リンカーコアを利用するのである。彼らも原理については完全には理解できてはいなかったが、特殊な術式によってコピー元の

人間のリンカーコアを通じて記憶や経験を完全ではないにしろ、クローン体に送り込むことに成功したのである。ただしその欠損率はまちまちであり人格崩壊やクローン体そのものの生育に影響が出るなどしていた。リンカーコアという未知のモノを通じた結果ゆえにその後の改良は困難を極めた。

結局彼らは成果を得る前に逮捕、プロジェクトF・A・T・Eは終わった。

使い魔は通常、主からの魔力供給を受け、それが途絶えれば役目を終える存在だ。一定の人権が認められている関係上、そういった事態の際には主の変更権限が一時的に使い魔本人に移譲される仕組みになっているのが一般的だが主の為に生み出されたということと、使い魔を保有、維持できるほどの魔導師がそう多くはないことから使い魔たちの多くは主と運命を共にすることを選ぶ。

しかしプレシアは死期の近い自分とアリシアの飼い猫である私が心中することを望まなかった。そこで彼女は心中できぬように私を使い魔の身でありながら主からの魔力供給を受けない存在にしたのだ。それはある意味、新しい生物の創造とも言える所業だった。

今の私の状態は禁忌であり不可能とされている人間を素体にした使い魔に近い、と表現するのが妥当だろうか。だが素体は紛れもなく老いた猫である。リンカーコアを持った魔道機械という言い方もまた私を現状を表す言葉としては微妙にずれている。機能面から言えばさほど違ってはいないがAIではなく人権を認められるほどの人格を持つという社会的側面で異なるからだ。プレシアという人物に表沙汰にできない新しい功績が今ここに追加されたといえよう。彼

女は新たな生命の創造に成功したのだ。

そして、そんな世紀の発明において、失敗がなかったのであろうか。ましてや素体は一度寄り代として用いてしまえば取り返しがつかず、失敗は許されない。成功が確信できるまで彼女は失敗を繰り返したはずだ。

そう、あの“囀”はそうした実験の末の産物なのだ。私という存在が背負う罪である。だからかもしれない。プレシアが私にアリシアの愛猫リニスであった頃の記憶を移さなかったのは。彼らを同族と認識してしまえば、この罪の意識がより私自身を苛んだであろうから。プレシアはフェイトの真実を伝える頃にこのことも告白した。そしてそれは自分の罪であると。

私の主は、不器用で優しい世界一のマスターなのだ。

「プレシア、貴女だけに背負わせはしませんよ」

第五十七話 呪われし研究の落とし子（後書き）

不器用で優しいマスターの使い魔は不器用で優しい。テストロッサファミリーはヤマアラシの群れという説を唱える８８式です。

リニスの“罠”に対する感情はこういうことでした。対プレシアの時はマスターの手前さらっと流していますが。

○非戦闘時に発見される可能性は低い
魔力を溜め込むというリンカーコアの性質上、平常時に垂れ流すことはないでしょう。もし垂れ流しなら魔導師は隠れたり待ち伏せしたりできないことになってしまいます。

また消耗した魔力を回復した程度で魔力素濃度に大きな変化が出るとも考え難いです。野外で誰かが運動をしたからといって付近の酸素濃度が目に見えて変わることはないのと同じことです。

魔力素がどういうものなのかは設定が乏しいのでこの辺りは８８式の捏造設定です。場合によってはA、Sで隠密行動している人が軒並みアウトになりかねないので難産設定でした。

○プロジェクトF・A・T・E

単にクローン魔導師を作るのが目的であればプレシアの求めた記憶の部分は必要ないはずです。使い魔の教育は比較的簡単らしいので欠損記憶と生育失敗のリスクのある元の方法よりもリニスの成功の方が実用性は高いかもしれません。

○使い魔の主変更

元の主が許可すれば可能とします。使い魔契約は主から使い魔への術式行使と考えられるのでその内容を変更できるのも主とするのが自然でしょう。

○人間を素体にした使い魔

公式設定では不可能とされていますが技術的に人間がダメで他の動物なら可能というのはいまいち通らない説明で、単に禁忌であるとした方が適切な気がします。

第五十八話 空を駆ける巫女（前書き）

例によってシリアスが継続しません。

第五十八話 空を駆ける巫女

海鳴港沖

第十三任務部隊旗艦 駆逐艦澤風

クロノ・ハラウン三等海佐

魔導師であるかどうかの最も簡単な見分け方は念話に反応できるか否かである。しかしそれはあくまで“魔導師であるか”の見分け方であって彼らの求める魔導師資質があるか否かとは厳密にはイコールではない。リンカーコアの生育が十分でなかったり、あまりに魔力保有量が少なかったり、あるいは別の要因などで念話に反応できない人も少なからずいるのである。

そうだったケースは主に管理外世界や管理世界になって間もない世界の住人に多く報告されており、魔法という文化が周囲にあるかどうかという意識的な要因があるのではないかという説もあるものの、リンカーコア周りの原理が解析されていない関係上はつきりとした結論は出ていない。

とはいえ彼らが要求しているのは簡易的な検査なので僕は念話による確認法で構わないかとたずねたところ、豊田准将はわりとあっさり承諾してくれた。曰く、戦闘艦にそうした専門家が大勢乗っているはいないだろう、と。流石は艦隊司令官を任されている人物だ。こちらの内部事情を察してくれたようだ。大勢は乗っていない、というのは乗っていないわけではないという意味だ。

次元巡察隊はパトロール部隊という任務の関係上、漂流者や管理外

世界の人々との接触もある。彼らが魔導師資質を持つかどうかというのは彼らが無害な人間を装った管理世界の犯罪者であるかを見極める一つの指標になる。そしてそうした際、自己申告である念話による確認は意味を成さないのだ。無論、魔法を使えない犯罪者であることや魔導師資質がある管理外世界の一般市民である場合もあるが、魔法を使える犯罪者はそうでない犯罪者に比べて直接的な危険性が高いので魔法を使える犯罪者をそうと知らずに自由にしまふという最悪の事態を避けるために、魔導師資質を検査できる技官が乗艦している。もっとも彼らの多くは別の職を兼務していることが多いのだが。

今回の場合は受け取り者未指定の広域念話で魔導師であるかを確認し——これ自体は魔導師なら誰でもできる上に大して手間もかからない方法である——反応した人物がいれば魔力量などを精密検査させてもらうことになる。こちらはサービスのようなものだ。

鈴木少佐は自分たちが第296管理外世界の人間であるというアイデンティティーを維持したい、できればベルカ自治区のような形での決着を望んでいるようだ。だがそのためには自分たちの価値を示さなければならぬ。もちろん、彼らの艦隊と博士の技術は十分な交渉材料になる。けれども金と技術だけでそれを勝ち取ったケースを僕は知らない。

そう、それを世間に認めさせるには古今東西、血を流す必要があるのだ。言い換えるなら人を出すと言ってもいい。戦争によって住む世界を失ったベルカの人々は管理世界に広いネットワークを持つ聖王教会を通じて時空管理局に協力し、時には戦力として教会騎士を貸し出すなどしているからこそ現在の地位が認められているのだ。もし彼らが何もせずミッドチルダに住まうことだけを望んだのなら今頃ベルカ自治区は存在せず、ベルカの文化も博物館に陳列される

過去の遺物と成り果てていただろう。聖王教会は存続していたかもしれないが、ベルカの偉大な聖王を敬うという性質上、ベルカそのものが過去の存在となれば求心力は低下していたかもしれない。

彼らは質量兵器で武装した軍人であり、質量兵器がなければ無力とは言わないがその価値が激減するのは間違いない。後方要員としてもまずは魔法文化から学ばなければならないというハンデがある。

……もし、彼らの中に戦える魔導師がいればどうだろう？ 魔導師は即戦力足り得るし、何より今の時空管理局では引く手数多だ。彼らが一線で活躍すればこの上ないアピールになる。この事件に対しては念話による連絡役程度の扱いだろうけれど、その後の有用性は高いはずだ。今のうちに詳しいことが分かっていたいれば鈴木少佐のことで、いろいろと活用してくれることだろう。

住む世界を失った彼らに対する同情と思われるかもしれないが、僕は彼らの逞しさに魅力を感じたのだ。自分たちの生きる世界を失って尚、絶望する事無く現実に立ち向かう彼らを見ているとこちらも頑張らなければという気になるのだ。言いようのない閉塞感が漂う管理世界に彼らなら新しい風をもたらしてくれるのではないか、というのは少々期待のし過ぎだろうか。これはその一足早い礼のつもりなのだ。

もともと第296管理外世界に対する調査報告によると魔力素濃度こそ問題はないものの、第97管理外世界同様に魔導師資質のある生物は人間を含めてまれであるということだから空振りお節介になる可能性も濃厚ではあるのだが。

事実、既に澤風以外の調査が終わったものの、高速総合補給艦サプライ艦長シルヴィア・シンブソン中佐相当官が念話は可能だが戦闘

にはとても耐えられないごく僅かな魔力を持つということが判明したくらいだ。彼女が言葉少なに語るところによるとどうやら以前からたまに声が聞こえることはあったらしい。精神異常か何かではないかと悩んでいたらしく、事実が分かかって大層喜んでいた。管理外世界で無遠慮に受け取り者を指定せずに念話を飛ばしていたのが誰かは気になるところだが。不法滞在者というのがもつともありそうな話だろう。彼女もとんだとばっちりで悩むことになったものだ。

「クロノ執務官」

「終わったかい？」

技官が顔をほころばせているところを見ると魔導師資質のある乗員が見つかったのだろうか。一緒にやってきたのは鈴木少佐と通信長の日野中尉だ。メガネをかけた落ち着いた感じの女性であるが、初対面の際の挨拶でみせた太陽のような明るい笑みをからすると明るく元気な人なのかもしれない。そんな彼女はややひきつつた笑みを今は浮かべている。

「日野中尉は魔導師資質があります。魔力量はCランクほどですね。話を聞いてみたところどうやら彼女の家系に魔導師がいたようです」

「まさか空を駆ける巫女さんの話が本当だったなんて……」

話はよくあるとまでは言えないものの、同じような話は聞くことがあるストーリーだった。代々巫女としての務めを果たしていた日野家のある女当主が異国の行き倒れの男を助け、世話をするうちに心を通わせて結婚して子をなした、という話が日野家には伝わっているらしい。怪我人を救うために空を駆けたとか、重傷者を治療してみせたとかいう話は恐らくその後の巫女に魔導師資質のある人間が

いたためだろう。魔導師資質が遺伝するという説に信憑性が出てくる話だな。

彼女が真実を知らなかったのは漂流者の魔導師が危急の時を除いて無闇な魔法の行使を禁じていたであろうことと、おそらく科学技術が発展するにつれて魔法というものに対して偏見が生まれたためだろうと鈴木少佐は言う。そういえば彼らの世界では中世には魔女狩りというものすらあったのだったか。魔法も科学に近い側面はあるのだが、魔力素などを観測できていない彼らからすればオカルトなのだから仕方のないことかもしれない。

「で、驚くべきことに彼女がしているその髪留めなのですが、実はそれがベルカ式と思われる古いデバイスであることが分かったのです」

「巫女時代から代々伝わるものと聞いていたんですがその割には全然古そうじゃないので信用していませんでしたんですけれど」

たしかに日野中尉は薄い水色の髪留めをしているが、彼女の言う通り見たところ古そうには見えない。技官が言うには詳しいことはまだ分からないが恐らく自動修復機能があるのではないかとのことだ。なるほど技官が興奮していた理由が分かった。技術者として興味津津なのだろう。

ベルカ式というのは僕らの使うミッドチルダ式魔法とは別の魔法体系だ。物体に魔力を付与して戦うスタイルが一般的で、魔力そのものを飛ばす射撃魔法の使い手が多いミッド式に比べると比較的交戦可能距離は短い。その性質からやや融通が利かない側面はあるものの戦闘面では汎用性を重視しているミッド式に比べて状況によっては強い面もあるとされている。

聖王教会が偉大な王と讃える聖王の時代に使用されていたとされる古代ベルカ式は今では聖王教会騎士を中心に僅かに伝わるのみで使い手が少ないが、ベルカ自治政府や聖王教会と時空管理局の手によって汎用性の高いミッドチルダ式の利点を活かして古代ベルカ式をエミュレートした近代ベルカ式としてミッド式に比べれば使い手は少ないものの一定の使用が存在する。

つまり彼女の先祖は今では少ない古代ベルカ式の使い手であった可能性が高い。伝わっている話からするとベルカ式には少ないとされているサポート系の術者であったということになる。そしてその人物が使っていたデバイスが目の前に……僕ですらちょっとした歴史のロマンを感じられるのだから彼らにとっては宝石のようなものなのだろう。立ち回り次第では聖王教会やベルカ自治政府の庇護を受けられるかもしれない。

彼女の魔導師としての資質や古代ベルカ式のデバイスについての精密検査は興奮している技官には申し訳ないが後にということになった。彼も今の状況は分かっているのだろう、しぶしぶ同意してくれた。さしあたっては簡単な魔法や念話——古代ベルカ式の使い手の末裔であるから彼女のことは魔導師ではなく騎士と呼び、念話も思念通話と言うべきだろうか——についてのレクチャーを受けてもらうことになった。シルヴィア中佐相当官も念話についてだけ軽く練習をしてもらう予定だ。魔法の知識自体はユーノの手解きがあるので理解が早そうなのありがたい。

ちなみに日野中尉は放出された魔力を感じ取る力に優れているらしく、昨日の戦闘の際には僕らの動きをほぼ正確に報告していたらしい。鈴木少佐はそういったことや彼女の昔話を聞いていたので多少は期待していたそうだ。魔力量こそさして多いわけではないけれど

彼女もなのはとは違った意味で稀有な才能の持ち主なのかもしれない。

「26歳にもなって魔法使いだったなんて今更言われても困ります」

「その言葉遣いや口調は26歳がすることじゃないと思うぞ。それに小さい頃に分かったとして高町君のように魔法少女をやったとしても。その記憶を持って今の年齢になっていたら？」

「黒歴史ですね。今更で構いませんでした」

その稀有な才能の当事者からの魔法に対する扱いが酷いような気がするのは気のせいだろうか？

第五十八話 空を駆ける巫女（後書き）

シルヴィアがホシノ・ル。にしか脳内変換されない知人を持つ８８式です。でもシルヴィアは設定に２９歳と書いてあります。合法口りは博士一人で十分だと思うのです。残念な合法口りだけ。

きつと後のなのはさんも９歳当時「魔法少女をやっているのです」みたいなことを思っていたことやトレードマークになってしまい変えるに変えられない小学校の制服がデザイン元のバリアジャケットとかのことを考えるとずーんと暗くなることがあったんじゃないでしょうか。大人になるって……時間の経過って残酷ですね。

○日野中尉の容姿

よく考えると彼女に限らずキャラの容姿をあまり描写していない。一人称だと見る側の主観になることや知っている相手の容姿のことをわざわざ内心で考えたりすることがないのが原因か。

○巫女のソツチの扱い

そういう方面で緩い場合もあるらしく結婚後も職を続けることができたり、中には遊女の性質を帯びた巫女もいたらしい。あくまでそういう場合もあるというだけで、また現代では未婚の若い女性が務めるのが一般的だそうです。

○先祖のベルカ式術者

実は××王で日野中尉はその末裔とすればVividに絡められそうだけれど、その頃彼女は三十過ぎなので没に。流石にヴィヴィオやアインハルトに混ざって格闘少女する年齢では……１９歳魔法少女なんて目じゃないレベルでアウ（トリプルブレイカー

。ベルカ式とミッド式での同じ用途の魔法の呼称の違い
大して変わらないのに名前だけ違う。現実にもよくあること。

第五十九話 祈禱と巫女と少女（前書き）

真面目な話と胸があつたかくなる話。……たぶん。

第五十九話 祈祷と巫女と少女

海鳴港沖

第十三任務部隊旗艦 駆逐艦澤風

鈴木和人少佐

「しかし那岐君が魔法少女ねえ。魔法少女ナギ、始まります?」

「……わざと言ってますよね副長」

額にうつすらと青筋立てつつ満面の笑みで那岐君が振り返った。はつはつはつと笑って誤魔化す。そんな脅しをしても無駄だ! ……さっきまで背中に哀愁が見えていたしな。

那岐君が魔法を使えるということが分かったのは昨日のことだ。飲み込みの早い那岐君は念話をその日のうちにマスターしたらしく、たまに上の空になっては——本当は魔導師たちはいくつも同時にいろいろなことを頭の中で並行処理できるらしい。那岐君がまだ半人前な証拠だ——クロノ執務官やリンディ提督からの話を伝えてくる他には衛星軌道上にいるアースラの通信士たちともやり取りをしているようだ。

実はSF小説に出てきそうな感じに空中に窓のように通信映像を送ったりも出来るそうなのだが——便利だがこちらとの協定が結ばれる前だったので先の交戦時には内規に抵触するため使えなかったらしい——今は那岐君の訓練ということで答え合わせと称してたまに採点役の向こうのオペレーターが顔を出す程度である。

そのオペレーターは何人かいるのだがその中で頭一つ階級が高いのがリミエッター等海尉だ。聞いてみるとアースラ通信主任という肩書きこそあれど、本来はクロノ執務官の補佐官であって執務官同様の正式な所属はアースラではないそうだ。執務官やその補佐官というのは本局において執務官長の指揮下にあり、他の部隊とは命令系統が違うらしい。重大事件の捜査などにかかり出されることも多い彼らはそうして他の組織の干渉を断ち、捜査対象との癒着を防止する狙いがあるんだとか。

…… 思いつきり血縁人事でアースラ常駐状態である現状を見るに正常に機能しているかは怪しいが、どうやらそれはクロノ執務官の母親であるリンディ提督が局内のかかなり大きな派閥に属しており、そこで相応の地位があるため“ちょっと無理なお願ひ”がきくかららしい。それでいいのか管理局。いや大抵どういう組織でもそういうものだといえそうなのだが。ちなみにその後、クロノ執務官におぼっちゃんと呼んだ方がよろしいかと聞いたら顔を真っ赤にして結構だとおっしゃられた。…… 坊やだなあ。

そんなこぼれ話はともかく、那岐君がクロノ執務官の防護服バリアジャケットに興味を示し、それなら展開してみてはどうかと彼が冗談交じりに言ったのに対して、彼女がやってみようかなと答えた時、彼女の髪飾り――代々伝わるデバイスが輝いて防護服を構築してしまったのだそうだ。

執務官曰く、普通は魔法を知ったその日のうちに防護服構築をするというのは考えられないことらしい。今は那岐君の同意を得て髪飾りはアースラで解析中である。元はそこまではしないつもりだったらしいが万が一エラー等を起こしていた場合、危険であるということとでクロノ執務官がわざわざ頭を下げてきたから応じないわけにも

いかなかったのである。むしろ那岐君に何かがあつてからでは遅いのでこちらから願い出ようと思つていたくらいなのだが、なかなか執務官も律儀な男だな。

ユーノ君の見立てでは高町嬢に彼が渡したレイジングハート嬢同様、持ち主の想いに反応する祈祷型なのではないかということだ。祈祷型とは術者の思考や想いに対応した術式を発動できるとかなんとか……つまりあれか、彼女が副長のばーかふっとんじゃえとか思つたら吹き飛ばされるかもしれんのか。今後は言動に気をつけよう。しかし巫女の家系のデバイスが祈祷型というのはお似合いだな。

問題なのはその時に展開された防護服である。

巫女服なのだ。那岐君がやるとどうしてもコスプレにしか見えない。知らない人から見たらさほどおかしくはないのかもしれないが、将来高町嬢やクロノ執務官のようにこの姿で飛び回ると考えると笑いがこみ上げてしまうのは仕方ない。空を駆ける巫女と聞くと一瞬いいかなと思えるかもしれないが実際に存在するとなると、世間一般の人々が持つ巫女に対するイメージからするとミスマッチもいいところである。

「先祖代々巫女でしたけれどね。だからってこれはちよつと」

「しかし祈祷型なんだろ。つまり那岐君が思い描いたんじゃないのか？」

「うゝ、そ、それは……はい」

ずーんと沈む背中。なんというか……ご愁傷様である。恐らく、つい考えてしまったことを拾われてしまったのだろ。先祖代々の付

き合いの癖に空気の読めないデバイスである。あるいは洒落の分かるデバイスということも考えられるが持ち主をネタにする道具なんて物語の中ですら聞いたことがないぞ。祈祷型ではなく愉快型——持ち主にとっては不愉快型——の間違いではなかるうか。これはひどい。

もつともため息をつきつつ顔を上げる彼女の口元に僅かに笑みが浮かんでいるのを見るに本当のところは満更でもないようだ。彼女の祖母は生涯現役の巫女だったらしく、幼い頃の憧れだったらしい。巫女にはならなかった専業主婦の母親、その夫と時を同じくして亡くなったそうだが。パタパタと家族や親類が亡くなって、夢も憧れも色褪せて軍人になるしかなかった彼女からすればこれは過去を取り戻すかのような出来事で、常に身近にあった先祖伝来の品の心遣いにも思えたのかもしれない。

海鳴市

自室

高町なのは

「こうしてゆっくりお話するのは実は初めてなのかな」

>>……そうかもしれません<<

レイジングハートがややためらったように点滅している。そう、よく考えてみたらわたしは自分の相棒とも言えるはずの彼女とろくにお話していないことに気付いたのです。ユーノくんとも最初は

魔法の話ばかりだったけれど、今ではちょつとだけのお互いの話もしているの。でもレイジングハートとは魔法の練習に関することばかりで、彼女はわたしのことを気遣ってたまにアドバイスやお話をしてくれているのにわたしから何かを話すということがなかったのです。昨日からユーノくんは魔法のレッスンの補助のために豊田さんたちのところに行っているの二人きりなので絶好の機会なのです。

デバイスは道具だろうと言う人もいるかもしれないけれど、きちんと人格があつてお話ができて、わたしの安全を守るために頑張ってくれているのだからきちんとお礼も言つてしかるべきだと思うし、お互い通じ合つていた方がいいはずだと思うのです。

「ずっと気になっていたことがあるの」

>>なんでしょう、マスター?<<

「……レイジングハートは、どうしてわたしをマスターと認めてくれたの?」

考え込むようにレイジングハートの点滅が止まりました。そ、そこでレイジングハートが何も言ってくれないと、初めて思念体を封印して周囲の破壊の跡——ほとんどは思念体によるもの……のはず——とパトロールカーのサイレンの音を背に謝りながら逃げ出した時と同じくらい困るのです……。あれは非常にその、アレだったの。うう、警察官の人や動物病院の院長先生ごめんなさい。なのはが壊したわけじゃないけれど説明も何もできずに逃げ出してしまつてごめんなさい……。説明のしようはなかっただらうけれど、それでも罪悪感はあるのです。

うう、こうしていても仕方ないので頭を切り替えよう。どうしてレイジングハートはそんなに悩み込んでいるのか、それを考える方が建設的だよね。首を捻って考えてみる。思い出そうとしている……違うような気がする。デバイスであるレイジングハートは物忘れはしないんじゃないかな。それじゃあ言えないような理由だった？

……言えない理由ってなんだろう。実はお母さんが魔導師で先祖代々伝わっていたけれど随分前行方不明になってしまっていた魔法の杖がなんとレイジングハートだったのです……そんなわけないよね。うん。いくら考えても分からないからって我ながら発想が飛躍しすぎだよ。しかも日野さんとわたしを同じ境遇にしているのは返事を待つ間の暇潰しの思索にしてもどうなんだろう。

……ふう、そうだね。認めよう。わたしは不安なんだ。もしお母さんが魔法使いだったら、その娘のわたしも魔法使いであつてもおかしくないし、認めてもらうのも比較的簡単なのだろうから。だからわたしは最初はご近所の迷惑にならないように、街の安全に、そして怪我をしているユーノくんのお手伝いというふうに理由付けをしていったんだ。

それを状況に流されてではなく、わたしの意志でやる、というのは決めた。そのはずなのにどこかで弱い心が無意識にレイジングハートに理由を求めてしまったのかもしれない。ううん、違う。たとえばそういう想いがあつたとしてもそうじゃない形にしくちや。わたしの意志をレイジングハートと共有するための、そして一緒に戦うための決意に昇華させる、そのための儀式にしくちやなの。

>>……実を言うと本当のところは私にも分からないのです<<

「にゃ？」

>>しかし貴女が私のマスターに相応しいと、あの瞬間確信したのです。それは確かです。貴女が望む限り、私は貴女とともにあることをお約束します<<

これでいいですか？　とうかがうようにどこか落ち着かない感じでレイジングハートが点滅している。わたしは一瞬予想していなかった答えに呆然としてしまったけれど、すぐに頬が緩むのを感じました。レイジングハートは祈祷型だからわたしの想いを敏感に感じ取ったのかもしれませんが。けれどもそこには確かにわたしとレイジングハートの絆があつて、だからわたしは理由が分からないなんていう些細なことはもう気にならなくなっていたのです。

「ありがとう。一緒に頑張ろうね。レイジングハート」

>>はい、マスター<<

第五十九話 祈祷と巫女と少女（後書き）

なのはたちはともかく那岐の方はなにいい話っぽくしているんだという突っ込みは認めます。空飛ぶ巫女さんがやりたかったただけだろと言われると微妙に否定できません。

相変わらずのいい女、^{デバイス}レイハさんでした。なのはさんの相棒として一緒に物語を駆け抜けている割にはかなり公式設定が薄いレイハさん。この話ではスクライアが発掘したデバイスということにして謎が多い理由を補強していました。

公式でもレイハさんが何故彼女を選んだのかは今も謎のまま——映画版でよい魔力をお持ちですね、と称賛したくらいでしょう——で、この話でも明らかになるかは謎です。今のところ表に^{オープン}する理由がなのはさんに無くなってしまいましたし。

というかスクライア族長、よく分からんものを贈るなよというツツコミはスクライア一族宛てにお願いします。レイジングハートを発掘してしまったスクライアの少年が、あれは危険な物なんだと回収にやってくるんですね分かります……おやフェレットが二匹に？（やりません

○内規に抵触

共闘する上で魔法の秘匿に同意してもらうとか諸々の共闘の上で必要な協約が結ばれていなかった。緊急避難の名目で無視も出来たがリンディたちは彼らが独力で乗り切れると読み違えていたので（以下略

。言動に気をつけよう

本気で思っていたら術者に確認した上でならやるかもしれません。あくまでツツコミ程度に。祈祷型の機能を活用してデバイスに魔法でツツコミさせるとか才能と機材の無駄遣いでしかありませんが。

。世間一般の巫女に対するイメージ

現代では概ね清楚で物静かとかそんなところではなかるうか。東の方だとまた事情は違うらしいですが。腋とか2Pカラーとか。正直88式はそっちは詳しくないです悪しからず。

。なのはをほっぽりだしたユーノ

主に那岐のデバイス目当て。惚れ気よりも歴史なのがスクライアらしさか。レイハさんにその興味の対象がいなかったのは彼女が族長たちからのプレゼントで、贈り物を解析などという無粋な真似をしなかったからです。

。非常にアレ——初の思念体戦

原作ではアリサたち相手に“ちょこつと事実をばかした”以降、さほど気にした様子もなくケロつとしています。が舞台裏で自己嫌悪の末に消化したんだろうなという88式の妄想の産物です。その時は怪我人も出ていませんしね。

。リリカル桃子さん

既に先達が通っている道。ティンときたなら魔法パティシエでググって見たらいいと思う。

。 “日野”さん

会ってもいない大人の人相手には苗字にさん付けかなど。

第六十話 ここに存在する意味 他人と接する意味（前書き）

プレシアさんの自爆劇場。子供は大人の予想を遥かに超えて成長するものです。

第六十話 ここに存在する意味 他人と接する意味

海鳴市郊外

フェイト・テストロッサ

「……ん、夢？」

私によく似た幼い子供と母親がピクニックに出かけ、母親に妹が欲しいとねだって母親がどうしたものかと困惑する。そんな夢だった。私が失ってしまった過去の記憶だろうか。もしかしたらアリシア姉さんがそんな風に母さんに言ったことがあったのかもしれない。あるいはそう思いたいゆえの私の願望がその夢を作り出したのか。

母さんは全く、リニスも言葉少なにしか語らないのでアリシア姉さんについて私が知っていることはほとんど無い。容姿は私とよく似ていて、私と違って魔導師としての資質はあまりなかったというところくらいだ。いつ、どこで、どうして亡くなったのかを私は知らない。いや、思い出せない。彼女と一緒に過ごした時間があつたかどうかすら、だ。薄情な妹でごめんなさい、姉さん。母さんが私に厳しく当たるのも当然なのかもしれない。家族のことを一つとして思い出せないという娘に思うところが無いわけがないのだから。

ベッドからのろのろと身を起こす。この世界に降り立ってたった数日のことだというのに私の体は悲鳴を上げていて、その程度の動作ですら節々を軋ませた。今まで魔法戦の訓練は嫌というほどしてきたというのに、だ。慣れない地での生活、訓練とは違い本当に命の

危険がある戦闘が私の心身を蝕んだのは間違いない。

けれども、はつきりしているのは我を失って暴走したあの時の戦い方があまりにも無理なやり方だったということだろう。我が身を省みない加速に急旋回、力任せの斬撃に無理な姿勢での離脱。もちろんあの後、リニスにこつてりと絞られてアルフにもこんな無理はやめておくれよと言われた。

そしてリニスは私の体調が戻るまで、ジュエルシード回収には自分が動くと言った。時空管理局が本腰をあげて次元航行艦まで投入してきたらしい。執務官に武装隊まで出てきた以上、現地駐留の部隊とは考え難い。管理外世界にいるのはせいぜいが連絡員や諜報員のはず。仮に彼らが何かの間違いで高ランク魔導師だったとしても組織的戦闘ができるような部隊はいないはずなのだから。

体調を崩した私やこれまでの転移魔法の連続使用で消耗しているアルフ——彼女の消耗が回復しきっていないのは私のせいでもあるのだから同じ理由ということで一括りにできそうだ——では管理局に捕捉される可能性が高いというのがその説明だった。体調自体は恐らく明日には回復していると思う。つまるところ、リニスが求めたのは頭を冷やせということなのだろう。考える時間が欲しかった私にとつては渡りに船で、きつとりニスのことだから分かった上でそうしたのだろうね。

頭を振って周囲を見回すと、ベッドの横ではアルフが椅子に腰掛けたままうつらうつらと舟をこいでいた。手にはドッグフードの箱が……。狼としてのプライドはどうなのかな。そういえば動物に人間の食事を与えたりすると舌が肥えてしまい、ペット用の食事を受け付けなくなることがあるらしい。その逆を行くアルフは果たしてどういう扱いになるのだろうか。

「……私は、そんなに頼りないのかな。無力なのかな」

そうではない。今の今までしていた思索は全て自分に対する言い訳だ。

「私は、一体何なんだろうね」

私は守られているのだ。

記憶喪失？

嘘だ。なら何故私は一度も病院に連れて行かれないのか。過去を思い出す材料になるであろう姉さんの話をどうしてしてくれないの？

それが辛くて話せないことだったのなら他にも話せることはあるはずだ。そしてここには私が今まで生きていた痕跡があるはずだ。

ここで確かに私が暮らしていたという証拠が。見せないのではない。見せられないのでもない。ここには“そんなもの”はないんだ。

「私は、私は一体何者なんだろうね」

局員との交戦を禁じる？

それは私が母さんから命じられているジュエルシードの回収が犯罪行為だからだ。母さんは何かの目的でジュエルシードを手に入れたのだけれども、私の手を汚したくない。私が犯罪者になるのは受け入れられない。だから管理局が本格的に介入してきた今、リニスが前面に立っているんだ。それなら何故私は戦うことを学ばなければならなかったのだろう。それに巻き込みたくないと本当に思っていたなら最初からリニスに全てを任せておかなかったのは何故？

私には知らされていないことばかりだ。守られている……はずなのだ。

「私は何故ここにいるんだろうね」

そう、認識してしまった時、私を襲ったのは自分が自分でなくなるような喪失感と強烈な疎外感だった。プレシア・テストロッサの記憶喪失の娘、フェイト・テストロッサ。昨日まで信じてきた自分。それが跡形もなく崩れていきそうになる。いや、右も左も分からなかった最初の頃はともかく、リニスに様々な社会常識や知識を教えてもらった中で薄々気付いていたはずだ。

私は、普通ではないのではないかと。

学校に通わず、使い魔に勉学を任せる。それ自体は珍しい幼少期かもしれないが、全くそういった子供がいないわけではない。将来優秀な魔導師になるであろう娘に対する英才教育という風に解釈すれば、むしろそういうものかと世間では言われるのかもしれない。しかし、時の庭園から魔法の訓練のために必要な時以外は一步も外に出ることがないというのは明らかに異常だった。同年代の友達はおろか、まともに家族以外と会話することすらなかったのだから。

あの子は、なのはにはきっと暖かい家族も優しい友達もいるのだろう。スクライアの魔導師というパートナーまでいた。そして彼女の私に対する態度を思い出した。今までのことを総合して、リニスから学んだことを照らし合わせてみる。

「……友達に、なってくれようとしていたのかな」

思わず口にしてしまった想いを、首を振って追い払う。馬鹿馬鹿しい。彼女は“敵”なのだ。それに彼女の控えめな態度からするとそこまでの想いではないはずだ。あるいはよそ様の心に土足で踏み込む行為をよしとしなかったただけなのかもしれないが。

アンタのこと、嫌いじゃないよ。

アルフが彼女に残した言葉——我を忘れて戦っていたけれど、その小さな呟きは何故か私の耳にするりと入ってきた——が頭の中でリフレインする。

うん、たぶん、なのはが言いたいのもそういうことなんじゃないだろうか。

「高町なのは……か」

盲目的に信じてきた母さんが——その言い方も正確ではない。目を逸らし続けていただけ——何かを隠していることを意識せざるを得なかったこの日。皮肉にも私は生まれて初めて“他人”からの意思を投げかけられ、それをどうすることもできずに持て余していた。

第六十話 ここに存在する意味 他人と接する意味（後書き）

感情について知識として学ぶことはできても、実際に人と触れ合わなければ実感することはできないんだという話。原作のフェイトさんはアリシアとしての記憶があったのでなのは言う友達の意味を理解できたのかもしれませんが、この話では綺麗さっぱり真っ白な上になのはさんが微妙な表現をしたせいで、経験も記憶もない彼女にはそれをどうしたらいいのか分からないのでした。

そしてなまじ元々頭の出来がよろしい＋リニス先生が張り切った結果、プレシアたちが見せまいとしていることがあるということに思いついてしまいました。思考が9歳じゃない子が増えたよ、やったねなのはちゃん（SLB直撃

どうしてもフェイトさんは一度暗くならないといけないみたいです。某赤い人じゃありませんが君の生まれの不幸を呪うがいい状態……洒落になっていないのがフェイトさんの辛いところ。

○薄情な妹 母親の態度も当然
フェイトは原作ではプレシアの仕打ちに対して自分が悪いと言い出す子なのでこんなものだと思う。

この話のプレシアさんは積極的にフェイトに接触しようとしなない他は、会話する際に親子親子しないように気をつけているくらいです。ジュエルシード回収を命じる時は心を鬼にした模様。

○狼のプライド

見つければ慌てて隠す程度のプライドbyアニメ。

○考えるフェイトさん

プレシアのハイパー自爆タイム。時間をかけてリニスにいろいろ教え込ませたら状況把握能力が高くなっていたの巻。

○なのはの意図を想像

流石に“近くの人”なんていう微妙な関係を求めていることには気付けません。

第六十一話 “海”の亡霊（前書き）

彷徨う亡霊たち。

第六十一話 “海”の亡霊

衛星軌道上 L級次元航行艦アースラ エイミィ・リミエッター等
海尉

「あぁっ、もう！ ごめん、クロノ君……ロストした」

私は苛立ち紛れにコンソールに拳を叩きつける。そつと肩におかれた手は振り返るまでもなくクロノ君のものだろう。何しろこの行動も、彼の次の台詞も、もう何度目だったか。ほとほと自分の無能さに嫌気がさしてくるよ。

「条件も相手も悪過ぎるんだ。仕方ない」

そう言うクロノ君も苦虫を噛み潰したような顔だ。あれから四日が経つというのに私たちは未だにあの使い魔も、フェイト、アルフの両名も捕らえることができないでいる。というより、後者については注意深く潜伏しているのか足跡を掴むことすらできていない。この四日間、私たちを悩ませているのはあの時クロノ君と対峙した使い魔である。クロノ君の戦力漸減策がプレシアに読まれたのかもしれない。

相手は落ち目とはいえかつて大魔導師と呼ばれた稀代の天才——の使い魔。推定魔力量はAAA超。フェイトとアルフ同様、いや彼女たち以上の手際で短距離転移魔法を操り、決して無理はせず、素早く目的を達成すればすぐに逃げに入り、離脱する。それはそれは鮮やかな手並みで、教本のお手本にしたいほどの見事なゲリラ戦術だ

った。

「あーもう、亡霊じゃないんだから“痕跡^{アシ}”の一つや二つ残してくれればいいのに」

「本当に一筋縄ではいかない相手だな。だからこそ向こうの思惑を成就させるわけにはいかない」

発見したジュエルシードを目前で強奪してしまったのはこれが初めてではない。相手は戦闘力自体も高く、遭遇した武装隊は高速機動と嵐のような直射魔法の雨に翻弄されまともに交戦することもできない。プレシアとフェイトたちの出方が分からない以上、二人に対抗可能なクロノ君とリンディ提督は迂闊に動けないのだから先に見つけて確保する他、手はない。なのはさんたちは訓練を続けているようだけれど、それを監督しているユーノ君も、現場責任者であるクロノ君もまだGOサインは出していない。

なんとか確保できたジュエルシードの中には、第十三任務部隊の警戒網に引っかけたものもある。もしかすると事情を知らない人間からは質量兵器を暴走体に撃ち込んでいたようにしか見えないので、それを警戒して断念したのかもしれないけれど。

「こちらで確認している限り、残りのジュエルシードは六つだな」

「陸上はほとんど調べ尽くしたと思うんだよね」

これは高町家の協力で転移先を提供してもらい、人目を気にせず自由に展開することができる拠点を得ることができたのも大きい。アイスラの探知能力が落ちている以上、実際に隊員が足で稼ぐのが有効な方法になっているからだ。事実、そうした地道な探索活動で武

装隊員が見事発動前のジュエルシードを発見、確保に成功している。

「そうになると、残りは海だな。様子見は終わりだ。増援も明日到着する。僕が出て彼女に仕掛けてみよう。戦闘に注力すれば隙も見えてくるかもしれない」

「まっかせといてクロノ君、今度こそ亡霊さんの足を掴んでみせるって……って亡霊じゃ足りないか」

「任せるよ。エイミイならできるさ」

嬉しいことを言ってくれるね全く。ほんといい上司になるよクロノ君は。あとは適度に力を抜くことを覚えてくれるとお姉さん助かるんだけど。別に私がサボりたいわけじゃないけどさ。

エンターキーを叩いて海鳴市の地図を浮かび上がらせる。先ほど暴走状態のジュエルシードを確保する為に展開していた武装隊は収容が完了、今は第十三任務部隊の艦艇が海上を遊弋しているのと、なのはさん、ユーノ君の現在位置が輝点で表示されているだけだ。

海に残りがあるのではないかという考えは豊田准将にもあるのだそうだが、彼らの魔力探知能力は受動限定パッシブということらしく、さほど多くの魔力を周囲に放出しない発動前のジュエルシードを発見するのは困難なのそうだ。開発者の博士曰く、まだ試作の段階なので仕方ないとのこと。

「次元航行隊と第十三任務部隊うみ、ねえ。クロノ君はどちらが見つけると思う？」

「出題者も回答者も事態の当事者じゃないか」

それじゃクイズとしては成立しないだろうと言いつつも、彼らじゃないのかとしかめっ面で答えるクロノ君。第97管理外世界と第296管理外世界の類似性はたしか研究者たちの間では答えの出ない謎としてポピュラーな話だったと私は記憶している。クロノ君もその辺りを考慮した上でそう答えたのだと思う。

各次元世界は同種の人間という知的生命体が存在するということや言語体系の類似性などから、私たち人間は過去の文明の末裔たちであるというのが通説になっている。中には一般的には御伽噺の存在とされているアルハザードがその過去文明であると唱える人もいる。第97管理外世界と第296管理外世界は技術年代が近く、よく似た歴史を歩んでいるために各世界の成り立ちを知るための研究素材として最適と言われ、また両者が母星にして唯一の生存圏としている“地球”に関しても環境が非常によく似通っていることが知られている。

異世界の軍隊である第十三任務部隊がこつも第97管理外世界で“以前と変わらぬ”艦隊行動をとれているのはひとえに両世界が鏡写しと言えるほどに似ているからに他ならない。そうでなければまともな活動を行えるかも怪しいところだ。

「魔法を知る技術者に、本局の諜報士官、非常に似通った世界への“偶然”の次元転移……やだなあ、面倒事の臭いがするよ」

「……なら首は突っ込まないでくれ」

心底嫌そうな顔をするクロノ君。私もそうしたいのは山々なんだけれどね。こういう面倒なことは傍から眺める分には興味深い話だけれど自分が処理するとなればお断りしますと私だって言いたいよ。

「どう考えても私たちは当事者で、放っておいても提督が突撃すると思っただけれど」

「……」

海鳴市沿岸 第十三任務部隊 HLG支援艦スバルヴィエロ フェ
デリカ・アニエツリ大佐

「やれやれ……これだけの大型艦で隠密行動なんてもうこれっきりにして欲しいね」

時刻は丑三つ時。ポケットの中で煙草の箱を弄びつつ毒づく。夜陰に乗じて、艦隊用光学迷彩装置で姿が見えないとはいえ港の近くでそれなりに船の往来のある水域に侵入するのは骨の折れる作業である。

スバルヴィエロは艦隊最大の艦であり、アタシが艦長を務める愛すべきポンコツだ。HLG設計装置やそれによる改装を可能にするための機材を多く積んでいる為かなりのトップヘヴィになっており、その上表向きは軽空母であるとされているゆえにF-35B4機、MH-60R2機を搭載、運用するためのスペースがとられており、かなり居住性、凌波性能は悪い。軍艦としての完成度ははっきり言って低く、進んで乗りたがる奴はおそらくいまい。文字通りの実験艦であるのだから仕方無い……と言っても乗り込む将兵は納得はしないだろう。

スパルヴィエロに接舷して改装を受けているのは駆逐艦Z51。艦隊も艦隊用光学迷彩装置の効果圏内で遊弋中だ。岸壁では上陸している兵士たちが警戒している。見えないとはいえ物が当たったりすれば当然跳ね返るし、装置では音は誤魔化せない。幸いHLG設計装置による改装では不思議なことに大きな作業音がすることはないが人の接近を防ぐに越したことはない。こうまでして我々が今日だけでなく、連日深夜に“波の静かな”沿岸に接近している理由は一つである。

HLG設計装置の使用だ。げに恐ろしきはあの博士か。彼女は一晚でレーダーの魔法探知系統と各兵器のリンクを作り上げ、魔力を放出している対象に我々の持つ武器を正確に誘導する術を持たせてみせたのだ。威力の問題は解決していないものの、当たるのであれば倒せる可能性は見えてくる。今回は武装はそのままだが、それを可能にする装備の改装を4隻に行っているのだ。特にアンバスケイドは対魔導師戦のために試験的ながら実験装備を搭載することが決まっているそうだ。

「HLG設計装置ねえ……。博士しか扱えない。とんだ欠陥装置だとアタシは思うんだがね」

「少なくとも兵器を造り出すものとしては失格でしょうね」

改装中のため、Z51の乗員は移乗してきている。やや居心地悪そうにゲルダが几帳面に海軍帽を被り直しつつ言った。ちょっと普段からからかいすぎていたかしらねえ。苦手意識をもたれるのは本意じゃないから自重するとしましょう。

兵器というのはある程度、誰でも訓練さえすれば扱えるようでなけ

れば役に立つまい。もしかすれば将来的には兵器の性能が飛躍的に上昇し、単騎で軍団を殲滅するような存在となれば話はまた別かもしれないが。もっともその場合はその兵器を扱う人間のモラルを鍛えねばならないかもしれない。今の軍隊という組織ですら圧倒的な“暴力”を一部の人間に預けるといふ形をとっているのだから。それが更に極少数に委ねられるとすれば、民衆はどう思うだろうか。

「魔法……アタシは気に入らないね」

「それは大佐に資質がなかったがゆえの発言ですか？」

的確に嫌なところを突いてくるゲルダ。アタシは言葉に詰まった。目を伏せてすみません、言い過ぎましたと言っ彼女にアタシは気にするなと答えた。しばし、沈黙が流れる。

もしアタシしか戦えなかったのなら。軍隊に行く夫を見送ることも祖国が蹂躪された時——あのヒトが逝ってしまった時、何も出来ずに降伏することもなかった。そう思わなかったと言えは嘘になる。まあ、その場合はお国の為にアタシは名誉の戦死とやらを遂げて、あの世で旦那とよろしくやっていたのかもしれないが。いや、その場合は旦那は生きているのか？ 要領も運も悪いあのヒトのことだから案外それでも流れ弾でぽっくり逝ってしまっていそうな気がするが。

彼女の祖国ドイツ共和国は激しい陸上戦闘の舞台となった。海軍の要衝、キール軍港を失陥し、一時は降伏すら検討されたと聞く。そんな絶望的な防衛戦闘の中、彼女も似たような思いをしたのかもしれない。あの戦争は、あまりにも多くの人間に影を落としている。

「……亡霊は亡霊らしく過去にこだわって生きるもんさ」

「我々は亡霊じゃありませんよ。護ったじゃないですか。ここで暮らす人々を」

たしかにそんな演説はした。実際、将兵たちの士気は上がったそう
だ。司令自らの陸上視察、そしてそこからの砲撃誘導も一部の士官
からは必要性について疑問の声があつたそうだが、概ね好意的に捉
えられている。艦隊は今もその統制を失うことなく機能している。

もつともそう言うゲルダにしても表情が固い。彼女も自身が言つた
ことについて何か思うところがあるのかもしれない。結局、彼らを
護ることができたのはアタシたちの力によってではなく、アタシか
らすれば自分の子供よりも小さい子たちによってだったのだから。
真面目な彼女からすれば、護るべき対象であろう“子供”を矢面に
立たせてしまったということは受け入れられるものではないのかも
しれない。

「アタシらが護つたのは彼らじゃない。アタシたちの寄る辺さね」

「……そうかも、しれませんか」

司令は恐らく、これを狙つて有事に自分が艦隊にいない状態を作り
出したのではないだろうか。愚連隊であつたこの艦隊がこの世界に
転移した後も士気を保っていたのは、部隊創設当初から兵たち
と苦楽を共にし、司令官がすることとは思えぬような細々とした雑
用まで彼らと一緒にしていた豊田司令の人徳によるところが大きい
とアタシは思っている。

つまり、もし司令を失えばこの部隊は容易に瓦解してしまう。その
状況を彼は分かっていたのだろう。だからこそ他に、自分以外の寄

る辺を用意したのだ。この世界を護るといってお題目を。アタシたちがここにいていいんだと思うための理由を。護る人々を無くしたアタシたちに護るべきモノを与えてくれたのだ、司令は。

鈴木少佐の派遣と時空管理局との交渉はここでの全てが終わった後に、第296管理外世界崩壊を知らせることになっている将兵たちに戻る場所を持たせるためのものだ。帰る家があれば、第二の故郷があれば我々はまた戦うことができる。アタシらのほとんどは兵隊以外に食う方法を知らないのだ。見知らぬ世界で生きていくのは難しい。

何も司令のやることは間違っていない。しかしアタシにはどうしても分からないことがある。

司令、アンタはどうして、そうも自分がいなくなってもいいような準備をしているんだい？　ここはアンタの家^{ホーム}じゃないのかい……？

第六十一話 “海”の亡霊（後書き）

描写しないとか言っていたわりには準主役級の扱いの気がするアニメッリ大佐。年齢詐称疑惑の人々リンディ提督や桃子さんと同類なので地味に目立つ宿命なのかもしれない。最初は会話相手がベントレー少佐だったのだけれど、真面目なゲルダ大尉になった理由はお察し下さい。ろくでもないゴーストが囁くのがいかんのぢや……。

中盤部分を原作アニメに習ってデウスエクスマキナりました（おい魔改造リニス無双。クロノはアテが外れたけれども戦力を失っていないので時間稼ぎには成功しており、実は追い込まれているのはプレシア側です。

相変わらずの博士チート。WW2中にイージスシステムや巡航ミサイル、果ては光学兵器ができてしまう原動力になった人なのでこのくらいは朝飯前のようなのです。でも強化内容は地味。改装は結界っぽい何かの中で行われている感じです。

次は同じ期間中のなのはさんたちにスポットライトの予定。

・確認している限り、残りのジュエルシードは六つ
プレシア側はあれ以降、リニスが武装隊をかわして入手した分しか手に入れられなかったということ。

原作に比べると正面戦力はプレシア側有利ですが、到着の早さや高町家、豊田たちの存在によって現地活動能力が向上しているため探索ではアースラ側が一枚上手です。

・亡霊

リニスもある意味亡霊ではある。

・様子見は終わり

増援が到着したため、フェイトたちに武装隊をぶつけることができようになり、クロノがフリーになった。クロノはまだなのはたちを戦力に入れていません。

・次元航行隊と海軍^{うみ}

紛らわしいことこの上ない。ミッドチルダにも海があるので海上部隊が存在してもおかしくないと思う。更にややこしいことになる予感。

・首は突っ込まないでくれ

頑張れクロノ。一期の終わりは近いぞ！……事後処理祭りは必至だけだ。

・トップヘヴィ

重心が高くなり、安定性が失われている状態。水上戦闘艦は甲板上に兵装や装備を多く持つ関係上、必然的にこの状態になりやすい。転覆しやすくなるなどの悪影響がある。

・F-35B

現実世界ではJSF計画によって開発中の機体。B型はSTOL性能を有する艦載型。鋼鉄世界は開戦初期はWW2とさほど変わらぬ技術力なので、超兵器との戦いの中で50年近い軍事技術躍進を果たしていることになる。

・MH-60R

ブラックホークの派生型で、艦載仕様の発展型。攻撃任務から哨戒

任務などなど何でもこなす多用途機。

・演説の背後にある事情

世の中綺麗事ばかりじゃやっていけません。豊田の思惑は果たして……。

第六十二話 着々準備ヲ進行中ナリ（前書き）

ピッピリピーハイジョーホンハーハイホーヘンヘー風。

第六十二話 着々準備ヲ進行中ナリ

海鳴市

ユーノ・スクライア

とんでもない弟子を持つてしまったものだ。この世界に来てなのはに出会って以来、一日一回は必ず呟いてしまう言葉である。

まるでスポンジが水を吸うように、なのはは恐るべきスピードで魔法をマスターしている。おそらく今から魔法を習うために管理世界の魔法関連校に通うことになったとしても実技面で苦勞することはないだろう。誘導弾によってお手玉にされる空き缶を見ながら僕はそう思った。

なのははに対する魔法の教育方針としてはレイジングハートと相談した結果、短期戦力化のために彼女の適性と今回戦う相手を考えて教える分野を絞ることにしている。今のなのはは誘導弾と遠隔拘束魔法、そして切り札の砲撃魔法という特化型魔導師になっている。残念ながら僕が得意な結界魔法はイメージが持ち難いので祈祷型であるレイジングハートとの相性がよろしくなく、オミットした。あると便利なんだけれどな。少なくともこの事件の間は僕がいるから問題は無いのだけれど。

目標はフェイト、アルフの足止めを僕と一緒にできるようにすること。あちらは明らかに訓練を積んだ魔導師とその使い魔だ。遺跡発掘にかまけていた歴史研究家と魔法を知って一月も経たない素人魔

導師で勝とうというのは夢を見過ぎだろう。けれどもこれまでの戦闘でこちらは向こうを観察する機会があり、手の内はある程度分かっている。そうとなれば戦いようもある。

フェイト。彼女は魔力刃を展開して行う接近戦から、正確な射撃魔法で中距離戦闘もこなすオールラウンダータイプのようだ。そして速いだけでなく小回りもきく機動力の高さ。また彼女の魔法は電気変換がされている——おそらく魔力変換資質だろう。機動力が売りの高速戦闘導師がわざわざ消費の重くなる自己変換術式を選択するとは考えにくい——ため生物や機械に対しての威力は一段上に見ておく必要がある。これだけの魔導師だ。恐らくはまだ見せていない切り札もあるはずだ。

実を言うとなのはは彼女に対しては分が悪い。鳥の暴走体との交戦時には無理な機動でダメージを受けていたようだから、防御はやや薄いのだろう。けれども戦闘センスと経験のある高機動型の魔導師に一発は大きいけれども当てにくい砲撃魔法が切り札の素人魔導師では相性が悪過ぎる。

そのための牽制、追い込みのための誘導弾と隙を突いて行使し、砲撃魔法へのお膳立てを狙う拘束魔法だ。彼女は精神面が脆いようなのでチャンスはあるはずなのだから、ここ一番に強いと見えるなのは度胸に期待したい。特に拘束魔法についてはなのはのそれはまだ見せていないし、警戒するにしても僕の方を警戒するだろうからやり方次第では不意を打てるかもしれない。

アルフ。彼女はいまいち分からないがおそらくは近接タイプだろう。後は短距離転移は彼女の方が上手らしいから支援魔法も備えている可能性がある。暴走体相手の時は牽制の射撃魔法を放っていたけれど、狙いがやや甘く、連射して量でカバーしているようだった。あ

の時の念話での打ち合わせでは動きさえ止まれば自分が前に出て叩いてもいいと言っていたので近接戦闘に自信があるのだろう。

機動力はさほど高くないようなので――近接型なら自分が矢面に立ってフェイトに一撃離脱させた方がいいはずである。動きの速い鳥の暴走体についていけないから彼女は射撃魔法で牽制するしかなかったのだろう――なのはにとっては相性の良い相手だ。仮に近寄られたとしてもなのはは小回りはきかないものの直線機動であれば高速飛行が可能だから振り切れるはずだ。防御も厚いから狙いの甘い射撃魔法での追い撃ちは脅威とならない。

僕がなのはの守りについて、フェイトの一撃離脱や中距離射撃を捌く。防御面では自信があるから受けるだけならできるはずだ。速度を緩めて攻撃頻度を増やそうとすればなのはの誘導弾と僕の拘束魔法の餌食になるから時間は稼げるだろう。その間になのははアルフを撃破、二対一に持ち込むというのが基本方針になる。

もちろんそこまでうまくいくとは思っていない。戦い慣れしていない僕となのはではフェイトの一撃離脱に翻弄されている間にアルフに捕捉され、距離をとるうにもフェイトに邪魔されて思うように動けないという最悪のパターンもあり得る。だから無理せずを誘導弾で牽制しつつ、拘束魔法をばらまいて自由な機動を封じ込めて膠着状態に持ち込めれば万々歳、と僕は思っている。

「ああ、失敗しちゃった」

>>惜しかったですね<<

僕が物思いにふけている間になのはの訓練は終わっていたようだ。残念ながら最後の一撃によって放物線を描いた空き缶はくずかごに

の縁に弾かれてしまった。僕の足元まで転がってきたそれを拾い上げて放り込もうとしたけれど、ふと思い出して僕は歩いて直接入れに行くことにした。

実のところ、僕が射撃魔法などの遠距離攻撃魔法が不得手なのは距離感覚に欠けているのが理由だ。もともと術式構築が適性の薄さで不安定なところに、狙いが曖昧でどこに飛んでいくのか分からないのでは使いようがない。

不思議なもので結界魔法に設置型拘束魔法、そして転送魔法についての空間座標設定についてはむしろ得意中の得意なのだ。どうやら物を投げる、といった“そこに向かって”というのがどうやらダメで“そこに置く”という考え方なら大丈夫なようだ。

多くの場合、適性には言葉では表し難いセンスの問題が関わることが多い。似たような事柄なのに一方は得意で一方は苦手などということは人間誰しもあることだろうから殊更魔法資質に特有のことではない。歴史書や発掘品の整理が得意でも掃除が苦手で自室がとんでもないことになっているスクライアの人間もいたなあ。……あれは単に無精なだけかもしれないが。

「なのは、お疲れ」

「ごめんねユーノ君。付き合わせちゃって。アースラから戻ったばかりなのに」

「大丈夫だよ。あれは僕の趣味だからね。無理はしていないよ」

心配そうな目をしているのはを微笑んで誤魔化す。嘘である。けれども勉強でも研究でも徹夜の一日や二日は日常茶飯事だった。

もやし”扱いはされるのはそういう生活スタイルの結果のような気がする。……ああ、クロノ執務官も士官学校時代の勉強漬けが原因で背丈が残念なことになっているのかもしれない。夜しっかり寝ないと背が伸びないと言うからね。同志と呼んだらきつと怒るだろうな。

「日野さんのデバイス、そんなに珍しいの？」

「うん。古代ベルカ時代に製造されたものはあまり多くは残されていないからね。前に言った通りレイジングハートも由来はよく分からないんだけど」

>>私の中にも製造時の記録が残っていればよかったのですが<<

レイジングハートが僕の手元に来た事情を話した時はなのはが随分慌てていたつけ。もつとも渡されたレイジングハート自身も思うところはあらしい。贈られた品である自分が最初のマスターに合わなかったからといってほいほいと主を変えていいものなのかと。正直、普段は首から下げて身につけているだけで、後は布で週末に磨くくらいしかしていなかった僕にそこまでの恩義を感じてくれたというのはなんだかくすぐったかったな。

レイジングハートは解析不能なブラックボックスがあるという点以外は何の変哲もない祈祷型インテリジェントデバイスだった。ただし今の管理世界は魔法教育が前提となっている社会構造なので祈祷型はあまり製造されていない。ただでさえインテリジェントデバイスには相性問題があるというのに、祈祷型は持ち主の意図をどこまで正確に把握できるかなどの要素が更に加わるために――僕がレイジングハートに適合しなかったように――非常に持ち主を選ぶものになってしまっただ。

スクライアの総力を挙げた——族長談。目が本気だったので本当にやらかしたんだと思う——結果なのでもうお手上げである。動作確認は入念に行われ、そのブラックボックスには問題がないという結果が出ていて、おそらくはデータボックスか何かが経年劣化か何らかの損傷によって意味消失したのではないかということだ。残念ながら発掘された遺跡から仕様書などは一切見つかっていない。ブラックボックスはA I部分に近接していて影響が出るとまずいので消去するわけにもいかないらしい。規則上、こうした仕様の明確でない古いデバイスを使用する際に義務付けられている強制停止機構も“本人”の了承の上で組み込まれている。

あの夜の出来事はそう考えると恐ろしく幸運だったのだ。現地にいてもかもしれない魔導師に助けを求めつつもりで発した念話をたまたま才能に溢れた現地の魔導師資質保有者が受け取り、尚且つその人物が非常に人を選ぶデバイスに適合したのだ。

もつとも、適合性自体には実はレイジングハートが初めての出会いの時に言及していたので病院での二回目の助けを求める念話は広域念話ではなくなのは個人に対するものだ。焦っていたとはいえかなり姑息な手を使ったことに関してなのは特に僕を非難することはなかった。実際、ほかに手の打ちようはなかったのだけけどね。

思えば薄氷を踏むような奇跡に支えられた結果、この世界は平和を保っているのだ。一方で理由も分からずあっけなく崩壊した世界もある。歴史にはそんな事例はいくらでも残されている。時空管理局という組織はその薄氷を踏み続けて人々を護るのが仕事なのだ。設立の経緯や活動の裏はどうあれそれだけは事実であり、後世に評価されるべき点だろう。

「何はともあれ、確実にステップアップできているよ。この調子な

ら案外いい勝負になるかもしれないね」

「お話ができるくらいにはなっているかなあ」

>>そればかりは相手のあることですので<<

無邪気に笑うなのはを眺めつつ、僕は決心していた。時空管理局はそうした活動ゆえに常に優秀な人材を求めている。またこの世界の出身であるグレアム提督がそうであったように魔法文明のない世界で魔法に関わってしまった人間、それも優秀な魔導師には現地文明の保護、不干渉のために“首輪をつける”ことがある。なのははその両者に適合する魔導師だろう。リンディ提督やクロノ執務官は悪い人間には見えないが、組織人というのは往々にして個々人の人柄などを飛び越えて判断を下すことがある。

もしなのはの意思に反した理不尽なことが行われようとすれば、僕が彼女を護らなければならない。……そこに彼女に対する好意が含まれていないと言え、嘘になるんだけれどさ。

第六十二話 着々準備ヲ進行中ナリ（後書き）

なのはさんたちは大体こんな感じです。一週間そこでこれは……溢れる才能、漲る魔力、ホントなのはさんは規格外。実際、原作でもそう短くない訓練をしていたフェイトからすれば一月そこで戦えるようになってしまったのはは何者？　って感じだと思います。もつとも三人娘周辺の魔導師はいつもこいつも才能の塊ですが。

ユーノがフェードアウトしない頼れる男にクラスチェンジ、主人公スイッチを押しました。でもこの話には明確な主人公はいないというオチ。頑張れユーノ。88式は多分味方だ。

○魔法教育

原作の見せ方だとほとんどレイハさんの独壇場みたいに見えるけれど、きちんとユーノもやっているのです。

○対フェイト、アルフ考察

状況把握やそこから考察、結論に持っていく能力は高いユーノ。身を守る程度の力はあるので実は前線指揮官としては十分有能な気がします。もつとも彼には他に才能の活かしどころがあるのですが。

○遠隔攻撃ができない理由

独自設定。ある程度は理論と訓練で矯正できるにせよ、向いていない力を伸ばすよりは……という話。

○レイジングハート

独自設定。こうした出自であればこのくらいの安全措置はあると思

う。仕様不明、説明書なしなのだから。

○ユーノの決意

僕が君を護る！ ユーノが漢になりました。堂々宣言できるタイプだったら原作で主人公になっているはずなので勘弁してあげて下さい。

第六十三話 軍隊と時空管理局（前書き）

欧米ではビジネスシーンでのノックは4回あるいは4×2回らしい。

第六十三話 軍隊と時空管理局

海鳴港沖

第十三任務部隊旗艦 駆逐艦澤風

日野那岐中尉

私は扉の前に立ち、大きく深呼吸してからノックした。

「日野中尉か？」

「はい」

「よし入れ」

豊田司令が開けたドアに体を滑り込ませ、中に入る。ここは司令の個室だ。時には内密の話し合いも行われるので防音はしっかりとしている。後ろ手に鍵をかけ、司令はデスクについた。私が呼ばれたのはその内密の話にあたることだと思うのだけれど……一体何の話なのかしら。

『結界を張ってあるから鍵など不要じゃぞ』

「気分の問題だ」

空中にウィンドウが二つ開く。博士とシンプソン中佐相当官だ。司令は苦笑しつつ言う。えーと、結界魔法？ ああ、そういえば博士

は魔導師ということでしたな。うう、管理局や魔法の話、管理世界に私たちの世界の消滅に別世界への転移と驚くばかりで理解が追いつきません。そこに魔法を習えとくるのだからもう頭がパンクしそうです。

「よろしい。ではこれから中佐と中尉に第十三任務部隊司令としての特命を伝える。博士」

『うむ。中佐には既に渡してあるが、これじゃ』

「これは……？」

博士から手渡されたのは一見、何の変哲もない普通のインカム。私が普段使っているヘッドセットとそう変わらないように見えるけれど。

『単一目的ストレージデバイスが組み込んであるのじゃ』

言葉を失う。たしかに例のノイズの原因が博士がリーダーに魔力探知機構を組み込んでいたせいだったり、博士が魔導師だったりと驚かされてばかりだったけれど、今度は魔法文明の産物であるデバイスとは。魔道炉モドキを謎の装置に組み込んでいる時点で今更なような気もするけれど、本当にこの人は規格外だよね……。

『本当は自分で術式構築してもらいたいんじゃないが今回は時間がないのでな』

「念話を傍受されても解読されないように暗号化するそうだ。本来個人レベルであればリアルタイム解読は不可能なのだが管理局艦船はそうした魔法戦能力を持つらしいのでな」

なるほど。今のところアースとは協力関係にあるとはいえ、情報秘匿は重要なことだ。人工衛星ですら地上を精査できるというのに彼らの艦がこちらの状況を把握できないとは思えない。だから結界を張ってこうして密談をしなければならなかったというわけですか。

「この結界は大丈夫なのですか？」

「それは心配なからう。残留魔力素の問題で探査能力は落ちているはずじゃ。同じ理由で念話が傍受、解析されるかも正直微妙なところなのじゃが念には念をじゃ」

「結界展開の事前通告はしてある。情報秘匿に関しては向こうも了承済みだ」

「ということはこの措置は「覗きはしませんよ」と向こうが言っているけれど「覗けない」ようにしておいた方がこちらにとって安心できるから行っ、ということなのだろう。でも先の政治的な話し合いの際にはしなかった情報保全をわざわざ今行っのは何故なのか。答えは一つだ。

「これから話されることは知られては困ることなのですね？」

「中尉は鋭いな」

そして司令は話し出す。

前回、思念体相手の戦闘で第十三任務部隊が苦戦したのは相手に攻撃を誘導できず、まともに当てられなかったことと、結界により物理エネルギーを魔力に変換した結果、火力が足らなかったためであ

る。

しかし、レーダーの魔力探知機構と火器管制システムのリンクと兵装の改造によって誘導能力は復活している。この艦隊本来の戦闘力が発揮できるようになったのだ。しかし火力の問題は如何ともし難い。高速総合補給艦サプライの存在があるので弾薬の心配はないとはいえ、外洋での補給は危険を伴う作業である。少ないに越したことはない。また各艦の手持ちの弾薬だけで今後現れる敵が撃破できるかという問題もある。

ネックになっているのは謎の演習用装置の持つ特性だ。現地の建造物や人々を保護するための用地確保機能は必要不可欠である。けれども敵を殺傷しない機能は“相手が人間でなければ”必ずしも必要ではない。

「結界機能の分離……ですか。可能なのですか？」

「別に不思議なことではないじやろう。アレも結界魔法じゃよ。恐ろしく術式が複雑で魔力消費が大きいためにとて個人で使えるようなシロモノではないがの」

『思念体……実体が無いけれど……大丈夫？』

シンプソン中佐相当官が首を傾げながら尋ねる。実体が無い物に物理的な攻撃が通用するのか、ということだろう。これについては博士が説明をする。

魔力と物理エネルギーの変換が自然に起こることは極々稀なことらしい。それも当然かもしれない。頻繁に起こっているのであれば世の科学者たちがもっと早く魔力の存在に気付いているはずだ。

思念体というのはジュエルシードが付近にいる生物の願いに反応して、周囲の魔力素を集めて出来上がるものなのだそうだ。幸い、生物自体が組み込まれるわけではないのでジュエルシード本来の次元干渉という働きを帯びることはほぼなく——暴走体の場合でもよほど強い願いや、核となった生物が大きな魔力を保有しているケースでなければ心配はない——構造自体が脆いので、周囲の大きな物理エネルギーに容易に影響され、自壊してしまうらしい。イメージとしては立ち昇っている煙に風を送れば形を保てずに流れてしまうようなものだろうか。

「提示された時空管理局の法規にも照らし合わせてみたが、対人運用でなければ物理攻撃設定による攻撃や質量兵器をそのまま投入することも許されているようだ」

『質量兵器が“完全に”禁止されたわけではないからの』

各管理世界の政府軍はいつでも質量兵器による再武装が可能な状態が保たれているという。管理局でも申請すれば個人携行火器レベルの武装であれば許されるため、非魔導師局員の中でも危険が想定される職についている者は拳銃などを所持していることがある。そうした需要から管理世界の兵器技術メーカーはあまり大きく伝えられることはないものの、今も質量兵器の開発生産が続けている。

「もちろん政治的には彼らに一つ貸しになるかもしれない。我々の生存が脅かされるような状況でなければ使用しない。中尉、君には私が使用を判断した際、博士への伝達を頼む」

「無線ではいけないのですか？ 符丁を使えば何の問題もないはずでは」

「……関わる人間を減らしたい。私の独断であれば最悪私を“切つて”事態を収拾できる」

躊躇いもなく言い切った司令を見て、私はそれ以上聞くことはできなかった。ただ黙って敬礼して、従うしかなかった。

司令は更に自分が何らかの理由で判断が出来ない際にはシンプソン中佐相当官に使用権を移譲することを告げた。中佐は長い、長い沈黙の末に了解とだけ答え、敬礼した。中佐もまた、司令と覚悟を共有したということだ。

“我々の生存が脅かされるような状況でなければ使用しない”

おそらく司令のこの言葉にはそのような状況にあれば“たとえ相手が人間であろうと”そうするという意味が含まれているのだと思う。だからこそ司令は“切つて”などという表現をしたに違いない。私たちは軍隊。彼らは時空管理局。違いはそこにある。

彼らの仕事は犯罪者を逮捕することだ。けれども私たちの仕事は“敵を排除する”ことなのだ。

第六十三話 軍隊と時空管理局（後書き）

あくまで警察的な発想の時空管理局と軍隊である第十三任務部隊では考え方に差があります。

職域が違うのであって、どちらが正しいとか、そういう問題ではありません。あくまで“違う”だけなのです

○思念体

公式設定が薄いので好き放題の巻。話全体がそうだろうと言われたらその通りですが。

○管理世界政府軍

管理局は治安維持組織としては優秀なのかもしれないけれど、純粋な軍事組織としてみるならば疑問点が多いです。各管理世界に国軍解散などという主権放棄を迫るやり方が成り立つとも思えないため存続としています。ただし規模はかなり縮小されているでしょう。

○管理局や政府軍の質量兵器装備

全廃されていればそういった産業は廃れ、技術も断絶しているはずです。正規需要の全く無いものが作られるはずがありません。

○“切って”

そう簡単な問題ではないものの、上司の仕事は責任をとることであります。

第六十四話 万全の布陣 クロノの誤算（前書き）

大丈夫だと思った時ほど意外と見落としがある。誤字とか誤字とか誤字とか。

第六十四話 万全の布陣 クロノの誤算

海鳴港沖

第十三任務部隊旗艦 駆逐艦澤風

クロノ・ハラウン三等海佐

『よし、では行動を開始してくれ。警戒はしっかりとな』

リンディ提督指揮下のD級次元巡察艦3隻が輸送船遭難現場の調査を応援に駆けつけた別の部隊の次元航行艦に引継ぎ、こちらに到着したその日、すぐに海鳴近海に沈んでいるであろう残りのジュエルシード6個の回収作戦を決行した。時間は基本的にはこちらの味方ではあるが、プレシアの手に落ちてしまったジュエルシードのことを考えれば急ぐに越したことはない。

武装隊の各小隊長からの返答と部隊の展開状況を確認する。今のところプレシアの手勢による襲撃もなく、探查魔法によるローラー作戦は順調だ。

搜索に従事しているのはD級次元巡察隊所属の武装小隊だ。各艦には定数の一個武装小隊——概ね10名前後。艦の運用能力自体はもう少し多いがその実数は“機密”である。ちなみに長期作戦従事が多い巡察隊の任務の関係上、乗員が多いと補給の問題から好ましくないため意図的に定数割れさせていることもある——が搭乗しており、出ずっぱりのアースラ所属隊は休息中である。もっとも、彼らも出動待機はしているのだが。

第十三任務部隊は結界展開を担当し、搜索海域中央部にて遊弋、通信補助と搜索支援にあたってもらっている。武装隊の搜索方法は基本的にローラー作戦ではあるが、彼らのソナーに怪しい反応があった地点は重点的に搜索することになっている。

今までのジュエルシード搜索作業によって彼らとの共同作戦への不安点は払拭されている。先の交戦時に発生した念話の不通についても彼らの結界単体においてはわざわざ機能追加しない限りは通常起こりえないということが博士の報告とアースラ解析班の結論の双方から導き出された。

現在、僕は駆逐艦澤風の艦橋で全体指揮を執りつつ、不測の事態に備えて待機中だ。本来ならアースラ第一、第三武装小隊も彼らの艦で待機するべきなのだが、思ったよりも両小隊の疲労と消耗が蓄積していること、第十三任務部隊はあくまで協力者であって管理局指揮下にないために指揮統制上好ましくない事態が想定されるため——例えば艦内での武装隊員の行動はその艦の艦長の指示に従うのが筋である。それがこちらの指示と相容れないものであった場合、指揮権が明確でないために混乱が発生する可能性がある——僕だけがこうしてここに居る。

僕自身はこの作戦の指揮官であるから彼らの要請を僕自身の意思で取捨選択することができ、また彼らの指揮官である豊田司令もいるため意思疎通の不足による混乱も起きにくい。無論、その決断に伴う責任も自分自身にあるのだが。

『エイミィ、体調はもういいのか』

『ああ、うん。クロノ君心配かけてごめんね。この通りエイミィさんは元氣ハツラツですよ』

エイミィが倒れたという知らせは寝耳に水だった。事態に対処するのに精一杯で、すぐ近くの部下の状態も把握できていなかったのだから僕は上司失格だろう。二人揃って母さんから管理局員としてではなく、人生の先輩としての立場からの——指揮系統が違うのでこの事件に関しては“リンディ・ハラウン少将”は僕らの上司ではない——お叱りを受けた。倒れるまで仕事をして得をする人など誰も居ないのだ。そんな基本的なことすら頭から抜け落ちていたのだから我ながら情けない。

ちなみにエイミィは非魔導師なのでこの会話は通常の念話ではなくアースラの通信機能を介したものであり……つまりところ職権濫用の私的通話に近い。上司が部下の健康状態を確認している内容なのだから一応公の扱いでもいいのだが。要するに士官学校時代からの付き合いの彼女のことか心配なのだ、僕は。堅物だろうがなんだろうがこれだけは事実である。

『……その、なんだ。倒れられると困る』

『……うん』

間。

『ああ、そうだクロノ君、私が倒れている間にこっちの仕事までやってくれていたでしょ。私が言うのもアレだけれど無理はしちゃダメだよ』

『ああ、分かっている』

どうやら考えていることはお互い同じらしい。士官学校時代からの付き合いだから当然なのかもしれない。

「結界の外ですが魔力反応、きました！　これは……大きい」

『クロノ君！　魔力反応来たよ、海鳴港付近！』

日野中尉とエイミイが声をあげたのはほぼ同時だった。第十三任務部隊が展開した結界は今回は限定的で搜索海域に絞った範囲のものだ。まだ試験段階という彼らの技術だがこの発達速度は末恐ろしい。

しかし、結界外で反応とはどういうつもりなんだ？　結界術式を破るのには――彼らの結界術式は彼らのほとんどが魔導師ではないから当然と言えば当然だが単純な非魔導師排除式ではなく、一人一人許可した者だけが入ることができる許可制である――少なからず時間がかかるはずだ。結界付近まで隠密で接近し、できる限り早く結界を破る、というのが強襲するにしても最善だと思うが……。何か見落としてもあるのか？

『これは……大規模儀式魔法！？』

「反応更に拡大！　……天候が？」

「しまった、その手があったか！」

僕はプレシア・テストロッサのプロフィールの中の一節を思い出していた。彼女は先天性の魔力変換資質保有者。魔力を変換術式なしで電気に変えることが出来る。それを最大限に生かした儀式魔法、

サンダーフォール。人為的に雷を落とす、天候を操るとさえ言えるこの術式は公表当時にはかなりの反響があったそうだ。本人の魔力と自然の力の相乗効果の結果、その威力は個人の行使可能な魔法としては法外に大きい。

それこそ結界など容易に貫通し、尚も十分な威力があるほどに。

「狙いは結界外からのアウトレンジかもしれない。エイミィ、全部隊を散開させてくれ。豊田司令も回避を。儀式魔法による雷で攻撃してくるつもりかもしれませんが」

「ただの雷ならともかく、だな。よし、念のため各艦第四戦速で敵の攻撃に備えさせるぞ」

「了解、各艦に伝達します」

「第四戦速！」

副長の指示——やはり艦隊司令と艦長の兼任は無理があるらしく、原則として戦闘中の澤風の指揮は彼が代行しているらしい——でゆったりとした速度で遊弋していた艦があつという間に増速して波を切って走り出す。計器を見れば27Ktとある。艦が思ったよりも大きく揺れる。

……妙だな。確かに曇ってはいたが天候はそこまで悪くなかったはず。いくら儀式魔法で雷を呼び起こすとはいえここまで海況が変わるものだろうか？

「司令、周囲に魔力反応です！」

『豊田准将、ジュエルシードの魔力反応が増大中です。数は6!』

日野中尉の声と空中に開いたウィンドウからのエイミィの警告は同時だった。その瞬間、彼女たちが何をしようとしているのかに気付いた。

儀式魔法による大魔力の行使。そしてこの地域にばらまかれている残留魔力素とジュエルシード。

マッチ、火種とガソリン。

結果は明らかだ。

「馬鹿な！　彼女たちはジュエルシードを暴走させるつもりか!？」

第六十四話 万全の布陣 クロノの誤算（後書き）

火遊びはいけません。ダメ、絶対。

テストロッサ組の狙いについてはまた次回にて。

○ 一般的な一個武装小隊

妄想設定。人数や運用方法は現実の歩兵分隊を参考にしています。

フロントアタッカー

最前衛 4 ～ 7 名

射撃隊、ベルカ式や防御魔法に長けた隊員がいれば壁役。

ガードウイング

前衛 1 ～ 2 名

遊撃、最前衛の穴を埋める。誘導射撃魔法や機動戦闘が可能な隊員。

フルバック

後衛 1 ～ 2 名

戦闘支援、各隊員の強化や敵に対する攪乱妨害など。隊の個性を決定付ける存在。

センターガード

中衛 1 ～ 2 名

指揮官及び次席指揮官。二人いる場合は隊を分けての戦闘も可能。

○ 決断と責任の問題

責任をとることが出来ない立場の人には決断する資格がありません。外交官や政治家が自分の一存で決められないことに明瞭な返答を避けるのと同じことです。「善処します」はそうした際に便利な魔法

の言葉。

○過労と倒れること

休むな！　だが倒れるな！　ただし本当に倒れそうならさっさと休んでくれというのが普通……のはずである。

ほんと社会人は地獄だぜフウハハハー！

○ツンデレクロノ

深い描写はしないがイチャイチャさせないとは言っていない（おい

一期アニメの頃から寝癖直しシーンとかがありましたからね。彼らは。

○許可制結界

当然そんなことをすれば消費魔力はうなぎのぼりである。

○ただの雷

戦闘艦、民間船関係なく車と同じ原理で通常の雷であればさほど問題はありません。少なくとも雷そのものが原因で沈むことはないです。

ただし非金属船体（掃海艇などに多いFRP船）である場合は別ですし、可燃物に引火する可能性なども考慮すれば全く危険がないとも言えませんが。

第六十五話 試算とイレギュラー 大魔導師の読み違い（前書き）

不確定要素って怖いですね。

第六十五話 試算とイレギュラー 大魔導師の読み違い

海鳴港

リリス

「でも、こんなことをして本当に大丈夫なのかな……」

儀式魔法を制御しながらフェイトが不安そうに空を見上げながら呟く。つられて私も暗雲垂れ込める空を見やる。見えるはずもないが、その向こうには管理局の次元航行艦や時の庭園もあるはずだ。

フェイトの懼れはもつともではある。魔力に反応して暴走する危険性のあるジュエルシードがあると見込まれているこの海域にこのような大魔力を撃ち込めば何が起こるかは火を見るよりも明らかだ。更に悪いことにこの地域一体にはジュエルシードが落着いた際にはば撒いた魔力残滓が今尚残っている。

にもかかわらずこのような乱暴な手に出たのには理由がある。こちらが確保したジュエルシードは合計で五つだ。管理局の動きを見て即応、回収という手を今まで使っていた。これが可能だったのは彼らよりも先に海鳴の各所に観測地点を設けていたからだ。もちろん管理局とて同じ手を使いたかっただろうが、管理外世界の現地文明への過度の干渉を禁じられていることと、恐らくは人員あるいは機材の不足によって実現しなかったものとみえる。思ったよりも管理局は手詰まりらしく、現状では時の庭園はおろかフェイトたちを捕捉すらできていない。

これではこちらの計画通りにはいかない。となると強攻策に出る必要があるとプレシアは判断した。研究することがあるわけでもないのにプレシアが端末に向かっていたのは今回の儀式魔法によってどの程度の影響が出るかということを試算していたからなのだ。

今までの暴走のデータなどから弾き出されたプレシアの計算ではこの魔法を打ち込んだとしても思念体をそれぞれ生み出す程度のはずである。今までの管理局の動きなどから考えられるこの海域に存在する——残されたジュエルシードの数は最少で六個。その場合であってもせいぜい暴走体が一体生まれるかどうか、ということだろうだ。

もちろんこれには周囲の魔力残滓による影響を入れている。この魔法は確かに威力は凄い。だが所詮は“雷”なのであり、面制圧ができる魔法ではない。正確な場所が分からないジュエルシードへの影響は本来の威力には遠く及ばないのだ。もちろん、運悪く直上に落ちたとしても海面下にあることで威力は低減する。

もちろん今までのやり方からすれば妙な行動であるから、何の理由もなくいきなり海面に撃ち込めばフェイトにも管理局にも不審に思われてしまう。だが、展開している管理局部隊ごと葬ろうとする策、そして暴走自体は管理局に抑えさせ、ジュエルシードだけを確保する妙案だと思わせれば話は別だ。実際には管理局部隊には直撃させず、海面に撃ち込むことによって威力を拡散させつつ、思念体を生み出すだけという結果に終わることになっているのだが。

「心配はありませんよ、フェイト」

「そうそう、プレシアは科学者なんだろ。母親としてのあり方ともかく計算結果はアタシだって信じるさ」

いつも通りの捻くれた言い回しのアルフにフェイトもようやく笑みを浮かべる。ふむ、アルフも立派に“お姉さん”なのね。惜しむらくはこの家族が“普通”の形ではなかったこと。揃いも揃って異常者ばかりなのだから。私が言うのもどうかとは思っけれども。ただ、私としてもフェイトの疑問に思うところがないわけではない。プレシア自身も自らの計算にイレギュラーがあり得ることは認めているのだから。

第一に、何と言っても対象がロストログアであること。いくらスクライアー族が調べたとはいえ、本格的にしっかりと研究をしたわけではない。何が起こってもおかしくないのがロストログアというのは誰もが知っていること。

第二に、あの質量兵器を扱う謎の艦艇群の存在。撃ち出されるものは明らかに質量兵器ではあるものの、プレシアによる解析によると魔力ダメージに変換される結果を展開しているとのこと。管理外世界の現地政府と管理局が協力関係を築いているはずもなく、この世界の人々が魔法を知らない以上はあれは管理局の部隊と考えるのが自然ではあるものの海上部隊を管理外世界に展開するとは思えない。

とはいえ、不確定要素が多いとはいえ私たちのとれる手段は少ない。もちろん全てを白日の下に晒してしまうのも最後の手段としては“あり”なのかもしれないけれども、私はそれはプレシアが亡くなるまではしないと決めている。プレシアの願いに反する上に、私は彼女の使い魔なのだから。

更にはフェイトも私も特殊な存在ゆえに下手を打てば研究施設送りになるかもしれない。良くても生まれが周囲に知られれば平穏な一生は望めない。プレシアもそんなことは望まないだろうし、私はともかくフェイトがそんなことになつては先に逝く主に顔向けが出来ない。アルフにも、自分の主が雁字搦めにされる経験などさせたくはない。もっともこちらには私が使い魔となつてプレシアの事情を知ってからずっとそれを感じているからという私情も混じつていうだけだ。

『リニス、聞こえているかしら』

「プレシア!？」

突然の魔導ウィンドウの展開に私は思わず声をあげてしまった。怪訝そうな顔でアルフがこちらを見、折角落ち着いていたフェイトがまた不安そうな顔になる。そういえば今回の件でフェイトは随分思い悩んでいるようだ。プレシアは気付いていないだろうけれど、もしかすると自分の出生と今の環境に疑問を覚え始めたのかもしれない。“私にとっては”いい傾向ではある。

しかし、と頭を切り替える。魔力残滓の残る中、衛星軌道上からこのようなことを行うにはそれなりの魔力を使う。機材の力を借りてのことだろうからあまり体に負担はかけないだろうが、問題なのは管理局に会話の内容はともかく時の庭園の位置が発覚しかねないということだ。ここに私たちがいるのを見て戦力分散をしている好機

とばかりに管理局が時の庭園に部隊を送り込むようなことがあればプレシアの思惑も、“私の思惑”も危うい。そのことが分らないプレシアではないはずだ。“あの”プレシアであろうと、こちらのプレシアであろうと。

『まずいことになったわ。周囲の魔力の流れを見て御覧なさい』

ただでさえ顔色が悪いプレシアだが、今の表情はどんよりとした今の空よりも暗い。各所に設置された機材の情報を収集し、事前に位置がばれないよう隠蔽した上で待機状態にして各所へ散らせていたサーチャーも起動させる。そして主の深刻そうな様子から推測された中でも最悪の結果が起きてしまったということに気付かされる。

「こちらとは別に結界の外から魔力が流れ込んでいる!? これは一体っ」

『例のイレギュラー……それも結界外に退避していた船からよ』

流れ込む魔力はこちらが流し込んでいるものよりも遥かに多い。フイトに術式中止させるも魔力の奔流は止まらない。意図しなかったとはいえ、私たちは恐ろしいモノの引き金をひいてしまったのかもしれない。プレシアが言うには下手をすればこのままでは次元

震、最悪の場合一帯の次元世界崩壊を引き起こしかねない勢いだという。とはいえ、この流れは余りにも激しい。人間が止められるような次元を超えている。

絶望。その二文字が頭を過ぎる。

いや、立ち止まっている場合ではない。幸いジュエルシールドはしっかりと封印さえしてしまえばかなりの大魔力を撃ち込んでもどうこうなるようなシロモノではない。輸送船の事故は急ぐ余りに——純粹に再度封印解除などを行えばその封印の度合いに応じて費用がかかるという世知辛い事情もある——簡易封印状態だったからではないかとプレシアはみている。つまりこの魔力にあてられて暴走しかけているジュエルシールドを封印すれば少しでも最悪の事態からは遠ざかることになる。仮に封印状態が長く持たないとしても封印したジュエルシールドを遠くにおいやってしまえばあるいは魔力の流れは止まるかもしれない。

「フェイト、アルフ。危険ですがやれることは一つしかありません」

「封印、するんだよね」

フェイトがバルディッシュを掲げて言う。いつになく凜凜しい顔つき。少々フェイトは考えすぎるところがあるのが時として立ち止まってしまう要素になるのではないかと心配していたけれども、なかなかどうしてやる時にはやる子だということも事実。そしてそれはこうして今ここに証明されている。

『アルフ、少々予定は狂ってしまいましたが……』

『分かってるよ。やれやれ、難題ふかつけられたもんだね。世界を救うついでにフェイトもなんとかしてみせるよ』

アルフは薄く野生的な笑みを浮かべてぐつと親指を立てる。こんな時ばかりはいつでも前向き思考でいられる彼女が羨ましいと同時に頼もしくも思える。

『まあ、引き金ひいたのはアタシだからマッチポンプもいいところだけれど』

どこまでも正直なのはアルフらしいかもしれない。私も自然と微笑んでしまうのを感じる。考えていないようで考えているアルフのこゝとだから、もしかするとプレシアや私が焦りと後悔で押し潰されないうようにとわざといつも通り明るく振舞っているのかもしれない。

『あなたたち……』

「母さん……行つて来ます」

プレシアははつと顔を上げて、しばらく無言で無表情のままこちらを見ていた。そしてふつと表情を崩して、小さな声で告げる。きつとそれは、フェイトが生まれてから初めて主が本心を漏らした瞬間。

『いつてらっしゃい。気をつけて』

第六十五話 試算とイレギュラー 大魔導師の読み違い（後書き）

プレシアさんがデレた、だと……。時々少女のような可愛さを見せるプレシアさん主義者の８８式です。

いよいよ物語はクライマックスへと向かっています。言うなればここからの戦いはクライマックス前のラストミドルです。鋼鉄スキーの方にとってもあつと驚く展開が待ち受けているかもしれません、と自らハードルを上げてみます。空気扱いの某コンビもきちんと出番があるので心配なさらぬよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3597s/>

魔法少女リリカルなのは 鋼鉄の魔女たち

2011年12月2日15時50分発行